

第四部 カウンターフォース

「なんだ？」

——
リ
チャ
ード・
M・
ニク
ソン



ベティ・デイヴィスとマーガレット・デュモン^{*1}が、キュヴィリエ風^{*2}の渦巻き曲線で飾られた居間にいると、窓の外から、いつかしら、カズーの音が聞こえてくる。シヨッキンダほど悪趣味なその曲は、おそらく映画『レースの日』——「レース」^{*3}ってのは掛詞だね——の中の「フリー・ダット・マン?」だろう。グルーチョ・マルクスの滑稽な仲間のひとりが、低く、耳障りで、喉からしぼり出されたような音で演奏しているのだ。ベット・デイヴィスはこわばった顔をキッと上げ、煙草の灰を落とす。「何ですの、あれはいったい?」マーガレット・デュモンは笑みを浮かべて胸を突きだし、鼻越しに相手を見下して答える。「あれは、もしやカズーというものではありません?」

スロースロップの思いの中で、たしかにそれはカズーだった。眼ざめたとき、騒音は朝もやの中へ吸いこまれていたが、何の騒ぎだったにせよ、それで起こされたのだ。で、何だったのよ、あのブーンって音は。はい、それは、海賊^{パイレーツ}、ブレンティスが、いわばハイジャックしてペルリンへ向かっている、P-47機の音なのでした。彼の使命は、単純明快。それは他の教皇のエージェントにしても同様だ。教皇が突如、大まじめの指令を出した。

1 フランソワ・ドゥ・キュヴィリエはミューンを中心にしたロココ建築を中央ヨーロッパに広めた十八世紀の装飾家、建築家。
2 フランソワ・ドゥ・キュヴィリエはミューンを中心にしたロココ建築を中央ヨーロッパに広めた十八世紀の装飾家、建築家。

3 マルクス兄弟主演の競馬コメディ *A Day at the Races* (一九三七、邦題『マルクス一番乗り』) の *Encore* に「競馬」と「人種」の両方の意味を掛けている。黒人方言による挿入歌 "Who Dat Man?" はマルクス兄弟のハーボが笛を吹いて、黒人の子供達が踊るスイング・ナンバー。

4 ブレンティスと交差したスロースロップは、

かの愛の歌い手^{（インゼンガ）}を見つけてまいれ。あれは善いやつだったのだ……

で、乗ってる機体は旧式の「ジャグ」。これには温室みたいに栈入りの風防がついてい^{（タ）}る。視界の仕切りが、彼の首に痛みの記憶を呼びさます。この機体、どうしようもなくガタがきている、そうとしか思えんのだが、それでもプレンティスはあれこれつまみをいじっている。いま〈戦闘緊急時用電源〉をオンにしてみた。もう〈戦争〉はやってないし、〈緊急〉ってわけでもないんだけど、さあ、これでどうなる——おっと、計器盤のRPM、各種の圧力値、シリンドー・ヘッドの温度、それら全部が赤い危険のラインをつついてい^{（タ）}る。パワーを落とし、飛行を続ける。やがてツェレ上空でゆっくり旋回、ブラウンシュヴァイク上空で宙返りして、マクデブルク上空に出たところで、^{（タ）}かまうもんか、インメルマン・ターンだ。仰向けの姿勢になったところで奥歯が痛む。口もとがニタリ。宙返りを始めるときのスピードがちょいとだけ足りなかった、時速一三〇マイルに届いていなくて、ほとんどエンストを起こしかけ、何度もグラリと驚愕の傾き——これは普通の宙返りにするべきなのか、それともインメルマンに行っちゃう方がいいのか？——が、すでに補助翼は立て——方向舵なんかどうでもいい、^{（タ）}錐もみしたってかまわない……だが最後のところ^{（タ）}で、足がペダルを、軽くだけど、踏んでいた。自分としたことが、妥協に走った（おれも四十が見えてきて、切れ味を失ってきたか）、そしてもう一度、宙返りして機体を立てる。これはインメルマン・ターンでいくしかないぜ。

おお、トゥーティン^{（タ）}グのイーグルたあ俺のこと

爆弾、銃撃、誰一人

クックスハーフェンから
だいぶ南へやってきてい
る。730、731ページ地図参
照。

5 J^{（タ）}とは、ずんぐりと丸っこいP-47についた愛称。最初仕切りの入っていた風防は、就航二年目から全面が透明の「バブル」タイプに変わった。

6 ロンドンから東へ飛んでドイツ上空。ブラウンシュヴァイクとマクデブルクの間で、ソ連占領区に入った。

7 宙返りにひねりを加えることで、最高地点で上下を正しく立て直すターン。第一次大戦中のドイツ人パイロットの名に因む。

8 ロンドンの南の郊

Gravity's Rainbow

俺を落とせる者はない

皇帝のビルよ、あんたもすっかり下り坂

俺はのりこむ、貴様の故郷へ！

フロイラインとマドモワゼルに

伝えよ、窓辺の灯りをつけておけと

トゥーティングのイーグル様が、ルーティ・トゥー

飛んでいくんだ、勝利のために！

今ごろオズビー・フィールはマルセイユに着いて、プロートヘット・ワックスウィングとのコネを求めて動いているはずだ。ウェブリー・シルバーネイルはチューリッヒへ向かっている。カッチェはノルトハウゼンにいくだろう……カッチェ……

いやいや、カッチェは、パイレートに話さずに行動することもあった。それに立ち入るつもりもない。どれだけのことを打ち明けてくれても、彼女には謎の部分がつきまとう。

彼が彼であり、ひとりの人間が全方位に動けるはずはないのだから、死角はできて当然だ。それでも、ふたりがお互いから消えてしまう展開にならないのはどうしてだろう。書類都市の奇妙に平和な午後の中にも、近づいてくる逼迫感にも押しつぶされもせずにいられるのは？ 今回のミッションみたいな、場当たり的なやり方には、共にあるべき人間たちを自然と結びつけるところがあるんだろうか？ それが同じ冒険でも、格式を整えてしまふと、そのぶん別離と孤独が深まるみたいなの？ おっと、プレンティス……何だこれは、プロベラが制御不能だ？ ちがう、燃料圧力を見る——針がふらついてる、こんなに低い値

外の地区、

9 ヴィルヘルム二世の、英語化した愛称。彼は一九一八年のドイツ革命で退位してオランダに暮らし、四一年に死去。

じゃないか、タンクがもう空っぽだぜ――

このくらいの飛行トラブルは、ブレンティス様には屁でもない……ヘッドフォンから時おり、彼をけしかけ叱咤するゴーストのような声が入る。航空管制をやっている連中だ。〈ゾーン〉の上にレイヤーがもう一枚あって、そこが彼らの王国だ。空の荒野の要塞みたいにアンテナ網を張り巡らせて、半球型の範囲に影響を及ぼし、自分たちだけにとってリアルな空中回廊を築いている。パイレーツのサンダーボルト^{*10}は、鮮やかなケリー・グリーン。パイレーツの考えで塗りかえた。グレイは戦争向きだから変えちゃった。追っかけて来るなら来い。おれは捕まらんからな。

グレイの機体が戦争仕様なら、他人の幻想を乗っ取ってしまう“海賊”^{オッド}の奇異な才能も、同じく戦時限定だったようだ。VEデイ以来、何の異変にも見舞われない。だけどそれで彼が霊的トラブルから解放されたかという、違うのだ。今度はカッチェの御先祖様に憑かれてしまった。ドードー鳥殺しの冒険家、フランス・ファン・デア・フローフにだ。憑依といっても、これまた、やんわりした、それとわからぬ程度のもので、訪れるでもなく去るでもない。パイレーツはそのことでやや感情的になっている。なんだよ、オレ様がカッチェの祖先の霊に、相性のいい宿主として選ばれてしまったのかよ。フランスにオレの心が見つかされてる？ 何を見られているんだよ。これって〈ファーム〉の――もちろん、〈ファーム〉がかんでいるさ。

フランスは自らの夢の糸かさをパイレーツの夢の中に織り込んだのだ。それは異端の夢であった。暗い畑の続く果ての、影の中で巡りつづける風車についての奥義。風車の四腕のそれぞれが、天空をめぐる巨大な輪のリムの一点を指している。回転する十字と天の輪

10 P-47型機の通称。

とは、止まるときも一緒なら、動くときも正確に連れそっている。両者をつなぐものが「風」である。真に十字を動かすものを、「風」と呼びならわしているということだ……そして、これが地球上のあらゆる風に当てはまる。お菓子のようなピンクと黄色をしたモーリシャスの山々を吹きすさぶ風も、その赤い花卉のカップに雨のビーズが一玉ずつ溜まっていく故郷のチーリップを揺らす風も、それぞれの風に、巡る十字が、物理的にであれ意味的にであれ対応する。十字はそれぞれ独自のマンダラであり、対極を一つにくるめて回している（今オレ様に吹きつける、高さ二万五〇〇〇フィートのこの風は何の風だ？ フランス、教えてくれ。下界で回るあれば、何の風車だ？ 何を碾いている？ 碾き石の番をしているのは、フランス、誰なんだ？）

サンダーボルトの下腹の遙か下、緑なす田園をかするようにして、時によって柔らげられた古代の土塁の輪郭や、^{グレート・ウェイク}《黒死病》の時代にうち捨てられた村々が流れる。畑に並ぶ小屋の住人はみな、鎌をふるいながら北へ進んだ死神に容赦なく刈られてしまった。紗幕のうしろからソプラノの声が聞こえる、家の奥、禁断の翼棟の家具に掛かったシーツのように冷たい——だがその声はけっしてメロディを組みたてない。蛋白質の分子のパターンが死んでしまうと崩れるのと同様に……

「空気のように透んでいる」作曲家のグスタフがわめいている、「老いぼれフルでもなきやわかるだろうに——そうか、《老いぼれフル慈善協会》ってのがあって、あんたらみんな仲間なんだな。七十歳以下で厄介なのはどいつかって、投票で選んでるんだろ。で、このおれがランキングのトップになったか。知ったことかよ。あんたら周波数が外れてるんだ。こっちがなにを発信しても通じない。隔たりがありすぎる。あんたらの問題に、関

わってなんかいられないよ」

何種類もの隠潜動物が、パンくず、陰毛、ワインのしぶき、煙草の灰や吸い殻のまわり、散在したコカインの小さな空き壘——その赤いベークライトの蓋にはみな、ダルムシュタットのメルク社のシール——のあいだを動き回る。この虫の生態環境は、床から二、三センチのところまでついてしまふ。理想的な湿気と暗さ、安定した温度という条件に、それより上は合わないのだ。虫たちにかまう者はない。ゾイレの家には踏みつぶしを禁じる不文律がある。

「あんたはね、調性音楽にとらわれているの」グスタフは声を張りあげる。「文字通りの囚人だよ。調性^{トナリテイ}というのはゲームにすぎない。何調であれだ。あんたらは老練して、そのゲームを止められない。だから〈音列^{ロウリキ}〉に入¹¹っていけない。〈音列^{ロウリキ}〉にこそ啓示があるのに」

「〈音列〉」というのだってゲームだろうが」椅子にかけたゾイレはニンマリとして、象牙のスプーンで山盛りにした信じた量のコカインを鼻の穴に放るにあたって、いつもの型を演じてみせる。まっすぐ伸ばした腕をグワンと回してカーブを描き、目当ての鼻孔を狙いますと、一粒の結晶も落とさぬまま、数十センチの距離からピュッと跳ね上げる……すると一個のポップコーンのようなものが空中にほうりあげられ、狙いどおりに鼻の穴から、ウングツとばかり吸い込まれる。鼻孔の中は陶器の便器さながらの滑らかさ。そこは、少なくともカール・リープクネヒト¹³の葬儀以来、鼻毛は一本も生えていない……仕上げに、左右の手の間をスプーンが行き交う。象牙がこんなに速く空中を舞うのは史上初かというスピードで……導管のみちびきが必要としなかった軌道が、ウインクと共に消え

11 次のゾイレとのやりとりで、グスタフは「調性」へのとらわれを批判しているが、ここで聞こえる「メロディを組みたてない」音楽は、無調性の「音列」によるもの。タンパク質の分子は規則的なパターンが繰り返えされており、調性音楽も同様であるところから、無調性音楽と死んだタンパク質の間に比喻が成立している。

12 原文は *The Row*。ここでは一オクターブの十二の音すべてを含む音列を、ランダムに操作して鳴らす技法を指していると思われる。

13 ローザ・ルクセンブルクと共に革命を指揮し、一九一九年当局によって抹殺、運河から射殺死体があがった。

る。「サ、ラ、ンド、それ自体がゲームなのだよ。その速い動きについていければの話だがな、アデノイドの密室の幻視家さんよ。おしがシェボーア、ロッシーニ、スポンテイーニを聴いてるのはそのためだ。自分のゲームは自分で選ぶよ、光と優しさにあふれたゲームをな。おまえは地上から離れた成層圏の音楽にはまり込んでしまったのさ。それで、その退屈を埋居で何とかしようとして「啓示」なんていう言葉を使うんだ。カール、おまえに啓示の何がわかる。おしの方が、まだ物が見えとるよ」

スロースロップが踏みわけ道を歩いている。谷川の清水に彼のハーブをひと晩じゅう漬けておいたのだ——二枚の岩の間に挟んで、静かな水たまりの中に。

「光と優しさ」だと？ あんたが聞いているのは、破滅のジグ・ダンスじゃないのかね」とグスタフ。「飛びはねるような音の一つひとつから、死すべき人間の劣性が匂ってくるわ」顔に軽蔑を浮かべ、コカインの小壘の首を喰いちぎると、その赤い蓋を、ちらちら動く虫の群れに向かってベツと吐きだす。

流水を透かして、スロースロップの見つけた愛用のホーナー^{*16}の穴の一つひとつが歪んで見える。四角い穴が楽音のようにクニヤリと曲がる。これは清流が奏でる視覚的ブルースだ。どの川にも、水が流れるところのすべてに、ハーモニカとダルシマーの奏者がいる——リルケの予言したミュージシャンが。

そして地上のものがお前を忘れたら

静かな大地に向かっては 言うがいい私は流れてゆくと
す早い水の流れに向っては 言うがいい私は在ると^{*18}

14 その名を冠したドイツの音楽祭で知られる作曲家・指揮者のルイ・シェボーア（一七八四—一八五九）は、バガニニと並び称されるヴァイオリニストでもあった。

15 イタリア人ガスパール・スポンテイーニ（一七七四—一八五一）は、パリで成功したオペラ作家。ヴィルヘルム三世の招きでプロイセンの宮廷楽長に就任。

16 十穴のブルース・ハーモニカの代名詞となっている、ドイツ（トロツィンゲン）の楽器メーカー。上巻728ページにその工場が出てきた。

17 ひとつの楽音の音程を微妙に上げ下げする（黒人音楽などに特徴的

失われたハーモニカ吹きたちの魂を見つけたし、その音を聴かせることも、こんなにさ
まよい出てしまった今なお可能である。ハーモニカを叩いて中の水を払う。足にぶつける
とリードが歌う。きょうの朝を括りとする第一小節、単独のブルースが始まった。ハーモニ
カに吸いつくスロースロップ。彼がこんなにスピリチュアルな媒体に近づいたのは初めて
だが、そのことに気づきもしない。

“ハーブ”はすぐには出てこなかった。山に入りたてのころ、まず出くわしたのは一式の
バグパイプ。スコットランド高地連隊による四月の置きみやげである。スロースロップは
何につけ勘が発達していて、この大英帝國的な楽器も簡単にこなした。一週間もしないう
ちに、ディック・パウエルが映画の中で歌っている「イン・ザ・シャドウズ、レット・ミ
ー・カム・アンド・シング・トゥー・ユー」^{*19}をマスターし、もっぱらそれを演奏して過ご
した。ブワンディディープゥ、ブワンディブー、ディ・ブウウー……これを何度でも繰
りかえず、バグパイプでだ。やがてスロースロップは気づくようになった——自作の差掛
け小屋のそばに食物が置いてある。砂糖大根、籠に入ったチェリー、新鮮な魚が置いてあ
るときさえある。誰が供えてくれるのか、心当たりはまるでない。だれか彼のことをバグ
パイプの霊とも思ったのか。あるいは純粋な音そのもの？ 野宿の孤独と夜の声たち
のことをよく知っているスロースロップは、事情を察して、さっそくバグパイプを吹くの
をやめた。すると次の日にハーブが出てきたのだ。一九三八年か九年のローズランドのト
イレで失った、まさにあのハーモニカ^{*20}ののだが、もちろんそんなに昔のことを、スロース
ロップは憶えていない。

な) テクニクを、ベン
ディング (曲げ) と書く。
これはその視覚的表現。

18 リルケの『オルフ
オイスへのソネット』第
二部のエンディング。富
士川英郎訳。『リルケ全
集 3』(彌生書房) から
転載。

19 これは歌詞の最初
のラインで、題名は「シ
ヤドー・ワルツ」。一九
一〇年代の歌だが、映画
『四十二番街』で、隣の
建物の窓から見つめるル
ビー・キラーに、ピア
ノを弾きながら歌い聴か
せる。後のシーンでは、
バズビー・パークリー振
付で、この曲をヴァイオ
リンで奏でる白い踊り子
たちが花のようになって

彼の孤獨をやぶる者はなかった。姿を見たり彼のおこす火を見る者はあったのだから、誰も近づいてはこなかった。髪もひげも伸びてきた彼は、ボーディーンがジョン・E・バグダース号の洗濯室からくすねてきてくれたダンガリーのシャツとズボンを身につけている。だがすっぱだかで一日過ごすのもいいもんだ。蟻が脚を這いのぼり、蝶が肩にとまるに任せる。山の生き物を眺め、モズや大雷鳥、穴熊、マーモットたちと知り合いになる。

進んでいくべき方向はいくつでもあるのだが、とりあえず今はここに留まりたい。自分の通ってきた場所は、クックスハーフェンもベルリンもニースもチューリッヒも、監視の眼が光っているだろう。それでもシュプリンガーやブロートヘット・ワックスウィングを探しに行けないわけではない。なんだって紙に書いた情報ばっかにこだわってるんだ。いたいペーパーが何だっていうの。バルト海のどっかの港で待っていれば、グナープの女将さんが沖からやってくるかもしれない。そうすりゃ、デンマークにもスウェーデンにも行けるだろう。まわりを見れば難民だらけだ。執務室は焼け、記録もすっかり失われた——書類が持つ価値なんぞ、もはやヨーロッパじゃ、それほど……おっと待った、スロースロップ、それほどどってどれほどだ？　どこと比べてなんだい、アメリカか？　おいおい、しっかりしてくれや——

うん、まだ戻っていく道があると思ってる。スロースロップは変化の真っ最中。そうさ、どんどん変身してくよ。自己というアルバトロスの^{*21}羽根を、まるで鼻くそでもほじるみたいにチョビチョビと筆りとして。それでもアメリカという羽根だけは、筆る指がパスしていく。バカなヤツだな、こんな女と別れられないのか。「愛して、ねえ」と、眠っている自分に繰り返しかえしささやきかけ、目覚めたら目覚めたで、魅惑の言葉を連発し、素晴らし

語る。

20 上巻126ページ参照。

21 「アルバトロス」(アホウドリ)は、心に取り憑いた厄介者のシンボル。ロマン派詩人コールリッジの「老水夫行」(二七九八)より。

すぎる約束事で手招きする。いつの日か、とうとう「ソーリー」といってサヨナラする日がくるだろう。それは眼に見えている……でも、まだダメだ。あと一回、チャンスをくれ、もう一度、あとひと勝負、ゴールの狙えるところまでもう一度送り込んでくれ。これもプライドのせいなのか。彼女の魔舎にもはや自分の居場所がなかったらどうだ。オレがもう追い出されているとしても、彼女から説明はないだろう。ただの「種馬」に何が言える？ そんな小さなバカげた質問にかかわったりはしないのだ。夢想の中で「アマゾン・ピッチ」と呼んだ女がいたな。そのアマこそが、アメリカなんだ。

それと、ヤンプだ。あのプライマルな夢の中で、「ヤンプ」と「自分」とはつながっていた。だがそのことを誰に訴えられる？ 事実調査ができることでもなさそうだが。うかつに探っていたりすると、彼らのしつべ返しが続いていそうだ。リベンジの前に警告があるだろうか？ あるかもしれない、ないかもしれない。

ぼんやりしていた兆しの輪郭がしだいにハッキリし、ある具体的な形をとる。鳥の飛行の形になって。焚火の灰に生じる模様になって。スロースロップは捕らえたマスのわたの形も読む、迷子になった紙切れも読む、くずれた壁の落書きも読む。その壁は仕上げ面が銃撃で崩れおち、下の煉瓦がむきだしになっている——その崩落のパターンからも何か読みとれそうだが……

ある夜、腸チフスの素が密集しているような臭いのする公衆便所の壁の、イニシャルと目付、ベニスのなぐり描き、それをしゃぶろうとする唇のなぐり描きの間に見つけたのが、型紙に成きつけた黒い男——ホンブルク帽をかぶり肩の張った狼男——と、公的なスロ

ーガ、WILLIST DOW V-2, DANNY ARBETTE V-2が欲しいなら働きなさいって。いらっし

22 「原初的な、自己存在の根底に関わる」の意

あつたね、タイロン・スロースロップ君……いや待て、大丈夫だ。こっちの別の壁にも、
WILSTON V.4. DANN ARBETTE. ってのがある。あ、大丈夫だ。脅威の声が退いた。悪意
のジョークは解消し、ゲッペルスの、世の中の善のすべてをいじくり回す宣伝文句だけが
残った。だが、その正常さを取りもどすには、別の壁まで歩いて行って覗き込む努力を必
要とした。そこには何がいても不思議じゃない。日はたそがれて、畑と電線と細い水路と
遠くの防風林が何マイルも続いている。スロースロップは自己信頼と落ち着きを取りもど
す。だがそのとき、別のメッセージが眼を奪う。

ロケットマン参上

まず思い浮かんだ、これを書いたのは自分なのに、それを忘れてしまったんじゃないか
と。そんなことを最初に思うのも変な話だけど、本当だからしょうがない。昨日の自分を
巻き込んで、いっしょになってそのときの自分の行為を糾弾するみたいになっ
たのか。自己の深みで眠れるアルパトロスが身動きした。

過去のスロースロップたち、一日一人と勘定するとこれまでに一万人の、強かったり弱
かったりの彼がいて、それが日没のたび、怒れる宿主のもとへ落ちていく。²⁴ 一万人のスロ
ースロップがなす「第五の縦隊」。彼の頭の奥深くにあって、外から包囲の輪をせばめつ
つある四つの縦隊に彼がすっかり引きわたされてしまうのはいつの日か……²⁵

彼は石ころを手にとって、「ロケットマン参上」の落書きの脇に、こんな記号を書きつ
けた。

23 「V4」とは「復讐兵器第4号」を意味するはずだが……？

24 上巻 611 ページで語られた「レロ族の神話のイメージを使って語られている。

25 「第五の縦隊」とは、街を四方から包囲した敵軍に、内側から協力する勢力。スペイン内乱で、マドリッドを四列の縦隊で包囲した（反乱軍側の）モラ将軍が、包囲された内側に「五番目の縦隊」の結成を呼びかけたことに由来する。



包囲されたスロースロップの図。これを五、六個書いているうちに、ハタと気づいた。

オレが描いてるこれって、A4じゃないか。そうだよ、A4を下から見た図だよ。と同時に、その他の四つ組図形が、次から次へと浮かんできた。フランス・ファン・デア・フローフの宇宙風車のバリエーション。鉤十字。FFFを上下も裏表も対称になるよう円状に収めた体操競技のシンボル図形、^{*26}静かな通りのこぎれいな戸口に掛かった *Frisch* ^{*27}*Fromm Fröhlich Frei* のスローガン。そして、クロスロード——そこに腰をおろすと〈彼方の側〉からの通話を聴きとれ、未来について聞き知ることができる十字路（〈彼方〉には直線的な時の進みは存在せず、あらゆることがすべて同じ永遠の瞬間に位置しているから、こっちの側で生きていると“意味”をなさないメッセージもある——時間的な構造を欠き、なにかあまりに気まぐれで、狂ったようににも感じられるのだ^{*28}）。

スロースロップの地平線上に、砂色の教会の塔がそびえ立つ。四方に突きだしたアプス^{*29}が、流線型の尖塔の行く手を導く尾翼のようだ……それは砂岩を彫ってつくったもので、聖なる徴し、十字を円で囲んだマークが、現れるのを待っている。とうとう、ある日の午後のこと、黒死病にやられた古い町の周縁で、スロースロップは日向に横になり、左右に腕を伸ばしてくつろいだ。自らクロスロードに、生ける交差路になった。そこにはもう、裁判官がやってきていて、絞首台を建ててある。何かありきたりの罪状の男を、正午に絞首台に吊るすのだという。見物人が集まってくるなか、黒い熊犬どもや、牙を剥いてイタ



26 右上にE、右下にF、左はその鏡像となる図形。

27 「フレッシユで、信仰深く、快活で、自由」。

28 第四部の語り自体に「気まぐれで、狂ったような」印象があるとすれば、それはシリアルではなくバラレな語りが実践されているから、と言えりかもしれない。第三部までは、物語の「第

ちのように滑らかに走る小ぶりのハンター種、七百年以上も前に血統のとだえた犬たちが、
 盛りをついた一匹の雌犬を追いまわす。縛り首はこの春すでに四回めで、見世物としてた
 いしたことはないが、ただコイツは、最期の瞬間に勃起したのだ。今際のきわにどんなス
 モックド레스がめくらられるのを想像したのか、死神のかあちゃんか肉付き豊かな臀部をさ
 らすのが見えたのか、なかなか凄まじい暗紫色の龟头を膨らませ、首が折れる瞬間に、そ
 こから液を飛び散らせた。四旬節の紫衣をまとった聖人の肌と同じクリーム色の液——そ
 の一滴がダラリとした足の体毛をうまく伝って垂れていき、カサカサの裸足の足先から地
 面に落ちた。クロスロードのちょうど中央。するとその一滴は、一夜の作用によってマン
 ドレークの根に変化した。次の金曜日の夜明けに、〈魔術師〉がやってくる。彼の頭にか
 かる光^{ハイリゲンシャイン}^{*30} 輪が朝露に濡れた草に、紫外線から赤外線まで、オールカラーのゆらめきを投
 げかける。連れているのは石炭のごとく黒い犬。その犬にはここ数日餌を与えていない。
 〈魔術師〉はその貴重な根のまわりを慎重に掘り、極細の根毛だけで支えられるようにす
 ると、それを黒犬のしっぽに結え、自分の耳には蠟を詰め、パンを一切れ取りだして腹を
 空かせた犬を引きよせる。グルルルバウワウ！ 犬はパンをめがけて突進、そのときマン
 ドレークの根がちぎれて鋭い必殺の叫び声^{フエータル・スクリーム}が空気を裂く。犬はパンまで半分以上の距離を
 残して即死。その光輪は凍てつき、無数の草露の中へ消える。〈魔術師〉は大事そうに根
 を持ち帰り、それに小さな白装束を被せると、その脇に貨幣を置いて眠る。翌朝、金額は
 十倍に増えていた。^{*31} 突発性元型調査委の委員がやってきて、「インフレですか？」とたず
 ねる。事を隠蔽しようとする〈魔術師〉の、流れ動く手——「資本とな？ 聞いたことも
 ない」「そうではなくて」と訪問調査員、「現在の話をしているのではないのです。この先

つが、およそ測定でき
ていた。

29 教会の中心から張
りだしたドーム天井の空
間。

30 聖者の頭を包む光
輪。

31 掘り出されると凄
まじい叫び声で掘った人
間を殺すというマンドレ
ークの根についての言い
伝えが——耳栓をして犬
に掘らせ、その根の魔力
で富を得るといふところ
も含めて——ヤーコブ・
グリムの『ドイツ神話
学』に収められている。
ただし、その話では額は
二倍にしか増えない。

32 The Committee on
Idiopathic Archetypes
|| これもまた、略称はC
I A。

のことを気に掛けておりましてね。これの基本構造がわかるとありがたい。たとえば根から上がった叫びスクリームというのはどのくらい凄いものでした?」「耳に栓をしておったもので、聞こえておらんわ」調査員は同志らしいビジネス・スマイルを口に浮かべて、「そりゃまあ、仕方ありませんな」

十字、卍字マニ、へゾーン、マンダラが、スロースロップに話し続ける。止めろといってもそれは無理だ。彼はゾイレ・ブマーのキッチンに連れてこられた。大麻の煙がモアレをなしてたなびくなかで、スーパのレシピを読む。骨の一本一本、キャベツの葉の一枚一枚が、それぞれに自分自身を表現している……ニュース速報、彼への返礼としてある脱出の役に立ってくれる荷引き馬の名前。……彼はバークシャーの春の道で、土方の仕事をしたことがあった。失われた四月の午後のこと。役所で「チャプター81」と呼ばれていた仕事だった。³⁴冬のクリスタル攻撃を土の内側に受けて生じた白い死のかたまりを、シャベルで剥がして……錆びたビールの缶を、へ選びに漏れた種で黄ばんだゴムを、落ちこぼれた鼻汁を内に隠す脳の形のクリネックスも、人知れずこぼれた涙も、新聞紙も、割れたガラスも、車の部品も——迷信と恐怖においてあらゆるものが整合した過去の日々の一つひとつが拾われ、記録され、歴史に、彼自身の、彼の冬の、彼の国の歴史に、エントリーされる……それは教えてくれる、愚鈍なる流れ者のスロースロップには説明できない深遠なやり方で、汽車の窓から顔を出した子供たち、どこか見知らぬ夜の通りに流れるダンス曲の二小節、夜の雲を背景に揺れながら発光している松の枝と針葉、しみと黄ばみのついた書類束に埋もれた何百もの回路図のうちのひとつ、朝早く登校途中にトウモロコシ畑から聞こえた笑い声、夏の日の垂れこめる夕闇の中で聴いたオートバイのアイドリング……そしていま、

33 シンボルとして極めて古い。英語等の swastika はサンスクリット語が起源で、卍 (右まんじ) にも卐 (左まんじ) にも用いられる。因みに、充実や幸福を寓意する「万」の漢字も、卐の変形。

34 大不況時代、マサチューセッツ州西部丘陵地で、実際に行われたローカルな失業対策への正確な言及。D・ラーソンの調査によると、この仕事は、路肩および側溝の清掃と整備だったらしい。

後日、フーテンで、彼みずからがクロスロードとなったのだ。覚えていないどしや降りの雨があがって、太い虹が出た。たくましい虹のベニスが、雲の恥毛から出て、緑に濡れた谷間の大地に差し込まれている。彼の胸はいっぱいだ。立ったまま泣いている。頭の中から思考は掃きだされた。自然の情がめぐるだけ……



ダブルクラッチをあやつる踵と爪先。^{ヒール・アンド・トゥ} ロジャー・メキシコが疾走する、夏のアウトバーンを。^{エクスパンション・ジョイント} 路面の切れ目が車輪の下でリズムカルにうなっている。飛ばしているホルヒ 870 B はヒトラー以前の代物だ。リユーネブルク・ハイデのなだらかな焦紫色の起伏を抜ける。杜松の香りの優しい風が、フロントガラスを乗りこえて、ロジャーの顔に吹きつける。そちこちのハイトシュヌツケン^{※1}は、地上に落ちたちぎれ雲なのか、動かない。沼地も低木もみるみる過ぎる。頭上では空がせわしく流れる——生きたプラズマ。

ボンネットの中ほどにラッパズイセンの花の模様、控えめな姿で描いてある。アーミー・グリーン¹のこのホルヒは、ハンブルクの〈旅団〉用駐車場、そのエルベ河沿いの端っこに停まっていた大型トラックに格納されていた。暗がりの中で、そいつのヘッドランプだけが見えたとき、気のいい宇宙人が突きでた目玉でロジャーに、ヨーコソ地球人、とはほえみかけている気がした。発車してから気づいた。床面でベビーフードのガラスビンらしきものがいくつかゴロゴロしている。中身は不気味、見るからに有害な色で、人間の赤い肉が食べたらしき生きているらしい。グリーンに大理石みたいなピンクの縞がつ

1 「荒野原の小羊」の意味で、北ドイツ産の三種のヒツジをさす。

いていたり、嘔吐のバージュ色にマセンタが混ざっていたり、一体全体なんなのか。蟻のキヤップにはどれもポツチャリした天使のごとき赤ん坊の笑顔があるけれども、きらめくガラス蟻の中は、恐ろしいポツリヌス中毒の毒素やらプトマインやらが煮えたぎっているのか……座席の下からは、ときたまゴロリと新たに生まれたボトルが、加速度の法則にさからい、ペダルの間にくっついてきて、ロジャールの足の動きを混乱させる。何が起こっているのか、ロジャールもふり返って車の床をチェックすべきなのだが、なかなか思い切れずにいる。

蟻と蟻がぶつかりながら足元でころがる。ボンネットの内側で、引っかかったタペットがカキカキと不満げにつぶやいている。²アウトバーンの中央に生えた菜の花は、黄色とグリーンの完璧なツートンカラーだ。二種類の色の波立つ流れとしてのみ知覚される、宿命の川だ。ロジャールはクックスハーフェンの彼女に歌いかける。その子はいまもジェシカという名だ。

2 エンジンのカムシヤフトがバルブの頭を叩いているのだろう。

夢を見た、おれたちふたりを取りもどす夢

春は去った、多くの見知らぬ死者の向こうに

ふたりは、ソー・フリー

ウオーキング・バイ・ザ・シー

^{ペーパー・ワイク}書類言葉をしゃべる男が言うにはね……

青葉戻る門のところでおれたち彼らに捕まった

頭が抜けてたはずねることもしなかった――

子供たちはまた会える、と

七月のスーパーハイウェイに

ふたりの軌跡は残っているの、と

目の前に黄金の髭を生やした土手の坂が迫る。その目映さにロジャーは、カーブのハンド
ル操作を忘れそうになる……

行ってしまう一週間前、彼女が「ホワイト・ヴィジテーション」にサヨナラを言いにき
たのだった。そこは、PISCESの取るに足らない残党がいたものの、基本的に精神病
患者の収容所に戻っていた。ぐっしり濡れた牧草地の上に横たわる防空気球の鋼索が、
錆の薄片となって剥がれおち、イオンと土に戻ろうとしていた――あの戦火の夜々、落ち
てくる爆弾のドラムビートをバックに、遠くで鳴る風のように滑らかな三度の和音を奏で
ていた鋼索がいま、だらしなく老いて、堅くねじ曲がったメタルな灰色の姿をさらす。足
元にはいたるところ忘れな草が^わ沸いて、蟻の群れがせわしく王国の営みを続けている。コ
ンマ蝶、ヤマキ蝶、ヒメアカタテハなどが断崖沿いの^{サイモクライン}変温層の上を舞っている。ロジャー
と最後に会ってから、ジェシカは前髪を切っていて、そのことでもいつもの悶着が始まった。
「ほんとにヒドイでしょ。わかってるからいいの、言わないで……」
「いやあ、すごいカッコイイと思うね」とロジャー、「ほんとさ」
「からかわるんでしょ」
「まあ、まあ、なんだっておれたち、ヘアスタイルのことでもめてなきやいけないん

3 海面の水温が急激
に変化する層。

だう」

「海峡」の彼方では、見捨てられたタイロン・スロースロップ中尉が、バラバラになりながら「ゾーン」の面上を這いまわっているというのに。ロジャーにとって「海峡」は、新米の霊媒にとって死の壁が超えがたいのと同様、大きな障壁だ。それでもスロースロップを見捨てたくはない。ロジャーは正しいことに与したい。「あのかわいそうな男を、あのまま放っておくわけにはいかないだろう？　彼らに葬りさられようとしてるんだぞ」

ところが、今度は笑顔が返ってきた。「ロジャー、もう春なの。私たち、戦争してないの」

違いますね、まだ終わってません。終わったっていうのは新手のプロパガンダで、発信源はPWE⁴さ。さてみなさん、研究結果をごらんいただいた通り、われわれにとって最適な時期は、どうも五月八日であります。五旬節の週末で人が繰り出す直前でして、学校もひと区切り、青葉がぐんぐん生育する好天の季節、それに応じて石炭の需要も下降する、われわれがルール地方の石炭に対して持っている権益も、数ヶ月は彼らに任して一息つけるころでありますって——とんでもない、彼に見えているのは、一九三九年以来少しも変わらぬ一方的な権力の流れだ。自分は一方的に奪われる側にいて悪戦苦闘を強いられたい——大事な彼女が、みんなが任務を解かれる今になって、ドイツに連れていかれようとしている。ふたりのどちらかでも脱出できるよう、上に向かって働きかける経路はまったく閉じている。いまだに何かが進行しているのだ。まあ「戦争」という言葉に語弊があるなら使わなくてけっこうです。たぶん死亡率も一、二ポイントは下がったでしょうし、缶

4 戦時のプロパガンダを統括した秘密機関。上巻45ページ参照。

ビールも復活した。トラファルガー広場にすごい数の浮かれた群衆が押し寄せたのはまだそんなに以前の話しじゃない……しかし「へかれら」の企画はいまも動いているんです。

ロジャーの心をひき裂き、心の虚空をさらし出す悲しい事実——ジェシカは「へかれら」の言うことを信じているのだ。ロジャーと一緒にいる条件として、ジェシカには「戦争」が必要だ、と。いわゆる「平和」の時代になれば別れるなんて簡単な話。だってこの人ときたら、資産も資質も「へかれら」に比べて全然ないし。だいたい言葉を知らないし、壮絶な愛のテクニクもなく、発作的な絶叫^{スクリーミング}で彼女を引きとめることもできない。ビーバーは、驚くことじゃないけど、出張であちらへ行く。空軍の防衛関係の交渉のお仕事——というわけでジェシカとふたり、ロマンティックなクックスハーフェンが待っている。タタ——、狂いそうなロジャーさん、ステキだったわよね、戦争中の不倫、ふたりでイクとほんとに燃えちゃう。あなたはまるで「空飛ぶ要塞」^{B17}みたいに両翼を広げてわたしを抱いた。軍事機密も共有した。あのデブの少佐をいのようにあしらって。でも、撤退の時って誰にもあるでしょ。残念だけど、時間切れ、もう行かなくちゃ、ロジャー、ありがと、ほんと、夢のようだったわ……

ジェシカの膝に倒れこむロジャーは、グリセリンとバラの香水の匂いをかぐ。砂と塩の染みついたATS^{*}配給のブローガン・シューズを舐める。身の自由を彼女に差しだし、安定した職から得られるだろう五十年分の給料も、哀れに脈動している頭脳もすべて差し出す。だがもう遅い。「平和」が戻ってしまったのだ。パラノイアも、身の危険も、隣りの部屋のドアの前でメロディなしの口笛を吹き鳴らしている死神も、みんな眠りについた、大戦とともに去った、彼女のロジャー・メキシコとの月日も一緒に去っていった。ロケッ

5 英国陸軍の女子支援部隊。上巻39ページ参照。

トが落ちてこなくなった日がロジャーとジェシカの終わりの始まり^{*}。何事もない日が続いて、もう一度と落ちてこないことがしだいに明らかになるにつれ、新しい世界がジェシカのもとに、春の気配のように近づいてきた——といっても、大気や光や、ウールワースの店に群れる人びとに変化を感じるようにしてそれを感じたわけではない。むしろB級映画の春のように、紙の葉っぱと、綿花の花と、ニセモノの照明による間に合わせの春として感じたのだ……もうジェシカがふたりのキッチンの流しに立って、瀬戸物のカップをキュッキュとこすることはないだろう、子供の泣き声のように無防備なカップの音が弱々しくふるえロケットが着弾した瞬間に指から飛んで床に青と白のとがった破片を撒き散らしたりすることは……

死のロケット弾はもう過去のもの。今度はジェシカが、打ち上げる側だ——ジェレミーとふたりして——これって最初から決まっていたことじゃないのか。ロケットを海へ向けて発射する。死人は出ない、純然たる見世物。焰と轟音の興奮を人殺し抜きで楽しめないかって、そんなふうにジェシカは祈っていたんじゃないのか。あの、もう記憶も薄れつつある家で。あの家も、いまは軍の接収を解かれ、球の縁飾り、犬の絵、ヴィクトリア朝の椅子にふさわしい住人が戻っただろう。二階の押し入れに積みあげた『ニューズ・オブ・ザ・ワールド^{*}』を密かに読みふける主人が。

別れは最初から決まっていたのだ。彼女自身にも手の届かない高みから、指令が出ている。ジェシカの未来は『世界』の未来とともにある。ロジャーとともにあるのは、自分一人で持ち歩いている『戦争』のヴァージョンだけ。哀れなことに、そこから動けない。戦いのヴァージョンが彼を捕らえて離さない。ロケットが降ってたときと同じで、今もロジャ

6 イギリスが最後のV2ロケットに被弾したのは、四五年三月二十八日。

7 犬の絵に関しては、上巻115〜116ページ。スロースロップの愛読する『ニューズ・オブ・ザ・ワールド』は立派な中流市民にとっては低俗に感じられただろう。

「は受け身の側。犠牲になるのは自分、発射の側にいるのがジェレミー。《戦争》が自分の生みの母親なんだ、と出会いの初日に彼は言った。それでジェシカは想像した——どんな黒衣のレディーが夢に現れ、どんな灰白色の笑みを浮かべるのか、どんな大型バサミが部屋をチョコキチョコキ切って回り、ふたりの冬を切り裂くのかと……ロジャーってわからないところが多すぎる……どうしても平和の中に収まらないところがありすぎる。早くもジェシカはふたりで過ごした冬の日を、一連の爆発の連鎖、《大戦》のリズムに合わせて群れなす狂熱として思い返している。そのロジャーが、今度はスロースロップという、新たなロケット・クリーチャーを救出しにいったがっている。ヴァンパイアみたいにロケット弾への恐怖を喰って、その性生活を成り立たせてるって人——ウーッ、気持ち悪いっとな、収監すべきよ。野放しにしといちゃだめ。ロジャーはわたしよりスロースロップの方が気になるのね。きっと同類なんでしょう——だったらふたりで楽しくやったらいい。一緒にビールを飲みながら、ロケットの話をして、お互いに数式でも書きあってれば楽しいでしょう。わたしが出ていっても、ロジャーの世界をカラッポにするわけじゃない。することがちやんとあるんだから寂しくなんかならないわ……」

浜辺を去っていくジェシカ。ロジャーから遠ざかる。太陽光線がきょうは強く、アキレス腱の影が黒く鋭い。ストッキングの踵の縦線のようだ。頭はいつものように前へ、向こうへ曲がり気味。彼女のうなじが、ロジャーの愛してやまない、でももう二度と拝めない首筋が、無防備にさらされている。こんな無防備な美しさを抱えて《世界》を渡っていくのかよ。それがどれだけ危険なことか気にかけてもいない。少しは——自分の顔や容姿が「きれいだ」というくらいには——意識しているとしても……それ以外のすべてを彼女

「なまじりく」をロジャーは知らない。他にどれだけ多くの命が、鳥たちも、草と雨の匂う
多し。目撃しの中ボカンとした瞬間も、彼にとってはみんなジエシカの存在と込みでは
にめその美しさを発揮する。発揮していた。ジエシカを失うことはジエシカひとりを見失
うだけ。なく生命の全幅を失うことなんだ。世界の「創造」に対して、生まれてはじめて
て安らかな気持ちになれたのに、それが失われる。また冬に、ひとりの殻に逆戻りだ。な
んとか遠いさうとしても、だめなんだ、ひとりじゃ出せる力が足りない。

ジエシカに去られて自分が泣くとは思っていなかった。だが泣いた。一立方ヤードの鼻
水をたらし、眼を真っ赤なカーネーションにして泣いた。まもなく歩行中に左足が地面に
つきたび、頭の半分に痛みが走るようになった。ああ、これが「別離の痛み」と
いうやつか！ ポインツマンは相変わらず、大量の仕事を抱えて現われる。ロジャーはジ
エシカのこと忘れられず、スロースロップのことにまでは気持ち回らない。

ところがある日、ミルトン・グロウミングが突然やってきて、ロジャーを引きこもりか
ら引っぱり出した。ミルトンはちょうど「ゾーン」を回ってきたところなのだが、向こう
でのタスク・フォースと一緒に男のひとりに、ヨーゼフ・シュライムという、あま
りバツとしないのがいたが、こいつが以前、ライトヒンガー博士のVOWI—NW7の
統計部——にいたのである。VOWIでシュライムはアメリカ班に属し、ケムニコ、ゼネ
ラル・アニリン&フィルム、アンスコ、ウインスロップといった子会社や特許委託会社を
通して、IGの産業諜報活動をやっていた。一九三六年に彼はイギリスに来てインペリア
ル・ケミカル社（ICI）に勤めるのだが、その関わりが具体的にどういうものだったの
かは曖昧さに埋もれたままだ。そのシュライムが、スロースロップの名前に聞き覚えがあ

が、それ以外にはR・サ
リー著「IGファールベ
ン」の記述通り、NW7
は、チチェーリンをドラ
ッグに引き合わせたヴィ
ンベの所屬先でもあるが
（上巻652ページ）、IGフ
アルベンの諜報活動は、
マックス・イルグナーを
長とするベルリンのNW
7が統括していた。その
最大の部局が「統計部」
という名で擬装したVO
WI。そのヘッドが、こ
こに出てくるライトヒン
ガーである。VOWIが
「科学的な情報の交換」
という名目で得ていた外
国の経済や財政に関する
情報は、OKW（ドイツ
国防軍最高司令部）を通
じて関係各局に流れて
いた。アメリカ合衆国に
関する情報を吸い上げて
いたのが、ケムニコ以下
本文に列挙されるIGの
下部組織である。

った……そうですとも、遠い昔の話を憶えていた。ライル・ブランドが、最期の壁、越え、旅に発ったあとの数週間、IG内の各部局に〈緑の報告書〉というものが回った。極秘¹⁰指令である。そのまわりで、きまってるわさがささやかれた——ブランドがいなくなつて、今度は誰がスロースロップの見張り役を引きうけるんだろね？ うわさは、まるで圧力下にあるコールド分子のように、つながったり切れたりを繰り返した。

それは、IGの巨大な情報機構が立ちあがろうとしている時期のこと。外務省の経済担当部と経済省の外務担当部がこぞってそのネタを探った。軍部も同様で、ことにヘヴェアヴィルトシャフトシユタープ¹¹——これは拡大包括委員会の一セクションでOKWと産業界の連絡を取りもっていた——の活動は著しかったが、IGとOKWとの直接的なパイプとなっていたのは、ディークマン博士とゴール博士を所長とするヘフェアミットウルングスシユテレW¹²だが、そこに多分に漏れずナチスの機関が絡むことで全体図はさらに錯綜する。一九三三年以降、ドイツ産業世界のいたるところで設立されたヘアプヴェア・オルガニザツィオーン¹³の中で、IGの監視を専門とするナチスの番犬はヘアプタイルングA¹⁴と呼ばれ、そのオフィスはIGとの癒着関係をまかなうヘフェアミットウルングスシユテレW¹⁵と同じビル内に設置され、両者の活動は完璧に足並みを揃えているかに見えた。だが〈テクノロジー〉というもの——かの、冠編みの髪と黄金の足をした乙女——は絶対にこういう機会を逃さない。シユライムの最終的な離反をもたらしたのは、ヒトラーへの倫理的反感といったものより、軍と党の間のホットないがみ合いこそが原因だったようだ。いずれにせよ、彼の記憶では、スロースロップの担当はヘフェアミットウルングスシユテレW¹⁶の下に新設されたヘシユバルテN¹⁶という部門が受けもつことになった。ヘシユバ

10 371 ページで語られている。

11 Wehrwirtschaftsstab
＝国防経済スタッフ。

12 Großer Generalstab
＝戦争に対する全領域的調査と諜報に基づいて軍の対応を決定する指令組織。プロシア時代からドイツ軍の優秀さの根拠となってきた。

13 Vermittlungsstelle
＝仲介所。

14 Abwehr-Organisationen
＝防衛組織。

15 Abteilung
＝区画、部局。

16 Sparte
＝部門。

「ルター」は窒素とガソリンを、〈Ⅱ〉は染料、化学薬品、合成ゴムを、〈Ⅲ〉はフィルムとフアイバーを、それぞれ担当。〈Ⅳ〉は専らスロースロップだけを担当し、他には——シユライムが小耳にはさんだところでは——スイスにあるIGケミーとの取引によって得たパテントがひとつふたつあるだけ、ということらしい。名前の思いだせない鎮痛剤と、「マイボラム」とか言った新種のプラスチック……えーと、「ポリメックス」だったか……「それだったら〈シュバルテⅡ〉が管轄してもよさそうなものだろうに」とだけ、そのときグローミングはコメントした。

「二、三の研究所長さんが慌ててたみたいだ」シユライムが同意した。「テア・メーアはスゴ腕だからな——それと、ヘアライン。どちらも一度食らいついたら離さない男だ。彼らなら、取り戻したかもしれんな^{*17}」

「党はアブヴェアの人間を〈シュバルテⅣ〉にも配置していたのか？」

「そのはずだ。しかし、そいつがSDだったかSSだったかは、私は知らない。とにかく人数が多すぎた。壘底メガネをかけた痩せ型の男がオフィスから出てくるのを一、二度見たおぼえがあるが、そいつは軍服を来ていなかった。名前までは分からんが」

「な、な、なんだって……」

「監視か？」ロジャーの手は落ちつかない。髪にいたり、ネクタイにいたり、耳、鼻、こぶしをいじったり。「IGフアルベンがスロースロップを監視下に置いていた？ 大戦が始まる前に？ いったい何のためだよ、グローミング？」

「妙な話だよな」とだけ言って、プイと退出。あとにロジャーがひとり、不気味に強まる光と共に残される。啓示の光の、三日月型のまばゆい先触れが、彼の脳の周縁を照らしは

17 フリップツ・テア・メーアはIGのトップ重役の一人で、〈シュバルテⅡ〉のヘッドをつとめた。ハインリッヒ・ヘアラインは、第一次大戦以前から、バイエル社の研究所所長として、有機化学の薬学への応用研究を牽引。バイエルがIGフアルベンに組み入れられてからは、IGの指導的地位にあつて、〈シュバルテⅡ〉に参画するとともに、アウシュヴィッツで使用されたタブンとサリンの毒ガス開発に関わる。

18 この男はヴァイスマン（22ページ参照）。

じめる。IGファルベンだど？ このごろのポイントマンは、ICIのお偉方とよろしくやっている。ほとんどそっち関係の交友ばかりだ。ICIはIGファルベンとカルテル協定がある。そうか、あのオヤジめ、スロースロップのことを最初から知らされてたのか。ヤンプのことは、ほんの表向きで……いったい全体、ここで何が起こってるんだあ？

バイクにまたがったロジャーは（ジャガーをポイントマンに占有されたPISCESの車置場には、このバイク一台と、クラッチなどないに等しいモータース^{*19}一台しかなかった）、ロンドンに向かう途中、ハタと思いつく。ポイントマンがグロウミングを自分に差し向けたのではないか。あのオッサン、このごろ『フリー・マンチュア』シリーズのネイランド・スミス警部に凝ってるから、あの煙に巻くような戦術を真似してるんじゃないだろうか（彼のオフィスには、サックス・ローマーによる善悪二元論的冒険譚が全巻揃って^{*20}いて、この頃、時を選ばず現れるのだ——それもたいていロジャーの眠っているときか、心静かに排便しようとしているときだ。トイレのドアの前に立って、精選した小説のページを大声で朗読するのだ）。ポイントマンを抑えられるものはない。かつての老ブディングよりもっとたちが悪くて、恥というものをまるで知らない。誰であれ、使いまくる——グロウミングも、カッチェ・ボルヘアスも、バイレイト・ブレンティスも、誰ひとり逃れた（ジェシカ）者はいない、やつの（ジェシカ？）マキャヴェリ的な操作の——

ジェシカだよ。そうさ、決まってるじゃないか、なんちゆうアホだったんだメキシコおまえは……第一三七部署の連中がおまえを避けてた理由を考えてみるよ。ジェシカにはな、トップのトップから指令が出ていたんだよ、当然だろ、それなのに、おまえときたら、バ

19 労働者階層向けの普及車。

20 第一巻 *The Mystery of Dr. Fu Manchu* の刊行が一九一三年で、以後一九四五年時点で十巻のフリー・マンチュア小説が刊行されていた。その後一九五九年にローマーが没するまで、三巻が加わる。

ツファンに頼り出して仕事をもらったり……バカめ。大バカ者めが。

ギヤラホー賤舎小路の〈第十二宮〉にたどり着いたロジャラーの心中は、人殺しもやりかねないほど荒れていた。自転車泥棒が裏通りを走る。三列に並んで相当のスピードで走る年配のプロたちだ。粹な口ひげを生やした若者が、ウィンドーを鏡にして身なりを調える。子どもらがゴミ箱をあさる。役所の紙クズが中庭の隅に吹きだまっている——逃げだした〈獣〉の脱ぎ落とした皮のように。通りで木が一本、理由もなく黒く焦げて、こけら板の黒死体と化している。ハエが一匹、ロジャラーのオートバイのフロント・フェンダーに仰向けに着地し、十秒間ジージーと暴れてから筋入りの敏感な翅を閉ざし、それと一緒に命を閉ざした。まったくあっけないもんだ。こんなのはロジャラーも初めて見る。P-47の飛行中隊が密集編隊を組んで頭上を過ぎていく。白いまま変化のない大空をバックに、赤白青黄、四色のチェックマークを浮かばせて。ひとつの中隊が過ぎるとまた次の中隊。軍の空中観閲式か何かだろうか。それともまた戦争が始まったのか。通りのすぐ向こうで、左官屋が働いている。クリームチーズのような甘美な漆喰をこて台に盛りあげ、死んだ友だちから受けついだ使いなれないコテで、爆弾で傷ついた壁をきれいにしようと奮闘中だが、まだこの仕事を始めて数日目、コテのエッジがどうしても手になじまず、その曲線の具合も彼の腕力ではどうにもうまく捌けずに、壁面に穴ができてしまうのだ……ヘンリーはもっと立派な体軀だったし……さっきのハエはまだ死んでいなかった。翅を広げて飛んでいた。今度はどいつをだますつもりだ。

待ってろよポインツマン〈第十二宮〉に大股で踏みこむロジャラー、七階分の廊下と階段のコルク板を踏みつけて進む。受付嬢が長い腕を電話器に伸ばしたどこにいやがるん

だ

オフィスではない。そこにいたのはゲザ・ロージャヴァエルディひとりだけ。こいつがまた、ロジャヴァーに向かってこんなことを言うのだ。「キミのしてること、ずいぶんミットモナイよ、ねえキミ」

「だまれ、トランシルヴァニアのうすのろヴァンパイアめ」ロジャヴァーがすごんだ。「おれはボスに用があるんだ、ヘタな真似をしやがると、おいしいO型RHマイナスの血に二度と吸いつけなくしてやるぞ。おれを怒らせたら、きさまの牙がどうなるか、おかゆも噛めなくしてやるぜ——」圧倒されたロージャヴァエルディは、冷水器の近くへ後退し、身を守ろうと回転椅子を持ち上げたら、シートの部分かもげ落ちて、足だけ抱えることになった。その足、バツの悪いことに、十字架の形をしている。

「ポイントマンはどこだ？」ロジャヴァーは歯ぎしりをして耐える。ヒステリーに陥ってはならない、おまえは今きわめて危い状況にあつて、そんな非生産的な贅沢はゆるされんだ……「この野郎、正直に言わないと、おまえの棺桶に戻れなくしてやるからな——」

威勢のいい小柄の秘書嬢が走りこんできて、ロジャヴァーの脛を、書類の束で叩きはじめた。その書類とは、A4ロケット000000号の〈Sゲレート〉^{*21}の後ろを通る液体酸素の配管に使うべき合金の特許をフェライニヒテ・シュタールヴェルケと共有する英国の鉄鋼会社の、一九四〇〜四四年における戦時超過利得税の記録なのだが、ロジャヴァーの脛は、その種の情報を感知するようにはできていない。秘書の眼鏡が落ちる。「ミス・ミュラー」^{ホー}「ホレーベン」と名札を読み、「メガネなついでと、あなた、ケダモノに見えましゅ。しゅぐに拾いなしゅい！」コミック・ナチス風のセリフ回しになったわけは、秘書の名前がド

21 デュッセルドルフを本拠とする巨大トラスト。名前は「台同製鋼」の意。IGファルベンやジーマンス・カルテルとの連結もあったことが知られている。

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
84

見、方、だ、の、よ、い、ぞ、。ドイツ語のアクセントだ。「よく見えないんです」

「それだ、お役に立てるかどうか、ちまつくら——おや、これは何なんだろ
う。……ア・リ・コ・ア・リ・コ・ア・リ・コ・ア・リ・コ・ア・リ・コ・ア・リ・コ・ア・リ・コ・
ア・リ・コ・ア・リ・コ・ア・リ・コ・ア・リ・コ・ア・リ・コ・ア・リ・コ・ア・リ・コ・ア・リ・コ・

Y
:
:
:

人々、乃て其の

白

「フレームにグルリとちっちゃな模造ダイヤがついているのではありませんか、フロイライン？」

「ヤー、ヤー、
ウノト・ミ
フト」

「そうですね、つるにまで、それがずうーっとついてるんですよ。それに羽根もありますね？」

「ダチヨウの羽根が……」

「オスのグチョウの羽根ですね、派手なビーコック・ブルーに染めてあって、両はじがピンと立ってますね」

「それ、わたしの眼鏡よ、ヤー」と、手探りしながら「どこにあるの、教えてよ」

「ほらここさ！」足を上げて、踏みおろす、ガシヤッ、ポインツマンの絨毯にガラスの破片が、北極風にキラキラと。

「アイ・セイ」向こうの隅からロージャヴェルディの声。部屋のその一角は薄暗い。光学の法則から外れて異様に暗い。ただのまっすぐな四角い部屋だ。(第十二宮)には変に多

22 「ミラー・ハイライ
フ」というアメリカ・ビ
ールの古典的銘柄をも
った名前。

23

24 一巻 日「あのう、
ちよつと」といふふちに
相手の注意を引く言ひ回
し。

面体の部屋はない……それなのに、一つのコーナーにだけ不可解な影の柱が立っている。

部屋に入った客が、ポインツマンが執務デスクにいないので部屋を見回すと、その暗い隅に立っていた——それも、不気味なことに、その影に顔を向けて——という話がたびたび聞かれる。……ロージャヴェルディ自身はその暗い〈部屋隅〉への嗜好は特になく、二、

三度試みてはみたものの、首を振りながら出てきた。「ダメですね、ミスタア・ポインツマン、わたし、あそこは、ドオにもキライだ。あんな影のよどみにはワクワクできない、そうでしょうダアレだって、ええ？」と痛々しく歪めた眉を吊りあげる。ポインツマンはただ申し訳なさそうな顔をしているのだが、それは、自分の非を詫びているのでなく、何かに対して、ロージャヴェルディの非を詫びているという表情だ。そして穏やかに——「ここだけなんだよ、私がこの部屋で、ほんとに生きている感じがするのは」そりゃそうでしょう、その影の柱を伝って、秘密のメモがひとつふたつ、省のトップ・レベルまで上がったいったんですもんね。で、大臣その人には届いたのかな。届いたとしても、そのメモが、お笑いとしてウケたからじゃないですか。「ははあ、なるほどね」彼は老賢者ふうの羊毛の頭髪を揺らし——両眼をほとんどスラヴ系の顔のように張った頬骨の上でしわくちやにして——くつろぎながらも礼儀正しさを失わない。「ポインツマンの名だたる〈部屋隅〉とね……そこに幽霊が出たと聞いても驚きませんな」これを聞いて下級職員は反射的に笑い、上層部は厳めしい表情のまま、口元だけゆるませる。「SPR[※]の連中を呼んできて見てもらいましょかね」葉巻をくわえたのがくすくす笑って、「そしたら、ポインツマン、また〈戦争〉になったかと思うだろうな」「うまいぞ」「そいつぁーいいや」という声が、壁をなす壁紙のけむりの中に響く。イタズラとからかいとは、これらの下級職員の間で、ま

る。一種の階級伝説のように盛り上がりを見せるのだ。

「ロー・セイ・セイ・ホワット？」 ロジャーはさっきから、このひと言をわめいている。

「アイ・セイ」と、もう一度ロージャヴェルディが繰り返す。

「それがあんたの言う内容なんだな？ 『I say』というの？ そうだな？ じゃあ『I say』って言えばよ」

「言ったヨ」

「うそつけ——『I say』と一回しか言わなかったぞ」

「でも、そのアトで、また言いましたネ……二度言ってますネ」

「それは、おれが質問してからだろ——切り離された二つの『I say』が一つのセンテンスを構成してる、などと主張するのは無理だ」 いや「おれに理不尽なほど」以下のことが本当に真であるなら別である「だまされやすい男になってくれと頼んでいるのなら別だが、おまえのそんな依頼に対して応じるのは一種の」すなわち、ふたりが同一人物であって、会話全体が一人の人間の思考になった場合ならな yaaagghhh それって「狂気だぜ、ロージャヴェルディ——」^{*26}

「わたしのメガネ」フロイライン・ミューラー「ホーホレーベンがベソをかきながら部屋を這いずりまわっている。ロジャーが靴でレンズの破片を蹴ちらしたせいで、あっちで手を切りこつちで膝を切り、その血が這うたびに床の敷物に長さ数センチの暗色の羽根をつくる。このまま、彼女がめげることなく、這いまわりを続けていくなら、ポインツマンの絨毯に、ピアズリーのガウンの裾が描かれるだろう。」

「いいぞ、ミス・ミューラー」ホーホレーベン！」ロジャーが櫂を飛ばす、「それにひき替

26 ロジャーが自らの主張する「不可能さ」とその「例外」を、語り手との協力(?)によって、実演・実証しているセンテンス。語り手が割って入っているが、引用符の内側の、ロジャーの言葉だけつなげば、一つのセンテンスとして意味をなす。しかし引用符の外まで含めて、それを一人の思考となすのは、たしかに狂気ではない。きわめて複雑に自己言及的な文で、これを正気で翻訳することは不可能。

27 鋭い線による白黒のペン画で今日も人気の高い十九世紀末の異才オーブリー・ピアズリーのこと(上巻142ページ註6)。

え、あんたって人は——と言ってロジャーは口をつぐむ、ロージャヴァエルディの姿が、暗がりの内奥へ、ほとんど吸い込まれそうになっている。白眼はポーッと白く発光し、空中でチラチラと、瞬きに合わせて点滅を繰り返している……その〈部屋隅〉に留まるために、ロージャヴァエルディは踏んばってはいないといけないようす。ここが、自分らのような輩のための場所ではないことは明らかだ。ここに立つと、部屋の他の部分が、カメラのファインダーを通して見ているみたいに遠のいて感じられる。それに壁が——見たところこの壁は……固体じゃない。流れてる。といっても強ばった、粘りけのあるシルクかナイロンの垂直な生地が波打っているよう。色は海のグレイだが、流れの中にとろどろ、思いがけず島があって、その島が部屋の配色からは考えられないど派手な色をしている。サフラン色の紡錘形とか、椰子の葉の色をした卵形、マゼンタ色の峽湾部が、ゴツゴツの島に櫛のように刺さっているという感じ。手負いの戦闘機はその上を旋回。機体からまずポンペを、次に銀色の風防を投棄し、両翼のフラップを、ストール²⁸を起こさないぎりぎりのところまで下げて浮上を狙うが、そのときブルーの（突然の猛烈なブルーの）襲撃。衝撃が来る直前にスロットルが閉じたフツッンン！ オー、クソ、珊瑚礁だ、こいつに叩きつけられるのか——あれ、あ、珊瑚礁、なかったの、ワタシ、無事だった？ほんとだ、無事だ！ マンゴーだ、向うの木になってるぞ！ それに女の子が——すごくイッパイ！ 見ろや、みんなゴージャスじゃないか。乳首がツンと立ってるよ。腰糞ふってウクレレ弾いて歌ってるよ（だけど、どうしてこんなに太くて強い声なんだ、すごく鼻にかかってアメリカのゴーストラインみたいだ）——

28 飛行機はフラップを下げることで上昇するが、下げすぎるとそれまで揚力を生んでいた規則的な空気の流れがかき乱され、翼の上面にいくつもの渦が生じ、飛行が不安定になる。この危険な状態をストールという。

ホワイトマン、ウエルカム・トラ・ブーカ・フッカ・ルッキ・アイアイアイランド！
あたしのバイヤひとなめしたら、ほーら帰りたくないよ！

月は黄色いバ・ナ・ナー

照らしてるよ、あたしのカ・バ・ナー

楽しいフラ・フラ遊びもいっぱいよ——

星の降る、ブーカ・フッカ・ルッキ・アイランド

山をくだる溶岩流^{ラ・ツア}は、素敵なチェリーパイ——

小さな草のおうちに暮らすレイラーニちゃん

ココナツモンキーと宣教師のおやつが大好き

ルッキ・ルッキ^ミ、シュガー・クッキー、ブーカ・フッカ・ルッキ・

アアアイランド！

コオリヤ、ダメだあ——ワタシ釘づけ、島のかわいこちゃんに、イトメられました、ワ
ガ人生の……残りゼンブを、若いパラダイス・アイランドの娘さんの、パバイヤ食べてマ
ンゴー嗅いで暮らしたあい——

パラダイスもまだ若かった。まだ背中の安全ベルトに縛られたままのロージャヴェルデ
イに、パイロットが顔を向ける。ヘルメットと、やたらと光を反射するゴーグルと、酸素
マスクに覆われた——メタルとレザーとアイシングラス^{*29}の顔を。そのゴーグルを、ゆっく
りと外す。見慣れた眼だが、誰の眼だっけ？　パイロットはニッコリ。ハロー。あんたの
ことは知ってるよ。ん、おれを知らない？　ほんとうに知らないのか？

29 魚類の浮き袋から
得るゼラチン。

ロージャヴァエルディが悲鳴を上げた。部屋隅から出てくる身体がガタガタふるえ、天井の灯りの眩しさに目がくらんだ。フロイライン・ミュラー・ホーホレーベン嬢は一つの円を巡回している。速度はどんどん増して、ほとんど姿を捉えられないほどになり、ひどい声でヒステリックにわめいている。ロジャールの巧妙な心理作戦が、どちらの相手に対して、狙ったとおりの効果を挙げた。ロジャールは物静かに、だがきっぱりと、「いいか、質問するのはこれが最後だ。ポインツマンはどこにいる？」

「モスムーンのオフィス」ふたつの声が重なった。

モスムーンのオフィスはホワイトホールから、ローラー・スケートで走っていける距離であって、どの部屋の前にも、女の歩哨が立っている。彼女らの着ているフロックがまたすごくて、全員、他と鮮やかに違う色なのだ（歩哨の列は長いから、それぞれが「鮮やかに違う」色にするには、そもそものが確率的に稀な色でないと無理だ——蜥蜴色とか、宵の明星色、薄アトランティス色みたいなね）。彼女らの守りをロジャールは甘い言葉と袖の下と脅しをもって突き抜け、それでだめなら無念にもパンチを浴びせ、とうとう「Mossmoon」の名前のついた部屋に行きつき、巨大なオーク材のドアを叩く。どこかの石造りの寺院の戸口みたいに彫り物が施されているやつだ。「ポインツマン、見つけたぞ。もしおまえにこの武装した変人に撃ち殺されず今日一日を全うするだけの常識の片鱗でもあるのであれば、その常識の名において言う、ドアを開けろ」この長たらしいスピーチの途中で実は扉が開いたのだけど、ロジャールはかまわず最後まで言いおえた。部屋の中は、レモンライムの光輝さを上品に抑えた、水割りアブサンを思わせる乳白色で、食卓をかこむ面々にふさわしくない暖かみがあふれている。その明るさに影がさしたのは、ロジャールの

侵入によるものか。部屋の奥へ走り込み、つややかなるテーブルに飛びのって、鉄鋼会社取締役のテカテカ頭を「またぎ、そのままワックスのかかった面を七メートルほどツツと滑り、食卓の端にすわる男の正面でピタリと止まる。男は温厚な（ってのはつまり鼻持ちならない）笑みを浮かべている。「モスムーン、おまえのことは知れてるんだ」ロジャーは実際、権力の内奥に踏みこんだのか？ 頭巾と覗き穴、黄金の装具と香と大腿骨の笏杖の世界に？

「そちらはモスムーン氏ではない、メキシコ」ポイントマンは咳払いして、「とにかくテーブルから下りなさい……ジェントルメン、こいつは私のPISCES時代の同僚でして、優秀なんです、ご覧の通りいささか情緒不安定で——おお、メキシコ、まったく何という——」

ロジャーはすでにボタンを外してホースを取りだし、光沢豊かなテーブルの上にたつぷり放水を始めた——書類にも、灰皿にも、筒先はたちまち、表情を変えずにいるテーブル席の紳士たちにも向けられる。幹部の人物にして、激しやすい連中なのだが、眼の前で起きていることをいままなお信じられずにいる。いま自分らが、どんな世界にワープしたかはさておくとして、ここが自分らの慣れ親しんだ世界とウリ二つということは確かで、そこでは、こんなことが起きようはずはないのであって……それに実のところ、温かいオシッコが、十ギニーも支払ったネクタイから、創造性豊かに見えるアゴヒゲ、肝臓色の染みのついた鼻孔、さらにはアーミーの鋼鉄リムの眼鏡へと這いあがり、糊のきいた胸当てにも、ファイ・ベータ・カッパのキーにも、レジオンドヌール勲章にも、レーニン勲章にも、鉄十字章にも、ヴィクトリア勲章にも、^{*30}退役記念の懐中時計にも、襟につけた「デューイ^{*31}を

30 順番にアメリカ、フランス、ロシア、ドイツ、イギリスの、学識または武勲を讃える（選ばれ）の印。

31 トマス・デューイは一九四四年の大統領選でローズヴェルトに対抗した共和党候補。大きな政府を背負う負担を実業界から軽減することを公約した。

大統領に」のピンにも飛沫がとび散るさまはなかなか爽快ではないか。見え隠れしている軍用リボルバーにも、肩の下に収まった短軀のショットガンにも……

「おい、ポインツマン」イチモツの意気はふれない。怒りでふくれた円筒を立てたその図は、夕暮れ時の海辺の上空、紫色（バイル地のピロードのような目のつんだ紫色）の雲の間で、強風にあおられて身を起こす、着陸待ちの飛行船のようだ。「おまえを最後に残してたんだが、なんてことだ、もう小便が残っていない。ほら、一滴も。いや、残念だ。おまえには何もないってこと。わかるか？ たとえおれの命を差しだすハメになっても」すごい言葉が口をついた、これは単なる誇張なのか、いやいやロジャ―は本気なのかも、「おまえの取り分はどこにもない、何かを得たならおれがいただく。おまえが昇進するというなら、組みついてでも引きずりおろす。どこへも逃がすもんか。もしおまえが束の間の休暇をもらって、だれか気の合う女と、どこかの部屋へしけこんだって、おれが窓に張りついてるぞ。どこへでも付きまといてやる。おれのことを消そうたってそうはいかない。外へ出るなら、おれが中に入る。おまえの部屋は汚れるし、霊に憑かれる。新しい部屋を探すことになるだろう。外へ出ずにいようというなら、中へ忍び込んで、追いまわして、最後の部屋まで追いつめてやる。おまえは一番奥の間にこもって、そのうす汚れた売春奴の人生を、そこで終えるんだ」

ポインツマンはじつとして、ロジャ―と眼を合わせない。ロジャ―が望んでいたとおりだ。そこに警備の警官が現れた。なんだよ、せっかくのクライマックスが——とお思いかもしれませんが、追跡シーンに詳しいあなた——タージ・マハール、ウフィッツイ美術館、自由の女神像を目にするたびに、チェイス・シーンを想起せずにはいられない、ワオ、イ

「イ、ダダラス・フエアパンタスが月光の塔を抜けて逃げていくぞって興奮しちやう方々
は、今のシーンに注目——」

ロジャーは飛びのき、テーブルの下に逃れて前のボタンをかける。職務に熱心なあまり
「片にテーブルめがけて飛びこんだ警官らは、鉢合わせして罵りあい始めた。ロジャー
は早くも卓上の追っ手の一段下層に陥り込み、なめし革の靴々、鉚釘を打った靴々、ピン
ストライプの脚々、ママのお手製のアーガイル模様の靴下群をすり抜けつつある。これは
きわどい逃避行だ。テーブル下のどの足から不意の蹴りが飛びでてロジャーを倒すかわか
ったものではない——だがロジャーは先ほどの、禿げの鉄鋼王の足下へうまく行きつくと、
その男が首から垂らしたネクタイか、股間に垂らした肉茎か、つかみやすい方をつかんで
テーブル下に引きこんだ。

「よし。これから脱出する。あんたはおれの人質だからな。わかつたか？」机の下からロ
ジャーが姿を現す。続いてネクタイまたはペニスを握られ、血色を失った大物実業家が引
きずり出される。息をつまらせ卒中が危ぶまれる人質を、子どもが雪ぞりを引くように、
ロジャーはずんずん引っぱってドアの外。そこでは歩哨の女たちが、異様な虹のアンサン
ブルをなしている、その表情には、少なくとも脅威の装いが浮かんでいる。虹を抜けると、
通りからサイレンの音《異常者に石油会議襲わる会議中の面々に××して逃走》そして早
くもエレベーターを降りたロジャーは裏回廊をスタコラサッサ。セントラル・ヒーティン
グ装置にまで降りていくと、そこに黒肌の守衛がふたり西アフリカの怪しいクサを紙巻き
にして回しのみズーム、と飛びこえ、春に運転を停止した（ちょっと残念）巨大なボイラ
ーに人質を押しこんだ。裏口を抜け、プラタナスの植わった小径を走る。そこは小さなパ

スとするチェイスとして、
アルフレッド・ヒッチコ
ックの『逃走迷路の謎』
（一九四二）が有
名。フィレンツェのウフ
イティ美術館からの窃盗
と逃走は、ピンチョン自
身『V』の第七章で描い
ている。

33 サイレント映画
『バグダッドの盗賊』
Thief of Bagdad（一九
二四）で三日月刀を持っ
たフェアパンタスが逃げ
るシーン。

ーク、柵をヒュイッと乗りこえた俊足ロジャーク。追うロンドン警察。

古巣の「ホワイト・ヴィジターション」に、ロジャークにとってほんとうに必要なものはない。どれも見捨てていってかまわないものばかり。背中にしょった衣類とモーターブールから失敬したバイク、小銭でいっぱいポケットと際限のない怒り。三十歳の無垢な若者が町を行くのに、これ以上何が必要だというのか。「おいらは、ディック・ホイッティントン！」キングズ・ロードを邁進しながらそんな思いが頭に浮かぶ。「ロンドンに出てきたぞ。みんなのための市長になるため……」

バイレイト・ブレンティスは家にいた。ロジャークが来るのを予期していたようである。テーブルの、愛用のメンドーサが、油と青み剤で光っている。両手には綿や布や棒や壘が握られているが、眼はしっかりロジャークを見ている。

「違うんだ」ミルトン・グローミングの名前が出たとき、ロジャークがポインツマンをなじり出すのを、バイレイトが制止した。「どのみち大したことではないが、そのくらいにしておけ。グローミングを遣わしたのはポインツマンじゃない。へわれらだよ！」

「へわれら」？

「きみはまだ新米のパラノイアだからな、ロジャーク」はじめてブレンティスにファースト・ネームで呼ばれてグツときたロジャークは、誹謗の口をつぐんだ。「もちろんへせい・システム」が充分な発達を遂げているのが前提だが、それだけでは半分だ。へかれらのあるところには、へわれらがあつてしかるべきだろう。おれたちのケースでも、ちゃんとへわれらは存在する。つまりだ、へせい・システムと少なくとも同等のへワイ・システムを展開しえたときにはじめて、そのパラノイアはへ創造的」と呼ぶにふさわしい

34 文無しの家出少年から身を起こしてロンドン市長にまでなったホイッティントン（一三五四？〜一四二三）は伝説化し、イギリスの子供向けのおはなしとなって浸透している。

35 チェルシー・エンバンクメントの北を並行して走る。「キング」の名は十七世紀にチャールズ二世の私道だったところから。

36 上巻209ページ参照。

も、ちよとならんのだよ」

「待て、マイン、それ、まず、*ライク・システム*はどこよ。客人は寛大にもてなしてくれ、第二に、いきなりへかれらシステムへって言われてもわからないからな、おれは、*チェビシェフの定理*のほうから始めようないだろ、」

「要するにだ、へかれら、またはそのお抱え分析師が言うところの『*妄想システム*』のことだ、言うまでもないが、いわゆる『*妄想*』は常に、権力によって定義される。何が現実で何が非現実かを、われわれが思いたやむ必要はない、へかれらの便宜で決められるのだよ、意味があるのはシステムだからな、データがシステム内でいかに収まり合うかが重要だ、全体として一貫性があればいい、そうでないとシステムが支えきれない。ポインツマンがグローミングを派遣したという考えは、システムの常規を逸脱している。きみのグローミング説も、それに反する妄想集合——この我々自身に関する妄想をへわれらシステムと呼ばしてもらおう——がないのであれば、却下されはしないんだがね——」

「われわれ自身に関する妄想？」

「本物の妄想ではない」

「しかし、公的に規定される」

「便宜上はだ」

「だったら、海賊さん、それ、彼らのゲームを演じてることにならないのか」

「つまらんことに気を揉まなくていい。この考えで問題なくやっていけるんだ。まだわれわれが勝っていない以上、自分たちのプレイの仕方にとだわる必要はない」

ロジャールはすっかり混乱している。ちようどそこへ、誰あろうミルトン・グローミング

37 自然数 n と $2n$ の間に必ず素数が存在することを証明したもの。

が、黒い肌の男を連れて入ってきた。その黒人は、クライヴ・モスミーンのおフィスの地下のボーラーのところで、ケムリを喫っていたふたりの守衛の片割れで、名前はジャン・オデュイユンブー、《黒の軍団》の連絡員だ。ブロート・ヘット・ワックスウィングの不良副官も女連れで姿を見せる。女の方は、流麗なスロー・ダンスの足取りで入ってきた。その足取りから、キッチンから上半身ハダカで出てきたオズビー・フィール（おやまつ、いつのまにか胃のあたりにボーキー・ビッグの刺青をしている）は、《ロインの影響を読みとる》。

ふむ、これでいいのか、ちと心配だ。もしこれを《われらシステム》というのなら、《かれら》のシステムと同じくらい、各部が合理的に相互連結していきそうなのに、そのような思慮深さはまるでなさそう。

「そこがポイントなんじゃないの」オズビーが大声を張りあげる。ベリー・ダンスの腹の上で、ボーキーがゾツとするような笑い顔になった。合理的なのが《かれら》なのよ。その合理ってのを粉碎するのが《われら》だから。なあ、メキシコ、そうだろう？」

「オーイェ」他の連中が喝采する。ウケは良好、オズビー君。

サー・ステイヴン・ドズセントラックは窓辺にすわって、ステン軽機関銃の掃除に余念がない。外はロンドンの晩夏の静けさがうずくまり、その背中を厳肅なる冷気が撫でるのが感じられる。いま、サー・ステイヴンの頭の中に言葉はない。心をまるごと機関銃に奪われている。妻のノラのことも考えない。ノラはどこかの部屋でいまも彼女の回りを巡る部属者により養われ、自身を奇妙な運命に委ねている。ここ数週間、彼女は明瞭に理解したのだ、真のメキシコがどうなるように、自分の実の正体は、文字通り《重力の

力〕であるのだと。わたしは〈重力〉、〈ロケット〉は昇るのに私をうち払わねばなりませ
ん。太古の死骸は私に向かつて固まり歴史の素材に変質するのです。……惑星となつてノ
ラの回りを巡る異能者、予知者、念動者、霊界トラベラー、悲劇のヒューマン・インター
フェイス。彼らはみな彼女のおとずれについて知ってはいるが、誰ひとりとして彼女がい
かにめぐるのかは看取できない。いまや彼女は自らを証明しなければならぬ——より深
い自己放棄の形を見いだすこと。「至高の門」を前にしたサバタイ・ツエヴィ³⁸よりも深い
自己否認を。この状況にかこつけた悪戯というのがまた、ときどき起こるのである——哀
れにもノラは、きみの大叔母でさえインチキだと見抜く降霊会のカモにされてしまふだろ
う。イエス・キリストの扮装をしたロナルド・チェリコークみたいなやつのおふざけた訪問
を受ける。隠れた紫外線の小型スポットライトの中に上からヒュルヒュルとワイアで降り
てきて、なんとも悪趣味な蛍光に包まれる。そいつはヘンな福音の一節をむにやむにや唱
えたかと思うと、磔の高みから手を伸ばして、ガードルに包まれたノラのお尻の感触を味
わおうとするのだ……侮辱をうけた彼女が廊下に逃れる。するとそこには冷たく湿った不
可視の手がウジョウジョしている——ポルターガイストどもはトイレにすわった彼女の割
れ目の頂角めがけて、淑女らしい糞塊をとび上がらせる。アヘッと叫び、ケツからそれを
垂らしながら、ガードルは膝のあたりに巻きつけたまま、私室の居間にヨロヨロ戻るが、
そこにも慰安は待っていない。誰の仕業で現れたのか、レズビアン³⁹の象が二頭69にいそ
しんでいる。ヌンメリとした鼻を濡れた互いのヴァルヴァの中に対称的に抜き差ししてい
る。いまわしい光景からクルリ振り向き逃げだすのだがドアが開かない。いたずら好きな
幽霊が鏡をかけてしまったのだ。そしてもう一体、別の幽霊が冷たいヨークシャー・ブデ

38 カバラの教義に通じた彼は、トーラーに新解釈を施し、自らをユダヤの民の救いの主だとして信者を集めたが、一六六六年オスマン帝国に捕らえられ、皇帝メフメトIV世（至高の門）サブライム・ポルト、と呼ばれた）に強いられて自己否認し、イスラム教徒に転向した。

リングをもった手を挙げ、彼女の顔に狙いをつける……

バイレートの二層家屋では、みんなが対抗勢力の旅の歌を歌っている。そこにはトマス・グウェンヒドウィもいて——そう、ポインツマンの奉じる〈正典〉の弁証法的思考の呪いに彼は落ちなかった——ローズウッドの六弦琴とおぼしき楽器を鳴らしている。

〈かれら〉はお前の背中で眠り

お前のビールの中で泣いた。

悲しきララバイ、歌いまくって

お前を信じ込ませてた——

〈かれら〉は同情が欲しいんだ、

お前の魂が欲しいんじゃない、と。

いいか、〈かれら〉にダメされるなよ、

泣きを見るだけが人生じゃない、

クソを喰らいつづけるだけが。

金を配ってクソを喰らわす

ヤツラを蹴おとす時がきた。

レジスタンスじゃないんだぞ、

こいつは全面戦争だ。

「全面戦争だ」とロジャーは歌いながら、クックスハーフェンへと車を乗り入れる。ジェ

シカがジェレミーのために、どんな髪型にしたんだろうと思いつながら。あの我慢ならない
堅物の頭をロケットの燃焼室に突っ込んでやったら見ものだぜと思いつながら。「イエー、
全面戦争だ……」

出かける前に一点けろ、

〈かれら〉を甘やかすのはヤメろ、

〈ゼイ・システム〉を打倒する。

レジスタンスじゃないんだぞ、

こいつは全面戦争だ。

見えるのだが、いまはそれよりもっと異様な何かに見える。それが何か、じきにエディにも考えが浮かぶだろう。

師団の腕の徽章。



振動はエディの趣味である。ブルブルふるえて時間を過ごすのを彼は好む。これは普通の、鳥肌がザワッと立って引いていくといったブルブルではない。彼のは止まらないブルブルなのだ。そう簡単にマスターできるものではない。エディはこの道をきわめた体振動のプロであって、おまけにブルブルのようすからその意味を読み取るという、不思議な能力も得ている。ゾイレ・ブマーがマリワナから意味を汲みとり、ミクロス・タナツが鞭傷の意味を読みとるのと同じだ。しかも、自身のブルブルだけじゃなくて、他人のブルブルも解読できる。そうなんだよ。振動ってのは、それぞれ別個に来ることもあれば、一かたまりになって来ることもある。すると、近頃エディの脳には一種の弁別器回路^{ディスクリミネーター・サーキット}ができていて、個々の振動により分けることができるんだ。振動にも種類があって、一番退屈なのは、周波数が一定で何のバリエーションもないというもの。その次につまらないのは、向こう端（発信源はいろいろだが）でのインプットにしたがって、周波数に、早くなったり遅くなったりの変調^{モジュレーション}が見られるというだけのもの。そしてその次のレベルに、周波数と振幅の双方が変化する不規則な波形があって、こうなるとフリーエ解析^{フーリエ解析}にかけて波動のハーモニクス⁴のようすを検討しなくちゃならない。こいつは少々煩雑で、コード化⁴ってことが絡んできたり、サブ周波数やパワー・レベルの設定をしなくちゃならなかったりで、それに対処できるようになるには、相当な熟達が必要になる。

「おいペンシエロー」エディの上官、ハワード・「スロー」・ラーナー軍曹である。「火からどけ、燃えちまうぞ、バカヤロウ」

4 複雑なシグナルをその成分（周波数）ごとに取りだして、大小にしたがって並べる操作。

まれるのであって、現実の電球が発しているのは、知覚できない明と暗との繰りかえしであるわけだ。通常は、知覚できない。パディの側でも、送るメッセージが意識されているわけではない。メッセージを送り出しているのは彼の筋肉と骨格の動き、すなわち電力のソースとして作動することを習得した彼の身体回路である*6。

いまエディ・ペンシエロは体をふるわせ、電球にあまり注意は向けていない。自分のところのメッセージが面白くて気をとられている。近くで誰かが、夜闇にまぎれてブルース・ハーモニカを吹いているのだ。「何だ、ありやあ？」軍服の礼装姿で黙って腰をおろしている大佐の後ろで、白色光に浮かぶエディがたずねる、「ヘイ、マゴニグル——なんか聞こえねえか？」

「聞こえるさ」発電機の向うからパディがまぜっかえす、「てめえの除隊が飛んで消えてく音だろ。ケツのはしっこからでっけえ翼が生えててさ。その音にちげえねえや！ だはは！」

「バーカー！」とエディ・ペンシエロ。「おめえ、除隊が聞こえるのかよ、へえー、アイリッシュってのは狂ってるねえ」

「そんならな、ペンシエロ、イタリアの潜水艦がどんな音出すか知ってつか、新型のソナーで聴くと？ どうだ、え？」

「うーん……どんな音だ？」

「ピングニ、ギニ、ギニ、ウォップ・ウォップ・ウォップ！ わかったか。だはは！」

「くそっ、てめえ」と吐き捨てて、エディは大佐の銀黒色の髪を梳かしにかかる。

6 つまりパディの腕が、新陳代謝のエネルギーによって、スピードを変えながらクランクを回す。すると発生する電流に波形の変化が生じる。それはフィラメントの微細な輝き具合に反映するので、それを解読できる人間がいれば暗号のシステムが成立する。

7 「ウォップ wop」はイタリア人に対する差別語。

クシが頭に触れた瞬間、大佐の口が開いた。「ふつう、掃討作戦というのは二十四時間でやってしまうもんなんだがな。日没から始めて一戸一戸しらみつぶしに行って、次の日の日没で終わる。始まりも終わりも、黒と黄金のクオリティに包まれるもんだ——伸びる影と、サイクロラマのごとく純粹に揺れうごく空にな。だがここの日の入りは、どうなんだ、どこかで何か爆発したのか？ いや、本当に——東方のどこかで、クラカタウの再現か？ いや同じくらいエキゾチックな名前だ……色が今やがらりと変わった。火山灰でもいい、別の細かく分裂した物質でもいいが、粒子が大気中に漂うと、光の回折のために空の色が妙な具合になるわけだ。知っていたか、若いの？ とても信じられんだろう。長めのテーパークットで頼む。上の方はクシが通りそうに通らん程度に短くな。そうなんだよ、おまえ、空の色が変わるんだ。どうやって変わるのか。問題は、何かにしたがって変化しているのかという点にある。太陽のスペクトルは日々、変調^{ミジュレト}されているのか？ ランダムではなく、体系的に、風の中に舞いひろがる知られざる粒子の操作によって？ それはわれわれに向けられた情報なのか？ 深遠な問題だ、心を不安にさせる。

「おまえ出身はどこだ？ わしはウィスコンシン州ケノーシャだ。家は小さい農場をやっておる。雪の畑と柵柱がシカゴまで延々と続く。操車場のブロックの古い貨車を雪がおおって……白い塊がボコボコ続いているという景色だ……ウィスコンシンってところはまるで、軍隊の遺体処理班みたいだぞ」

「ヘッヘッ」

「おいペンシエローパディ・マゴニグルが声をかける。「まだあの音聞こえてっか？」

「ああ、ありやマウス・オーガンにちげえねえ」ペンシエローは一本一本髪をすくい上げて、

8 円筒形の部屋に描かれた三六〇度の円形パノラマ。

9 一八八三年に大噴火した、インドネシア、スンダ海峽の火山島。ヨロップバ人の感覚には、ヒロシマやナガサキの位置も、名前の響きも、「クラカタウ」からそんなに遠くないのかもしれない。

10 「運命の三女神」のうち、クロトーが紡ぎ出し、ラケシスが長さを決めた糸を切るのがアトロポス。

11 ハーモニカの別称である「マウス・オーガン」を、文字通り「くわえ器官」の意味にとったシモネタ・ジョーク。

それぞれを微妙に異なる長さにカットして、それを繰りかえしながら、大佐の頭のあちこちを微調整している……髪の本数は神のみぞ知る。そのそれぞれを相応の長さに切るのがアトロポス^{*10}。今夜のエディ・ペンシエロを動かしているのは、無慈悲な裁断を行うアトロポスの相を帯びた神だろう。

「おめえのマウス・オーガンなら、おれが持つてるからな^{*11}」パディがからかう。「ここにな！ 見ろや！ イタ公の尺八^{クラリネット}！」

散髪の長いひと切りひと切りに、転送される情報がこもる。毛髪もまた、変調^{モジュレート}される周波数のひとつにほかならない。髪の毛が、神の恵みにより、すべて均等に配分されていた時代を想定してみよう。完璧な直毛の髪が、大佐の頭全体から垂れていた無垢の時代。そのとき以来、日々の風が、かき分ける仕草が、汗とかゆみが、思いがけぬサプライズが、眠りの縁での三フィートの落下の衝撃が、見つめられる空が、恥辱の思い出が、ことごとく、かの完璧な回析格子^{グレーティング}の上に、おのれを書き込んできたのである。そこにクシとハサミを入れて、構造改変を行うエディ・ペンシエロは、言ってみれば〈歴史〉のエンジニアなのだ。大佐の髪をつくり直す作業とシンクロして、彼の身体はブルースをふるわせている——ハーモニカの第二、第三穴の長いふるえ^{*12}が、今宵にかぎっては、髪を刈りこむハサミの入り方に対応する。湿気をたっぷり吸い込んだ夏の夜の樺の幹とも、樹木の繁る公園内の石造りの家に通ずるアブローチとも、高い旗の立つ遊歩道のわきで麻痺して動けなくなった雄鹿とも響きあう……

ブルースというのは低い側波帯の問題だ。吸い込むときは音程どおりの澄んだ音だが、それを顔の筋肉で低い方へベンドする。きみの顔の筋肉は笑いもつくったし、苦痛にも引

12 白色光（さまざまな波長の波の混合）を、スペクトルに分光する装置。ここでは光の波長と頭髪の長さとの対応的に語られている。

13 ブルース・ハーブ独特の（ブルーノートと呼ばれる）ふるえのこと。下層の黒人の心情と結ばれた波を受信し、それに合わせて大佐の調髪を下層階級の兵卒エディは、〈カウンターフォース〉の営みに参加しているといえるだろう。なお彼の名前は、イタリア語の *un pensiero*（そして考えも）と同音。『GRC』はこれを、ヴェルディの歌劇『リゴレット』の「女心の歌」の第四行の引用と見る。この床屋は他人の「頭の中も変える」ことができるのか？

きつただらう。意図して無表情を装ったこともしばしばだ。物心ついてからずっとそれをやっている。どこで純音を発するかも、部分的にはこうした動きの関数として決まる。それがブルースの響きの、日常的な基盤である——^{スピリチュアル}霊的な基盤の方は、言わないでおくけどね。

「どこだかわからん場所だった」大佐は物語る。「ただ延々と下りていく。切り取られたコンクリートの大きい塊を下りていく。黒い強化ロッドが突きでていたな……鉄が錆びついて黒くなったやつ。空気中にとろろ高貴な紫がうっすらと漂っていた——周囲がボウッとするほど明るくはない、夜の闇を変質させるほどではない。それらがニュッと垂れさがりながら、一個ずつ、ボトン、ボトンと落ちてくるんだ——ヒヨコの胎児というのを見たことがあるか？ やっと鳥の形になりたてのやつだ。見ているはずはないな、おまえは都会育ちだし。農場へ行くと、いろいろ勉強になるぞ。鶏の胎児ってのがどんなのかも学べる。そうなりや、暗闇でコンクリートの山を下下つてるときに、空から紫色の滴りとなつて、そいつが生まれてくるのが見えたら、何だかわかるというもんだ。田舎は都会よりずつといいぞ。都会じゃ、ただ危険から危険へ動きまわるだけだ。それも全部新しい危険だから、過去のやつとカップリングさせることもできん……」

はいはい、これも巨大な廃墟。エディは一步ずつ、足下を確かめて下りていく。大佐の髪はいま、あまりに滑稽——後頭部から前方へ撫でつけ、端をグンと長くして、それをピンと立ててあるものだから、たとえて言うなら顔のまわりに黒いヒマワリの花か、さもなき人用の日よけ帽ができていいる。真中できわ立っているのがマゼンタ色の長いゲジゲジだ。魔城のエレバスから、ヒヨイヒヨイッと伸びてきて、大佐をパチン、楽しげに扶

んでは引っ込んでいく細くて鋭利な二本のアーム（おっと悪く取らんでよ）ちよっと夜風を浴びするか、ハッハッ！ってな感じなのだが、大佐を捕らえ損ねると——まあ、そんなことばかりなのだが、そのたびに、ヒョイツと腕を引っこめるところはギャンブラーとおなじだ。あーあ、でもまあ、次がある……

ちくしょう、連隊から離れちまった、盗賊団にとっ捕まって火あぶりにされちゃう！

おっと、あそこにダコイツだ、何だありやあんな獣みたいに身を低くして占領軍^Gが居すわった街の光の中を走るのかい、赤と黄色のターバンに、三七年型フォードの前面みたいにすり切れた顔、どいつもこいつも、いかにもヤクの常習みtainな焦点の合わない眼をしてる、カルマの鉄槌も受けつけそうもない顔だ——

三七年型フォードが？ カルマの鉄槌を免れている？ バカ言うな。安物の車はみんな廃車場でオダブツするのさ。例外はねえよ！

へえ、ほんとだよ、スキッピー。それならなんで、今もあれだけ道路を走ってるのさ。

うーん、そ、それはだな、ミスター・インフォメーション、《戦争》のせいで新品のクルマ、つくらなくなったら、だから昔なじみの愛車を、そろりそろり運転してなくちゃいけない、っていうのも修理工もみんな戦争にとられちゃったし、ガソリンも買いだめできないし、ほら、Aステッカー^{*14}を右下の目立つところにつけとけて——

スキッピー、アホ助め、また朦朧とした精神退行の旅に出ちまいやがったか。戻ってこい。分岐点まで。ほら、ここで路が分かれてるだろ。向こうの男を見ろ。白い頭巾に茶色の靴、愛想よく笑っているが、誰ひとり眼も向けない。なぜか。そりゃ、あいつがいつも暗がりに入ってるから。それでもな、悪いやつじゃないんだぞ。あいつは転轍手^{ポイントマン}、レバー

14 戦時中にガソリンの販売を制限するための分類で、仕事に必須でない一般家庭の車は「A」のステッカーを貼り、週あたり5ガロンの消費を許された。

を動かしてポイントを切り替えるからそう呼ばれる。おれたちは「幸福の町」へ行くんだぞ。『悩みの都市』じゃない。ドイツ人の「Der Leid Stadt」は「めんだ。ミスター・リルケっていうドイツ人にそれをうたった、しみったれた詩があるが、そんなのは読まんぞ。俺たちはハッピーヴィルを目指してるんだからな。あのポインツマンがそれは請け合ってくれる。いや、楽なもんさ。レバーはスムーズに動く、力を加える必要などない。スキッピー、おまえにだって押せるぞ。その場所を知っていたらの話だがな。だけど、あいつは小さなひと押しで、ずいぶん大きな仕事をした。なにしろ、おれたちみんなを、『悩みの都市』じゃなく、『幸福の町』まで送りこんでくれたんだから。そういうことができるのも、分岐ポイントとレバー位置を知ってるからだ。こんなに小さな労力で、こんなに大きなことをなし遂げるというのは、この広い世界で、彼のような人間だけだ。スキッピー、彼はおまえにだって、正しい軌道を与えることができたんだぞ。自分で勝手な幻想を膨らますのはかまわないがな——まあ、おまえにや、まともに考えるのはそもそも無理だから——今夜、ミスター・インフォメーションは気分が乗っている。おまえにハッピーヴィルを案内してやろう。まずは、一九三七年型フォードについての情報だ。ダコイトの面をして、いまだに路上を走っているのはどういうわけか。おまえは「戦争のせい」といったな。ポイントを、ガキガキ乗り越えて、間違った線路に乗っちゃったみたいにな。あの『戦争』こそ、岐路であるポイントの集合体だったわけだろ。そうだと、スキッピー、『戦争』では、モノが死なずに生きつづけられるんだ。モノだぞ。各種のモノたち。フォードもそのひとつだ。『戦争』というと、すぐにドイツが何の日本が何の、っていう話になるが、それは、現実の『戦争』の一面、かなりシュールなヴァージョンにすぎない。実

15 「ドイツの悲歌」の「第十の悲歌」上巻647ページ註11に「おお、天使なら跡形もなくこの慰安の市（いち）を踏みくだいてしまうだろうに」（手塚富雄訳）とあるが、その「慰安の市」と同じで、虚飾と喧嘩に満ちた市街を表す。

戦争の「戦争」は、いついかなるときも存在しているのだよ。今は、死者の数が減ったが、戦争が大量の人間を殺しているという事態に変わりはない。いまは殺しの手口がより巧妙で見えにくいものになっているというだけだ。ときには、あまりに手が込んでいて、われわれのレベルにいる者でさえ、見破れないことも多い。しかし、死ぬべき人間が死んでいくという点では、両軍に分かれて殺しあっていた頃と変わらない。基礎演習で機関銃の一斉射撃をやつてるときに立ちあがってしまうやつ。自分に命令する軍曹を信頼していないやつ。すべて転んで敵に弱みをさらすやつ。そういうのは、そもそも「戦争」のお役に立てないわけで、だから死ぬのだ。正しいやつらが生き残る。だがそうでないやつもいる。自分の寿命の短さにちゃんと気づいているらしいのに、それでノロマな人生を生き続けているのはなぜなんだ。誰にもわからんな、これは。そいつらを一人残らずこの世から抹殺できたらいいと思わんか？ そうすれば誰も戦争で死ななくてよくなる。そうなりや楽しいだろ、どうだ、スキッピー？

うーん、そりゃ、面白いでしょうねえ、ミスタア・インフォメーション！ でも、ハッピースキッピーって言うの？ その町、着くのが待ちきれないなあ！

めでたいことに、スキッピーは待つ必要がない。ダコイト団のひとりがヒュッと風を切って跳んできたのだ——亜麻色の絹紐を両拳の間にブーンと音がするまで張って、やつちまえばかり、しきりに歯を剥きだして。と同時に、崩れたコンクリートの裂け目からやつとこのようなアームがヒュイと伸びて大佐を挟み、安全なところに引きおろした。尻から着地したダコイトは、体からんだ紐をとろうと奮闘し、クソッと吐きすてる。ダコイトだって罵るときはクソッと言うのだ。

「あなたは山の下に入りました」アナウンスの声が響く。洞窟音響効果つきだ。「これより先は規則にしたがってください」

ガイドはずんぐりしたロボットで、黒褐色のプラスチック製、ヘッドランプの眼がくるくる回る。体型をカニに似せてあるのだ。「カニはラテン語ではcancer」とロボットがしゃべる、「ケノーシャでも同じです」こいつ、自分にしか通じないキメの文句を言わないといられない性格なんだろう。

「ここはマフィン・ティン・ロードです」と告げるロボット、「どの家も笑顔でいるのにお気づきですか」二階の窓が眼、杭垣が歯、鼻が正面のドアになっている。

「ちよいときくがな」大佐が質問を思いついた。「ハッピーヴィルに雪は降るのかね？」

「雪ですか？ そりゃ降りますノー」

「質問をはぐらかすな」

「ハグラ貸すなど、ケチをおっしゃる。シラバくれたら、貸していい？」と、礼儀を知らぬ機械が歌いだす、「シユラバは見たくないですよ！ 大将、ほかに言いたいことは？」^{*16}

このカニ型ロボット、無礼にもガムを噛んでいる。ラスロ・ヤンプがポリ塩化ビニール分子をいじって作成したこの合成ガムは、きわめて伸縮性に富み、着脱可能の分子を放出したりもする。放出された分子は、ジーマンス社が開発した精巧なヘオズモ・エレクトリック・シエ・シャルターヴェルケ^{*17}によって匂いをコード化、それはロボットのカニ的知覚機構によって、ピーマンズの甘草^{リコリス}の香りと、事実上等価なものと判断される。

「ミスター・インフォメーションは、いつも必ず、疑問には答えているぞ」

「彼が疑問に答えるなら、わたしはその答えを疑問に付して進ぜましょう。雪が降るか、

16 原文のダジャレは
"does it ever snow" に
対して、"Does what
ever snow?" それに大
佐が "You're evading."
「おまえは質問をはぐらかしている」と応じると、
"I'm evading-room vino
from Wisconsin." と歌
い出す。これは「リタシ
ヤ、ウィスコンシンの持

とお聞きになるか。そりゃ降りますとも。ハッピーヴィルに雪が降らなかつたら、雪だるまさんは、どうするんですか。とてもハッピーじゃいられんでしよう！」

「思いだすなあ、ウィスコンシンじゃ玄関前のアプローチを風が吹きぬけるんだ。まるで人が入れてくれといっているみたいにドアを揺すって。雪の吹きだまりを残していく。……ハッピーヴィルでも、そんなことがあるのかい？」

「しょっちゅうですわ」ロボットが答える。

「風が戸口に吹きあたっている最中に、ドアを開けたりもするのかね？」

「それも日常茶飯事ですわね」

「つまりどうか——」大佐が、堰を切ったように、「ドアが家の鼻で、そのドアが開いてて、そこに真っ白な雪の結晶体^{*18}がでかい雲のかたまりになって、マフィン・ティン・ロードから吹き込んでくると——」

「AAGGH！」プラスチック製のロボットは悲鳴を上げて、カラコロと狭い横町に逃げ込んだ。ひとり大佐が残った一角は、街の熟成ワインのような褐色の一面。そこは砂岩とアドービ煉瓦が、壁も屋上も道路も一斉に赤っぽく染めている。樹木は見えない。おや、シヨコラーデシュトラッセ^{*19}をぶらぶらやってくるのは誰だ？ これはこれは、紛れもない、ラスロ・ヤンフ博士じゃないですか。すっかり高齢にはなられたものの、三七年型フォードと同じで、世の一大事もどこ吹く風だ。ここハッピーヴィルでは有為転変のすべては笑顔に生じるちょっとしたお湿りに——口元の真珠のきらめきが、物憂げな薄布に覆われた程度に——すぎない。ヤンフ博士の締めている蝶ネクタイの色は、くたびれて灰色がかつた紫^{ラベンダー}——たとえば言えば、過ぎ去った日々を歌う短調の歌曲が物悲しいピアノと共に聞

台座のワイン中巻」をドイツ語訳りで歌ったもの。

17 Osmo-Elektrische

はジューメンズ・カルテルのブランドネーム。シャルターヴェルケ (Schalterwerke) は「スイッチ装置」。

18 真っ白なコカインの粉末も英語のスラングで snow と呼ばれる。

19 「シヨコレート通り」と訳されるこの通りは、架空の「心の化学社 Psychochemie AG」があるチューリッヒの架空の通り。上巻480ページに既出。

こえる音楽学校の窓から見た、ゆっくりと死にたえていく午後の色。ムツとする談話室にパイプの煙がたちこめ、運河そいを歩く人々の上に雲が重くたれこめる……まさにこの日の午後、このときを鋭く意識してふたりは出会った、ふたりの男が。運河の向う岸で時を告げる鐘が鳴る。ふたりとも遠い地から、もはや記憶もうすれた長旅を経てやってきた。

ある使命を果たすために。だが相手の任務については知らない……

いま大佐の頭上にあるこのオスラム電球^{オスラム}、実はこいつは以前、ノルトハウゼンの地下口ケット工場のベクラー^{ベクラー}の寝台のすぐそばについていて、彼の眠りを見下ろしていた、あの電球なのである。^{オスラム}へかれらの語るところでは、統計的に、 $n \times 10000$ 個に一個の割合で完璧な電球——あらゆる偏差におけるデルタ q が完璧な値で寄り集まったもの——ができてしまう。だから、この電球がいまだに切れずに光っていても、それ自体は驚くにあたらない。驚愕すべき事実は、この電球が不滅だってこと。実に一九二〇年代から光を発しつつづけている。先端に、いかにも時代物らしい、小さなトンガリがついているし、全体の形も、今ほど西洋ナシ型に膨れていない。どんなにすごい歴史を歩んできたことか、もしもこいつがしゃべれたなら——と思っただらね、実は本当にしゃべれるの。そう、パディ・マゴニグルの手回しは、こいつの微細なまたたきにしがっている。つまり、ループができていて、パディの手回しがふたたび発電機にはねかえってタングステンがまたたく具合を変調させるというわけなんだが、まあ、とにかく、聞こうじゃないか——

電球バイロンの物語



Gravity's Rainbow

20 ミュンヘンで一九〇六年から製造されている電球界の先行ランナー。ドイツではジーマンス、AEGらがこの電球に規格を合わせ、イギリスでもGEが、オスラムからの輸入フィラメントを使っていた。

バイロンはブダペストのタンクスラム社で製造されるはずだった。*²¹ そうであつたら、デ
ーザ・ロージャヴァエルディの父サンドールによって持ち運ばれていただろう。サンドール
は、トランシルヴァニア全域をまわる敏腕セールスマンで、この地と親密な接触を行うう
ちに異様な能力を発揮するようになった、と本社ではバラノイアックな恐れを抱くに至つ
た——彼の思い通りにさせないと、ビジネス全体に恐ろしい呪いがかかるのではないかと
いうのだ。現に、一介のセールスマンながら、息子を医者にしたいという望みを抱いて、そ
れを実現させている。だがバイロンの製造は、土壇場になってベルリンのオスラム社に回
された。やはりブダペストという町にただよう魔術的なオーラに影響されたのだろう、生
まれる場所が変更になった。ベルリンには赤ちゃん電球をあずかるヘバルプ・ベビー・ヘ
ブン、すなわち「赤ちゃん電球天国」という組織があつて、なんだい、そりゃ、映画み
たいだね、そうさ、ビッグ・ビジネスよ、ハッハッ！ などとほほえましい冗談^{からかい}のネタに
もなるのだが、〈かれら〉に気を許したらダメだ。これの本質は官僚機構なのであつて、
〈バルプ・ベビー・ヘブン〉つてのはほんのサイド・ビジネスにすぎない。すべては我々
の手の届かないところでの話——連合企業が、おのれのポケットから、何キロ四方もの
薄地^{薄い土地}織物や、大樽入りのピンクやブルーのIGファルペン製〈ベビー染料〉を繰り出して
くる。ジーマンス社製〈赤ん坊電球用おしゃぶり〉も何トンとなく出てくる。乳飲み子の
電球ちゃんに一一〇ボルトをふくませて、一滴の電力^{パワ}も漏らさずに吸わせるのさ。この子
らが育つた暁には、立派な電球族として、権力^{パワ}の装いを与えるビジネスに活躍するだろう
——闇夜に抗する、見かけだけのパワーをね。

実のところ、〈B B H〉はかなりシヨボイところなのだ。褐色の垂木から蜘蛛の巣

21 従ページ参照。
22 欧州屈指の歴史を
持つハンガリーの電球会
社。

が垂れている。ときどき床をゴキブリが這う。するとベビーちゃんらは一斉に身を転がして覗こうとする（電球なんで、どれもまったくシンメトリックに見えるだろうが、見かけはそれでも、スキッピー、ネジ山のてっぺんで接触しているってことを忘れちゃ困るぜ）。ゴキブリを見て、みんなアー・ガー、アー・ガー言いながらチラチラ発光すると、ゴキブリ君はビククラこいて腰を抜かし、むき出しの床材の上で、ただ潰されるのを待つかのような体勢だ。恐怖の瞬間が、サーッとよみがえったのだ。頭の上に、どこからともなく、一瞬の放射爆発のようにピカッと現れた、全視の光の記憶が。純真無垢なヘベビーバルブ²³たちにはこのゴキブリのアプリアクション²³が理解できない——恐怖に襲われたのはわかるけど、なにがそんなに怖いのだろう。ぼくらはただ友だちになりたいだけなのに。ゴキブリっておもしろいよ、たのしい動きをするし、みんな興奮して見てる。ただひとり、バイロンは別だ。みんななんて幼いんだと思っている。こいつらに、少しでも意味のあることを考えさせようとしたら、たいへんな苦勞が必要だ、と。よう赤ちゃんたち、おれは〈電球バイロン〉だ。お歌を歌ってあげようか、この歌どうだ——

輝け、電球ベビーズ

白熱の、狂犬病^{レベイズ}の顔を光らせろ

口から泡吹き、喉から叫べ

いいぞ、まるで小悪魔だ

きみらに国を与えよう

ゴキブリたちの王国を

23 「トラウマ再体験」の意。上巻97ページ註3参照。

楽しいぶらう

天井の上から、夜も昼も

ふらりと王国、見渡している

ゴキブリさんはそろそろ出てくる

みんなきみらが大好きさ、でも

朝の光に照らされると、スタコラサッサ逃げていく

だからきみたち、照り輝けよ

〈電球ベビーズ〉、未来の波だ

ぼくの偉大な十字軍に入れ

歌え、ベビーズ——来いよ、ともに大行進！

困ったことに、パイロンは古い時代の魂なのだ。老齢でありながら、〈赤ちゃん電球〉のガラスの牢に囚われている。パイロンはここが気に入らない。じっと仰向けになって製造されていくのを待つのはいやだ。スピーカーから聞こえてくるのが、チャールストンの騒音か、国民に告ぐという演説か——なんて、やっつけられるかっていうんだ。ここを抜けだす。そして外の動きに身を投じる。もっともなことに、彼の身体はあらゆるストレス性の病に冒されてしまった。ベビーバルブのおむつかぶれ（これはネジ山の腐食のごときもの）。ベビーバルブ・コリック（タングステンのフィラメントのどこかに高抵抗値の痙攣を生じる）。ベビーバルブ呼吸亢進（真空の電球内に——その事実がないのに——空気が入ってくる感覚を伴う）。

Mデイ、すなわち動員開始の日がきたら、パイロンの心はさぞ燃えあがるだろう。その

日まで、ずーっと、壮大でクレイジーな計画を温めながらすごしてきたのだ——電球全員を組織する、ベルリンの電力中枢を占拠する。彼は〈ストロボ戦術〉にだって通じている

——人間の脳のアルファ波にサイクルを合わせて明滅する、そのほとんどヨガのような動きのコツをみんな磨いていけばいい。そうすれば敵は癲癇発作で倒れるはず。そうだとも。パイロンは収容された養育棟の垂木の上に幻影を投げかけた。ヨーロッパ中の電球二千万個、それが一斉に——〈グリッド〉に送り込んだスパイの誰かが設定した周期にしたがい——パチパチと明滅する。人間どもは〈完全エネルギー〉の海から浜に打ちあげられた魚のように、二千万の部屋の中でのたうち回るだろう——気をつけろ、人間たちよ、これはほんの警告にすぎないのだ。次は自爆攻撃をしかけるからな。ハッハッハ。そうともわれわれだってカミカゼ特攻隊の用意はあるのだよ。〈キルギスの光〉というのを聞いたことがあるかな？ あんなのは、われわれの光作戦に比べれば、ホタルのケツの灯りみたいなもんだ——おっと、初耳とね？ よく聞いときな、われわれの仲間だね、率で言えば五パーセントほどだが、それでも百万はいるかな——よろこんで爆死を遂げるつもりでいる。計算された最期を辛抱強く待ってブツリと切れるなんてのは、一度にボン！と破裂して燃えつきる死に方がいい。……というわけでパイロンは〈ゲリラ攻撃部隊〉の編制を夢みる。ハーバート・フーヴァーも、スタンリー・ボールドウィン²⁴も、彼ら全員の顔面に、同期した、一斉の電球破裂大作戦だ……

パイロンを激しく揺りおこしたショッキングな事実！ 人間たちはすでに組織されていた。多国籍白熱電球カルテル、その名も〈ファイーパス²⁵〉は、スイスを本部として、インタ

24 一九二三年から一九三七年までの間に、三度英国首相に就任。フーヴァーが米国大統領だった時期と重なるのは一九二九年。

25 一九二四年にスイスのジュネーヴに置かれた実在の電球製造販売カルテル。世界のメジャーな企業が集まって全市場の九〇パーセントを独占、電球の寿命と価格の調整を行った。Probus（古代ギリシャ語で「ポイボス」）とは、元来「輝く者」の意味で、太陽神アポロンと同一視される。

26 一九二八年に合併によって生まれた「電気企業連合（Associated Electrical Industries）」は、一九六七年にG Eに吸収合併。

ーナショナルGE、オスラム、英国A E I²⁶が中心となって運営しているが、この三社の株はそれぞれ〇〇パーセント、二九パーセント、四六パーセントという割合でアメリカのゼネラル・エレクトロニクスが握っている。〈ファイバース〉は諸価格を固定し、ブラジル、日本、オランダにいたる世界の電球の寿命を決定しているのだ（もっとも、オランダのフリッブス社はカルテル内の「暴れ犬」と呼ばれ、しょっちゅう勝手な行動に出ては、〈カルテル〉全域に災いの種をまいていた）。これだけの抑圧的状况下に生まれた赤ちゃん電球はどうしたらいいのだ。人生をどん底から歩みだすしかないではないか。

だが、〈ファイバース〉はバイロンが永遠の生命を得ていることに気づいていない。バイロン君のデビューはベルリンのシャルロットンブルクにあつて、かのヴェルナー・ジーメンスの銅像がほとんど見える位置にある女アヘン窟^{ソケット}だった。壁の裝飾燭台に収まって光りかがやき、共和制時代のドイツの頹廢^{ソケット}ぶりを、たくさん仲間とともに見つめていた。やがてかれはアヘン窟の電球全員と知り合いになる。すぐ隣りのベニートは、いつも脱走の計画をめぐらしていた。廊下の行きあたりのトイレで光るバーニーは、あらゆるウロフィリア症^{ソケット}的ジョークを飛ばしている。台所を照らす母親ブレンダは、ハッシシ入りの揚げパン^{ハッシシ}や、アヘン安息香チンキを仕込んで子宮の毛細血管に強烈なオルガスム刺激を送り込むディルドーのことを語り、アスタルテとリリース^{ソケット}に祈りを捧げ、夜の女王の信仰に生きるうち、不眠の日々を続けたあとで、ついに真の〈他者の夜閨^{ソケット}〉に到達し、リノリウムの床の上に冷たくなった裸体を横たえた……

毎月毎月、ひとつ、またひとつと仲間を命を燃えつきさせていく。他の電球の死は当初、バイロンにとって衝撃だった。連れてこられたばかりのころ、彼はまだ自分の不死身を知

27 電信技術の改良により起業し、電気機関車、電動エレベーター、ダイナモ等の開発によってドイツ電気産業の父と呼ばれる。銅像はシャルロットンブルクの旧工場の前の公園に建っている。

28 尿に対する異常性欲を特徴とする。

29 ともにユダヤキリスト教神話から排除され、邪惡とされた存在。アスタルテは古代セム族の豊饒多産の女神。リリースもバビロニアの民間伝承に遡ることができ、アダムの最初の妻としてユダヤ教典『タルムード』に出てくるが、『旧約聖書』では、アダムに従属したイヴの話のみ語られる。リリースは『ヴァインランド』（220ページ）にも登場。

らなかつたのだ。だが、白熱の発光の日々を重ねていくうち、他の電球の命のはかなさが実感され、はかなき命を愛おしむ心が芽生えてくる。つまり、相手がまだこの世にあるうちに、決められた寿命時間数のそれぞれを、まるでそれが最期の一時間であるかのように惜しみながら、心を込めて愛することを学んだ。ほどなくバイロンは「永遠の古株」となる。他の仲間の眼に、バイロンの不滅の光は明らかだったが、それが直接話題になることはなく、語られるときは、たとえば「グリッド」の他の地域から、不死身電球の伝説がチカチカと聞こえてきたとき——リヨンのカバリストの書斎にいる魔術に通じた電球の話や、ノルウェーの倉庫の外で、南のやつらが聞いたならそれだけで軽くストロボ発光を始めてしまふような白一色の極地を見つめているタマの話——一般論として、それとなくふれられるのがつねだった。どうやら他にも「不死身」君はいるらしいが、みな沈黙を守っている。その沈黙が、多くを——いやいや、すべてを——秘めていた。

愛を学んだバイロンが次に学ぶべきは、沈黙である。

バイロンの燃えかがやきが六百時間に達したころ、スイスからの監視の眼がきつくなつた。「フイーバス監視室」の所在地は、名の知れぬアルプス山の地下。冷えびえとした部屋に、ドイツ製の電気機材、ガラス、真鍮、エポナイト、銀、銅のクリップやネジ類が突きでた、重々しいターミナル端子台が並び、とびきり白い白衣を着た、雪魔のごとき幹部職員が、軽やかな足取りで計器のメーターを見まわっている。万事異常がないかどうか、どこかに電球の平均寿命を引き上げる、不逞なタマはいないだろうか。まずい事態が拡がり出したら、市場がどんな混乱に見舞われるかはわかったものではない。

監視室のレッド・ラインは六百時間。すでにバイロンはそれを超えている。すぐさまル

30 原文は the true night of the orlber (かれら) が「光輝」をわたらせようと画する (この世) に対する、究極の他者がイメージされる。

ーティンのチェックが始まる。フィラメント抵抗値、白熱温度、真空度、消費電力。すべて正常。今後は五十時間ごとのチェックとなる。その時がくると、監視ステーションのチャイムが上品に鳴る。

八百時間め、ここでふたたびルーティンの予防措置。ベルリンのエンジェントがパイロンを移送すべくアヘン窟に派遣される。アスベストで裏張りした仔山羊革の手袋をはめ、十八センチのスパイクヒールをはいた女だ、このヒールは、彼女が群衆に紛れる役には立たないが、燭台ソケットに手を届かせて、他の電球たちが恐怖もあらわに見つめるなか、パイロンをグリグリひねって持ちさるためには必要なのだ。「パイロン奪わる」の知らせは「グリッド」全域のすべての電球に、準光速のスピードで伝わった。ひと気の消えた、ベークライトのごとく暗い通りを見おろすエイゾス³¹にも、サッカーのナイトゲームを観戦していたニトラランペンやヴォータンGにも、ジュストゥウォルフラムにも、モノヴァットにも、シリウスにも、この出来事は全欧州の電球にもれなく知れわたる。話を聞いた者たちは無力感にうちひしがれる。闘争なんて神話なのさ、そんなの無理にきまってるとも。どうしようもない、羊たちの眠る牧草地からアウトバーンから、北のさいはての石炭の積出港にいたるまで、電球たちの一斉の諦念が低音のうなりを上げた。僕らなんかに対抗できたためしはない。……屈従からの浮上の夢を、ごくわずかにでも灯したならば、CIA（白熱異状委員会³²）が踏み込んできて連行されてしまうんだ。不満を口にする電球は、そこちこちにいたとしても、不満はただの情報にすぎない。モジュレーターで規制された、無害な光に収まっている。幼児だったパイロンが、養育棟にいたところに無垢な心で思い描いた、権力者への破裂攻撃と、それはまるで違ったものだ。

31 以下、一九二〇年代のヨーロッパ主要メーカーの白熱電球が列挙される。

32 Committee on Incandescent Anomalies

バイロンはノイケルンの、とある地下室に送られる。ここを根城とするのは暗闇恐怖症のガラス吹きで、この職人はバイロンをつけっぱなしにして眠る。だがバイロンは、フリントガラスのボウルや、怪獣グリフィン、船型花瓶、跳躍姿勢の野生の山羊、緑のクモの巣、いかめしい氷の神々などを始終見下ろしている。ここはいわゆる「コントロール・ポイント」のひとつ。疑わしい電球を、彼らはこうやって手間を掛けずに見張っているのだ。

それから二週間もしないうちに、〈フィーバス〉本部の、氷と石でできた回廊に銅鑼が鳴りひびく。メーターを睨んでいた顔が一斉にクルリと回る。銅鑼はめったに鳴らないのだ。鳴るのは特別なケースだけ。そう、バイロンの寿命が一千時間を超えた。こうなると対処法はきまっていて、〈白熱異状委員会〉からベルリンに刺客が派遣されるのだ。

だが、ここで妙な展開になった。いや、ほんとに。予定ではバイロンを叩きこわし、このガラス細工の店で溶解すべきガラス屑にして——むろんタングステンを取りだした上で——ガラス吹き職人の次の作品（白い摩天楼のてっぺんから飛びたつ気球）にするはずだった。バイロンにしても、これはそんなに悪い話じゃない——自分の余命がどれほどか、〈フィーバス〉同様バイロン自身知っていた。この店で、多くのガラス屑が一度形なきドロドロへと溶けたうえで、ふたたびあらゆるガラスの形状になって生まれ変わるようすを連日見ているうちに、この過程を自分で通り抜けてみるのも悪くはないか、という気にはなった。だが自らのカルマの巡りを逃れることはできない。オレンジ色に輝く溶解ガラスが自分を嘲る残響さ。バイロンには逃れることができない。永遠にソケットへ還り、ソケットからねじり取られることの繰り返し。と、そのとき、ヴァイマル共和国の浮浪児ハ

ンゼル・ゲシュウィンディヒが疾風のように現れて——バイロンを天井から外すと、ゲシュウィンディヒ！俊足を飛ばして戸口を飛びでる。ガラス吹きが夢が暗転する。彼の夢が夜気からつかみとってくる不気味さの中でも、光の消滅は最悪である。夢の中で光はいつも希望そのものだった。根元的な、寿命のある、希望だった。電球が螺旋にめぐって電気を断ち、希望が闇に変わった瞬間、ガラス吹きは激しく眼をさまして叫ぶ「誰だ？ 誰だ？」

この程度で騒ぎたてる「ハイバス」ではない。これは前にも起こったこと。対処法は確立している。一部職員は超過勤務となる、それが却って漠然とした、しかし腹の底からの昂奮を生む。日々の仕事の退屈さからの漠たる解放の欲びが、タナボタのように降ってきた。感情の昂まりがお望みという人にとって、「ハイバス」は最悪の職場なのだ。石のように無表情な顔たちが、通りへ出ていく。街のどこを捜せばいいか、見当もついていない。消費者の中に、バイロンが不死身であることを知っている者はいないはず、とすれば、死すべき電球の盗難に関するデータが、このケースにも当てはまるのであって、確率のグラフの山は、ベルリンの貧民居住区、ユダヤ人居住区、ドラッグ・同性愛・売春および魔術が盛んな地区にくる。電球泥棒という犯罪の性格からして、論理に叶う犯人はこの住人だ。体制側のプロパガンダが口をそろえて言う通り。これは心の犯罪なのだ。ハイバスは知ったのだ——我らの時代の、知られざる大発見をなした——消費者には何かしらの罪の意識を注ぎこむことが必要であり、「不可視の手」がきちんと動いているところでは、罪悪感こそ最強の武器になるのだと。アメリカではライル・ブランドとその傘下の心理学者たちが数値を握り、専門家の証言を味方に、カネに物を言わせて（ビューリタン

33 ドイツ語の意味は「敏速ハンゼル」。因みにハンゼルは、グレート・ヘル兄弟の（日本語で「ヘンゼル」として定着した）名。

34 アダム・スミスが『国富論』で論じた、市場の自動調節原理。経済を回転させる「神の手」として、上巻63ページでも言及された。

的意味合いにおいて、カネは彼らのなすことに對する神からの、外的で可視的なOKサインなのだ、科学理論と事実とが交差する尖点に、この「罪悪感の発見」を結びつけた。

近年の成長率はブランドの説を立証するものであったが、その前にブランドは、六人の名賢概かつぎ人（サリテイエリ、ブーア、ナッシュ、デ・ブルータス、ショートという年長組プラス、くしゃみをしていたライル・ジュニア）によって墓へと担がれる人になってしまった——パディは土壇場で役を降りて『魔人ドラキュラ』を觀にいくことにきめた。まあ止解だね。ブランドの遺した数々の理論のうち、もっともスケールの大きいのがこの「電球コソ泥の異端」というやつだろう。彼の説は単に、電球を買わない人間を指弾するだけのものではない。同じ人間が、ソケットに電気を流すこともしない、という点もついている。つまりその悪党は、ヘフィーバスとヘグリッドの双方に對して罪を犯しているのだ。そんなやつを野放しにしておく彼らではない。

かくして、もぎとられたパイロンをたずねて、ヘフィーバスは捜査官の出動となる。だが、疾風小僧はベルリンからハンブルクへひとつ飛び。モルヒネ注射の代金を得るために、レーパーバーンの売春婦にパイロンを売り渡していた。今夜彼女を買ったお客は原価計算が専門で、自分の肛門に電球をねじこむ趣味を持ち、持参したハッシも吸った挙げ句に、うっかりパイロンを肛門に差したまま帰ってしまったのだが、そのことに気づく機会は永遠に訪れない、というのも（帰りのトロリーの中は立ちっぱなしだったので）初めて腰を下ろしたのが自宅のトイレ、そこにしゃがんでポロンと落ちたパイロンは水洗の水にザザザザと流され、下水管をぶかぶかとエルベの河口めざして下っていく。途中どこにも引のかからずに進めたのは、ほどよい丸みが幸いしたのか。数日間北海の波の上をただよ

35 ドイツの社会学者マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（一九〇四年）も、この小説の理念的基礎を与える文獻の一つ。オランダ、イギリス、アメリカなどピューリタン（カルヴィニスト）の影響が強い国々で資本主義が発達した背景に、自分が神に「選ばれ」ている意識、現世的成功に求める心理があったとした。この考えを、皮肉を込めて言い換えると「成功して得たカネは聖なる徴（ニサクラメント）」となるだろう（『聖公会祈禱書』は聖体拝領においてパンとワインが聖なる次元を持つことを、神の恩寵の「外的で可視的な徴し」という言い方で説明している）。

ったすえ、漂着したのがヘルゴラン島³⁶。はる、あの、赤と白のナポレオン・ケーキを海につけたような島である。そこで、ヘンクスとメンとの間のホテルに身を寄せていたパイロンを、訪ねてきたたいそう高給の司祭が本土へ持ちかえったのである。この司祭、毎晩きまって一九一一年のホッホハイマー・ワインの夢を見るのだが、その夢でパイロンの不死性についてのお告げを得たのだ……急遽舞台はベルリンの大いなる〈氷の宮殿〉³⁷。音の響きわたる、薄暗い、鉄骨づくりの洞窟の青い影に女たちの匂いがたちこめる——香水と皮革、毛皮のスクーティング衣装、宙に舞う氷の細片³⁸、きらめく鋼、突きでた尻、病のように肉体をつつむ欲望、鞭打ちの終わりに感じる無力感、差し込む日光が氷のはこりて息を詰まらせる、その中をロケットとなって滑走中、足元のくすんだ鏡の下から声が聞こえた——この奇跡をおこした者は誰か。探しだしなさい。聖者であるなら、世に広く告げねばならない。列聖の手続きを急がねば……一老司祭は、パイロンがヘルゴラン島の浜辺に流れついでから、島に出入りした約一千人の観光客リストを作成し、そのなかにいるにちがいない聖人を求めて汽車に乗り、小道を歩き、イスパノ・スイザを駆動して、しらみつぶしの調査を始める。だがそれもニュルンベルクでついでにミサ用の僧侶服に包んで入れておいたパイロンが、スーフケースごと盗難にあったのだ。犯人はマウスマッハという、ローマ・カトリックの礼眼を偏愛するルター派のトランスセクタイトで、こいつは、家の鏡の前に座って、教皇の十字架を作るだけでは満足しない。完全女装でツェペリン・フィールドのナチスの決起集会に出かけ、トーチを手にした党員に片っ端から祝詞を手えられたり、どんなにか素敵な朗誦感が味わえるだろうと夢想した。燃えあがる緑のトーチ、赤い鉤十字、きらめく金管楽器、そしてマウスマッハ神父は、自分の乳と

36 キーホルトと載っているが、これは海軍省の五人、息子の子パイロン、371ページ参照。

37 372 ページの記述と一致しないが、こちらはトッド・ブラウニング監督、ベラ・ルゴシ主演によるハリウッド初のメジャーなドラキュラ映画（一九三二）。

38 大胆な風俗産業で知られるヘンツェル飲食街の中心。

39 島にある有名な岩のふたつ、それぞれ「種馬」と「修道僧」を意味する。

40 宗派を意味するミサを繰り返した、ミサは、異性の愛を司ることを偏愛する人間（misogynist）のもじり。

ツブの具合、腰のくびれと股のふくらみに注意しながら、パッハのリフか何か、宗教的な旋律の数小節をハミングし、「ジーク・ハイル」を連呼し、「ディー・ファーン・ホッホ」を歌うなか、ほほえみながら通りぬける。この聖職者に正体を知られていなかったバイロンは、盗まれた僧衣からすべり落ちてグラウンドに転がる。すぐわきを何十万ものブーツと靴とが通りすぎるが、ひとつとしてかすりもしないのはもちろんのこと。翌日（グラウンドは死んだようにひっそり、石柱も青白く、長い水たまりができて、金メッキを施した鉤十字と花冠の向うに朝の雲がたなびいていた）バイロンはユダヤ人の貧しいクズ屋に拾われ、その後——確率の法則にも「ファイバース」にも逆らって——十五年の隠遁をまとうする。ドイツ語で雌のねじ穴はなぜか、誰も知らない理由によって「母」と呼ばれるのだが、その母から母へ抱きとめられていくのである。

カルテル側は、すでに不測の事態に対処する「ブランB」に移行していた。それには、七年をリミットとして、それを越えた電球は法的に燃え尽きたと見なす規定がある。バイロンの担当を外れた係員は、いま別の長寿電球の追跡に余念がない——かつてアマゾンのジャングルにあった軍の前哨地点の玄関口を照らしていた「電球ベアトリス」が、つい先頃インディオによる謎の襲撃を受けて、持ち去られてしまったのだ。

生きのびていくバイロンに対し、このようにさまざまな救いの手が、まるで幸運な偶然のように差しのべられるのだ。バイロンは出会った電球を片っ端からオルグする。「ファイバース」の本性が悪であることを説き、カルテルに対抗する連帯を訴える。彼には事態が見えてきていた。自分らは、単に光のエネルギーを伝達するだけの存在であっていいのだろうか。「ファイバース」が自分たちに押し当てる単一の機能を乗りこえる途はないのか。

ピンチの遺語。

41 長い杖の上部に三本の横棒を配した形をしている。

42 古都ニュルンベルクの壮麗な競技場。一九三四年のナチの党大会を撮ったレニ・リーフェンシュタールの『意志の勝利』の映像でも知られる。

43 「旗を高く揚げよ」92〜93ページ註35参照。

可視光線がすべてではないのです。それより長い波長帯も短い波長帯もある。電球は熱も発することがある。植物、たとえば押し入れの非合法的な植物を育てるエネルギーだって与えられるし、睡眠中の人間のまぶたをつらぬいて、その夢に割って入ることだって。こうしたアシテーションに傾聴する相手もいる一方で、〈フイーバス〉にたれこんでやろうと策をめぐらす者も出てくる。反バイロン派の年配の電球の中には、パラメーターをいろいろ動かすことで、スイスの山の下にある検査室のエボナイトの計器に、体系的な信号を送ることのできる者もいた。本部から刺客を呼びよせたい一心で、自分の身を焼きる電球さえいたのだ。

電球の「超越」を語るとなれば、それはもちろん体制転覆を説くに等しい。〈フイーバス〉にとってはとにかく電球の効率、すなわち注ぎ込んだエネルギーに対する発光エネルギーの比、があらゆる判断の基本であって、この値が低ければ低いほど多くの電気が使われることになるので、〈グリッド〉にとっては好ましい。ところが低効率は白熱電球の寿命延長に通じ、〈フイーバス〉側の電球売上げの減少を招く。当初〈フイーバス〉はフィラメントの抵抗値を大きくする策に出た。そうやって気づかれないように、だんだんと電球の寿命を縮めていくという戦術である。電力消費の減少に気づいた〈グリッド〉がこれに対し大きな抗議の声を上げ、やがて両団体は、電球の寿命に関して、双方に相応の利益をもたらす数値で妥協案を締結。と同時に、電球盗難防止キャンペーンの費用も折半することが決まった。電球を一切使わずに、蠟燭で暮らしていこうとする犯罪的な輩に対しても、両者協力のうえ、より巧妙な作戦をとることになった。〈フイーバス〉は食肉カルテルとの間でも、長年協定を結んでいて、それによると、市場に出回る食肉は、心臓病の危

除が増えることになろうとも、定量の脂肪を含まなくてはならない。また、削ぎ落とされた脂肪は、そのほとんどを石鹼の製造に回さなくてはならない。当時、石鹼はブームといっていたほどの関心を集めていた。ブランド研究所が、消費者の間に、糞便に対する深い感情があることを明らかにしていたのである。ただ食肉も石鹼も、(「フィーバス」が絡む程度はそれほど大きくはない。タングステンのようなものの方がもっと重要なわけで、(「フィーバス」が電球の寿命をあまり大胆に縮められない理由のひとつがそれだった。タングステン・フィラメントの生産量が増え、原料の備えにまで影響が及ぶと、主要原産国が中国であるからして、対東洋政策にも微妙な影響が及びかねない——)のみならず、炭化タングステン⁴⁴に関してゼネラル・エレクトリック社およびクルップ社との間に結んでいた協定にも支障をきたす。いつどこでどれだけ生産していくらで売るか、事細かに決めていたこの協定に、ドイツではボンド当たり三十七から九十ドル、アメリカでは二百から四百ドルと明記されているのだ。この数字が変われば、影響は機械の生産量に、ひいては軽・重工業の全体に及びかねない。戦争が始まると、GE社がドイツにそれだけの便宜を提供するのはいかなるものかと考える者もたしかにいた。だが権力をもった人間からは、そういう声は挙がらなかった。大丈夫だ、心配しなくて。

みずからの白熱の寿命を伸ばしていくバイロンは、このバッテリーを繰りかえし眼のあたりにする。電球以外の家電や、工場・街頭の電気器具とコンタクトをとるやり方も学んでいた彼は、それぞれからさまざまな話を聞かされた。彼の魂(旧式のカーボン・フィラメントはドイツ語で「魂」⁴⁵と言うのである)にバッテリーが累積する。理解が巨大に、鮮明になり、それとともに、バイロンの絶望感も強まる。いつか、すべてを知ることになって

44 その硬さゆえに、高級切削用具や、対戦車・船艦用の砲弾として使用。

45 この数値は、サスリー著『IGファルベ』にある通り。

も、自分は変わらず無力でいるのか。若き日に夢見た、世界中の電球と結託する夢は、見果てぬ夢として終わるのか。――グリッドンでは、すべてが筒抜けで、あらゆるメッセー
ジは立ち聞きされるし、裏切り者も同じ回路にうようよしている。預言者はいつの時代も
短命なものだ。素直に殺されるか、事故を装った災難に引きこまれ、その後は口をつぐん
でしまうか。だが、バイロンに訪れた運命は、さらに巧妙にできていた。真実を知り、何
ひとつ変えられない無力感に苛まれつつ、永遠に光りつづける。もはやカルマの輪から逃
れようとすることもないだろう。怒りとフラストレーションは膨らむ一方だろう。そして
それを、哀れにも、変態的に、愉しみはじめのだろう……

ラスロ・ヤンフは運河にそって歩みさる。運河で犬の群れが泳いでいる。浮き萍の浮か
ぶ運河に、犬の頭が浮き沈みする……犬の頭が、チェスの騎士が、不可視のまま、秘密空
軍基地の上空にも浮かんでいる。濃霧のなか、温度・気圧・湿度の諸条件が揃えば跳ね
駒の形を結び、同調した飛行士はそれを感じるだろう。レーダーもそれを捉え、無力な乗
客も、たまに小さな窓から、蒸気のシートに透かしたそれを、一瞬眼にするだろう……そ
れは慈悲深い〈へいぬ〉のすがただ。人間に条件づけられることもない、創めにも終焉にも、
無力なわれわれが、それでも前を見て進んでいく旅にも、付きそってくれる〈へいぬ〉の御
影だ。……ヤンフがスーツのひだを揺らしながら遠ざかる――裏庭のアイヤノの葉が風に揺
れるように。大佐はハッピーヴィルにひとり取り残される。彼を待ち受ける鋼鉄の都市。
うす曇りの均一な光が、街路沿いの巨大なビルのそれぞれを白く染める。道路は完全な碁
盤の目で、まちまちの高さにカットされたビルが、モジュレーションとして、グリッドの

上に並んでいる。この街を梳かして、完璧なデカルト的調和を回復する「ハクシ」はどこだ？ 空から舞いおり、ハッピーヴィルを再調髪する「ハサミ」はどこだ？

ここに血や暴力を持ち込む必要はない。しかし大佐の首がいま、大きく後ろに傾いて、「電球」の苦痛の輝きに対して喉を完全にさらしているのは、もしかして、降伏の表明なのだろうか——で、目撃者といえば、他にバディ・マゴニグルがいるだけだ。彼なりの夢をもった、ワン・マン・発電システムとして、バディもまた、誰にも劣らず大佐が消えることを望んでいるだろう。エディ・ベンシエロの震える筋肉からブルースがあふれる。死すべき魂の響きを奏でるその手にはハサミが、理髪屋に許されない持ち方で、握られている。真下を向いたハサミの先端が、円錐の電灯傘の下でふるえる。エディ・ベンシエロが指を抜いたハサミの丸い握りのところを、いま彼のこぶしがきつく握りしめる。大佐は、最後にまた頭をのけぞらせ——何を待ちきれずにいるのか——頸部をさらす。



盗難品の自転車に乗って、カッチェが街に入ってくる。頭の頂には冠代わりに白のカチーフが留めてあって、後方に複数の三角点がなびいている。干上がって占領された国土からの、高貴なる使者。古い時代の称号には事欠かない彼女であるが、いま現実にあふることのできる権勢は、その幻想すらもない。着ているものも貧弱な白いドレス——戦前の夏のテニスウェアだ。ブリーツ・スカートの襷もナイフの刃のようではなく、より柔らかで、偶然的で、キリッとせず、折り目の奥は青みがかっている。気候の変化に撓うウェア——固められた土道の木陰を、物思いにとらわれながらも私的な微笑一つ漏らさず通りすぎると、褐色とサンイエローの葉の細片がその上を流れていく。三つ編みに結えた髪を頭の上に留めているが、その位置は高すぎず、かといってひとところ言われたような「重々しい」スタイルでもなく、ある特定の未来に向けて（対抗して、と言うべきか）置いている——こんなことはカジノ・ヘルマン・ゲーリング以来はじめてだ……それでも彼女はわれらと時を共にしない、今の時代をかすめもしない。

一番外側の歩哨が、骨の錆びついたセメントの廃墟から見ている。ペダルを二回フルに

入っておいで。……いやいや、カッチュを誘惑しようだったため、森や繁みの中なら慣れている、全裸で踊り、牧神の角に向けて陰部を開いたこともあるのだ。足の裏に月を感じ、月の潮流を脳の表皮でとらえたこともある。牧神は恋人として最悪だった。このごろ彼とは人前で出会っても、お互いぎこちない視線を交わすだけになっている。

いや、現にいまも危機に瀕する事態となった——突然どこからともなく、ヘレロ族の男たちのフル・キャストによる歌と踊りが現れたのだ。身につけた白いセーラー服のラインが、彼らの尻と股と、締まったウエスト、形のよい胸を強調して見せる。その彼らに持ちあげられた一人の若い女は、全身銀ラメ、ダイヤモンド・リル^{リル}かテキサス・ギナン^{ギナン}を真似た派手な恰好をしている。その女を地面に降ろして、踊りと歌が始まった。

バ・ラ・ノオオオオオイイイア、バ・ラ・ノイヤー！

お楽しみのお顔が、すげえや、また拝めたやー！

バ・ラ・ノオイ・ヤー！ オーすげえ、ヤー

ほんの少し、ほら、アレやー

ずっと昔を思い出すやー

ゴヤー、でも描けん、その顔はー

乱入してきたむかしとは、違う顔やー

弁護士呼べや、バラノイヤー

おれのケツをおまえに遺る、フォー・エバー！

き地に遺る（リー）へ、同じ景色。

2 メイ・ウエストが自作自演したブロードウェイ演劇の主人公で、一八九〇年代の煽情的な女性。

3 禁酒法時代に名士が集ったニューヨークのもぐり酒場（スビークイージー）「スリー・ハンドレッド・クラブ」の女将にして女優。トッキー・ミュージカル『ナイトクラブの女王』（一九二九）で、自分役を演じている。

4 「裸のマハ」（一八〇〇頃）で有名なスペインの画家フランシスコ・デ・ゴヤ。

それからタップシューズをはいたアンドレアスとパーヴェルが登場（このシューズ、七月にENSA^{*6}のかなり差別的な公演が巡ってきたとき盗んだものだ）、スタッカードの効いたタップと歌を披露する。

パ・ラ・ノイ——（コカッコ、コカッコ、コ「ヤー」コン！）
パ・ラ・ノイ——（シュシュットン！ シュシュットン！ シュシュットン！）

「&」コ「ヤ」コン！ コカッコ コ「おたの」コンし（コン）の「ココ
ン」かおつ（コカッコ・コン）また おがッめたッやー！

最初の八小節に行きつく前に、カッチェはすっかり理解している。その破廉恥なブロンド女は他ならぬ自分自身なのだ、と。カッチェ自身が、陸に上がった黒人水兵と一緒にダンスを披露しているのだ。その自分はパラノイアを寓意化したキャラクターであって（ちよつと滑稽だが、気持ちには純粹な、古典的レディー^{*8}）、それを思うと、この音楽のジャズの的な品の悪さは悲しくなる。イサドラ・ダンカン^{*8}の演し物のように、身体中にガーゼ地の布をまとった——そう、白でなくては——クラシクなスタイルを思い描いていたのに。

パイレート・ブレンティスからは、彼らのフォークロアと政治と「ヘゾーン」での戦略についてのことばは聞いてきたけど、黒さについては聞かされていない。それこそ一番必要な知識だったのに。こんな濃密な黒さの中を、どうやって通りぬけたら自分が贖えるっていうの？ こんな中に、スロースロップを見つけたって言うの？——この（ここで彼女は「ブラッパネス」という言葉を声にして発音せず、老人が卑劣な公人の名を口にするとき

5 パーヴェルはクリステイアンの妹との間に儲けた子を、オムピンディラ（空無派）に始末された。前回登場時には、ガソリン工場で幻想を見ていた（241ページ）。

6 イギリスの芸能人の軍隊慰問奉公会。Entertainers' National Service Association

7 原文は Shuffle-stomp。「シャッフル」は足で地面をこする動き、「ストンプ」は踏みならす動き。どちらもステレオタイプなアフリカ系ダンスの動作。

8 サンフランシスコ生まれで西ヨーロッパ及びロシアで活躍した、白人の、元祖モダン・ダンサー。

Gravity's Rainbow

のように、それを唾棄する——もう一度と口にしないで、すむように、真の暗黒^{ブラッックネス}へ吐きすてる。ペツ！の中に。その思いには、凝り固まり抑圧された熱気がある。いや重度の人種差別主義者の、肌をチクチク刺すような感情ではない。そうではない、これは厄災だらけの〈ゾーン〉の日々に上積みされた重圧なのだ。食べ物不足、鶏小屋、日が暮れば洞窟か地下室、武装した占領軍にビクビクしながらこっそり動きまわらなくちゃならないことも去年のオランダと変わらない——もちろん、この地べたでくつろいで、ショーを見ている分には快適だ。しかし彼女は今も、外なる〈現実世界〉を信じ、いつかまたそこに加わることを望んでいるのであって、その現実にとっては破滅的だろう。いろんなことでギリギリなのに、おまけに黒さにまで耐えなくてはならないとは。黒さについては何も知らない、その無知を頼りに切りぬけるしかない。

アンドレアスに対するカッチェは魅力的だ。遠く離れた恋人を気づかう女に特有の色気を発している。だが、カッチェはエンツィアンに会わなくてはならない。両者の初対面。ブリツェロ大尉に愛された同士、彼の愛に耐えて一日一日をやり過ごしていくための算段をとともに強いられた同士……

「大佐^{オーバーシュ}、あなたにお会いできて——」カッチェの声が途切れる。演技じやなく途切れてしまう。エンツィアンのデスクに向かって頭は下げたし、それで感謝は伝え、自分が受身であることも宣告した。その上「うれしい」だなんて……

エンツィアンはうなずき、顎ひげをしゃくって椅子を勧める。そうか、ブリツェロがオランダからの最後の手紙の中で書いていた〈金の牝犬^{ゴールデン・ベッチ}〉とはこの女か。手紙を読んだときエンツィアンは、ヴァイスマンに訪れた運命に心を奪われ、思考を詰まらせて、その女の

夢までも想像している余裕はなかった。そのときは、この女を、世に満ちている恐怖のありふれた、形態ぐらいいにしか見ていなかった。だが、ヘレロ的になることを人一倍きらって遊んでいるエンツィアンも、じきに彼女をカラハリの岩場に描かれた「ホワイト・ウーマン」と結びつけるようになった。このレディーは、腰から下が白色で、弓矢を持ち、黒人の侍女を後にしたがえ、石と深みの、さまざまなサイズの形象が前へ後ろへ動きまわる、錯乱した空間を進んでいる……

だが、いま目の前に真の「ゴールデン・ビッチ」が現れた。彼女の若くて細身であることにエンツィアンは驚かされる——この世界からすでに漏出しはじめたかのような蒼白さ。無理につきまうとすると完全に向こうへ消えてしまいそうだ。カッチェにしても、自身の不安定な細さを——魂の白血球値がどんどん上がっていることを——意識して、それを上手に使っている。彼女の前に立てば求めずにはいられないのに、目の動きでもしぐさでも、それを表現しようものなら、彼女の肉体は精となって、砂漠へ向かう道にたなびく煙のようになくなってしまい、二度とチャンスはついでに失ってしまう。

「自分よりあなたの方が、最近の彼に会ってますよね、きっと」エンツィアンはもの静かに話す。丁寧な言葉づかいがカッチェには意外だ。残念でもある。荒々しさを期待していたのに。彼女の唇が動きはじめた瞬間に、「で、彼のようなすは？」

「孤独でしたわ」カッチェは無愛想に、横を向いたままうなずき、それから、この状況でもっとも信頼できる無表情を彼に向ける——その冷たさに、彼に必要とされたとき、あなたは側にいてあげなかったという意味を込めて。

「孤独というのは、いつものことで」

9 一九一八年にドイツの探検家ラインハルト・マークが、現在のナミビアの最高峰ブランドベルク山の奥で見つけた、ブッシュマンの岩壁画。「ホワイト・レディー」とも。

彼女はそれが、勇猛さの欠如ではなく、品格の表れだと知る。この男は、わたしにきちんと対応しようとしている、自分を閉ざすことをせずに（それは彼女も同じなのだが、彼女の場合は、ずっとむかしに心が擦りきれて、もはや傷つくところがないからだ。カッチェにリスクはほとんどない）。だが〈過去の愛人〉が——たとえば言葉としてであれ——登場したとあっては、エンツィアンの方はリスクなしにはすまない。恥辱、あらためて感じる喪失、屈辱、嘲笑、それらに身をえぐられるような思いに襲われる危険を負う。この女にあざ笑われるのか？ 自分でその種をまいてしまい——それでいながら、相手にフェアプレイを期待しているのか？ 彼女が大きなリスクを背負わずに、おれと同じく腹を割って話すことは可能だろうか？ 「彼は死へ向かっていましたよ」とカッチェが告げる。「老人の顔でした。生きてオランダから出られたのかどうかもわたし、知らないんです」

「彼は——」とだけ言って口ごもったのは、(a)カッチェの心情を思いやったのか、それとも、(b)〈黒の軍団〉のセキュリティのためか、あるいは、(c)その両方が理由なのか……だがこのとき、〈リスク極大化の原理〉が今度も事を仕切ってしまう。「あの男はリユーネブルクの荒野原^{ハイデ}へ行きつきましたよ。もしご存じでないなら伝えますがね」

「彼のことを探したのね」

「そう。スロースロップも彼を探していたわけです、自分でそれに気づいていたとは思いませんがね」

「スロースロップとわたしは——」部屋を見まわす彼女の視線は、金属面と、書類と、塩の結晶面にはね返され、どこにも落ち着くことがない。唐突で破れかぶれの告白のように——「もうすべてが過去の出来事でしょう、なのに、どうしてわたしはここに送りこまれ

たのかしら。スロースロップが本当は誰なのかなど、わたし、わかりません。見定めようとしても光が足らない。すべてわたしから遠ざかってしまっんです……」

まだ彼女に触れるべきときではないが、エンツィアンは手を伸ばし、彼女の手の甲をポンと叩いて、ほら、どうした、とばかりに軍人風の親しみのこもる励ましを与える。「この世には、手放してはいけない、大切なものがあります。すべてが幻影に見えるかもしれないが、リアルなものも存在するんだから、ほんとに」

「ほんとに」ふたりの口から 笑いがこぼれる。カッチェの笑いは、ヨーロッパ的な倦怠のこもる、スローテンポの、頭を振りながらの笑いだ。かつて彼女は、笑いながら状況を見定め、外縁や深み、損益、日アワー、ポイント・オブ・ノー・リターンを語ることもあった。配力が危機にさらされたときは、とにかく政治的な笑いをふりまいた。それ以外にすることがなかったから。かつてカジノ・ヘルマン・ゲーリングでスロースロップと笑ったときがそうだったように。

エンツィアンを前にして彼女は、共通の友人の話に終始している。〈ザ・ヴァキウム 空〉の中って、こんな感じなのかしら？

「スロースロップとわたし」がテーマでは、先がうまく進まない。「ブリツェロとわたし」のことへ話を向けるべきなのか。そちらを選んだら、自分はこのアフリカ人と、どういう局面に入りこむのか？

「ブリツェロとワタシとは」彼は穏やかに話しはじめる。黒光りする頬骨ごしにカッチェを見つめ、丸めた右手に煙草がくすぶっている。「親密だったところは限られていてね。敢えて開けなかったドアもある。ここでは自分も、全知の男です。余計なことをばらす

10 攻撃開始の時間。

11 その一線を越えると元の状況や関係に戻れなくなるところ。

な」とは言いますがね。しかし結局は同じです。彼らの思いが変わることはない。ワタシはベルリンの、鼻持ちならん大将でね。オーバーハウプトベルリナーシュナウツェ¹²といえど、このエンフイアンだ。わかってるんです、すっかり。みんなワタシを信頼していません。ワタシとブリッフェロについての、漠然としたゴシップを勝手に紡いでは流してます——まあ、真実を告げたところで連中の不信感が変わるわけではないし、ワタシの《無制限情報アクセス》に変化が生じるわけでもない。相変わらず、別のうわさを紡いで広めるだけでしょうからね。しかし、あなたに対して、真実は何かしらの意味を持つでしょう」。

「ワタシが愛したブリッフェロはとても若くて、帝国を愛し、詩を愛し、自分の傲慢を愛していました。どれもみんな、以前のワタシにとっては重要だったんでしょうね。今のワタシもそんなワタシに根ざしている。過去の自分の姿は、愚かしくて見るに耐えないものだけれど、それでも彼はいまなお人間なのだし、不具な人間の心のありさまをさらけだそうなんて、あなたはなさらないでしょう？」

エンフイアンがカッチェから本気でアドヴァイスを求めているかに見える。彼の毎日の時間は、こんな問題でふさがっているのか。《ロケット》や、《空無派^{エンフティ・ワンス}》のことでいっぱいではないのか。誕生まもない国家に迫る危険のことで。

「ブリッフェロの何が、いまもあなたにとって重要なんですか？」と、やっと彼女が訊いてくる。

答えに手間取ることではない。《質問者》の到来は、かねてから想定していた。「ちょうどいいタイミングだ。バルコニーに出ませんか。展望デッキになってるんですよ。」

12 Oberhaupt は「指揮官」、Berliner は「ベルリンの」、Schnauze は「鼻面」が原意で「ほら吹き」「粗暴なやつ」といった意味合いで使われる。

「ラケーテンシユタット」

「〈ロケット・シテイ〉を見ていただきたい。〈ゾーン〉内におけるわれわれの活動網が、プレキシガラスの地図になってましてね。これが地下の学校、そして食糧や薬の配給システム。……下を見るとスタッフ・ルーム、コミュニケーション・センター、実験室、診療所が見える、そういうものを計画してまして——」

「それら全部をあなたのものにしてあげましょう、もしあなたが——」^{*13}

「違う、その話は間違いだ。ワタシだったらこう言うね——ワタシはこのようになった。ある高みに押し上げられ、遠のけられた人間に……」そして琥珀色の夕闇の中、黒ずんでいく雲の流れを背にして「ラケーテンシユタット」をその高みから見やるのだ——「この眺望する高み以外、すべてを失ってしまった。ハートもない。私の存在する場には、人間的な情というものが、どこにもない。それがいったいどんな感じが、あなたにわかりますか？」

ライオンだわ、この人は、強烈なエゴの持ち主——しかし、それでもカッチェはこの男が気に入った。「でも、仮にあの人がまだ生きていたとしたら——」

「それを知る手だてはありませんよ。ブリツェロは、あなた方の都市を去ってから、手紙を何通か書いてよこしました。すいぶん変貌してましたね。ひどいもんです。彼の何がいまもワタシにとって重要なのかと、あなたはたずねました。あのやせこけた、色白の、わが愛すべき冒険家の、いっぺんに二十歳もふけて病める老人になってしまった彼——ワタシという存在をなんらかの実質において受け止めてくれた最後の心——その彼が大きく変身していたのですよ、カエルから王子へ、王子からとてつもない怪物へとね。……『もし生きていたなら』とおっしゃるが、生きていたならもう誰にも見分けのつかないものになって

13 新約聖書「ルカ伝」第四章で、サタンがイエスに言う言葉。続くセリフは「私の前にひざまずくならば」。

「そんなじやないだらうか、空に昇った彼の手をグライヴして、彼が見えるのかというところだろ、最後に何が起ったのかは知りませんが、あの男は超越したんです、たとえ死んだだけであっても、彼固有の苦痛と罪をうち払って——／＼かれらの領域へ、コン・ローレルする側へ、合成と制御のただ中へ、深く打ち込まれた、ここで主語に「われわれ」を使いそらになったが思いなおして、「ワタンが超越できずにここにいるよりもっと激しく速くについてしまった、ワタンは高みに追いやられただけ、これはもう空虚さの極みだね」とても信用できない相手から、オマエは死ぬ必要がないと言われるよりひどいですよ……そうです、あの人は今もワタンにとって重要、とってもね、彼は古い自己なんです、自分にとりついた、振り落とせない、愛しのアルバトロス^{＊14}」

「わたしにも、かしら？」一九四〇年代の新しい女のような口をきくことを、きつとこの人は期待してる、とカッチュは思う、「きつとそうね」よく言うわ、でもそれ以外、この人に助け船を出し、ひとときの安らぎを与える言葉は思いつかない……

「おおカッチュ、かわいそうに、あなたのように悲しいストーリーはふたつとない」カッチュは男のあざわらう顔を見とどけようと視線を上げたが、その顔にはなんと涙があった、驚いたことに、ほんとうに涙が頬を伝っている、「ただ単に自由になっただけなんて」

「自由」という単語のところで、彼の声は涙に崩れた、顔が一瞬、両手に埋もれる。と思ったら、パツと明るい顔が現われ、カッチュぼりの、薄気味悪い三拍子の笑い声に挑戦している、やめてよ、この男までわたしの前でおかしくなってしまうわけ？ いまはわたしの生涯の中で、だれか一人でいいから、安定した、健康で力強い精神の男が必要なのよ。こういうのは、やめて、いらない。「スロースロップにも言っただけなんですよ、き

みは自由だとね。耳を貸してくれる相手なら誰にだって言ってもやろうと思ってます。誰にだって、あなたにだって、言いますよ、あなたは自由だ、自由だ、自由なのだ……」

「それより悲しいストーリーが私にありえるかしら？」 恥知らずな。これは相手を喜ばせる冗談ではない。男にいちやついて、手玉にとろうとしている。若い女が身につける、薄葉紙にか細い筆記体の文字で手紙を書くたぐいのテクニクを繰り出して、彼の黒さに引き込まれまいとする。その黒さは、実は彼のではない。そこを間違えてはいけない。これは彼女自身の黒さなのだ——自分には受けとめることができないので、とりあえず彼のものだとしている黒さ、この黒さは、牧神の森の奥の中心でも受けとめられない性格のものだ。田園的なところは微塵もない。これは都市につきまとう黒さの集合。自然の力をはね返し、踏みにじり、矯正し、大地に血を流し、とどのつまりは悪霊のようなものに変えてしまふ種類の黒さなのだ。ヴァイスマンが「超越」したというヘクリフォト^{*15}がそれだ。彼岸への旅があまりに悲惨だったため、青い稲妻により（それは海面に長い畝を生じさせる）優しさのすべてを奪いとられ、阿呆な殺し屋やジョーカーとして空虚の中を無意味な音を発してただよう、臆だらけの、鼠のように肉を殺がれた魂たち——都市の暗闇。それはカッチェのもの、四方八方に流れが走り、何もはじまらず、何も終わらない、独特な手触りをもつ闇。それでも、時の経過とともにそこは騒がしくなる。その闇が震えながら彼女自身の意識へ忍びこむ。

「ワタシの気を引こうというのなら、それもいいがね」一変してエンツィアンは、ケーリー・グラントの滑らかな口調、「でも本気にしますよ」。おー、きたきた、みなさん、お目当てのシーンの始まり始まり——

15 カバラの教えで邪悪な力の具現化とされる「クリフォト Qiphoth」は、上巻338ページでは「死者の殻」として、ジエシカの姪のベネロビーの前に現れた。

とはならないのだ。彼の味わってきた辛苦の深さは（ドイツの公文書保管所にいけばわかるが——いや、それもいまでは焼失したか）は、カッチェの理解の及ぶところではない。彼は千の仮面に習熟した（それは〈都市〉にしても同じだろう。都市はつねに襲ってくる侵略——われわれに見えない、結果を知ることもない侵略——にさらされ、その、サイレントな、気づかれない、白壁の倉庫地区での、雑草茂る空き地での革命から身を守るため、次々と仮面を取りかえているのだ）。この〈物腰の柔らかな年長のエキゾチックな人〉というのも、きっとその仮面のひとつなのだ。

「わたし、どうすればいいのよ」カッチェは立ちあがり、しばらく肩をすくめたまま、それから優雅に室内を歩きはじめる。お得意のスタイルだ、まわり中が自分に注目していることを意識した、十六歳の少女の足取り。髪をフードのように垂らし、二本の腕がしばしば触れあう。

「ただスロースロップの居所がわかればいいのであって、それ以上の深入りは無用ですな」エンツィアンが、やっと直截に言った。「あの男が現われるまで、われわれと一緒にいてくればいいんで。それ以外のことに頭を悩ます必要がありますか？」

「あるんですの」と、おそらく意図的に、声をひそめて、「いまのわたしは、それ以外のこと」こそ為すべきだと感じてますから。表面的な勝ちを手にして、去っていくなんていやなのよ——何と言ったらいいかしら、あのタコ^{*16}の一件を清算して、それでおしまいにして、たくない。彼がどんな次第でここまで来たのか、わたしがへかれら¹⁶のために何をして、それが彼をどんな目に遭わせたのかを知る必要があるでしょう？ 上っ面のことだけで、いつまでもやり通せるというのかしら。わたしだって、もっと奥まで絡むべきでしょ

16 カッチェとスロースロップの関係のはじまり（上巻354ページ）。

う？」

あの女のマゾヒズムは「とヴァイスマンはハーグから手紙を書いていた」自分を安心させるためのものだ。自分はまだ傷つくことができる、人間らしく痛いときには泣き叫ぶことができると感じていたい。というのも、その感覚を失うことがよくあるからだ。それがどんなにつらいことなのか、私には推測することも難しいが。……だから彼女は鞭を求める。彼女にとって尻を突き出すことは、降伏なのではなく、絶望の表現なのだ。おまえの抱く、おれもだが、インポテンツへの恐れと同じだ：今日は痛みがあるだろうか。……しかし真の屈従はそこにはない。自己をふり落とし〈全〉へ入信することに、彼女は関わりはしない。最後におれが選ぶ生贄として、彼女はふさわしくないということだ。おそらく終わりがくるまでに、別の者が見つかるだろう。もしや自分が夢を見ているにせよ。……私だって彼女の空想に自分を捧げるべく、ここにいるわけではない、違うか！

「あなたは滅びません。生き残る公算が大きい。どれだけ苦痛へと自分を追いやって、つねに、そこから出てこられますよ。その過程を、どのくらい快適なものにするか、あなたには選択する自由がある。たいてい、それは報酬として得られるものですよね。いや、それが何なのかをお聞きするつもりはない。失礼ながら、あなたがそのことに気づいていないように思えたのでね。あなたほど悲しいストーリーはないというのは、そういう次第です」

「報酬だなんて——」カッチェは怒ります。「なんてことを言うの、私からすれば終身刑よ。あれを報酬と言うのなら、わたしのことはどう呼ぶのかしら？」

「駆け引きはよそで」

「この、黒い私生児が」

「それはまさにワタシのことで」エンツィアンは彼女に真実を言わせることができた。石造りの角で時計が鳴る。「五月にブリツェロといっしょだった人間が来ているんです。終幕の直前にね。だからあなたには――」

「話を聞いてもらわなくてもいいと。そうでしょ、大佐。でも、わたしは聞こうと思いますわ」

エンツィアンは立ちあがると、格式ばった、紳士然としたやり方で肘を曲げ、彼女の腕を招き入れる。横目づかいに笑みを浮かべたりして、まるで道化になった気分だ。カッチェの笑みは上目づかい。狂気の国を一瞥したら宮廷から今にも逃げ出したくなった、お転婆のオフィーリア¹⁷のような顔をしている。

フィードバック。スマイルにスマイルをぶつけ、調整し、変動を試みる。最終的に出てきた答えは互いを知るなど永遠に無理だ。晴れやかな顔で、すれ違いのふたり、ラララ、共に愛した男の最期を聞きにゆく。映画館でも他人のふたり、席も、通路も、出口も、帰宅も別々だ。

遠く離れた別の回廊で、ドリルの先が折れる寸前、軋りながら煙を上げている。蒸気と、酸味を帯びつつある脂肪と、煙草のけむりと、食器を浸した水、消毒の匂いからなるカフェテリアのなじみのコーナーで、トレイとスチール食器とが、カタカタ無垢でやさしい音を立てている。

手放してはいけない大切なものたちがある……

17 言及はシェイクスピアの『ハムレット』。



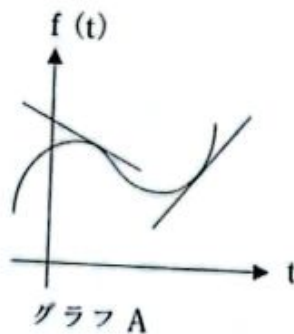
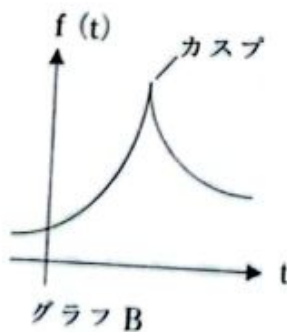
人は話に因果の筋をほしがるもので——いいですとも。アヌビス号からスロースロップをさらったあの暴風雨^{*}で、実はタナツも波をかぶり船から放りだされたんだ。彼を救ったのは手漕ぎの舟で、稲妻に打たれる実験をしていたポーランド人の葬儀屋だった。誘電のためこの男が工夫した金属のスーツは、深海用の潜水服に似ていなくもない複雑なメタル・スーツで、ドイツ国防軍のヘルメットに二百個ほどの穴を開けて、ボルト、ナット、スプリング類、いろんな形をした良導体の棒を差し込んだのを被っていた。うなずいたり首を振ったりするたびに金属音がする。しかも、この男には、この二つの動作が多いのだ。彼はデジタル人間で、すべてがイエスカノーかに分化する。だから、その晩は彼とタナツのまわりに、妙な形と手ざわりの二色のチェッカー盤が、花開いたかのようにだった。アメリカの宣伝パンフレットに書いてあったベンジャミン・フランクリンの、凧と雷と鍵の話を読んでからというものの、葬儀屋は、稲妻に脳天を直撃されるための企画に取りつかれていた。ある夜、彼の頭に閃いたのだ——いや、求める閃光の落下ではなかったが——いまこの瞬間にも、ヨーロッパ全体で見れば、雷にうたれて生きている人が、何百、何千とい

1
176 ~ 181 ページ。オ
ーデル湾での出来事。こ
の後スロースロップはフ
ラウ・グナープの船で、
スヴィーネミュンデに到
着した。

るだろう。彼らからどんなにすごい話が聞けることか！

葬儀屋の読んだパンフレットには、一つ大事なことが記されていないかった。ベンジャミン・フランクリンはフリーメイソンで、宇宙的規模のイタズラに耽っていたのだ。アメリカ合衆国自体が、彼の関わった壮大なイタズラのひとつだったという可能性も捨てきれないのである。

問題は連続性という点にある。人間の一生には浮沈の波があるけれども、ほとんどの者にとってそれはサイン・カーブのような比較的ゆるやかな漸進的変化の連続であり、すべての点で、一次導関数を得ることができる^{*}。これが雷にうたれたことのない人間。彼らには突然の大変動というものに対する実感が無い。ところが、雷に直撃された人間には、人生における特異点——連続したカーブのなかの不連続な一点——の体験がある。尖点^{カusp}における、時間当たりの変化がどのくらいか、みなさんご存じ？ 無限大ですよ！ そしてその点を過ぎた瞬間にマイナス無限大に転じる。こりゃ「急激な変化」なんてもものじゃない。時速無限マイルだったものが、逆方向への無限大のスピードに変わる。それがですね、蚊のケツ幅とか、赤毛のねえちゃんの陰毛の直径みたいな、極小の Δt の中で起きるんです。雷に直撃されるってことは、みなさん、そういう意味なの。高山のてっぺんの針の先について、ここにヒゲワシなど飛んでもんかと高をくくっていきやいけない。赤肌のケバいい世の上空に、ちゃんとヒゲワシが旋回して、人間をかつさらう機会をうかがっているんだから。そうだと。そのヒゲワシにまたがって操縦している小型人間がいて、こいつらは目のまわりに小さなマスクをつけている。その形が、無限大を表す ∞ なんだ。悪辣そうな眉毛と、とんがり耳と、ハゲ頭の連中がだよ、ハゲの頭の上に、法外な被り物を載せた



2 グラフがAのようになめらかな曲線であるかぎり、どの点においても接線の傾き(Δt に対する上下への変化量)が定まり、それによって「一次導関数」を得ることができる。ところがグラフBに見るように、カuspにおいては、接線の傾きが定まらない。

りしている。ロビン・フッドみたいな緑のフェルト帽とかじゃないですよ。カルメン・ミランダ風の帽子だったりする。バナナ、パイヤ、ブドウ、梨、パイナップル、マンゴーに、おやまあ、驚きだねえ、スイカまで載ってるよ——他に被り物といえ、第一次大戦期のスパイクトップのヴィルヘルムメット（ヘルムメット）から、赤ん坊のボンネット、斜（は）に被ったナポレオン帽まであって（Nのマークを付けたやつも付けてないのも、みんな赤のスーツと緑のケープは着込んでいる）、そいつらがみな競馬のジョッキークーよろしく前傾姿勢で、獰猛な鳥の耳元にささやくのだ。きみをかっさらえ、とね。エンパイア・ステート・ビルから生贄の猿をもぎ取るみたいに。違いは、きみの場合、下には落ちずに、上に運ばれていく。やつらが働いている本部へ、だ。その世界は、きみの世界と似てはいるが、違うのだ。

合（コンクルエント） 同であることと同（アイデンティカル） 一であることとの中間にもう一段別のそっくりという段階があつて、そのレベルでは稲妻の頭しか見いだすことができない。さっきまでの世界と、その上に新たに敷かれた別世界とが、見た目はまったく違わなくても、わかるのだ。天の光にうたれた者には違いをちゃんと見抜けるのだ。自分でわかつてることを知らなくてもわかっている。そのことを確かめに、今宵葬儀屋は嵐の中を、小舟で漕ぎでたのである。

だが葬儀屋は、猛禽類の背に小型人間を乗せて送りだしたりする諸々の異世界に、関心を持つてゐるのか。いいや。雷をくらった連中がつくるサブカルチャーを調査して、人類学の古典的名著を書きたいとも思っちゃいない——彼ら独自の秘密結社があつて、握手のときは、尖らせた指の爪先をツンと立てるとか、『節約した五セント玉 A Nickel Saved』という月刊同人誌を発行しているとかいうのでもない（この誌名はまったく無害に見えるけれども——インフレーション後の老ペンジャミン・フランクリンを思わせるでしょ——）

3 ポルトガル生まれのブラジルのサンバ・シンガーとして第二次大戦中のアメリカで活躍。トリードマークのフルーツ・ハットを被つての歌と踊りで大人気を博した。上巻724ページでは、チチエーリンの眼が彼女のようだと書かれている。

4 行進時に、ヴィルヘルムII世と臣下の兵士が被っていたヘルメットを、ピンチョンが洒落てこう呼んだ。

「節約したニッケル玉は」の後に「ニッケルの備蓄なり」と続くのだ。ニッケル王マック・ハナの実際の言葉を引用すると、「きみも政治の世界とは充分な年月かかわつとるんだから、公職にある人間が大衆に負うものは何ひとつないのだ、ということくらいわかつとるだろう」だから、真の誌名が『充分な年月』であることは、〈知る者たち〉は知っているのだ。そのように変換してみると、この雑誌の毎号の記事から興味深いメッセージをたくさん引き出すことができる。外部の人間には、そんなの、どこかのクラブのささやかな楽しい会報にすぎないわけだけどね——ジェド・ブランキット氏が四月最後の週末にアイオワ支部でバーベキュー・パーティを開きました。〈アンペア数コンテスト〉の話は聞きましたよ、ジェド。どうも、お生憎さま。でも次のバーベキューには、きつとまたよみがえって戻ってきてくださいな。……ミニ・コーキンス嬢（支部番号1・793）が、カリフォルニア出身の網戸のセールスマンと、イースターの日曜に結婚式を挙げました。残念ながら、旦那の方は今のところメンバーの資格外。しかし、毎日網戸に囲まれているんだから、そのうちきつとよい機会に巡りあうでしょう！……ディケーターで催された春の大会の祝辞の席で、全照明が消えてしまった一件に関し、編集長宛てに、アレはなんだったのか、との問い合わせが殺到しておりますが、原因がようやく判明したことを欲びとともにご報告申し上げます。原因は、つかの間発生した巨大電流で、当クラブのエンジンアとして現地にいたハンク・ファフナー氏によれば、あれは「一種の電気津波」であつて、「場内の電球は、すべて焼き切れ、天井が、もはや孵ることのない煤の卵でいっぱいになった」とのこと。なかなか詩的なことをおっしゃる、ハンクさん。その突出波がどこから来たのかは、わかりませんかねえ——

5 悪い冗談のようなこの話は、一般にフロンクリンの作と信じられていた。誌A Penny saved is a Penny earned（使わなかった一セントは稼いだ一セント）をもっている。

6 マシュー・ジョセフの『泥棒男爵 The Robber Barons』（一九三四）によると、一八九〇年、オハイオのスタンダード・オイル社に対して、反トラスト法違反の訴えがなされたとき、訴えを起こした地方検事に宛ててマーク・ハナ（オハイオ州の「ニッケル王」、後の上院議員）が書き送った手紙に、この言葉がある。

しかし、舟で漕ぎでたボーランド人の葬儀屋が、暗号破りや秘密組織、表面にあらわれた特殊集団のふるまいに関心があるのかというところ、そうではないのだ。雷にうたれた人間をどうして探しているかというところ、それは仕事に役立つと思うから。その思い、通じますかね？ この葬儀屋は、雷体験の以前と以後で人間のふるまいがどう変わるのかを知りたい、それを知ること、遺族のより適切な遇し方がわかると考えているのだ。

「あんだ、これほどの大発見を、ただ商業目的に使おうというのかね」岸に上がりながらタナツが言う、「そんな恥知らずなことを」。沼地の端の町に上がって五分もしないうちにタナツはもうこの調子だ。そのとき、ピカッバリバリッザッグルグル、グル、後方で壮大な光と音の炸裂。後方で光と音が弾けとんで水面を打った。ちょうど葬儀屋が、恩知らずの発言に腹を立て、舟を漕いでいったあたりである。

「おおっ」かすかな声が届く。「おおっ、ほおっ。おーっ、ほほほーっ」

「ここは俺たちだけが住む場所だな」がっしりしたシルエットが、タナツの行く手に現われた。押し殺した声で、「よそ者に手出しはしないが、ここを通っていくのは避けた方がいい」

それは一七五条のやつらだった——收容所のホモセクシユアルたち。ノルトハウゼンのドーラ強制收容所を出て北上し、陸のはずれに來ると、この沼地とオーデル河口との間に男だけのコミュニティをつくったのだ。通常ならば、タナツもここを彼らの楽園と考えただろう。しかしこの人間はみな、ドーラが恋しくて仕方ない——ドーラこそ我が家であって、みんなホームシックになっている。「解放」は追放に他ならず、彼らはこの新天地で、假想上のSS指揮系統をつくりあげたのである——以前は、〈運命〉の命じるままに

7 この同性愛者たちと、スロースロップは、上巻551ページで遭遇している。ドイツ刑法で同性愛を禁止していたのが「二七五条」だった。

看守を宛がわれ、それに甘んじなくてはならなかったが、もはやそれには耐えられない。
収容所指揮官にも、プロック指揮官にも、想像上のナチのブレインの演じ手として最高
に作態なやつらを宛て、囚人代表、プロック長、模範囚、作業長、舎内勤務、
伝令など囚人内部の序列も、お互い同士で選んで決めた——。もしも夜明け時、湿った
砂丘の間の湿原を、ほとんど樹皮の色に見えん赤フントをなびかせ、はためかせながら駆
け抜けてゆくロイファアの姿を見たなら、きみにも想像がつくだろう、囚人共同体におい
て彼の果たすべき真の目的が。この男はすなわち、聖なる戦略の伝令、良心のメモ書きの
配達夫なのだ。だから、葦の茂る早朝の湿地を近づいてくるとき、きみは垂れたうなじを
摘まれて、その「偉大な瞬間」の側波帯によって掃き飛ばされてしまうだろう——ここで
ロイファアは誰よりも神聖なのだ。彼こそ、可視の収容所と不可視のSSをつなぐ廃墟の
インターフェイスへ、メッセージを届ける役目を担っているのだから。

天地にまたがる複合全体を統括するのがシュツヘフトリンクスフューラーたるブリツェ
ロである。ブリツェロの名前は、こんなに東にまで達していた。まるで名前が本人になり
変わり、リュートネブルク・ハイデの最後の発射地点を超えて撤退を続けていたかのようだ。
「ゾーン」で最悪の霊といえ、このブリツェロだ。その悪辣さは、伸びつつある晩夏の
夜に染みわたる。蝕まれた根のように変化しながら、彼は冬に向かって伸びる。白さを増
しつつ、怠惰と飢饉に向かう。一七五条の連中が、自分らの至高の圧制者を選ぶとしたら、
彼以外に考えられない。その権力は絶対だ。おまけにこの男は、いつも待ち構えている。
砲弾を浴びて錆びついたガス工場の外でも、曲がりくねった階段の下でも、戦車や塔の背
後でも待っている——夜明けの最初の洋紅色に縁取られた伝令が、一夜の出来事を報告し

8 囚みにドイツ語で
はチエスのビショッブも
同じ「ロイファア」の名
で呼ばれる。

にくるのを。夜こそ彼の心からの関心事——だから絶対に報告を怠ってはならない。

この「ファントムSS」の指令指示は、囚人たちがドーラ強制収容所で知ったことではなく、むしろ隣りの「ミッテルヴェルケ」におけるロケットの構造（として彼らが思い描くもの）に基づいている。A4にしても、やはり壁に隠されていたわけだ——真の苦痛と恐怖を、召喚された解放者から分かち、通過不能の壁に。ヴァイスマン／ブリツェロの存在は、その壁をワープして通りぬけ、悪臭たちこめる簡易寝台室に震えながら入り込む——言葉が夢を通りぬけて出てこようとするかのごとく、別の形態へ向けて、おのが身を伸ばしながら。そして一七五条の囚人らが現実のSS看守から聞いた話として喋っていることを耳にする。それはヴァイスマンを即座に昂奮させるに足るものだった——同輩のエリート将校でさえ、ヴァイスマンという男が何を企画していたのか知らなかったというのだ。囚人たちの近くに来たときには、看守たちはひそひそ話をやめたが、彼らの恐怖はエコーとなって響いていた。それはヴァイスマン個人への恐怖ではなく、時、そのものへの恐怖だった。ヴァイスマンがミッテルヴェルケの所有者でもあるかのように自由に歩きまわれるような、それほど絶望的な時。アウシュヴィッツやブーヘンヴァルトにおけるのは異質の権力を、看守たちが担いえない権力を、ヴァイスマンに与えるに至った今という時代を、恐れたのだ……

いまブリツェロの名を聞いて、タナツの肛門がひき締まる。その名を、誰かが仕掛けておいたと思ったからではない。タナツにとって、パラノイアはさしたる問題ではない。彼にとっては、その事実を他から指摘されたことが気になった。ロケット000000号が発射されたあの正午以来自分は、ブリツェロがどんな地位にあるのか——生きているのか死

んだのか、支配者となったのか逃亡者にすぎないのか——どんな言葉も届いていなかったのだ。どうであってほしいのか、タナツ自身にもわからない。アヌビス号が動いているうちは、選ぶ必要などなかった。記憶が充分に遠のいてしまえば、事象の「現実性」など問題にならなくなる——ああ、あれは実際起こったことだとも。もちろん起こっちゃいないがね。

「われわれは、彼が実際にいると考えている」ここのスポークスマンがタナツに告げる、生きて逃走している。ときどき聞こえるんですよ——ブリツェロの特徴と一致する声だね。だからわれわれは待つんです。ブリツェロはわれわれを見つけるでしょう。ここのブレハブの権力基地では、待望されているわけだし」

「ただ立ち寄るだけだったらどうする」と、単なる悪意からタナツはたずねる——「あなたがたを鼻で笑って、行ってしまったら？」

「そうだったらもう、説明は成り立ちません」もう一人が後ずさりして、雨の降りおちる下に出る。「これは信念の問題なんだから」

タナツは、ブリツェロを探しだすことは、00000号が発射された後には決断するまいと誓っていたので、恐怖の剣のひらをノドに当てられた気持ちになった。「きみらの伝令を教えてくれ」と大声を出す。

「自分で行くといい」と、くぐもったささやき声。

「どこへだ？」

「ガス工場」

「だがおれには伝えることがあって——」

のは、ベークン・ユンダの実験と同様（199、200ページ）。キリストの処刑も正午である。その直前の時間帯は（魔の刻）（イヴル・アワー、上巻710下巻85ページ）という言い方が使われていた。

「自分で持っていくんだね……」

アヌビス号の白い船体はどこかで魂の救難を続けている。その航跡では、見捨てられた者たちが泳ぎ、溺れ、ぬかるみに這い上がる。行き先を失った夕暮れの乗客らが浮き萍となつた互いの身に、こすれ落ちた記憶のジャンクに、跪きあう——彼らがすがるものはそれしかない——もがき合い、まじり合い、立ちあがっては、倒れこむ。船外へ投げ捨てられた、われら共通の浮き屑。

本降りの雨が降りしきるなか、タナツは砂岩のアーケードの下で怒りに震える。あのまま船に乗っていきりやよかつたんだ、と彼は叫びたい。そして実際叫びだす、「おれが、おまえらと一緒にとり残されるとはな。おまえらのようなクズと一緒に……」彼の悲話を聞いてくれる上級裁判所がどこにあるだろう。「ただ足がすべっただけなんだ！」船のコックが、ゲロの溜まりで足をすべらせ、クリーム状の黄色いチキンのゲロの素が入ったブリキ缶の中身を、右舷の甲板にぶちまけた。タナツはマルゲリータを探して^{*10}いて、それが目に入らなかつた。……そりやお気の毒だ、レ・ジュ・ソン・フエ、誰も聞いてないし、アヌビスは行ってしまったし。タナツさん、人間の浮き萍と一緒に泳いでる方がいいんじゃないかね。何が流れてくるかわからんよ。あのエンツィアンっていう大佐にきいてみな、彼なら知ってるよ（世界のがらくたの中に、鍵が潜んでいるんだと……その鍵は、白いアヌビスの船上にはないのさ。価値あるものは、みんな舷から海へ投げ捨ててしまうからね）。

タナツはガス工場に向かい、タールを塗った壁に対面する。雨にぬれたウールの襟の陰からサバの眼を膨らませて。あたりはまったくの白と黒。小路の暗闇が緑の黎明を含みは

10 Les jeux sont faits
|| 「ゲーム成立」を宣言
するカジノのクルピエの
言葉。

じめると、恐怖のあまり口の両脇から息を煙らせる。ここにいないよ、彼はただ死んだんだただ死んだ？　ここは生と死の「インターフェイス」じゃないのか？　ふたつの世界が会う面だよ……それはそうだが、どのふたつだ？　おっと、実証主義に頼ってみてもタナツは救われない。大戦前のベルリン、ペーター・ザクサのところをやった降霊会のとさきでさえ彼の実証主義は助けにならず……単にじゃまなものとして他の面々を苛つかせただけだった。自分自身と神秘世界の間に言葉のスクリーンを張るというのは、単なる戦法でしかなく……それによって自由へ導いてくれるものでもなかった。この頃じゃ、ますます無意味になっている。彼自身が、ブリツェロの存在を確信するようになったのだ。

あれは夢ではなかったんだ。夢だったらよかったのに、とか言いだすなよ。あれはただの熱病であって、熱が冷めれば、冷たい部屋の現実へと戻されるだけだとか……長く複雑な任務^{ミッション}を演じる必要は結局自身にはなくて。そう、あれはただの熱病で……現実ではなかったとか……

こんどはリアルだぞ。生きていようが死んでいようが、ブリツェロは現存するのだ。タナツは恐怖のあまり正気を逸したのか、ブリツェロを刺激してみたくなる。待ちきれないのだ。何をどうすれば、ブリツェロをインターフェイスのこちらへ連れてこられるのか、それをこの眼で確かめずにはいられない。どのように叫んで、ケツを振って、降参すれば、こちらへ引き戻せるのかと……

だが、やってきたのはロシアの警察だけだった。「一七五のく^{シュタフト}」に入りこむにあたっては、それ相応の規則があるのだが、むろんタナツは聞かされていない。ロシア当局が一連の大きな手入れをする以前、このガス工場はハスラーたちの商売の場として悪名を

馳せていた。／＼と七五調の聖歌隊が通りをスキップしながら去っていく。フェードアウトするメロディは、ホモセクシュアルへのおぞましい讃歌だ――

うまうま、おまおま、うんちやか、ぶら
おいらがゲイなら、あんたもゲエ

「このごろ捕まるのはあなたらフリーリストだけでね」と、胸ポケットに白いハンカチをさした平服の男が、帽子のつばの陰で笑っている。「もちろん、変なスパイもいるがね」

「おれはちがうぞ」とタナツ。

「おお、ちがうのか。では聞こう、何なんだ？」

これにはちょっとまいった。半日もたっていないというのに、なんと様変わりだ。つい先ほどまで、ブリツェロのことなど気にもせず、考えもせずやってこられたのに、今では、彼に関するしつかりした説明を用意していないと、いきなり現れたオマワリでさえ納得しない。これは棄却の民^{レトリック}となって最初に彼が学ばされたことのひとつだ――自分でまいた種がもたらす結果から逃げることはできない。逃げられたとしても、それは偶然^{アラン・ド}のせいではない。

たとえば、シュテティンの町はずれで、ロンドンから帰還したてのポーランド人ゲリラ集団が、彼の乗ったバトカーを、反ルブリンのジャーナリストを刑務所に移送中の車と間違える。ゲリラはタイヤを撃ち抜いて乱入し、運転手を殺害、平服の職務質問係を負傷させ、タナツをジャガイモ袋のように引きずって逃走する。

「人違いだ」とタナツ。

「クソ、その通りだ」

ゲリラは数マイル走ってから、難民キャンプでタナツを車のドアから放りだす。かれは他の一九九九年とともに金網の柵の中へ家畜のように追いやられ、ベルリンへ送られる。

それからの数週間は貨物列車で運ばれる。積荷となった彼らは交代で、割り当てられた車輛の外側にぶらさがる。その間、貨車内の藁の上で他の連中が眠るのだ。時間がくると交代する。眼を覚ましていられるかどうか勝負だ。何人もの難民が居眠りと同時に貨車から落下するのをタナツは見た。それはときに笑える光景ではあっても、痛ましさに変わりはない。難民のユーモアなど、実に不安定なものなのだ。タナツも手に額に尻にゴム印を押され、シラミ駆除剤を振りかけられ、こづきまわされ、触診され、名前と番号をつけられ、明細書とともにひき渡され、行き先を間違えられ、勾留され、そして無視される。

ロシアとイギリスとアメリカとフランスの身体担当の書類から書類へ出入りし、占領地区のサーキットを回され、新たな所有者の顔を、咳払いを、ブーツを憶える。配給カードもなければ給与手帳も持たず、一組二千人の集団となって「ゾーン」内を動きまわる運命なのだ。一つの集配地から次のセンターへ、いつまで続くもしれぬ引きまわしの旅。それがメクレンブルクの、池と柵柱ばかりが続くところに入ったあたりでタナツは認識する——自分に降りかからないことなどひとつもないと。レール上での二つめの夜に靴が盗まれる。炎症が気管支の奥深くに届き、高熱でダウンする。一週間のあいだ、ひとりの見回りも来ない。二錠のアスピリンを手に入れようとすれば、受け持ちの看護兵にフェラチオをしなくてはならない。そいつは、九度五分の熱があるひげだらけの頬で腿がこすられる

11 スヴィーネミュンデの西からリュールベックの東まで広がる。砂丘の広がる海岸と、内陸の湖沼、松・ブナの木を特徴とするメクレンブルク州は、かつてひとつの領邦（ラント）をなしていた。

のに快感し、きんたまの下から熱い息がかかるのをよがっている。メクレンブルクで、眠っている片腕の元兵士から煙草の吸い殻をくすねたタナツは、顔の見えない、聞いたことのない言葉をしゃべる連中から、半時間にわたって殴る蹴るの暴行を受けた。彼の上を這う虫は、彼のことをしゃまっけな山と思うだけ。与えられた日々の糧は別のDPに取られてしまう——そいつは自分よりチビのくせに当然オレのもんだという顔をしている。そんな顔、タナツには自然にはできない。装うことしかできない。だから相手の、ボロで覆われた肝臓色の背中と、パンを咀嚼する干し草頭を追うだけの意気地が出ない……他の連中に見られているのに。まわりには、幼い自分の娘に夜タナツがイタズラをするとはいふらしている女もいる（その欲望を、まさに抱えてしまっているタナツは、女と眼を合わせられない、スレンダーなかわいい少女、そのブカブカのGIパンツをひき下ろして蒼く小さな、ああビアンカを思わせる尻の割れ目にペニスをはさみパンのようにやわらかなふとももの間にかぶりつくや長い髪がうしろに放り上げられてアアッとうめく声がよがっている）その他に、消灯時間になってから煙草の吸いさしを探しにいかせるゲジゲジ眉毛のスラヴ男もこちらを見ている——実際に吸い殻を見つけることより、他人にそれを要求する権利を確保するためにタナツの睡眠を奪うやつ。いや実際、まわりのすべての敵対者に目撃された。パンを持って行かれたタナツがそれを取りもどそうともしないことを。周囲の裁定は明快だ。アヌビス号の船上で一度も見たとのないうような澄みきった眼をしている。その正直さを避けることもやり過ぎすこともできず、彼は、今にしてはじめて、その澄みきりに面と向かう。文字通り彼の「面」を向ける。そのリアルな光に……

少しづつ、ヘイデ^{トランスベアレンシー}での最後のロケット発射の記憶が澄んでくる。体内の熱が不純物

をあまり出し、痛みがそれを取り除いてくれたのか。ひとつのイメージが繰りかえし廻る。黒い泥濁色の眼球に一台の風車が（木の枝のシルエットがなす乱雑な網線^{レライネール}とともに）映っている……風車の両側の扉が、暴風で留め具の外れた錠戸のように忙しく開いては閉じる……虹彩の空にハマグリ^{ハムグリ}の貝殻形の雲が立ちのぼる、その縁ははつきりとした紫色、爆発による煙なのか、地平線が何やら明るい黄土色^{オリーブ}に染まっている……ズームすると、輝きを増す黄光のまわりを唸る紫が包みこんで、明紫色の影をともなった黄色の内臓が外に向かってこぼれ出ようとしている図だ——こちらへ腹を突き出して。これは変だ（その絵画的な素晴らしさを貶めるつもりはないが、しかし）変ではないか、いいか、リユーネブルク・ハイデには風車など一台もない！ いや、間違いがあってはいけないと、タナツはすばやくあたりを見まわしたが、ない、風車はやっぱり見えない。だったらなぜ、周囲のヒースを映しているブリツェロの眼の中に、風車が見える？ いや、実のところ今度は違った、いま映ってるのは風車じゃない。ジンの曇だ。へハイデにはジンの曇もなはずだ。だがさっきはたしかにジンの曇が映っていた。どういうことだ？ ブリツェロの眼の中に、かつてグレタ・エルトマンが、彼の王国の地図を見たことがあったな。^{*12}それと同じで、タナツにとっても、彼の眼が過去を映しだす鏡になっているというのではないか？ そんなヘンな話があるのか。彼の眼球で起こる現象が、こっちが眼をそらすと消えてしまうだなんて。ときたま断片だけが見えるなんて。カッチェが肩越しに振りむいて真新しい鞭の痕を目にする姿とか。朝の整列時のゴットフリートの姿とか——ワンダーフォーゲルのしなやかな身体を包む軍服に風が吹きつけ、太腿の曲線を起点として大きな波をつくる、髪を風にたなびかせ、チラリ横を向いた生意気な笑み、口を少し開けて、あごを

12 172 ページ。アヌビス号のトイレの中で、マルゲリータがスロースロップに、最後の、神話的なロケット打ち上げ時の話をした、そのなかで。

上げ、視線は落として。楕円の鏡に映ったブリツェロ自身の顔もだ。年老いた顔。今にもカツラをかぶる。ドラゴン・レディーの坊ちゃん刈りの前髪^{キリ}。鏡をのぞき込んだままポーズ、鏡に何を問うているのか、え、何と言った？ カツラを横にずらして少し下向きにする、暗くなったカツラの陰にもうひとつ別の、よく見えないが、顔が……だが眼を近づけると、骨の尾根と脂肪の原が出現し、氷でコーティングしたような白い顔が浮沈している。手に持った仮面を、がらんだりの頭巾の上に被せたみたい顔だ——ふたつの顔が今うしろを向いた。この男を、タナツ、おまえは裁こうというのか？ タナツ、おまえは鞭を愛したではないか？ 婦人服の衣ずれとため息を切望したではないか？ 愛する子どもを殺したいと、無力な汚れなき生きものを嬉々として殺したいと思っただろう？ 最後の瞬間にも、その子は信頼しきった眼差しでおまえを見上げて、にっこり笑い、唇をすぼめてキスしようとするまきにその瞬間に、一撃が彼の頭蓋にめり込む……そういうのが最高だったんだらう？ そのときおまえの胸の中で叫び声が漏れ、突然の喪失感がズシンと重く到来する、永遠の喪失、二度と戻ってこない愛と、希望が葬り去られた……それがお前の、否定しえない最後の姿……（だがそれを、その蛇^{アサマ}の顔を、受け入れるのは異様な恐怖だ、腕と脚を開いてそれをおまえの中へ、おまえの真の顔として抱きこむのは殺されかねないのだ、その顔に——）

いまタナツはこれを《黒の軍団》^{シムサルツコマンド}に話している。これ全部に他のことも交えて。一週間にわたり、流れるような金網の柵の向こうから黒い顔が現れるたびにおれは知ってるぞ、《黒装置》^{シムサルツコマンド}を見たんだと、石炭殻の山や交差路に向けて叫びまくって、うわさが伝わったのだ。ある日《黒の軍団》が到来し、石炭くずで彼らの顔と同じくらい黒くなった藁の

13 ドラゴン・レディーは、ミルトン・カニフのコミックに登場する中国人キャラクター。最初は典型的な東洋の悪人だったが、次第に人間味を帯びて、日本の大陸侵攻後は抵抗する中国のヒロインとしても描かれた。なお戦後、ピンチョンの少年時代には、カニフに代わってジョージ・ワンダーがこの漫画を描いていた。「坊ちゃん」のように前髪を揃えたドラゴン・レディーの図柄はワンダーの作。

ベッドからタナツはつまみあげられ——幼児のように軽々とだ、顔にたかったゴキブリも親切に払いのけてもらい——震える体を担いで運ばれ、呻くうちに南方のへ土豚^{エルトシニグアイン}穴へへ回収される。そこではみな焚火を囲んで、ケムリを吸い、口をむしゃむしゃ動かしながら、青いタナツを驚きの眼で見つめている。この男はもう七時間もぶっ通しでしゃべっているのだ。物語を、こんなにたくさん語る特権を許された男は彼だけだろう。この男はすっかり敗者に、ルーザーになった。

ただの阿呆だ、いつも負けてる

愛のゲームも連夜の敗北……

上に召された人にはかなわん

彼らはカードに細工する、悪事のカードも正義のカードも……

おれはルーザー、ぜんぶ賭けない、勝てるプレイをしないんだ

一度成功を逃したら、次もまた、負けるだろうと知っているから

愛のゲームの、ただのルーザー……

来る夜も来る夜も一人ぼっち

ゴットフリート^{ゴットフリード}を失い、ビアンカ^{ビアンカ}を失い、タナツは今になってやっと理解しはじめる——あれはひとつの喪失だったと、同じ勝者にとられたのだと。今ではどちらが先だったか、どっちの子を先に失ったかも忘れてしまった。そればかりか、記憶がハチの雲のように湧きでる中で、思うのだ——ゴットフリートとビアンカは同じひとりの子の、ふたつの違っ

た名前ではなかったか……だが他人の浮き算がぶつかってくるんだ、角がとがってブルブル高連回転してるやつだぞ、そんな考えをいつまでも保持してはいられない、すぐにまた自分は広い海に流されてもがくしかないと悟る。だが、ほんの少しの間でも、その考えを抱いて眠ったのだ。醒め際に、それに頼ずりした感触を、その触感と色具合を忘れさることはないだろう——ゴットフリートとビアンカのふたりは、まさに同じ子なのだ。

タナツはブリツェロを失ったが、それはあまりリアルではなかった。最後のロケット発射後、ハンブルクまでの記憶にない夜の移動のあと、盗んだP-51ムスタングでハンブルクからブイドゴシュチュ¹⁴へ飛んだ。そのひとつ飛びはまさに「プロカロフスキーが空からマシんで降下する」という感じで、これでオレもブリツェロの幻影をふり払えたんじゃないかとタナツも想像するに至ったが、それは単に機体のメタルがもたらした感覚にすぎず、案の状、その金属的感覚は、生身の肉体と、汗と、長い会話の続く夜の出会いにとってかわられた。ブリツェロは脚を組んだまま、股ぐらに向かって吃音を発する、「オレは、ク、ク、ク……」——can'tか？ そう言いたいのか、ブリツェロ？ couldn'tか？ care? それとも……その夜ブリツェロは武器のすべてを差しだし、自分の防壁と迷路の地図のすべてを広げて見せた。

タナツは実はこう問いかけていた——死すべき人間たちの、確信と自己一貫性を持つ顔が、自分を見ずに通りすぎていくとき、それらの顔は存在者^{リアリティ}なのか、それらは真に、魂であるのか？ それともただの魅力的な彫像にすぎない、雲に陽光が当たってできる顔のようなものなのか、と。

そして——「彼らをどうやって愛することができるのか？」と。

14 ポーランド中央部、ヴィスワ河沿いにあるこの都市に、「選ばれし」者たちを乗せたデカダンス船「アヌビス号」を所有するプロカロフスキー夫妻が住んでいた(125ページ)。

だがブリツェロから答えは聞かれない。眼の中の風車のシルエットがルーン文字を投げかける。いま、寄せられたいくつかのシーンがタナツの前を明るく過ぎていく。モリツリ少尉が送ってきたのは、一九四四年末、フィリピンのマバラカット¹⁵近くの光景。バナナの葉の床を赤ん坊が身をよじり、転がり、足で日光を蹴ちらし、半乾きの葉っぱからはこりを立てる。その頭上を、特攻隊が大音響とともに通り過ぎていく。ゼロ戦が、カミカゼ・パイロットを乗せて、彼ら好みのイメージでいえば、最期にサクラの花として散るために、飛んでいくところだ……グレタ・エルトマンからは、地表を覆う土と泥の奥底の光景が届く——泥のように這いまわり〈地〉のように叫ぶもの、生まれては死にゆくそれぞれの世代に働く重力とそれへの屈従が密に積み重なったもの——喪失、敗北、最期が連鎖をなして空虚とつながる、地層がのしかかる密封された洞窟にとらえられた、永遠に行きはぐれた……誰が送り込んだのか（それは決してわかるまい）ピアンカの像が一瞬浮かぶ、薄手のコットンのシフトドレスに身を包み、片腕を背に回し、スミーズに白粉をはいた腋の下と、片方の小さな乳房の跳び上がるような弓形をなし、うつむいた顔は影に包まれた額と頬骨のほかは見えない。こちらを向く、睫毛が見える、眼はあくのか、おまえは祈る……ピアンカはおまえを見るのか？ 疑いはいつまでも宙ぶりのまま、彼女の愛について疑いは永遠に続く——

延々とつづく話の後押しを、彼らはしてくれ。〈土豚穴〉の連中は、一夜を徹してノンストップの諜報ブリーフィングをやるつもりだ。タナツこそ、彼らの待ち望んでいた天使であり、その天使が、彼ら自身のロケットを組み立ておえた今日の日に現れたのは、じつに納得できる話なのだ。ポーランドからオランダに至る〈ゾーン〉全域を一夏くまなく

15 日本軍「カミカゼ特攻隊」の基地。マニラの北方約八十キロ。

回って、部品のひとつひとつを集めてつくった、たった一機のロケットだ。信じる者も信じない者も、空無派も緑の派も、ヤリマクリ派も政治的ノースセックス派も、政治好きも中立好みも、感じるだろう、嗅ぎだすことができるだろう、隠れた願望を、魂が秘かに支払う一〇分の一税を。〈ロケット〉のための何かを。その「何か」を、いま〈天使タナツ〉が照らしてくれる。聞き耳を立てるすべての者に、各自違ったやり方で。

タナツが話を終えるまでに、彼らはすべてを知るだろう、〈黒の装置〉とは何だったのか、どのように使われたか、00000号がどこで発射され、どちらを目がけて飛んでいたかを。エンツィアンは厳めしい笑顔を浮かべ、足下へ向けて一発うなってから、何時間も前に決めていた言葉を発するだろう、「ではまず、進行表を見ていこう」〈土豚穴〉でエンツィアンと張りあう、〈空無派〉のヨーゼフ・オムピンディがエンツィアンの腕をつかんで——「もしよければ何か……」と。エンツィアンは肯いて、「おまえに保安警備を固めてもらえると助かるな、同志」久しぶりにオムピンディを同志と呼んだ。見張りリストの決定を、移動の旅の間だけとはいえ、〈空無派〉の自由に任せるというのもまた、相当な譲歩だ……

……移動はすでに始まっている、一つ半下の坑道で、男も女も、それぞれのロケット部品をそれぞれトロッコまで滑車で引き揚げ、運搬し、トロッコに取りつける作業に大わらわだ。穴の外へ続く傾斜路には、さらに多くの軍団員が、革とブルーの花隊列をつくって並んでいる。木製のレールと溝とがつくる、現在から未来へのヴェクトルに沿って、エンツィアンもニュートラルもグリーンも諸派みな勢揃いして、待ち、引っぱり、指揮をとる。種族として生きるべきか死すべきかをめぐる断絶ができて以来（あれは何年前だったか）

初めて言葉を交わす者たちもいる。遠征のイヴェントが、凍えきった関係に、その場かぎりの雪解けをもたらしたのだ（俺の力ではない、とエンツィアンは悟っている、これが終わったあとには一体どんなことになるのか想像すると震えがくるが——たぶん今の融和は、一日のうちの数時間しか続かない定めなのだろう、それで充分ではないか、充分だと思えることが大事だから……）。

ウェブベルトを締めなおしながら、クリスティアンが通りかかる。肩はいつものようにいからせてはいない——おとといの晩、妹のマリアが夢枕に立って、誰にも復讐はしてほしくない、どうかングアロレルエを信頼し、敬愛し、思いとどまってほしいと伝えた——だからエンツィアンとも目を合わせる。その視線には慰安もなければ挑発もなく、ただお互いこれほど知り合えたのは初めてだという共通の理解が浮かんでいる。そして、彼の脇を過ぎるとき、クリスティアンの手がビクッと上がった——なかば敬礼、なかば祝福の合図として、へハイデンに向けて北西方向に、死の王国の方へ差しだされた。そしてエンツィアンの手も同じく差しだされる、イーヤ・克蘭ディエ！^{*16} どこかで一瞬、ふたつの手のひらが、横にずれて互いをかする。ほんとうに触れ合う。これも、この場かぎりであっても、充分な接触、充分な信頼ではないか……

16 テクストの表記は
"iya, 'kurandye" iya
の意味は不明。ピンチ
ンが参照したらしき
W. Kolbe の『バレン語
英語辞典』によれば、
"indyo 'kurandye" と "C
ome, my fellow" とい
う意味になる（『G R
C』）。



期待してなかったが、この国、気持ちいいんだよ。実際に行ってみれば、まったく爽快なもんだ。そりゃ悪人もいるさ。死神^{デス}みたいなヒドイやつがね。そいつはアメリカン・テイーンエイジャーの典型的な父親で、毎度どのエピソードでも息子を殺す策をめぐらす。息子もそれを知っている。想像してみなさいよ。今ところは、父親の日々の死の罨^{えん}から何とか逃れてきたんだけど——今後もずっと逃げられる筋書きになつてるとは誰も言っていないのだ。

息子の方は、陽気で元気な若者なんで、だからといって特に父親を恨んだりはしていない。親父のプロデリックスは、ホントしょうがないなあ、殺人にしか目がないんだから、やれやれ、次はどんな手してくるんだろう、ってな感じである。

そこは巨大な工場国家、《未来都市》のひとつ。一九三〇年代のスウープ・ファサードやバルコニー付き摩天楼を未来に投影したビル、髪をボブにした細身のクローム製女人柱像であふれ、街の深い谷底の喧噪または静寂の中を、それぞれに趣向をこらした飛行船が漂流し、屋上庭園で肌を焼く金髪の美女たちが、通りかかるきみに向かって手を振る。^{*}ロ

1

この多重層の未来

ケット・シテイ、そう、ここはヘラケーテン・シ・タット」なのだ。

下の方では、幾千もの少年たちが風吹く中庭や通気渠を走り、階段をかけ上がったたりかけ下りたり。被ったスカルキヤップのてっぺんでプラスチックのプロペラがブーンと回っている。少年たちはメッセージを届けに、プラスチックの草木の間を走りまわり、ソフト・プラスチック製のオフィスに出入りする——ねえ、タイロンへのメモもあるぞ、《光り輝く時》^{サキ}を捜しに行け、（えっ！ 知らなかったぜ、それ、盗まれちゃってるの？ こりやまたきつと、父さんの悪だくみだな！）ってわけで、人混みの回廊にやってきたのだ。犬がじゃれる、自転車走る、まだあどけないティーンズの秘書がローラー・スケートでかけ回る。青果を積んだ荷車と、光の中でくるくる回るビーニー帽、あれはおもちやのピストルか水鉄砲だな、あっちこちの角で決闘を演じてる、きらめく噴水のかげに子供たちが隠れておっと待った！ ありや本物の銃じゃないか、本物の弾丸がズギューンととんだぞ！ 父さん、やってくれるねえ。でも、まあ、今日も《ザ・キッド》の方が一枚上手ということでした。

《光り輝く時》の救出作戦。父さんの一味が、何やら邪悪な目的のため、一日の二十四の時のうちから盗んでしまったのだ。ここヘラケーテン・シ・タットは移動がとて複雑であって、直行する道路の溝に沿って、建物群が全体として動く。建物自体を上下に動かすこともできる。お好みの上階層や地下の階へ、秒速十二階の速度で移動できる。まるで潜水艦の艦長になって潜望鏡を動かすみたい——といっても、全部の道筋が使えるわけじゃない。それを使える人もいるんだけど、あんたはダメ。これはチ・スなの。いやキングを獲ればいいってわけじゃない。そもそもキングはいないのだ。目標がその時々で

都市イメージは、高層建築の登場と共に空想され、フリッツ・ラング監督の『メトロポリス』（一九二七）などを通して強められ、少年向けの読み物やコミックスなどを通して一九三〇年代には通俗化していた。

2 原文は『原・訳』、宗教的な光と原爆的な光を重ねたイメージはキーワードなので、できるだけ「光り輝く」または「光輝の」光輝なる等の訳語に統一している。

変化する。いまは「光り輝く時」の奪取をめざす。

プロペラ付きのスカルクアップを被った少年がヒョイと現れ、スロースロップに新たなメッセージを手渡すと、ふたたびクルクル去っていく。「光り輝く時」の身柄はあずかった。彼女を見たいなら、その種のカスタマー向けに展示を行うので、十一時半に以下のアドレスまで来られたし——都合のよいことに、空に白い時計の盤面がただよっていく。

うむ、レスキュー戦隊を駆りあつめるのはほんの三十分もあればすむな。紹介しよう、まづマートル・ミラキュラス。肩パッド入り、栗色のドレスで飛んできた彼女は、まだカラーを髪に巻いたまま。眠りの国から引きずりだされて少々ご機嫌斜めのもよう。続いて登場のマクシミリアンは、パール光沢のグレイのズートスーツに、インヴァネスのケープをまとった黒人で、高く角ばった頭にはポマードを塗りたくり、極薄の口ひげを生やしている。表向きにはクラブ「オーガブーガ」の如才ない店長さんをやっていて、そこは、ピ—コン・ストリートの上流階級が夜ごとロクスベリーのアル中／麻薬常用者と交歓する店なのだが、今はその仕事を放りだして駆けつけた。ヨオ、タイロン、きましたぜ！ ハロ—オ、マートル・ベイビー！ ヒエイハイハイ、何なのよ、何が起こったちゅうんだい。

胸につけたカーネーションを整え、部屋を見まわす。まだ来てないのはマルセルだけだが……おっと待った、ジュークボックスから聞こえてくるこのメロディ。こりやステイ—ヴン・フォスターのスイートなオールドタイム・ミュージックじゃありませんか、それをバックに、バルコニーの窓から入ってきましたマルセル君は、一世紀前のフランス第二帝政時代^{＊4}に大魔術師ロペール^{＊5}ウーダン^{＊6}が作らせたという機械仕掛けのチェスプレイヤーでありまして、まじめ一徹の顔をしたフランスからの逃亡者。耳まわりからきっかり六ミリの

3 アメリカを配属の居住者ビーコン・ストリートと、黒人の居住者ロクスベリーは、上巻140ページでも対照づけられていた。

4 一八五二—一八七〇。ルイ・ナポレオンがクーデターによりナポレオン三世として執政した。「故郷の人々」(一八五一)や「ケンタッキーの我が家」(一八五三)など、アメリカ人作曲家フォスターの楽曲がブームになったのも同時代の出来事。

5 精巧な機械仕掛けの「オレンジの木」で有名な近代奇術の父ジャック・ウジェーヌ・ロペール^{＊4}ウーダンは、一八四五年にパリでデビュー。

6 一九三〇年代初頭

ノ・フ・ラ・ン・タ・の皮肉を幾し、思ひ出した特許品の髪のもが、おかしたヘアスタイルをつ
 ノ・フ・ラ・ン・タ・の角縁のメガネをかけ、物腰も遠慮がちな若い青年は、意しことに、コ
 ー・ク・ン・ソンの助言を頼み、あまりに字の通りなのである。想像してみなよ、初対
 面のマク・ン・ソンの、いきなりハイブローとドアを開け、本指をいかにも黒人風に
 揺りうちかしたなら、ハイブロー・サム・ソキン・ブローンと言ったとする。マル
 セルはその「ソキン」という語の意味合いの探索に時間を費やすだけじゃない。そりやま
 だこの表面的な話で、その先がすごい。むしろ、という語の概念についての延々たる議論
 が始まる。それがすむと今度は、「さあ、これがただ事ではない徹底ぶりだ、実を言う
 と、マルセルの議論は今もって結論に近づいていない」という面もあるものの、マル
 セルの頭脳を作り出した素晴らしい緻密な十九世紀的人知は、今やドードー鳥のように
 完璧に絶滅してしまったものの、^{（イタリヤの）}イタリヤの脅威、との度重なる戦いにおいて、われらが
 ノ・フ・ラ・ン・タ・グ・フ・ォー・ンを繰りかえし窮地から救ってきたのである。

それにしても、マルセルの体内のどこに、チヌス名人の小人さんが、ヨハン・アルガイ
 アの「セツト」みたいに潜んでいるのか、パンタグラフは、磁石は、どこだ？ どこにも
 ない。マルセルは真正正銘のメカニカルなチヌスプレイヤーなのである。隠れたカラクリ
 などなく、動きに人間らしいところも見られない。ノ・フ・ラ・ン・タ・グ・フ・ォー・ン（略称
 見）の面々はそれぞれに、特殊な才能に恵まれている反面、それが欠陥にもなつて、人間
 らしい暮らしに不適応をきたしている。マートン・トラキエラスは奇跡を起こすのが専門
 だ、人間を超越した驚嘆すべき離れ業をやっている。そんな力を持っていたら、無器用
 でヘマばかりしている人間族を敬う気持ちにはなれないだろう。愛したいという気持ちには

のなまじり、（イタリヤ）
 ノ・フ・ラ・ン・タ・グ・フ・ォー・ンで
 キー・ブ・キ・ブ・キ・ブ・キ・ブ
 進出した、おなじみのノ
 レー・ブを真似ている。

ア「ちょっととメキンを
 貸せよ」とは、かしこま
 った調子に代わって、黒
 人風にかっこつけて手と
 手の接合を求めるとき
 の言葉、現在は一般に使
 されている「メキンを
 も黒人起源の呼びかけ、

名「ノ・フ・ラ・ン・タ・グ・フ・ォー・ン
 タ・フ・ォー・ン」など、よう
 に、アメリカの露地の貴族
 キー・ブ・キ・ブ・キ・ブ・キ・ブ
 名だが、（イタリヤ）
 は「ちまき」にかたじけ
 なく、無器用にも「ノ・フ・ォー・ン」
 を意味。

タ「十九世紀初期のワ
 イ・フ・ラ・ン・タ・グ・フ・ォー・ン
 ノ・フ・ラ・ン・タ・グ・フ・ォー・ン

あるのだが、彼女の超人的な力をもってしても愛の奇跡だけは起こせない。愛は、彼女の前で、固く扉を閉ざしてしまった。同列の男たちといえば、ホモか、法と秩序の熱愛者か、奇妙な宗教にはまった求道者か、でなければ、マートルと同じく他人の失敗を許せない完璧主義者。友達のメアリー・マーヴェル¹⁰やワンダー・ウーマンはよくパーティを開いてくれて、男と出会う機会もあるのだけど、マートル自身はあきらめの心境だ。……一方のマクシミリアン。彼は抜群のリズム感をもつ。すべてのリズムに対してだ。その中には、コズミックというのも含まれる。だから、底しれぬマンホールがありそうところや、高い窓から金庫が、爆弾のような金切声を立てて落ちてきそうなどころには近寄ろうにも近寄れない。マクシミリアンと一緒にときは、できるだけくっついて歩いていけば、地球最悪の地雷原も通り抜けられるっていうわけだ。でもそれは、本人にしてみれば、危険に立ち入れない弱みを宿命的に負っているということ。危険をほんのひと嗅ぎするだけで終わってしまう——皮膚にピリッと感じるだけで。

かくも立派な面子をそろえたクルーが、光りかがや——え、何ですか？ スロースロット自身の才能と欠陥の話がまだだって？ ああ、そりゃ勘弁して——〈光り輝く時〉^{レイディ・エント・アワー}を奪還するため、必要なものを準備する。マートルがあっちへ飛翔し、こっちを滑空すると、あれやこれやが魔法のように飛びでてくるのだ。

まずはゴールデンゲート・ブリッジ。「どうかしら、あれ？」「うーん、別な方、もう一度見せてもらえるかな？ ほら、あの……」「ブルックリン？」「——やや古風なスタイルのさ——」「ブルックリン・ブリッジね？」「そう、そいつだ、何というのか、とんがったのが付いてるの……」。

自動人形の中に隠れてプレイしたエピソードでも知られる。

10 「キャプテン・マーヴェル」(一九四三年連載開始)に変身できるビリー・バトソンのきょうだい。Shazam! というおまじないを唱えると彼女もまた「メアリー・マーヴェル」に変身できる。

ブルックリン・ブリッジ（「はらね、マートル、チェイス・シーンにはさ、釣り合いってもんが大事だろ——」）「はつきり言うてよ」「高速のカーチェイスをやるのなら、そりゃもちろん、ゴールデンゲート・ブリッジがいいだらうけど……でも、空を飛ぶシーンにはね、もつと占めの時代というか、なんか親密でヒューマンな——」。

最高に優雅なロールスロイスが二台（「冗談よせよ、マートル。車はなしってことに決めたはずだろ……」）。

小さなプラスチックの幼児用、ハンドルだけの車（わかった、おれにリーダーの資格がないなら敬意を示す必要はない。しかしこんなバカはやめてくれ……）。

こんなチームで毎日（悪党ババ）相手の戦いをやるっていうんだから、信頼の気持ちか湧かなくても不思議はない。ここには方向性というものが無いのだ。物理的な力の合成という意味でも、精神的な協力という意味でも。何かが決められるときも、決定が下され、ためしはなく、不平と気まぐれ、幻想と全面的愚鈍とが入りまじった混沌から、よろよろと立ちあがってくるだけである。「戦隊」というのも名ばかりで、実態は、イライラ鳥とふさぎ鳥、うらみつらみの鳥の巣で、中に珍種や伝説の鳥がいるわけでもない。それがいまでもサバイブできているというのは完全に運のおかげで、すべては巨人的な夜毎に、重々しく生じる大理石模様の空を手探りで進んでいる盲目の運命の手にかかっている。だから連合チームを眺めるスローストップの気持ちはいま、成功の願望と破滅の願望がほぼ均等（といって両者が相殺されて心が静まるってわけじゃない、騒々しい不協和音が心の中で互いにナイフで刺しあうのさ）。こんなふうに分裂して、どちらか一方に気持ちを収められないというのは、スローストップとしても快いことではない。むかし「どっちつか

ずの取り繕い屋^{*11}」ってのが、ビュリタンの説教でやり玉にあがったね。実は、どっちつかずの道というの、楽な道ではないんです。世の中の権威の人に言っときますが、あんた方に見えないからって、存在しないってことにはならない。内なるエネルギーというもの、外に現われたのと同じくリアルなものなんだ。その働きからあんたは決して逃れられない。「強度の生ぬるさ^{*12}」を感じたことは、あんたはないの？ え？ ああでもない、こうでもないで居つづけるのも、英雄や悪漢になるのと同じく、人間的なことじゃないかね。この世の悩みを背負ってるのは彼らなのさ、だろう？ さあ、みんな、シテイ・ボーイもカントリー・ガールも、寝床にいるのも、バスの乗客も、どこにいたって関係ないや、あんたの身近のへどつちつかず^〆に眼を向けてみなさいよ。いや、あんた自身を鏡に映してもかまいません。どうでしょ……歌ってみたら？

やあ、お隣りさん、ハロー、フレンド！

黙って通りすぎてくのかい

淋しいねえ、笑顔も見せず

親しみの言葉もかけないなんて

ちよつと言わせてもらうけど、

世の中崩れだしてるよ、ガラガラ彼らの顔の上に――

だから道中ご一緒しようよ、途中まで

空もいつかは晴れてくる！

ナウ、エヴリバディ――

11

¹¹ The "Stuttering Man"

世紀初頭のニュー・イン

グランドの牧師トマス・

フッカーの演説「自然の

オリーブへの魂の鼓吹」

(上巻48ページ註9に既

出)からの引用。フッ

カーはジョン・ウインス

ロップらと共にマサチュ

セッツ湾植民地へやって

きた牧師だが、教義上の

対立から百人ほどの信者

と共にコネチカットへ移

住した。

12

先と同じ演説でフ

ッカーは "The Stuttering Man"

「ぬるま湯」という

言葉を使って、コミット

メントをしない人間たち

を批判した。

四人がそれぞれの装束を着こむあいだ、歌声が続く。いつまで続くかはどれだけ念入りにやるか次第だ——早口のトマト娘マートルは大胆な脚線美を披露し、そのスカートの中を見やってマクシミリアンがニンマリとし、抑圧過剰の思春期少年マルセルの、困ったようなクスクス笑いを誘う。「さあ」スロースロップが間抜けなエンターテイナーの笑顔で、「ヘリフレッシュの一休み」^{*13}の時間だよ！——そしてマートルの「よしよー」^{オー・ジーザス}の声の余韻が消えないうちに冷蔵庫へ首を突っこんだ……冷えたチビ電球の灯りが、彼の顔を夏の夜のブルーに染める。タイロンはプロデリックとナリーンの間に生まれた影のチャイルド、タイロンは——これは告白されざる事実なのだが——モンスターなのであって、手の代わりに伸ばしてつかむしか能のない油圧型締をつけ……心臓はゴクンゴクンと音のする、見世物小屋のデブチン男の胃みたいな代物なのだ……だが今、この旧式冷蔵庫に照らされた一秒半の間、見えただろ、その顔面に浮かんだ表情、ポカンとした行きどころのない表情。なんと、昔なつかしい家庭用冷蔵庫が、ケルヴィネーター^{*14}ボストン訛りの機械音で招いていた——「さあ、おはいり、タイロン君、私のおなかは快適だぞ、うまい物だらけだぞ。モクシーもあるし、大きなベビー・ルースもあるし……」中は何マイルも続いている、こりや棚っていうより、冷蔵ランドのフード・マウンテンってとこだな、さもないやフード・シテイか。スロースロップは足を踏み入れる。(気をつけろよ、ここはファシストの匂いがするぞ。キャンディ色した甘いお菓子の陰に、明白な熱力学のエリート主義がひそんでいる——電球は蠟燭と交換可能だし、ラジオも無音にできる、だがこのシステムで「ヘグリッド」が担う大きな機能は、冷気の保持にあるのだ。日々の混濁と攪拌のサイ

13 "The Pause that refreshes." 一九二九年にコカ・コーラが採用したキャッチフレーズ。

14 「ケルヴィネーター」は、絶対零度の発見者ケルヴィンに因んだ社名で冷蔵庫を売り出した、ミシガン州の家電ブランド。ここはその冷蔵庫が、アメリカのエリートを連想させる英国風のボストン訛りでしゃべっている。

15 ビーナッツとキャラメルをくるんだチョコ・バー。

クルを再度希却し、無臭にして不変の立方体空間を保つこと、セロリの峰に登ったら、中層に文字入りチーズのガラス容器が高くつややかにそびえていた。バター皿の上で足をすべらせ、スイカに皮までかぶりつき、バナナの縁を歩いて派手にイエローな気分になった。おや、この一面の青緑の野原、硬い土を覆っているこれは、アオカビではないでしようか。カビを生やしたこれは、とてもそうは見えないけれどキャセロールに違いはない——えっ、いまの、バナナだったよね！　だ、だれが、バナナを——

れい・ぞう・こお　のう　なかあーに！

オー、ノ・ノ・ノ、ノー・ノー・ノー！

チキータ・バナナ⁴⁶が、それはいけないと言ったじゃないか！　恐ろしいことが起こるぞ！　いったい誰がやったんだ？　母さんのはずはないし、ホーガンはチキータ・バナナに惚れてるし。タイロンは、部屋のドアを開けて、兄ホーガンのマスターベーション・シーンを何度も目撃しているのだ——勃起したペニスにバナナのラベルをベタリと貼って、この年上のラテン女性とやりまくる夢にふけていた（相手は帽子をかぶったまま、大きな果物市場の帽子さ、大きな色っぽい口で笑顔をつくって、「アイアイ、燃えさかるのねえ、ヤンキーさんは！」……そ、それに父さんのはずもない、父さんはそんなことはやらない。でも、もしも犯人が（なんだか冷えてきたな、この中）うちの誰でもないとしたら（居間で鳴っていたスパイク・ジョーンズの「總統の顔をめがけて」⁴⁷のレコードの音も消えそうじゃないか、なぜだろ）、おれが自分でも知らないうちにやったってことか（おいおい、

16 中南米フルーツ市場を独占していたユナイテッド・フルーツのブランド商品。そのマスター・キャラクターは帽子を被った、色っぽいラテン系のバナナ女性。CMで「バナナはとてもトロピカルな赤道の気候が好き、だからぜったい冷蔵庫には入れないでね」と歌っていた。

「鐘のきしむ音だ」いよいよおれの頭はおかしくなったのか？（なんだよ、電球が明るく
なったぞ——）ボタンそうか、ユナイテッド・フルーツのラジオCMの言うことをきかな
い不埒なヤツが、いま子供時代のタイロンを冷蔵庫に閉じ込めたのか。こりや、マートル
に救出されるのを待ってるしかないや。まったく、サマにならないぜ。

「その考え、悪くないわよ、ボス」

「おお、マートル、何が起こったんだ、おれには理解できない……」

「ボスに理解できたこと、何かあった？ ほら、あたしのケーブにつかまって」

ヒューツ——

「フーッ。さて」とスロースロップ、「えーと、おれたちみんな……？」

「〈光り輝く時〉は、もうきつと何光年も先に行っちゃったわね」とマートル、「なのに、
ボスったら、ハナミズの氷柱を下げてつつ立ってんだから」マルセルは可動ビルのコン
トロール・パネルまで飛んでいく、〈中央制御室〉を呼び出して、全方向への最速移動許
可を求める。この要求は通ることもあれば通らないこともあって、すべては認可者側の秘
密のプロセスにかかっているのだが、そのプロセスを明らかにして世に示すことこそ四人
の至上の任務なのだ。今回許可が出たのは〈スロー・クロール、郊外ヴェクトル〉。これ
は〈ラケーテン・シユタット〉の移動速度としてもっとも遅い段階であり、過去にただ一
度、同性愛のインディアンインディアンの幼児殺害犯人（そいつは自分の汚れたベニスベニスを国旗で拭くの
が好きだった）事件の際に、用いられたという記録があるだけだが——「なんだよ！」と
マクシミリアンが大声をスロースロップに浴びせかけた、「〈スロー・クロール、郊外ヴェ
クトル〉ってのは？ おれたちに何しろってんだよ、え？ 泳げ、ってか。ったーくね

17 曲のタイトルは「デア・フューラーズ・フェイス」（一九四二）。ハイル！の掛け声の後におならに聞こえるバードフォンの音が鳴って、「right in the Führer's face」という歌詞に続く。サウンドでのユーモアを追求したバンド・リーダー、スパイク・ジョーンズは、ピンチョンがCDにライナーノーツを書いて賞讃しているコミック・ミュージシャン。

18 一八九九年に「ボストン・フルーツ」と「トロピカル貿易通商カンパニー」との合体によってできた、中米カリブの砂糖および果物輸入の一大独占企業。アメリカ資本主義が熱帯地方で行なった搾取労働と政治介入の象徴的存在。

「ねえ、マートル……」金のスヌードをしたマートルにスロースロップが、少しばかり恭しく歩みよって、「あのさ、きみならできるよね……」毎度おなじみ、そのたんび繰りかえされるルーティンだ——マートルは弱虫大将の、^{い、い、い}もじもじにはあきあきしている。いい加減、男らしくしたらどうなの！とばかり、煙草に火をつけ、唇の片端にダラリとはさみ、それと反対側に腰を突きだし、ため息をついて——「アッという間よ」という口調には、もうやってらんないわよという気持ちがありありだ。

するとどうだ、奇跡である！奇跡の起こったヘラケーテン^{＊20}シユタット^{＊20}の狭路を、海中の首長竜のごとくに、四人は進む。市街上空に張られた蜘蛛の巣のような高架橋のアーチの上には、子供たちが蟻のように湧いている。まるでスパニッシュ・モス^{＊20}が落下の途中で固まって石になったみたいなのを、いっぱいぶら下げたこの都市で、子供らは空中高く張られた手摺を越え、市街を巡回する怪獣の、つるりとした人なつっこい背中に乗る。窓から窓へとよじ登る子供たちは、恩寵に満ちた優美な動きで落下の心配はまるでない。子供たちの中にはこちらのスパイも紛れていて、青いチェックのエプロンドレスに同じくブルーのハイソックス、ハチミツ色の髪をカールした女の子は、窓際の排水溝の怪物の下でマクシミリアンからの指令に耳をすましているのだが、そのマックスときたら、ビルが動き出すや、酒瓶をあけて飲みだし、目の前のガリア^{フランク}の天才少年に、あんたは真に魂^{ソウル}を持っているといえるかどうかと、学術的とみせかけて、ひたすらマルセルを扱きおろすだけの議論をふっかける。すると、ガーゴイルの下の子が、その一部始終を速記する。これも心理戦のための貴重なデータになるのだろう。

19 黒人と泳げないという、ステレオタイプな表象と共に、黒人の入居が歓迎されない郊外の（しばしばブル付きの）住宅も、微妙に絡んでいると見られる。

20 アメリカ深南部の亜熱帯湿原によく見られる、木から藻のように垂れる植物。日本語でサルオガセモドキとも。

ここに集って、この世界は「ヘフラウンダリング・フォー」と「父の陰謀」がすべてでないことが見えてくる。両者の闘いは、唯一の闘いでもなければ、最終的なものでもない。他にも闘いはいくつもあるし、見物客もいっぱいいて、みんな観客らしく眺めているのだ。何十万もの観客が陰鬱な黄色い円形劇場を取り囲んでいる。座席は無数の列をなし、層をなし、急勾配を何マイルも下り、底にある大闘技場に続いている。黄褐色の照明。上方の石の傾斜には食べかす飲みかすが散乱している。ちぎれたロールパン、ビーナッツの殻、骨、緑やオレンジの液が半分残ったドリンク瓶。風の当たらない小さな窪み——座席を剥ぎとった石の傾斜面のへこみ——で火が焚かれている。桜材の残り火にかけた薄手の揚げ鍋で女たちが拾い集めた食べ物の滓や屑、軟骨の塊りなどを煮ている。灰色の油水が泡立つまわりを、ものほしそうな子どもたちの顔が囲む。風の中にダークな若者が立っている。目曜になるといつも鉄の門の外でメイドを待ち、誰のものかわからぬ車に乗せて公園へ連れさっていくナイフのようにスリリとしたやつ（そいつの愛の形はあんたに想像がつくまい）。風が髪をかき乱すのを気にもせず、火から顔をそむけ、こめかみに、顎の奥に、冷気を、山の冷気を感じている……他の火のそばでは女たちが噂ばなしに興じ、ときおりひとりが首を突きだして数マイル下のステージを、新しい展開が始まっていらないかどうかチェックする——肩にコートをはおった、カラスのような黒い学生の一団が走りさっていく薄暗がりの空間には、人が決してすわらない（先祖のために空けてある）席がある。彼らの声は遠ざかりながらもなお大きく、舞台風で、聞こえのよさを意識している。女たちは女たちでランプをし、煙草をふかし、食べ物をほおぼる。ローズの焚火のところから毛布を借りられるか、きいてみてよ、今夜は冷えそうだから。あ——それから出かけつ

いでに配給煙草も一箱ね——すぐ戻ってきてよ、いいことろ、もちろん煙草の販売機は、機械に化けるのが得意なマルセルがなっていたってわけで、中の一箱に、観客のひとりにあてたメッサージが入っている。「きみもへかれら」に一九四五年度の夏のことを知られたくないなら、女装者用トイレで会おう。レベルL16/39Cの「メタトロン」ステーション、「ファイア」区画の「マルクト」でだ。いつもの「時間」に。遅れるなよ」

何なんだ、これは？ 敵勢力は何をしてるんだ、彼らを見にきた観客の中にもぐり込んだりして。いや、実はそうでもないのだよ。いま演じられているのは別のスペクタクルなんでね、ここロケットの都で夜ごと催されるスペクタクルこそ、このアフターダークの暮らしの主要な部分を占めている。きみが感じるほどに、パラドシカルなことではないのかもしれない。

マクシミリアンの居所はるか下、一番底のオーケストラ・ボックスで、Cメジャー・サクスの奏者に収まっている。そこにはちゃんと密室教養叢書の『偉大なるカミカゼ・パイロットの叡智』も備えてあって、ウォルト・ディズニーの挿絵つき、きーきーがなりたてる、鼻毛の伸びた、ふたつの白い平面が上反角をなして吊りあがった前歯と、細長く精巧な渦巻きの目と、丸くて黒いリコリス状の犬鼻をしたジャップが、どのページからもアップで迫る。マクシミリアンがサクソフォンを吹いていない時間に、この散漫ながら読みごたえのある作品に没頭しているさまは、彼の姿に目を留める人すべてに明らかだろう。さてマートルだが、彼女はキャンディケー²³ン模様のコントロール・ルームでスイッチ盤に手をかけ、仲間を窮地から救出する必要ができれば——じきにヘマをやらかすにきまつているのだ——いつでもレバーを動かす構えだ。スロースロップ自身はといえば、女装者用

21 この名は、ユダヤ神秘主義思想における最高天使（神そのものともされる）の名である。上巻443ページ参照。

22 カバラ神秘学の「セフィロトの樹」または「生命の樹」における十番目のセフィラで女陰表象。「王国」と訳され、玉座にすわった若い女性で表される。守護神はシエナナリ。

23 杖状のキャンディで、赤と白のストライプがグルグル斜めに走っている。

トイレに身を潜めている。煙と人ごみ、ジージーと鳴る蛍光灯、溶けたバターみたいに熱い小便に開かれて、開いと開い、便座と便座、陶器と陶器の間で交わされるやりとりのすべてをメモしながら（ブッチ²⁴に見える必要はあるのだが、あまりもろにブッチだと、それはそれでマズいし、肝腎なところで金属が見えちゃうのはダメだ。それを彼女に見られると、必ず10ポイント減点されるからな。彼女がくれるボーナス点は、ここに書いてあるものだけだ。最初の一発で血を流させることができれば、20ポイントのプラス——）、煙草の箱の伝言は無事届いたか、彼らは身替わりではなく本人がやってくるのか、それとも父さんが第一ラウンドKOをねらって、ヒットマンを送り込むのか、なんてことを考えている。

話の核心は要するにこういうことだ——都市のスラムも郊外も包む拡がりに壮大な黄色い建造物があり、生命と企業の活動が不眠不休で沸きたっている。その沸きたちは建造物の外殻を通り抜け、〈内側〉と〈外側〉とがあまりに速いスピードで、あまりに複雑繊細に貫きあい、もはやどちらかの領域がどちらかを支配していると見るのは不可能だ。舞台はノンストップで続く、音楽劇^{レビュウ}は、疎に密に、ノンストップで続く。ひとコマ、ひとコマ、人々を驚かせ、涙を流させ——

低周波リスナー

ドイツのUボートの通信電波は、波長にして二万八〇〇〇メートル、周波数はほぼ一〇キロサイクルという低さだ。それをキャッチすべき半波長アンテナは九マイルの高さ、と

24

レズの男役。

いうか長さを要する。あちこち折り曲げるにしても相当なもんだ。その現物がマクデブルクにあるのだが、そこは同時に「エホバの証人」ドイツ支部の本拠地でもあるとともに、スロースロップもいまのところこの街にいて、アルゼンチン無政府主義者の「Uボート」——いまはこの海を漂っているのか——と無線連絡をとろうとしている。なぜ連絡するのか、理由はもう自分には定かでない。エスクアドロシがどうにか彼を探しだして訪ねてきたのか、どこかで彼と偶然出くわしたのか、それとも、無意識に糸くずでも摘もうとした拍子に、ボケッとかボロか寝袋の間から、ずっと前、緑の萌えだす牡羊座の季節にジュネーヴのカフ・（蝕）で渡されたメッセーシの紙切れが出てきたのか。とにかくいまは何事をさしおいてもエスクアドロシを見つけなくては、それしかスロースロップにはわかっていない。

その「アンテナ管理人」の名はローアという。エホバの証人に属し、一九三六年以来（それとも三七年だったかな、本人の記憶も不確かでね）入れられていたライフエンスブリュックの強制収容所から出てきてまもない。これだけ長い収容所暮らしを経験したとあれば、政治的には信頼できるだろうと現地のG5に見込まれ、「ゾーン」内で最も長い無線波の夜間管理を任された。これも偶然かもしれないが、この頃この辺で盛んに行われているエキセントリックな正義の裁きの結果と考えた方が自然であって、スロースロップにしてみたら、これはきちんと突きとめるべき問題だ。ニュルンベルクで戦争犯罪への裁きが進行中とのうわさがあるが、いったい誰が誰を何の容疑で裁いているのだろうか。スロースロップが聞いてまわった限りでは、誰ひとり、それを知っている者はなかった。もっとも、彼らの頭の中は、たいてい反社会的で思慮のない快楽に耽っていたのだったけれども。

25 ベルリンの西百キロほどにあるエルベ河西岸の町。この町の上空をバイレートが飛んでいた（424ページ）。

26 上巻511ページ参照。

27 ベルリンの百キロほど北に位置し、もともとは人種的・政治的理由による女性の収容が目的だったが、後にカトリック僧侶やエホバの証人など宗教的理由での男性の収容にも充てられた。

28 ニュルンベルク裁判の開始日は一九四五年

それにしても、アルゼンチンの奇妙な無政府主義者集団以外に今どき二万八〇〇〇メートルの波長——因みにそれは、ペーネミュンデの第Ⅶ発射試験台から、八月上旬スロースロップがある特定のニュース写真を見る^{*29}グライフスヴァルトのハーフェン通りまでの距離と等しい——を使う交信者がいるとしたら、どこか知られぬ海の下で潜水艦を乗りまわし、第三帝国の敵を糾弾すべく艦内秘密裁判をやっている、いまだ非ナチ化していない残党くらしいものだろう。だとすれば、〈ゾーン〉で一番初期キリスト教徒に近い男が、公的な認可のない磔刑の知らせに耳をすましていうことになる。

「先日の晩に、死んでいく男の声が入って」とローアがスロースロップに伝える、「〈ゾーン〉の内部からだったのか、海上からの電波だったかは分かんが、神父さんを求めているたよ。そのときに、神父ってのが実はどういうヤツラなのか話してやればよかったな。そうしたら少しは気が楽になったかな。ときどき、やりきれない気持ちになるんだ。わたしらは真のキリスト教徒たらんとしているのに……」

「おれん家は会衆派——」とスロースロップが言いだした、「だったっけな」。両親のことを記憶に留めるのはますます困難だ。この頃プロデリクは〈悪党パパ〉^{バーニッシュ}に変身し、ナリーンの方はシ——ッ……（何になるって？ えーと、その言葉、なんだったっけかな、記憶を追っかけても、すごい速さで逃げていってしまうんだよ）。

スロースロップ・ママのケネディ大使への手紙

ジョー、しばらくね、元気にしてた？ 聞いて——ねえ、ジューゼッピー——^{*30}あたした

十一月二十日

²⁹ 八月六日の何を映した写真は、568ページで明かされる。

³⁰ 本名「ジョーゼフ・P」をいじって発音している。後の大統領の父ジョー・ケネディ・シニアは、証券取引委員会、連邦海事局の長を務めたあと、一九三八年から四〇年まで駐英大使。

ち、また下の息子のことが心配になって。申し訳ないですけど、ロンドンの愉快なお知り合いの人に頼んで調べてもらえませんか？もう一回だけ（約束します！）どんな古い消息でも、夫とあたしにはうれしい知らせになるんです。PTボートの恐ろしい一件が伝わってきたとき、あなたが言ったこと、いまでもよく憶えてるわ。あれはまだジャックの様子がわからなかったときの言葉よね。それ、子を持つ親なら誰でも夢見ることですよね。あーあ、それにホーセイ（あら、気にしないでね、ペンがすべっちゃったの、わかるでしょう？へふしだらナリーン）はこれ、三杯目のマティーニなの。このあいだピッツフィールドのゼネラル・エレクトリックの工場でやったあなたのスピーチ、うちの人と聞かせていただいたわよ。その通りよ、ミスターK！胸に響いたわ。マサチューセッツの近代化、これぜったい必要よ。さもないともうひどくなる一方でしょ。来週、この私たちの州で、ストライキの投票をするんですって。そんなことにならないために、WLBをつくったんじゃないかったかしら？ねえ、委員会が解体してきたわけじゃないわよね、ジョー？ときどき、ほら、晴天のポストンの日曜日、〈丘〉³⁵の上の空が割れて雲になることがあるでしょう、焼いたパンに親指を立てて二つに割ると中から白いのが出てくるみたいに。……わかる？金色の雲を見ると、ときどき思うのよ——ああ、ジョー、あれは天国が崩れ落ちてきたカケラじゃないかしらって。ごめんなさい、急にこんな暗い話を始めちゃって、ただあたし……ちがうわよね、崩壊が始まったわけじゃないわよね、それを、息子同士ハーバードで同級だったよしみで、あなたにお聞きしたいの。ときどきいろいろわからなくなるのよ。なんだか世の中を見てると自分たちにとって悪い方に動いて行くみたいに思えて。まあ結局は大丈夫なところに収まっているので、あとから振りかえれば、この展

31 一九四三年八月二日、哨戒魚雷艇一〇九号が日本海軍の駆逐艦大霧に衝突され撃沈したときの艇長がジョーの長男ジョン・F・ケネディ中尉で、そのときの英雄伝説は今も語り継がれる。息子の「ジャック」が一命をとりとめたとの連絡を受けた父親が何と言ったのかはわからない。公式に記録されているのは、八月十九日付ニューヨーク・タイムズに載った、考え抜かれた立派なコメント。

32 先の「ジュゼッピ」には「ジュ（ユダヤ人）」が入っていたが、こちらはスペイン語名にして、英語式に発音

開は最初から決まっていた、でなけりや、これこれのことも起こらなかった、みたいに言えるんだけど——そうはいっても渦中にいれば、心の中は心配のしどおしでしょ。いつもカラッポの私のハートだってそうなのよ。そうなるともう、神様の「ヘプラン」だとか、自分の眼に見えるより大きな形のを信じるのはむずかしくなってしまうの……。

あらあら、こんな年寄りの愚痴みたいなのは、シーッ！て追っ払っちゃいましょう。ほら、マティーニ、四杯目いくわね！

ジャックはすばらしい子ね。私にとってはホーガンやタイロンと同じです。実の息子を愛してるのと同じくらい愛してる。実の息子を愛してないのと同じくらい愛してるって言っちゃおうかしら、アッハッハッ！（しわがれ声で）あたしって性悪な年寄りでしょ、こんな女に希望はないわね……

「うしろケツ」なる表現について

「おい、ヤンキー・ビッグ、おれには英語でどうしてもわからんことがあるんだ」この頃「ゾイレ」は一日中スロースロップを「ヤンキー・ビッグ」と呼んでばかりだ。それがそんなにおかしいのか、いつまでたっても飽きない。「ヤン——」と言いだしたところで吹きだすこともしばしばで、喉にからまり鼻に抜ける結核病みの壮絶な笑い声を響かせたあげく、恐ろしくネバついた痰をベッと吐くのだが、その痰がまた多色の大大理石模様、緑であつても、夕闇の森の緑を映す古いブロンズ像の色といった具合なのだ。

「アイよ」とスロースロップが応じる、「ユーは英語、習いたい、ミィ、ユーに教えるよ。

している。

33 政界復帰をめざし、一九四五年九月にマサチューセッツの産業都市をまわる演説ツアーを行って、政府の梃子入れによる企業誘致、労働者の権利濫用の規制によるビジネスの促進などを訴えた。

34 「戦時労働委員会」。日本との開戦後、労働争議が生産の落ち込みをもたらすことのないよう設立した調停委員会。

35 ビューリタン植民者ウインスロップが、マタイ伝に出てくるフレイズ「丘の上の町」を引用して、キリスト教の慈愛にみちた町の建設を訴えたアメリカ史上の有名な演説をふまえている。

何でも聞きな、ドイツっべ」。ほらまた、性懲りもなく、自身を面倒に巻きこむ、スロー
スロップの「アイよ」が始まった。

「どうして英語だと反対の意味で表現するんだ——器具の接続が違っていると、うしろケツ
(ass backwards) と言うだろう。それがわしにはわからん。ケツはふつう、うしろについ
てるもんだろうが。逆だっというんなら、まえケツ」と言ったらどうだ」

「うう」とスロースロップ。

「数ある（アメリカン・ミステリー）のひとつにすぎんがな」とゾイレは嘆息、「誰か、
説明してくれるといいんだが、まあ、おまえじゃ無理か」

ゾイレはこんなふうに、ひとの言葉のあらを探す。ある夜、彼がまだ泥棒稼業をしてい
たころ、押し入った家がハンプブルク派の占星術師ミネ・クレッチェの豪奢な屋敷だった
という、すばらしい好運に恵まれた。この占い師はしかし、遺伝的な原因からか、ウムラ
ウトのついた母音を発音できないばかりか、聞き取ることもできない。その夜、ミネに
ヒエロポンの過剰摂取の症状が今まさに始まろうというときのこと。ハッと気づくと、彼
女の寝室に、当時まだカーリーヘアの伊達男だった若いゾイレが立っていた。冷笑的な笑
みをうかべる象牙のピシヨップの駒に片手を乗せている。駒にはまだ土をべっとり付けた
良質のペルー産未加工コカインが詰まっていた。「助けを呼んだりすると」と、（ゾイレ）
は硫酸入りに見せかけた塵をちらつかせて教えたとす、「そのきれいな顔が骨からペロ
リはがれることになる。ヴァニラ・プディングみてえにな」しかしミネは、それ本当な
らやってみてよ、という態度で声を張りあげ、助けを求めた。同じ棟に住む同年代のご婦
人はみな同様で、若い夜盗が入ってくれば、ヘルプヘルプでもこの男がワタシをレイプし

36 「神型」を意味する
接頭語のついたフィクシ
ヨナルなドラッグ。霊界
からの憑依に有効らしく、
上巻292ページでは、降霊
会で強烈な霊にとり憑か
れた男に、IGファルベ
ンのヴィンベがこれを処
方していた。

37 「フープ (Hoop)」は引
き揚げ」と、「シュラウ
ベ (Schraube)」はネジ／

てから助けにきて」という両面感情の持ち主ばかりだ。で、ミンネは「ヒュブシュ・ロイ
バー！」ヒュブシュ・ロイバー！」と叫ぼうとした。「キュートな強盗！ キュートな強
盗！」と。でもウムラウトが発音できないので、「フブシュラウバー！ フブシュラウバ
ー！」と叫んでしまう。それだと「ヘリコプター！ ヘリコプター！」になってしまふの
だが、時代はまだ一九二〇年代、声の届く範囲にヘリコプターの何であるかを知る者はい
ない。Hubschrauber? ³⁷ なんだいそりや。ところがひとり例外がいた。遠く離れた古い共
同住宅の中庭でひとり指を噛んでいた、バラノイアの、航空力学専攻の学徒が。³⁸ ベルリン
の夜更けにその叫びは彼の耳に届いた。路面電車の金属音、他地区から響くライフル音、
ハーモニカの初心者が「ドイチュラント、ドイチュラント、ユーバー・アレス」³⁹の旋律を
延々四時間、音を間違え、リズム取りもめちやくちやで練習する音に混ざって——
berall... es... indie... ⁴⁰ re... ときて長い長いポーズが入る——おい、調子つばず
れ、Welt だよ、ああ、直ったか...と、まあそんな夜更けのサウンドの間をついて、
「フブシュラウバー！」、すなわち「ねじり引き揚げ機」の叫びが彼の耳に達したのだ。大
地のワインの上で、輝く大気のコルク栓に螺旋がめぐる。まさにそれだ。この男は完璧に
理解した——この叫び声は予言なのか？ 家の中にいなさい、じゃまをしてはならん、と
いう警告なのか（空はそれらでいっぱいだ。旋回するスクリュウの下ハッチのところ
に、光線銃を持ったグレイの制服姿の警官らが股袋のように張りついて上からすべてが見え
ているぞ君らはもう逃げられないその路地で行き止まりだぞその地下室で袋のネズミ
だ）？ 彼は家の中にいて、じゃまをしなかった。そしてそのまま、ホルスト・アハトフ
アーデンが「黒の軍団」に告げた名である「シュペーリ」⁴¹ になっていった。だが彼は、ミ

「プロペラー」の合成曲。

38 住居から、フラン
ツ・ベクラーと誤解しそ
うだが、フランクはヤン
フの下で化学を学んだ。
航空力学を専攻したのは
クラウス・ネリフシュ。

39 "Deutschland, Deut-
chland über alles" (ド
イツよドイツよ、すべて
のものの上にあれ)と歌
う「ドイツの歌」はヴァ
イマル共和国以来の国歌。
メロディは、ハイドンの
弦楽四重奏曲「皇帝」第
二楽章の主題。

40 後に続く歌詞は、
Welt Welt だが、その
Welt (world)が出てこな
くて、女性名詞につく冠
詞のことで迷っている
という状態。

41 115ページ参照。

ンネがその夜何をわめいていたのかを確かめには行かなかった。ヒエロポンの過剰摂取で命を落とすところだったミンネを救ったのが男友達のヴィンベ。IGの東部地区担当のこの腕利きセールスマンは、トランシルヴァニアの丘の頂で目新しい刺激を求めるアメリカ人観光客の団に、オナイリンの全サンプルを投げ売りし、風を切ってベルリンの街に戻ってきたのだ。ワタシだ、リープヒエン、こんなに早く戻ってこられる予定ではなかったんだが——しかしそこにヴィンベが見たのは長々と寝そべったサテンの生き物。瞳孔サイズと肌の色を見るや、すぐさま革のケースを開いて、興奮剤と注射器を取り出した。それと、氷を満たした浴槽のおかげで、ミンネは一命を取りとめたのである。

「ケツ (ss) を付けると意味が強まるんだ」船乗りボーディーンが一説を披露する、「ケツイジきたねえ、とか、ドケツアホとか言うだろうが。だからヨ、何かがエラくうしろ向きだと、『うしろケツ』って言うのよ」

「『ケツうしろ』ならわかるが、どうしてそれをうしろから『うしろケツ』という？」ゾイレは納得しない。

「だからって前を向いてることにはならねえんだよ」眼をしばたたき、ボーディーンはすっかり本気、声も割れている。まるで誰かが彼をぶんなぐろうとしているかに見える——ただどこれは、陽気な水夫のひとり遊びであって、実はウィリアム・ペンディックスの真似なのだ。ジェイムズ・キャグニーやケーリー・グラントの役柄は他人にまかせ、ボーディーン自身は助演のほうを専門とする。キャグニーの弟役のアーサー・ケネディ^{*43}も完璧にこなす。こりや見ものだ。でなけりや、ケーリー・グラントの忠実な水運びのインド人に扮したサム・ジャッフェ^{*44}になりきる。この男は海軍だけじゃない、生き方そのものが「白

42 この当時は、スタインベック原作をヒッチコックが監督した『救命艇』(一九四四)のガス・スミス役、ユージー・オニールの芝居の映画化『ヘアリー・エイプ』(一九四四)で、船内の労働中に富豪の娘から「毛むくじらの類人

「難」なんであって、映画に出てくる作り物の人生を真似るときも、その声に善玉の生き方がにじみ出るっていうわけだ。

一方ゾイレはゾイレで同様のことをソロ演奏家としてやろうとしている——というか、やりたいと思って、「一から練習を始めた。これはな、長らく秘匿されていたロッシーニのヴァイオリン・コンチェルト（死後発見作品）を下敷にしたヨアヒム独自の解釈によるカデンツァなのだから、試行錯誤を始めるのだから、住人はたまったもんじゃない。トゥルーディはある朝、足を踏みならして家を出て行く。戸外は折しも、上空から米陸軍第八二空挺師団の大群が占領下ベルリンに落下傘で降下中、数知れぬふわした天蓋が、怒りの足取りで家を出たトゥルーディのシルエットのまわりに、真っ白な灰さながらにゆっくり舞いおりる。「あの男といたら気が狂っちゃう」「おおトゥルーディ、どこへ行くんだ？」「言ったでしょ——クレイジーよ！」いや、この性懲りもなくおんな好きで麻薬好きの年寄りが、トゥルーディを愛していないなどと思っではいけない。とても愛しているのである。彼は神に祈らぬ輩でもない。祈るのだ。クサ巻紙に願いごとを書きつけ、その紙で極上の聖なる大麻幻想の素を巻き、唇にできた火ぶくれのところまで吸いきる。それがドラッグ一直線のゾイレ流の祈り方、一番星に願いをかける彼一流のスタイルなのだ。心の中でゾイレは願う、さっきの怒りの足取りが、ただのストンプであってほしい、今日のうちに終わってほしい、いつものように戻ってきてくれ、もう一度だけ、と、彼はおやすみ用の紙巻きに書きつけるこれっきりだ、これ以上は頼まないから、頼まずにいられるようにするから、わしがどういう男か知ってるだら、殺生な仕打ちはせんでくれ……しかし床を踏みならして出て行くって、そう何度もあるのかな？ ふつうは

猿一呼ばわりされるハンク・スミス役で脚光を浴びていた。

43 『栄光の都 City for Conquest』（一九四〇）で拳闘家（キャグニー）の弟、音楽家を目指すエディ役でデビュー。

44 インドを舞台に、キップリングの詩を脚色した『ガンガ・ディン Gunga Din』で、インド人水運びガンガ・ディンを演じたアメリカ人俳優。

45 ヨセフ・ヨアヒム Joseph Joachim（一八三一—一九〇七）は当代随一とされたオーストリア・ハンガリーのヴァイオリニスト。ベートーヴェンやブラームスの協奏曲のカデンツァ（即興的なソロを披露する部分）で観客を魅了した。

一回でおしまいだよ？ でも彼はめげない。キーキーコーコー、ロッシーニを弾きつづける。社会の端くれとして、路上の長寿を勝ちえてきた、意地汚く瘦せこけた男の執念を発散しながら。いいや、ダメだ。この男にやめられそうにない。老人の身についての習性は止まらない。いくら嫌だと思っても自然と始まってしまうのだ。その「問題」にいくら注意を払っていても、そのカデンツァのメロディに心が奪われるのをどうすることもできない。……船乗りボーディーンにはその気持ちがわかる。わかるので助けに入る。老人のカデンツァに有用な干渉をさし挟むべく、自作の「カウンター・カデンツァ」を披露する、つまり一九四五年当時のクラシック系の題名を持つポップソング（「プレリユード・トゥ・ア・キス」^{*46}）「テネメント・シンフォニー」^{*47}を彼なりに焼き直した歌を声張りあげて歌うのだ——どんな機会も逃さない。毎週新たに加わるここの住人に向け、クルーナーぶりを発揮する。リユーベックからやってきたばかりのラリーにも、クラインビュルガー通りから逃げてきたサンドラにも聴かせる、ギターを抱え、色情も抱えたボーディーンが、骨盤くねらせて廊下を歩いてきた、お目当ては国を逃れてやってきた色気の固まりみたいな娘たち、どの娘もみんな彼の目には性犯罪幻想が肉をまとうって具現化したかのようにあつて、ギターを刻み、声をふるわせ歌うのは、

《我がドーバーのカデンツァ》

ホットなビートで甘く流れる
箱の調べが聞こえたら

46 デューク・エリントン作曲、彼の楽団が一九三八年に初録音した、甘美な歌詞のついたスローク・ナンバー。

47 マルクス兄弟の『デパート騒動 The Big Store』（一九四一）でトニー・マーチンがオーケストラをバックにテノールを響かせたナンバー。ソイレラも住む「テネメント」は、都市貧民街の安アパート／共同住宅というイメージ。

そいつあ、我がドーバーのカデンツァアアア！

きみの気をそそるメロデー

どっから来たのか、知らんがあ！

(へへッ) 我がドーバーのカデンツァ (ア) アアア！

ロッシーニほど冴えてないのは承知のうえだ

「ここに『泥棒かささぎ』からの抜粋」

パッハ、ペートーヴェン、ブラームスみてえに偉大じゃないし

(バババ「ウ」ウ「フルバンド演奏によるペートーヴェンの第五番「運命」の出だしに合わせて」)

だがおれは捨て去ろう、

ハリー・ジェイムズ^{*48}百人分^{フェイムズ}の名声を

・・・えと、フェイムだったけな、百人のジェイム？

ジェイムジース・・・フェイムジーズ？う？

もしもお、この歌で、きみをこの腕に、いだけるのなーら！

ダム・デイ・ダム、デイ・ダム・デイ・デイー

シンフォニーイイよりすばらしい

48 アメリカ兵の憧れのスクリーンの美女ベティ・グレイブル(上巻23ページのおズビーの歌にも登場)と結婚したトラシベント奏者/楽団リーダー。

我がドーバーのカデンツアを、きいみいいにいいい！

近ごろこの共同住宅は、ヘデア・ブラーツの名で知られ、ほぼ満杯の盛況だ。最奥の中庭まで「ヘゾイレ」の知己友人でこった返す。思わぬ変化が訪れて、敷地にもだいぶ緑が増えてきた、日曜大工の仕事ぶりで鏡もつけられ、採光経路と鏡の角度の調整を一日中続けることで、この最奥の中庭に初めて日光^{サンシャイン}というものが射し、今まで人目にふれたこともない色たちがたち現れた：：降水を導く灌漑設備もつくられて、樋から漏斗、水はね反射板、水車、ノズル、堰を通して流れる雨水が川と滝の水系をつくって夏には楽しい遊び場となる：：まだ内側から施錠できる少数の部屋は、孤独を愛する独身者、フェティシスト、そして占領下のベルリンで得がたい孤独を（ドラッグを求めるジャンキーのように）求めてさまよい込んだ者たち専用だ：：話のついでに明かしてしまおうと、この建物群のいたるところ、あらゆる種類の軍関係のドラッグがしまわれている。地下室から屋根裏部屋まで、一面に散乱しているのだ——モルヒネ酒石酸塩○・五グレイン入りシレット⁴⁹のワイアの輪つかとビニールのカバー（その本体は歯磨きチューブのように絞り出されている）とか、毒ガス防御キットから盗ってきた亜硝酸アミルの容器のこわれたのとか、アーミー・グリーンに塗ったベンゼドリンの缶だとか：：この古屋敷の回りに対警察用の壕をめぐらす土方仕事も進行中だ。目立つとまずいという配慮から、前例のない、中から外へ掘り進む地下壕ができつつある。ヤーコビ通りの真下に空洞をつくり、そこからゆっくり、パラノイアックに、くり抜き、穿ち、路面電車が突如突っ込んでくることのないように道路下の薄い地殻は注意深く補強する。だが、現実には突っ込んでくることが知られている。

49 一グラムの三〇分の一ほど入った注射針つき容器。

車内の光が燈んだ煮出しスープレのように温かな色になる深夜の時間に、灯りの消えた公園を突っ切り、歌いひびく倉庫の欄に沿って延々と「周縁地帯」を走行中、突如アスファルトがすぼむ。中世フランス語を発音する口のようにすぼむ。乗客は水滴したたる壕に落下する。いかにも地下の生き物らしい大きな眼をした夜間作業員は覗きこむ。だが彼のパライドの眼は、きみのことなど見ていない。これは本物の市営交通であるのかそれとも乗客たちはみな変装した警官なのか、どちらなのか見きわめようとしている、ほんと、壕を掘るってデリケートなビジネスなのだよ……

いま「デア・ブラーツ」の朝のどこかに、誰の子なのか、乳を飲む豚の子のように丸まるとした二歳児が、たったいま「日射し」という単語を覚えた。「ゾネンシャイン」と、その子が差し込む日光を指で差しながら言う。「ゾネンシャイン」と言って別の部屋に駆け込む。

「ゾネンシャイン」起きぬけの大人のしわがれ声がする。

「ゾネンシャインだよ！」すっとんきような声を立て、あぶなっかしそうに駆けていく。

「ゾネンシャインね」にこやかな若い女の声はこの子の母親か。

「ゾ・ネン・シャイン！」その子が窓辺で、母親に、自分の方を見る人みんなに、指さして見せる。そう、坊や、その通りさ。

シットもシャイノーラも

「こんどは」とゾイレがたずねる、「あんたに聞こう。アメリカ英語にシットもシャイ

ノーラも。って言い回しがあるな。説明してくれ」

「え、なんだと？」ポーディーンが叫びだす。「おれに課題を与えるってのか？ アメリカ俗語研究みてえなのをおれを使って続けていこうってのかい。どうなんだ、クソじじい」ゾイレの喉と襟首をつかんで、あちこち非対称に揺さぶりながら、「あんたもへかれら」の一味なのか？ そうだろ」ゾイレはまるでラガディ・アンディの人形みたいにポーディーンの毛むくじゃらの腕にぶらさがってる。日ごろ温厚なアメリカ人水兵がどうしたんだ、今朝のこの疑り深さはなんなんだ。「ストップ、ストップ」仰天したゾイレは涙声だ。驚きが、泣き声まじりの確信に変わってゆく、この男とうとう気がちがってしまったぞい……

いや、みなさんも「シットもシャイノーラも」という言い回しを聞いたことがあるでしょう。「そりや、あいつに聞いてもダメだ、シットもシャイノーラも区別つかねえんだから！」とか、「おい海兵隊、おまえはシットもシャイノーラも分かんのか！」みたいな使う。こう言われたら玉葱部屋送りだ。いや、もっとヒドイかも。ここには、ひとつ、両者がまったく別のカテゴリーにあるという前提がありますね。みなさんは、臭いが違うというだけで、シットとシャイノーラが一緒になるなんてありえない、そりやまったく不可能だ、と思っちゃいませんか。英語に不慣れたゾイレのごときヤク中のドイツおやじなら、どちらの単語の意味も知らずに、「シット」をコミカルな感嘆詞だと思い込んでしまうことはあるにしてもね。山高帽をかぶった弁護士が、たたんだ書類を黄褐色のブリーフケースにしまつて「シット、ヘル・ブマー」とはざいてニンマリしながら部屋を出ていき、二度と戻ってこない、そんな口だけ達者な連中と接したり……あるいは時事風刺マンガに

50 Shinola は「輝く」の shine に、商標によくつく oia をつけた往年の靴クリームの名前。「クソとミソの区別もつかない」というニュアンスで使われる。第二次大戦中の兵舎から始まった表現であるようだ。

「Sechhi!」とあって、ギロチンの刃が白黒の政治家めがけて落ち、首がゴロゴロ、おかしな渦巻き模様の線を描いて坂を転げおちる、そういうのを見ると、やれやれ、と思いませんか、いいからちよん切れ、これでネズミが一匹減るぞ、シット・ヤー！ってな具合にね。「シャイノーラ」の方は、大学出のフランツ・ペクラー、クルト・モンダウゲン、ベルト・フィーベル、ホルスト・アハトフアーデンらにお任せするとしましょう。彼らの「かがやきの大講堂」⁵¹が光を揺らめかせている。アルベルト・シュペーア風の雪花石膏製のオーブン・スタジアム、各コーナーにはセメントの巨大な禽獣が立ち、持ちあげた翼の影にフードをかぶったゲルマンの顔を隠している……外から見るとその大講堂は金色だ。まるで四時の陽光を浴びる谷間の百合の花が、ホワイトゴールドの色をして、人工的な勾配をつけた小さな丘の頂に咲いているかのような趣。この「アウラと思しきもの」は、才能を有しているのだ。荘厳な雲を前におのれの魅力的なプロフィールを見せつける才能。見る者に耐えて持続する力を感じさせる、春は戻り、愛の希望も戻り、雪も氷も溶け、学術の静けさと、やがて干し草になっていく、刈られて間もない草の薫りが戻ってくると……しかし「シャイン・アウラ」の内部は、仰ぎ見る空と同じ冷たい青一色だ。青焼きの青、プラネタリウムの青。だから中の人間は、どちらを向いたらいいかわからない。ショーは頭上で始まるのか？ 下の方でか？ 背中の方からか？ それとも空中でか？ いつ始まるのかもわからない……

ところで、クソとシャイノーラが相まみえる場所が一ヶ所だけありまして、それはロゼランド・ポールルームの男性用トイレ。「聖ヴェロニカの報告書」——あの病院はロケットで全壊したにもかかわらず不思議にも回収された——で明らかにされているんです。

51 「アウラ」の綴りは *Aura* で、人や物が発する「微妙な雰囲気」を意味する *Aura* とは別の単語。

スロースロップの「下水くだりの旅」の出発点となったところ。クソ色こそは白い人種にとって恐怖の色。クソは現実の死を体現している。そこが大鎌をもった爺さんみたいな単なる抽象的・芸術的表現とは違うところだ。白人の暖かい、ブライベートなケツの穴の内面で硬直し腐敗したもの、言ってみりゃクソは死体なのさ。あんたのケツはそういうものにくっついてる。だからこそ、トイレは白くするんだな。茶色いトイレってのはあまり見ないでしょ？ トイレの色は墓石の色と相場が決まっている。古典主義様式の霊廟の列柱の色だよ。陶器の白は「公認された無臭の死」の象徴なのさ。シャイノーラ靴磨きクリームはそのクソの色をしていた。トイレの靴磨き少年マルコムは、威勢よくシャイノーラを塗りたくって白人の靴を磨くんだが、そうやってクソとシャイノーラの色に生まれついた罪をかぶり、白人から懺悔の心を拭いとしてやってるわけだ。ある土曜の晩ね、リンデイホップの回転に床もきしむローズランドの夜のことに、靴磨きのマルコムが、ハーバード大の誰かの靴からふと見上げると、そこにいた最上級生のジャック・ケネディ（大使の息子）と眼が合った。このとき青年ジャックの頭上で、例の「永遠不滅の電球」がひとつ、チカチカしていたとしたらどうだろう。^{マルコム}レッドはボロ布を叩きつけるビートをほんのわずかに遅らせたか。そうしてできた干渉縞^{モアレ}のわずかな隙間を通して、白人ジャックに示すことができたろうか。⁵²ジャックは透かし見ることもできたか。それ自体透明な、同級のタイロン・スロースロップの靴の輝きを通して、見えただろうか。腰掛けたジャックと、しゃがんだマルコム、白い陶器をすべり落ちるタイロンとが、ちょうどいい角度に並んだ瞬間はあったのか。この後、ジャックもマルコムも殺された。それに比べてスロースロップのたどった運命は明らかでない。スロースロップに関して「へかれら」は別な考えを持っている。

52 471ページに記されたエディ・ベンシエロの体の振動と、靴をこするマルコムの振動との間に、相似の関係が成立している。

るのかもしれない。

女装者用トイレでの変事

小さめのエイプというかオランウータンというか、背中に何か隠しもっているヤツが、網タイツの足や、くるぶしの下で丸めたボビーソックス、ティーンズの女の子用ビーニーをはさんだアクアマリン色のレーヨンの腰紐の間をそろそろと縫うようにして、誰にも見られずスロースロップのところへたどり着いた。スロースロップは金髪のカツラをかぶり、フェイ・レイが『キング・コング』の船上でロバート・アームストロングのスクリーンテストを受けるシーンで着たのと同じ、長くてゆるい、しなだれるようなクロスバンド付きの白い薄手のガウンを着ている（あのローズランドのトイレでの過去を思えば、スロースロップがこのガウンを選んだのは、巨大な黒い猿にソドミーをされたいという抑圧された欲望からとは断定できまい。フェイ・レイの神業的な身のこなしに対する無邪気な感嘆——これを彼は口にしたことはなく、ただ指さして、「見ろよ、あれ……」と小声でつぶやくだけだ——のせいでもあるはずだ。衣装自体に対しても、特にあの特大の袖に対して、ある種正直で、快活で、清廉な気持ちを抱いている。それにしてもデカイ袖だ。あれがすすめた範囲は全部自分の通り道ってことになるのか……）。

最初の時は違ったの、峡谷を翔ぶずっと前

ティラノを一本背負いにし

あごを引き裂くもつと前、岩間のあなたの巢を

大蛇と翼竜が襲い、落下する前——わたしの気持は……

最初、柱にはりつけられて、森と闇とがひとつだった、

壁の松明に照らされ待った、

闇から「形」が現われ出るのを、

そのときわたしが祈っていたのは、ジャックじゃないわ

甲板をめそめそうろつく若いのなんて——いいえ

デナムよ、思っていたのはデナムのこと——銃とカメラを手にもって

下手な役者みたいなジョークを飛ばして回る

漆黒の土地に入り、ありえない映画をつくる

カール・デナム、わたしの監督、我が不滅の、

カール……

ああ、主光源を私に当てて、そしてセリフを耳打ちして……

みんな正体はひとつなのだ。だが千の名前を持っている……「グレタ・エルトマン」は

そのひとつ。恐怖に縮みあがるのを専門とする女たち……そう、その仕事から帰ると、みんなと同じに眠りについて、見る夢はといえば暗殺の夢、善良な人間を陥れる陰謀の夢……

類人猿は手を伸ばしスロースロップの尻を軽く叩いて、持っていたものを手渡し、ギョエ、ナンダコレハ、黒くて丸い鉄製のこれは、アナキストの爆弾じゃないか、しかも導火線に火がついている……類人猿はスタコラ逃げていく。湿ったガラス張りの一室で、ス

53 フェイ・レイ演じる女優志願のアンが、ドロ島で現地人に捕まり、コングへの生贄として、巨大な門の前にくくりつけられたときのこと。テイラノ、大蛇、翼竜のエピソードも、オリジナル版『キング・コング』に忠実である。

54 原文 *making the movie* は *making a movie* (非現実を現実にする) とも読めそう。

コースロップは立ちつくす。化粧が汗で流れる。マーブルみたいな眼にありありと眞鍮の色、蜂に刺されたかのように腫みしめた唇は、オイオイヤバイヨドシタライイノと言いたげだ。だが言葉が出ない。仲間はまだ現れないし、声を立てるとせっかくの女装が台無しに。……導火線が燃える。どんどん短くなる。あたりを見まわす。洗面台、小用便器はみなふさがっている。誰かのベニスの前、小便のほとばしりの中へ、導火線を差しだすべきか？……でもそれって、なんだかこっちが誘いをかけてるみたいだな。うーん、こんなに優柔不断な自分はいやだよ……ひょっとして、おれより弱いやつを選べばいいのか……でもさ、チッコイのは反射神経がいいんだって——

そんなコースロップを救ったのは、長身で肥満、東洋風の顔立ちで、映画の中でも私生活でもマーガレット・オブライエン⁵⁵になりたがる女装男。パチパチいっている爆弾をスロースロップからひったくり、走っていく最中もお下げ髪のひたむきな顔をくずさない。空いた水洗便器にそれを投げ込んでサバツと水を流す。そしてスロースロップたちを見まわして、これで大丈夫、市民としての義務は終了、ってときに突然——

KRUPPALOOMA すぐえ大爆発。黒蓋つきのすべての便器がびくくらこいて、驚きの舌を出した——青緑色の水が舌の形に飛びだしたのだ（トイレが「ヤイクス！」と叫ぶのを聞いたことあるかい？）、パイプがねじれて悲鳴を上げる。壁と床が震え、漆喰が三日月やパウダーシート形になって崩れ落ちる。おしゃべり好きの女装男らは黙りこみ、腕を伸ばし誰であれ近くの男にふれるのは、そうやってこれから流れる「声」に備えているのだらう。スピーカーが鳴りだした——

「いまのはナトリウム爆弾です。ナトリウムは水にふれると爆発します」——ってことは、

55 ジュディ・ガーランド主演のミュージカル『若草の頃』(1944)の四女役として、七歳にしてアカデミー子役賞を獲得。大映映画『ふたりの瞳』(一九五二)で、同じ歳の美空ひばりと共演している。

導火線はダミーだったのか、汚ねえぞ、ネズミ野郎。……誰がトイレに投げ入れたかは見ましたね、危険な爆弾魔を。その男、捕まえた方には多額の謝礼が出ます。さあ、その莫大な賞金で、あなたの衣装部屋を輝かせよう——ノーマ・シアラーのクローゼットがギンベルズの地下階のゴミ箱みたいに見えるまで」

そこでみんな、哀れにも抗弁するマーガレット・オブライエンのマニアに一齐に飛びかかる。その一方で、本来屈辱と（目下、警察の到着がほとんど遅れているために）性的な辱めやら苦悶やらにさらされるはずだった（父さん、してやられたよ）スロースロップはコッソリ抜けだし、外へ向かいながらガウンのサテンの帯をほどき、しぶしぶながら、リリースで山形袖章の形に整えた頭から、無垢に輝くカツラを引きはがす。

おかしなカミカゼ特攻隊員タケシとイチゾウとの、お楽しみのみと時

タケシはノッポで太め（でもマーガレット・オブライエンのお下げ髪はしていない）。イチゾウはチビ助のやせっぽち。タケシはゼロ戦を操縦し、イチゾウは桜花という人間爆弾を操縦する——長い爆弾にコックピットとスタブ翼とロケットエンジンの推力をつけ、尾部に少々制御のための装置をつけただけの代物だ。タケシは台湾にあるカミカゼ・スクールで二週間の訓練を受けたのだが、イチゾウは東京の桜花スクールで六ヶ月の訓練を要した。ピーナッツバターとジェリーほども異なる二人だが、どっちがどっちなのかを考えるのは控えよう。

この基地でカミカゼ特攻隊員はタケシとイチゾウのふたりだけだ。何しろ遠い。この島

56 無声映画時代から『モダン結婚 A Modern Fashion』(一九二五)

などで、豪華衣装の着せ替え人形的な役柄を演じる。後にアーヴィング・サルバード監督と結婚し、MGMのタイーンとも呼ばれた。

57 マンハッタンの中心地区にあったデパート。地下はバーゲン・フロアになっていた。

58 ずんぐりと短い主翼。桜花は永続飛行ができない設計だった。

のことはなんでも、もはや護の眼中にもない。戦闘はレイテ島で継続し……それから硫黄島に移り、沖縄へと向かうだろう。それらのどこへも、ここからの出撃は遠すぎる。それでも軍の命令だ、島流しの暮らしを続けるしかない。楽しみとしては、ウミボタルの死骸を探して浜辺をうろつくくらいだ。これは三つ目の甲殻類で、ジャガイモの片端に猫のひげが生えたような恰好をしている。乾燥させて粉末にすると、電灯の代わりになる。そいつを光らせるには、水を加えるだけでいいのだ。光の色はブルー、奇妙な多層の色調をもつブルーで、グリーンや藍色もとり混ぜたその色は、すごくクールな夜光のブルーだ。新月の夜や曇った夜に、タケシとイチゾウは服を脱ぎ捨て、ウミボタルの光をたよりに水をかけ合い、椰子の木の下を笑いながら走りまわる。

毎朝、ときどき晩もだが、ポロポロ頭の自殺嗜好のパイロットが椰子の葉葺きのレーダー小屋までテクテク歩いてきてチェックするのは、飛行可能距離内に自滅作戦に値する敵軍がいまいかどうか。毎日その繰り返しだ。呆れたレーダー技師のおやじ、ケンノシヨウは送信室で年がら年中、酒造り^{サケ}をしているが、それを、磁電管にくっつけた蒸留器の中でやるのである——あくまでも西洋科学とは違う道を鬼のように突きすすむジャップのやり方。いつものふたりが現れると、飲んだくれのワルおやじはオンドリのような鋭い声で、「突撃はきょうもなしネ、ノー・ダイイング、ザンネンよ」などと言って、どのPP-1スコープ⁶⁰にも、何ひとつ映っていないことを指で示す。緑の棒が、緑のシャンプー液のような網目模様の上を静かにぐるぐる回っているだけ。飛行機の航続可能範囲からは、平らかな海のようにしか返ってこない。タケシとイチゾウが胸躍らせてとびつきそうな「死のマンダラ」——航空母艦を表示するグリーンの点が、駆逐艦を表す八個の点がつくる円

59 桜花に乗った特攻隊員の最初の攻撃は、硫黄島陥落後、沖縄戦開始前の三月二十一日のこと。

60 レーダーの走査ビームを半径とする円周で情報が見られる一般のレーダー画面。

に阻まれている図——など見えるわけがない……そう、毎朝が同じなのだ——白波の立つ海の画像と、ヒステリー症のケンノショウの爺さんが、発作を起こして床に転がり、唾液と舌で喉をつまらせる。日々の訪問の楽しみといえはそれである。毎度の発作はいつも前回以上、といかなくとも、必ずどこかに新たなひねりが加わる——空中後方宙返りが入り、青と黄色に塗りわけたタケシのゼロ戦の翼端に噛みつこうとする。一度など恋人のさえない自殺未遂を詠んだ、即興俳句が飛びでてきた——

死火山の

火口とびこむ

二メートル

二人のパイロットは顔を歪め、笑い声を挙げ、あたりを跳びはねながら、のたうつ白髪のリーダー爺さんから逃げ回る——なんと、この俳句が気に入らない。靈妙さに欠ける？ まったくジャパニーズらしくない？ ふむ、まあハリウッド映画の一コマみたいではありませんね、そうでしょ、キャプテン、そう、あなたです、バサデナからいらした海兵隊のエスパーダ大尉——あなたですよ、たったいま〈神秘の洞察〉をなさった！（息をのむ観衆、気の早い拍手）そうです、本日の……バラノイド……決定であります！（ここで楽団は「バトン・アップ・ユア・オーバーコート」⁶¹）⁶¹何か、バラノイアにふさわしいアップテンポの曲になだれこむ。舞台に出ていた男は訳がわからぬうちに、このテカテカ顔と波打つ顎をした司会者に、文字どおりつまみ起こされ、通路まで引きずられていく。そうです、

61 ヘレン・ケインが子供っぽい声で吹き込んだこの曲が、アニメ・キャラクター、ベティ・ブ

これは映画です！ 太平洋戦争ネタのシチュエーション・コメディ。あなたはチャンスを獲得しました、そこが実際どんなところか、ご自分の目で確かめ——そうです、あなたに（ドラム連打、さらなる息をのむ音、さらなる喝采と口笛）当選決定、映画の実のロケ地、異国情緒がとても豊かなブーカ・フッカ・ルッキ島への御一名様完全ご招待！（オーケストラのウクレレ・セクションが「よーこそ、ホワイトマン」のサビのところを繰りかえす。われわれが最後にロンドンでゲーザ・ロージャヴァエルディ向けに演奏されたのを聞いたメロディだ⁶²）しかもご搭乗いただくのはジャンボなTWAのコンステレーション機！ 島の夜には、吸血蚊をあなたの喉から追っ払ってお過ごしいただけますし、熱帯の滝のような雨の中で、目隠しされたみたい暗闇をさまようのもご自由です。兵卒の水樽からネズミの糞を汲みだすのもオツなもの！ しかしクラクラするような興奮は夜ばかりってわけじゃないですぞ、大尉、だって明るくなれば、朝の五時きっかりに外に出れば、カミカゼのゼロ戦に会えるんです！ どうぞ操縦なさってみてください。制御装置をすべてチェックし、爆弾のセイフティ・リリースの確認も忘れずに！ そ、そ、そしてもちろん、あのヘドタバタ・ジャップンタケシとイチゾウとは鉢合わせしないこと。あのふたりは、あなたの姿など眼にも留めずに毎週の大騒ぎに明け暮れるでしょうから。南洋旅行であなたがなさる諸々^{もろもろ}、はつきり言って不吉な意味など考えもせずね…

数々のストーリー

霧の立つのがあまりにスムーズで目に見えにくく、まるで月が自力で明るくなったり暗

17の原イメージになったと言われている。もともとはミュージカル『Follow Thru』（一九二九）のナンバー。

62 455ページ参照。

くたたりしていったように思えた夜が明け、朝霧の中に絶縁体のゴム紐が下がっている。風が吹くと、帽子のような灰色をした空をバツクに、占びてはつれかけた黒い導線から、黄色い閃光が、ガッガッ蛇のような音をたててこぼれ出る。緑のガラスの絶縁体はその日のうちに曇って不透明となる。木製の柱は傾き、古い、三十年前の材木の匂いを放つ。タールを塗ったトランスが高みでうなる。まるでこれから忙しい一日が始まるかのような。中距離の位置に、霧の中からポプラの樹が姿を現わす。

そこはシ・トラールズントのゼムローヴァ通りだったかもしれない。窓は一樣に破壊されている。部屋の内、部もすべて一樣に真っ黒焦げなのか。家屋の内、側だけを破壊する新型爆弾ができたのか……いや……グライフスヴァルトだった。濡れた線路の向こうは荷積み、の起重機、船橋、複滑車、運河沿いの匂い……そうさ、グライフスヴァルトのハーフェン通りだ。彼の背中を重々しい教会の冷たい影が覆っていた。しかし前方の、路地をまたいでたたずむ煉瓦の塔、あれはベトリターじゃないのか……だとしたら、この通りは、ロストックの旧市街のスリューター通りかもしれない……それともリューネブルクのヴァントフェルバー通りか、煉瓦の破風の上に滑車があり、てっぺんには透かしの鋳物の風見鶏がいる……どうしてスロースロップは上ばかり見てるんだ？ 北ドイツの、朝霧に包まれた町の通りを二十ほど、上ばかり見て歩いている、北にゆくにしたいが、物事は単純になっていく。裏路地の中ほどに溝があつて、そこに雨水が流れこみ、道路の丸石はよりまっすぐに敷かれ、得られる煙草の数も少ない。「要塞教会」がムクドリデヤリツンツヤイナの声をこたます。〈北のゾーン〉に入るのは、霧の目に船で見知らぬ波止場に漂着するのと変わらない。

しかしそんなストリートストリートのそれぞれに、いくばくかの人間らしさが、なにかしら〈地〉

に属するものが、残っているはずだ。そこで何がなされたにせよ、それがどんな目的に使われたにせよ……

「死軍牧師」と呼ばれる男たちが、これらの建物の中でも説教をした。ここに生身の兵士がいたんだ。今は死んでしまったが、ここに立ったりすわったりして説教を聞いて、すがりつくことのできる話があればそれにすがり、市街戦へ繰り出し、この「要塞教会」へ戻って来られずに命を落とす者もいた。聖職者が軍に仕え、立ちあがってこれから死んでいくとする男たちに話した。神について、死について、無について、贖罪について、救済について話した。現実には、あたりまえのように、あつた話だよ。

そんな使われ方をしたストリートにも、めぐってくる、橙茶色に染まった午後が（ど）までも澄みわたったこの色を、ユールタール系染料に出せるかって。さもなくば、一日降りつづいた雨がやんだ就寝前の庭先に、雨滴に濡れて噛みたくなるほどまるまる膨れたタチアオイの花が風に吹かれて回っている……長い砂岩の壁際に顔がひとつ、壁の向こうでは破壊する運命の馬たちの荒々しい動き、一頭の雌が首を振り上げると一揃いの毛並が青い影の中へ跳びこんだ——一台のバスが運ぶ真夜中の顔たち、静まりかえった広場で目覚めているのは運転手だけだ、見張りに立つ地元の歩哨はなにやら褐色の正式っぽい軍服を着て吊り帯に古いモーゼル小銃を下げ夢見ている、沼地や影に潜む外敵ではなく家やベッドのことを、誰か井番の友とふたり、土埃と夜闇にあふれた木々の下をふらついている、歩道に落ちる影を抜け、ハーモニカを吹きながら……そこにバスに乗った一列の顔たちが通りすぎる、溺水したような緑の顔、不眠の顔、煙草の切れた、恐れる顔、恐れるのは明日のことではない、明日はまだ先だ、今は夜を過ぎる途中で停められるのが怖い、あ

MB DRO ROSHI

まりだや、失われることが、一体どれだけの苦痛に襲われるのか……

少なくとも通過の瞬間が、それを失うのは苦痛である瞬間が、どのストリートにも——いくら商売と戦争と仰月で灰色に曇ってしまったとしても——あつていいではないか……その瞬間を見いだし、失われたものを慈しむことで、いくらかでも、帰郷の糸口を見いだすことができるのではないか？

そんなストリートの中の一本が朝霧に包まれている。つるつるの丸石の二つを覆って、破れた新聞が張りついている。もぎれた見出しの下に電送写真——白い陰毛の茂みからまきく地面に刺さった巨大な白い男根の写真だ。見出しの文字は⁶⁴

64 左右の切れた文字を補えば、「ヒロシマに原子爆弾投下」という見出しになる。

この文字と一緒に、どこかの占領軍の新聞のロゴが浮かびあがる。ニヤリと笑ったグラマ・ガールが戦車の大砲にまたがった図、蛇の頭のように先端に切れ目の入った鋼鉄のベニス、セーターの胸の上で第三機甲部隊の三角とキャタピラのマークが揺れうごく。写真の像の一貫した白さには、ほら、こっちを見ろ、といっている独善的な感じがある。へ十字架⁶⁵と同様だ。これは単なる、突然やから白いベニスが襲ってきた図、なのではない。

それは同時に〈樹〉でもあるのだらう……

スロースロップは歩道の縁石に腰をおろしてそれを眺める——文字も、鋼鉄のベニスを愛きたしハイイと手を振る女の子も。霧が白さをまし朝が来ると、手押し車が、犬が、自

65 米陸軍第三機甲部隊のマークは、赤・青・黄に塗り分けられた三角形。キャタピラと大砲と

転車が人影とともに灰褐色のシルエットをなして通りすぎる。ぜいぜいした息の音、挨拶の声も霧に圧されてフラットしている。緑石に腰をおろして画像に見いつていたという記憶はすぐに消えてしまいが、スロースロップは事実それを、長いあいだ見ていたのだ。

この出来事が起こったとき、白き乙女が東の空から姿を現わした。頭から肩、胸を通して、水平線に処女膜が昇るまで一七度三六分。この乙女を西洋では神と崇めていることを知る者も、死にゆく日本人の中に少数ながらいた。聖なる乙女は東の空に現れて、今まさに生贄にされる都市を見おろしていた。太陽は獅子座にあった。炸裂する熱炎の轟きはまさに天界の王にふさわしかった……

トイレの音を聴く

「へかれら」は到着するなり水を止める。これが基本。メーターのまわりに棲息する隠潜動物は、頭上からの光の急襲に体を麻痺させ……それから低く、暗く、湿ったところへ必死に散っていくだろう。水を止めるということは、トイレの機能を奪うことだ。タンク一杯の水だけでは、ヤクも、クソも、書類も、流せる量は限られる。流入・流出を「へかれら」に止められたらもう、みんな「へかれら」のフレイム内に囲われ——ウンコも外へ運びだせない——「へかれら」のムヴィオラにケツをさらし、「へかれら」の編集のハサミの意のままカットされる他はない。自分たちがやってこられたのは、「へかれら」の善意の、否、無視のおかげなのだ、と。「へかれら」に見咎められずにいられば、あんたは自由だ。しかし「へかれら」は来てしまう。そしたらもう、社交界のギブでアポロンたちの堅琴の音が、

編集が描かれている。

66 八月六日の広島時間午前八時十五分に、乙女座が東の空に姿を表したのは事実通り。

67 フィルム映像をコマ単位で示し、カットの位置を決める、旧来の定番編集機。

ポローン

と鳴ったみたいになる。甘ったるく、いやったらしいコードを宙に浮かべたまま、すべてが凍りついちゃうって。ま……どうがんばっても打ちとけるのは無理だから。へかれら」の雇われ管理人に「管理人さん、もうこれで終しまいですかね？」なんてセリフを吐くくなよな、たいへんなことになる。「いや、実はだなあ……おまえなあ、その薄汚い口でよく聞くよ……おまえの始末がまだこれからだ、あーほ……」

だから、トイレのバルブにはちよっとひびを入れて、チヨロチヨロ水漏れしておくようにするといい。そうすりゃ、止められてたって少々の時間稼ぎはできるってもの。これは通常のパラノイアとは違うぞ。いつドアがノックされるか、いつ電話が鳴るかで戦々恐々とするってのとは違う。じっとすわって水の音が停止するのを待っているというのは、独自の精神疾患だ。しかし――

考えてみたまえ、きわめて科学的に見せかけたこの巧妙な虚偽を。サウンドは大気圏外の宇宙を伝えることはない、というのだ。だけど、本当は伝わる、としたらどうだろう。宇宙空間に波を伝える媒体があって（かつて「エーテル」^{*68}と呼ばれたようなやつね）、^{ソニフェラス}「へかれら」がそのことを知られたくないと思ってたらどうなんだ。この「音伝達エーテル」こそ、地球上のいたるところに音を届けるものとしたら？ 巨大な炉である太陽は、過去何十億年にもわたって、一億五千万キロの彼方から轟音を届けているのに、その轟音がまったく一定であるために、その中に生まれ落ち死んでいく人間どもには聞こえない。ずっと同じ音が永遠に鳴っているんだから、そりゃあ聞こえないでしょうよ。^{*69}でもね、ときどき夜中に、暗い半球のどこかで、このソニフェラス・エーテル上に小さな渦巻ができる。

⁶⁸ 十九世紀までの科学では、波である光が宇宙空間を伝わるのは「エーテル」という媒質が空間を充たしているからだ、と考えられていた。

⁶⁹ たとえばナイアガラの流れの近くに住み続け

その作用で——まあ、ごく浅いものではあるんだが、「無音ポケット」が生じている。この世界のどこかに、ほぼ毎晩、大気圏外からの音エネルギーが、ほんの数秒ほど遮断される場所が生じてるんだ。その、いわば「音の影」が、その短い命をまっとうするあいだ、太陽の轟音が静まる。どこでかって？ まあ砂漠の上空一〇〇〇フィートかもしれないし、人気のないオフィス・ビルの階と階の間ってこともあるだろう。さもないや、午前三時の安食堂、その白いタイルの床にホースで水撒き掃除する時間にやってきた男がたまたますわった席かもしれない。固定椅子に固定卓、フロアには透明なビニールシート^{プラスチック}の経帷子をきっちり被せた、まさにその地点へ……扉の外から、ルルルン！ カシャン、ズリズリ、キーキー、バルブが開いて、オー・イエス、へホースを持って床に散水する作業員たち」がやってきた——

っていう、まさにそのときだ。何の警告もなく、〈音の影〉の煽情的な羽先がきみに触れる。太陽の静寂がきみを包みこむ。時刻は？ 〈セントラル戦争時〉の午前2時36分18秒から2時36分24秒まで。おっと時間のズレる場所もあるか——ヴァージニア州ダンガノン、テネシー州プリストル、ノース・カロライナ州のアッシュヴィルまたはフランクリン、フロリダ州アパラチコラ。それから、サウス・ダコタ州マードウ・マッケンジー、カンザス州のフィリップスバーグ、ストックトン、ブレインヴィル、エリスも、ひよっとすると時間がズレる。なんだか、名誉戦死者のリストを読みあげてるみたいだな、大草原のどこかでさ、延々と名前が読まれていく、空が鋳物工場みたいな赤や紫に染まって、それが飼葉桶状に伸びる、夕闇に包まれていく市民らはほとんど肩を触れあって小麦の茎のように立っている前で、黒い服を着たひとりの老人が、マイクに向かって戦死者の出身地を

ると、瀑布の音が、しだいに聴覚神経への刺激とはならなくなる。つまり聞こえなくなる。「差異のないところに知覚は生じない」という考えは、神経生理学的に正しい。

次々に読みあがる、ダンガノン……プリストル……マードゥー・マッケンジー……老人の白髪はきみらの雪花石膏の街を彫りうがつ風にあおられて獅子を思わせる花飾りと化し、しみと毛穴の浮きでた顔面も風の運ぶ砂と光に磨かれる。まぶたの遠い縁に真摯な皺を刻みながら、ひとつまたひとつ、ブレイリーの鉄床に、死の町の名を響かせるのだ。さあ、ブライヒエレデの名は、ブリツェロの名は、いつ読みあげられるのか……

そうじゃないんだって——こりやみんなへタイム・ゾーンの境界にある町のリストだよ。ハッハッ！　よからぬ考えをめぐらしていたのがバレてしまったな。おい、他に何を考えていたんだ、全部さらけ出せ。さもなければここから出てもらうぞ。おまえのような人間はここにはいらん。シュールな感傷に浸るやつくらい嫌ったらしいのもないからな。

「さて——いま名前を挙げた東部の町だけは〈イースタン戦争時〉にあるが、境界線沿いの他の町はみな〈セントラル戦争時〉だ。いま読みあげた西部の町は〈セントラル〉で、同じ境界線上に並ぶ他の町は〈マウンテン〉……」

われらがシュールなセンチメンタリストは、スタコラ逃げだす最中で、そこから先は聞いている。それでかまわないのだ。この男の意識は、白タイルの大衆食堂で味わった太陽の静寂の方を向いている。それに「怪しくとり憑かれている」といってもいい。そこは以前——用向きは忘れてしまったが——彼が訪れた場所（ウィスコンシン州ケノーシャか？）を思わせる。自分は「ケノーシャ・キッド」と呼ばれたのだ。だがそれもただの言い伝えかもしれない。それ以外にいた記憶のある部屋はひとつだけで、その部屋は二色だった。二種類の色以外は皆無という部屋で、電灯も家具もカーテンも、壁、天井、絨毯、

70 アメリカの第二の国歌と言われる愛国歌「アメリカ・ザ・ビューティフル」の一節
"Thine alabaster cities
are built" (きみらの雪花石膏の街は輝く) より。

71 前のパラグラフに列挙された町の名前のうち、ヴァージニアからフロリダにかけては（現在では一部異なるものの）第二次大戦中、イースタン戦争時とセントラル戦争時の境界にあった。サウス・ダコタからカンザスにかけての町はセントラル戦争時とマウンテン戦争時の境界。

ラジヲ、それに書機の本のカバーまで——ことごとくが(1)ディープ・チープ・パフューム・アクアフリンか、(2)クリミー・チョコレート・FBIシューズ・ブラウン、のどちらかなのだ。場所はケノーシヤだったか、そうではなかったか、わからない。記憶の糸を懸命にたどっても、さっき、散水清掃が始まる三十分前に白いタイルの部屋に入ったときのことを思い出すので精一杯。そうそう、彼のすわったテーブルには、コーヒークップに半分ほど、砂糖とクリームたっぷりのコーヒーがあつて、パイナップル・デニッシュのパン屑がソーサーの下、彼の指の届かないところにある。いつかソーサーを動かして拾わなくちゃ、でも今じゃない。なぜなら今

（音の影）が彼の頭上に下りてきて、

その長い不可視の渦巻きでテーブルのまわりを包んでいる。まるでヘソニフェラス・エーテルのデニッシュだ。いや、音のといつても、耳に聞こえるのは、渦巻きの通過中、たまたま捉えられた音の切れ端であつて、遠い海上で発せられた現在位置は北緯二七度二六分、識別不能の言語で甲高く叫ぶ女の声、強風を浴びて騒ぐ波音、そしてお経のような日本語の吟唱、

ヒはリにカタズ

リはホーにカタズ

ホーはケンにカタズ

ケンはテンにカタズ

これはカミカゼおよび桜花特攻部隊の心得で——その意味は

非（無理）は理（道理）の劣位にあり

理は法（法式）の劣位にある

法もまた権（権威）に劣り

権といえども天（天道）に勝ることはない

ヒ、リ、ホウ、ケン、テンなるジャップ・ワードが長大な太陽の渦巻きに乗って去っていく。あとにひとり、ケノーシャ・キッドがテーブルに残される。太陽の轟音が鳴りやんだスポットで彼は生まれて初めて、力強い血流の音を聞く。心臓が、巨人の叩く太鼓のように響くのが聞こえる。

バルブ・レイン
ストレンジヤー
電球の光のもとで、彼と一緒に座ろうじゃないか——小さなパブリック・テーブルの席のよそ者と。そろそろホースの散水時間だ。サウンドシャドーに入りこもう。たとえ部分蝕だとしても、音の翳りをまったく経験しないよりは全然ましき——太陽の静寂にふれることなく、彼らに教えられるまま大いなる〈空無〉の下で縮こまっているだけで終わってしまう人生よりはね。

ヴァキニウム
教え込まれた真・空すなわち〈空無〉なんて、この世にないと想ってみよう？ 仮に〈空無〉があったとしても——それがきみをいのように扱うために〈へかれら〉が使う道具だったらどうなんだ。生命というものは虚空に取り囲まれた孤島なのだと信じ込ませることが、〈へかれら〉の都合に叶うことかもしれないじゃないか。宇宙空間に浮かぶ〈地球〉

のことだけ言ってるんじゃないよ、時間^{タイム}に浮かぶきみ個人の生命だって同じだ。自分の命は空無に浮かんでいただけと信じこませることがへかれら^のの利益^{利益}に適用^{適用}なことだったら、どうなのよ。

「あの男はしばらく、おとなしくしてるだろうさ」と、へかれら^は仲間内で言いあってるんだ。「へダークな夢^夢」を見させておいたからね」集まっては飲み、皮膚や血管に最新の合成ドラッグを射ち、とんでもない波形の電子流を脳幹に直接流してみたりするへかれら^は、大笑いしながら戯れにお互いをバックハンドで叩きあう——まるで齡^{とし}を感じさせない眼で「わかるよね、言わなくても」のメッセージを送りあう……へあれ^やらへこれ^れやらを飲ませたり、「夢^夢」を見させておく」ことを語る連中。仲間内でも同じフレーズを使うらしい。年に一度の大会で、誰かの悪い知らせが回ってくると、干からびた同情を示しつつ、果てしないマインド・ゲームの煽りを喰らった仲間に関してこう言うのだ。「いやあ、あいつには、とんだ夢^夢」を見させてしまった」わかるよね、きみも、言わなくても。

当意即妙

イチゾウが掘っ立て小屋から出てみると、タケシは椰子の葉陰で樽の風呂に入って「ティン・ティン・シャン、ティン・シャン」、鼻に掛かった声で箏の音を真似ている。——イチゾウはギャツと叫んで小屋に駆けもどり、日本製のホッチキス機関銃^{機関銃}、92型を手にして現われ、柔術のかけ声と目玉のグリグリをもってそれを設置する。銃弾ベルトを腰に巻

ウィーナーは『人間機械論——人間の人間的な利用』のなかで、生命を混沌の海に浮かぶ秩序の孤島として見る世界観を普及させた。ビンチョンの最初の小説『V.』も、この世界観に立脚して読まれることが多かった。

73 アメリカ人の銃製造者ベンジャミン・ホッチキスが南北戦争後フランスに渡って発明した三脚据置式の機関銃で、当初は「回転式大砲」とも呼ばれた。

きおえ、浴槽の中のタケシを穴だらけにする用意が完了したそのとき、

タケシ …おい、おい、待って！ こりやなんのまねだ？

イチゾウ…あ、おまえだったのか！ おれはまたマッカーサー將軍が——ボートをこいでるんかと思った。

ホッチキス銃というのはなんともおもしろい武器で、さまざまな国で製造されると、それぞれに民族的な特徴を身につける。アメリカ産ホッチキスはウーリデッド・ニーで丸腰のインディアンを掃射するのに活躍した。⁷⁴ フランス製8ミリ・ホッチキス銃は色気たっぷりと、撃てばホーホーホーッと、映画スターのような鼻にかかった魅惑の声を披露する。われらが従兄弟イギリスは第一次大戦後、無数のホッチキス重機関銃をひそかに転売、または溶鉱炉送りにした。この溶解した機関銃が後日、とんでもない場所に姿を現すのである。その化身のひとつを、⁷⁵「海賊」プレンティスは一九三六年、スコルピオ・モスムーン同伴で外出したおりに目にしている。所はチエルシーのジェイムズ・ジェロー宅、ジェローといえどその年の「ボヘミアの道化王」を射止めた男だ。いや、王といってもだいたいぶマイナーな王であって、一族には禍々しい病や精神の薄弱をもたらす血が流れている。その特異な性的嗜好が、公衆の面前で、きわめてタイミング悪く露呈することもあった（こよなく澄みきった雨上がりの朝、工場街の裏通りで廃棄物の山の中からペニスがぶらり、そこへ怒れる労働者らが押し寄せる、ボタンを留めたバギー・キャップを被り三フィートもあるスパナやら、ドア用のかたとこ、⁷⁵長短さまざまのチェーンを手にして、おケツ丸出しの皇太子ボルフィリオ、アルミニウムの削り屑がカールしたかつら頭に後光がぼっかり、口紅代わりに黒いグリースを塗りたいくって柔らかな尻肉を金属屑の冷たい山に押しつけてモゾ

74 一八九〇年、サウス・ダコタ州で起きたスー族の虐殺。

75 原文 Kelly crow-bar。普通 Kelly tool と呼ばれるもので、消防士などがドアをこじ開ける

モソ動かしながらケツの柔肉を甘美にチクチクいたぶる金属トゲを抜いている皇太子とハチ合わせだ、オー・ディア、角を曲がってやって来た群衆の臭いまで漂ってくるじゃないか、デモ隊としてもボルフィリオの御仁にどう対処していいのかわからない、行進はバラけて止まり、この化け物は何だ、経営陣がこちらの闘争気分をはぐらかす意図でこんなところに置いたのか、いやいやコイツは本物の退廃貴族だから捕まえて本物の身代金を要求しよう、ならば額はいくらだと、頭の固い革命同志の間で議論沸騰……一方、屋根の上、煉瓦と波状トタンの戸口が開いて現れたるは茶色い制服の英国政府軍、手にしたホッチキス銃は溶鉱炉に送られず世界各地の小国の政府相手の売人に渡ったものだった。ジェイムズ・ジェローが溶かしたホッチキス銃の化身をひとつ、部屋に保管していたのは、あの虐殺の日にその場に居あわせた皇太子ボルフィリオを偲んでのことだったのかもしれない——それともただ、ジェイムズには珍しくないグロテスクな気まぐれか。あの男、ほら、何やりですか、ほんと、わからんし……

男のハートの通じ合い

——なあ、父さんは気になっていたんだが、近ごろ若いモンがやってる「スクリュュー・イン」っていうアレな。アレ、電気を頭に入れこむんだろ？

——やだな、波だよ、父さん。電気そのものじゃなくてさ。ナマの電気をやるなんて、凄たれのことだ。

——そうか、波か。キーで波を打ち込むってわけか。どんな具合か、ひとつ父さんに説明

のに使う。

してくれないか。父さんだって、ずうっと何かしらのヤクとはつきあってきたんだし――

――やめてよ、父さん、ヤクなんて言うの。そういうのとは全然違うんだから。

――わたし等も、いい「ヴァケーション」をさんざ経験させてもらったんだ。むかしはそういう言い方をした。ほんとウ、ィ、アード、なところに連れて行ってもらったもんだ――

――でも、いつも帰ってきたんだよね？

――ハッ？

――いつもわかってたんだろ？ 帰ってきたとき、こゝはこのままだって。まったく同じ世界に戻ってくるって。

――そりゃそうだ、ハッハッ、だから「ヴァケーション」と言うわけだ。帰ってくる〈現実の国〉に変わりはないよ。

――むかしは、ね。

――タイロン、おまえ、ヤクの危険性の認識が足りてないな。向こうの世界へプラグ・インしたまんま、帰ってこられなくなったらどうするんだ、え？

――何言ってるの、それが目的なんじゃないか。電子的フリークが何を夢見ていると思ってるの？ 父さん、古いんだよ。それを夢とか決めつけちゃってるしね。実在するかもしれないじゃないか。どこかに僕らを連れさる巨大な「ヘマシーン」があるとしたらどうなの？ その電極を通して僕らの脳の活動を完全に、頭蓋骨の中から吸いだして「ヘマシーン」に取りこんでしまおうとしたら？ そしたら吸いこまれた人間は、みんな「ヘマシーン」の中で一緒に暮らすことになるわけだよ、永久にね。誰を、いつ吸収するか、「ヘマシーン」には決定する能力があるはずだ。ヤクなんかじゃさ、不死は手に入らないでしょ。いつも

に、ある部分の表面を撫でて通るような流れの有無にも、そうした愛撫的な動きのさなかに、衝撃や歪曲など、突然の不連続が生じるか否かにも依存する。

明らかに、刺激は電子的な方法で与えるしかなかった。プラスチックの表面に信号を送る方法として考えられたのは以下の三つだけであった。

(a) 導線による薄いマトリクスを、ヘイミポレックス^{*}の表面に近づけ、両者間に密接な相互作用システムを形成する。それによって「勃起」を含むコマンドをきわめて限定的な領域—— $\frac{1}{2}$ 平方センチ程度——の領域に送ることができる。

(b) ビーム・スキヤニングの照射システム（単体または複合）。これはよく知られているブラウン管の電子流に似て、必要に応じ、ヘイミポレックス^{*}の表面にグリッドと偏向プレートを組み込む（組み込む位置は外皮の下であつてもよい——そこを「下層にある物質との界面」と呼ぶか、「現にヘイミポレックスG」の皮膚を形成した物質」と呼ぶかは、当人がどちらの説を採るかという問題にすぎない。ここで「プライマリー・プロブレム」、すなわちプラスチック膜の下はすべて〈不確定性域〉にあるという問題を詳説する必要はないだろう。ただ、シュヴェルメライ^{*78}に走りやすい初学者に対して申し添えておけば、サバイミポレックスティに言及する「核」^{コア}あるいは「内的なエネルギーの中心」^{インナーナル}などの用語は、科学の他分野における「超音波領域」や「重心」と同じで、何ら実体性を持ちえないものだという点に留意されたい。

(c) さもなくば、映画と類似するやり方で、電子的な「イメージ」をヘイミポレックス^{*}の表面に投射する方法がある。プロジェクトターは最低三台、おそらくそれ以上を要す。正確な台数は、これまた不確定性の霧——いわゆるヘオティエイユンブ^{*79}の不確定性関係

78 心酔、空想への耽り
を意味するドイツ語。

に包まれている。この一般則は「物理的変形 ϵ (x, y, z) がもたらしうる機能上の乱れ γ_R は、ヘイミポレックスの下層における乱れ γ_B の有するより強力なパワー ρ に正比例する (ただし ρ は整数とは限らず、経験的に決定される)」というもの。ここで下付文字 R はロケット、B はブリツェロを表わす。

れた〈黒の軍団〉のロン
ドン通信員の名。



この間チチェーリンは、アルゼンチンのアナキストらの監視は単に恥垢をためるだけで、続行は無理との決断を強いられた。自分を追って諜報活動人民委員会のニコライ・リポフが町に入り、こちらへ向かっている。忠実だった部下のジャバジェフは、怖くなったか嫌気が差したか、地元の酔っぱらいふたりと一緒にクランベリーの湿原を突っ切って安ワインを呷りに行ってしまった。おそらく二度と帰ってくるまい。うわさでは最近、米軍の〈スベシャル・サービス〉^{*2}から舞台衣装を盗んでフランク・シナトラに扮し、行く先々で人気をさらっているという。町に乗りこみ、酒場を見つけ、歩道の上で甘いクルーナーの声を響かせる。しだいに十代のかわいい子たちが群れてきて、癪癪の引きつけみたいに意識を失い、ケーブルステッチとレーヨンのプリーツ、Xマス・ツリーのアップリケの山と^{*3}なって倒れ込む。どれもみんな、六十五ドルの課金に十二分に値する娘ばかりだ。いやあ、うまくいくもんで、いつもあり余るほどの無料ワインにありつける。飲んだくれの三人組がどこへ行こうと、ワイン樽やビール樽が田舎の砂利道をゴロゴロ転げてやってくるのだ。ふたりの酔っぱらいの間に入って、フランク・シナトラがいったい何をしているの、なん

1 Commissariat for Intelligence Activities. 略すとCIAになる、フィクショナルな機関。

2 エンタテインメントを目的とした芸能活動をプロデュースする軍の部門。

3 ドイツ娘と米兵との売春行為の抑止のため、実際に米軍がこういう規則を定めていた。

て不思議がる者もない。みんな本物のシナトラが来たと思て疑ってはいないし、残りのふたりも、町の情報通でさえコメディアンだと思っている。

高貴な騎士らは夜の鎖かたびらをつけて叫ぶ。そして従者らは歌う。聖杯をめぐる恐るべき術策から、彼らは完全に守られている。歌こそ魔法のケーブなのだ。

チチェーリンはいま、とうとう自分がひとりになったことを悟る。誰に見つけられるにせよ、そこにいるのは独り身のチチェーリンだ。

行き場所がないにもかかわらず、動いていないといけない気持ちにかられる。過ぎし日のIGファルペンのVマン、ヴィンペとのことがよみがえる。遅きに失した彼との想い出が、ずっと一緒についてくる。ついてくるのが犬だったら完璧だったのに、とチチェーリンは思う。犬は正直だ。犬と対話しながら自分の正直さを測ることができる。毎日毎日、終わりの日を迎えるまで、犬を連れて歩けたらいいのだが、それが叶わないのである。ばアルバトロスで満足しよう。呪いのかかっていないアルバトロス^{*}で。懐かしの記憶で。

政治が麻薬であるという話を持ち出したのだった、若いチチェーリンが——それこそ人民のアヘンだよ、と⁵。

ヴィンペは笑みを返した。地核で燃えさかる火も凍りつくような、おそろしく老いた笑みである。「マルクス主義的弁証法が？ それはアヘンとは違いますな」

「まあ解毒剤かな」

「いいえ」どちらともとれる。麻薬セールスマンの彼は、今後チチェーリンの身に起こりうるすべてを知りつくしていて、しかしそれをこの無知な若造の前にさらけ出しても無駄だと、せいぜい一時の気休めにしかならないと決めているのか。

4 「心に重くのしかかるもの」の意。431ページ註21参照。

5 マルクスによれば「宗教は人民のアヘンである」。

「基本の問題は」ヴィンペの考えが披露される、一常に、自分の代わりに他人に死んでもらうというところにあるわけでした。自分から命を投げだすだけの価値を持つのは何か、を考えたときに宗教ってものが入ってくるわけです。何百年もそういう時代が続いた。宗教とはいつも死に関わるものです。アヘン代わりとしてではなく、常にテクニクとして使われてきた——死にまつわる一揃いの信念信仰、そのために人が死ねるものが宗教です。屈曲してますか？ もちろんです。ですが、それを言っても始まらんでしょう。うまく機能してる間は、宗教の勧誘文句は成功なんです。ところが、死のために死ねなくなってくると、人間は世俗的な信念に走るようになった——マルクス主義ですな。あらかじめ予定されていた発展の段階に人類が到達するために命を投げだしなさい。あんたの行動が、よき結末を少しだけ引きよせるのだと確信して死になさい。革命成就のために死を選べ、というわけですよ。でもどうなんでしょう。もし歴史の変化というものが必然であるなら、死なくてもいいじゃないですか。そうでしょう、ヴァスラフ。どのみち成就するんだから、決断するに及ばない」

「しかしそもそも選択できることではないだろう？」

「もし選択できるとなれば、私はかならず——」

「そんなのわかるもんか。実際そのときが来てみなくては、ヴィンペ。前もっては言えないことだぞ」

「その考えはあんまり弁証法的とはいえませんが」

「何的、というのかは、わからないが」

「あなたの言うとおりなら、人間は意思決定の瞬間まで」とヴィンペは興味津々ながら細

心の注意を払って、「完全に純粹でいられることになる……」

「人間がどうでいられるかなんてことは、どうでもいいんだ。ただ心を決める瞬間に人間はリアルな存在になる。その間のことはどうでもいいんだ」

「マルクス主義者にとってリアルな存在に、ね」

「いや、本人にとってだ」

ヴィンベは納得していない表情だ。

「おれには経験があるんだ。あんたにはないだろう」

シッフ、シッフ。注射器、ナンバー26ポイント^{*6}。褐色の木造ホテルのスイートルームで、血と血があえぐ。この議論を続けるにせよ、噛みつぶすにせよ、言葉による敵対は避けられない。それはどちらも望んでいない。問題を避けて通るひとつの方法、それがテオリン酸オナイリン（チチエーリン^{*}。「チオリン酸塩では？」^{theo}、という接頭語は硫黄の存在を示す。……ヴィンベ^{*}。「いや、テオリン酸ですよ、ヴァスラフ^{*}」。theo^{*}は神の臨在を示す）。注射針を射つふたり。ヴィンベは不安げに水道の蛇口を見つめる。頭の中をチャイコフスキーが、サルモネラ菌が、「悲愴^{*8}」のアップテンポながら口笛で吹けるメドレーが駆けぬける。だが、チチエーリンの眼は針先だけに向けられている、そのドイツ的に精密な一点に、繊細な鋼鉄の肌理に。じきに彼は、数々の前線救護所や野戦病院を知ることになる。それは戦後の鉱泉場めぐりに劣らず、平和だった時代への郷愁をさそう——軍医や歯医者や傷ついた彼の肉体に接着剤とハンマーで特許スチールを接合し、肉に埋まったものを、両大戦間にデュッセルドルフのシューマン社から購入した電磁装置（電球と調節可能な反射板、軸二本のロッキングハンドル、一揃いの妙な恰好をしたボルシェーからなる

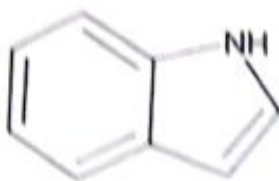
6 直径〇・二六ミリという非常に細い注射針。

7 カルボン酸エステルが、CとOの結合を中心に持つ構造だとすると、チオリン酸のエステルはP（リン）とS（硫黄）の結合を中心に持つ。上巻478〜480ページに架空物質ヘイミボレックスG^{*}をつくる重合についての情報があるが、架空ドラッグのオナイリンの化学構造も、theo^{*}とtheo^{*}の地口を含め、擬った構想の産物。

8 遺作となった交響曲第六番。この初演直後にチャイコフスキーは肺水腫で死ぬが、その原因はコレラの流行にもかかわらず、なま水を飲んだためと言われている。

——磁場の形を歪めるための磁石——がついている」を使って手荒に取りだすだろう。しかし、このコングでのヴィンセントの晩に初めて味わったこの注射針こそが、彼の肉体が鋼鉄化して、いく第 3 歩だったのだ……ここに神の臨在を見ないで済ますことはできない、その鋼鉄の武器から神をも知らぬ肝心の奔走を切りはなすことも……

十五分の間、ふたりは奇声を発してスイートルームを駆けまわり、ふらふらと門を描き、部屋の対角線に沿って整列した。フクロ・ヤシツの手になるこの有名な分子には、「ベクター変異」と呼ばれる特異なわけがある。これはある種の破損したインドール環に見られるもので、このわけがオライリ。特有の幻覚作用のもとになっているということは、後世の学者・技術者に共通の見解である。幻影は視覚と聴覚のみならず、五感すべてに同様で、それも繰りかえし現れるのだ。ケン・リッパ・心理学派のニコリ・オックスが「予知の諸原型」(Metaphors of the Future)と名づけたこれらの諸テーマが、特定の人間のもとに執拗に現れることについて、実験的にも検証されている。(ウィット&ウィットンの論文「中流家庭の大学生における予知諸原型の分布」『オライリ・精神薬理学ジャーナル』第 13 巻、四の六十四頁)。この繰りかえされる現象は、霊体の出沒との類比から「憑依」と呼ばれる。他の種の幻覚が見せる世界が、一般の麻薬吸いには理解できないやり方で関連し、流れ大、ていつてしまうのに対し、オライリによってとり憑いた世界は、きわめて明快な物語として揺れのない連続性を示す。いわばありきたりの『リーダーズ・ダイジェスト』の記事のような世界が展開するのだ。しばしばそれはあまりに平凡かつ紋切型であるために——「精神薬理学の知る限り最も退屈な幻覚」とイエアーハは評している——当人にもなかなか幻覚とは認知されない。絶対にありえない(が、一見ありそうな)出来



インドール環

9 インドール環は、LSD と、セロリン、マメ・マメ・マメ・マメ・マメに含有。などの幻覚成分に共通して含まれる。ニコリ・オックスから抽出されるオスカリンの分子は、インドール環の一部が切れたような基を

事——死んだ人間がいるとか、同じ道を同じ手段で後から出発した者が先に帰ってくるとか、印刷された図表がいくら明るく照らしても読めないとか——を前にしてはじめてそれと気がつくのだ。……幻影にとり憑かれていることを認識した被験者は、その瞬間「フェイズ2」に入る。それは個人個人によって強度が異なるが、つねに不快なものであって、しばしば鎮静剤（○・六ミリグラムのアトロピン皮下注射）を必要とする——オナイリン自体中枢神経系への鎮静剤に分類されているにもかかわらず。

オナイリンに起因するパラノイアについての言及は多いが、何ら特筆すべきところはない。他に起因するパラノイア同様、すべてはつながっているという発見の始まり、その認識の前翼なのだ。すなわち、すべては〈創造〉の過程、第二の啓示の中にあると。今はまだ、眼がつぶれるような〈単一者〉ではないが、少なくともつながっており、チチェーリンのような、外縁に押しやられた者を〈内〉へ引き入れる経路となるかもしれない……

チチェーリンに憑依した幻影

その男はニコライ・リポフ^{*10}なのか否か。現れ方はたしかにうわさの通りだ。重厚で、逃げられそうな気がしない。捕まると、ただひたすら話に引きこまれる。話の行き先は、屋内のもつれた回廊のような、言葉の混乱世界であって、なんとかチチェーリンを引っかけて、異端の思想をしゃべらせ、自己破壊へ追いやるうとする。

「きみが物事をはっきりと見る事ができるよう、手助けに来了。何かもやもやした疑念を抱いているなら、それは晴らしなさい。お互い腹を割ろう。報復されるわけじゃない。

10 いかにもロシア人らしい名前だが、英語で *chameleon* という、強引な収奪（特に法外な値で売りつけること）をいう。

わたしにだって疑念はある。スターリンでさえあるだろう。人間ならみんな疑念は抱く」

「しかし、大丈夫だ。自分の手に余ることは何もない」

「いや、手に余っているさ。そうでもないのに、中央がわたしをここに遣わすことはありえない。心配している相手が問題を抱えたことに気がつかない人たちだと思うのかね？」

チチューリンは訊かずにすませたい。胸の筋肉をギュッと締めて、それが口から出てこないように踏んばっている。心因性の心臓の痛みがズキンズキンと左腕を伝わっていく。だが、訊いてしまう。自分の吐息にわずかに変化が感じられる。「おれは死ぬことになっていたのか？」

「いつのことだ、ヴァスラフ？」

「戦争で」

「おいおい、ヴァスラフ」

「おれを悩ますものを訊かれたから、言ったんだが」

「しかしわかるだろう、連中にどう受け取られるか。さあ、全部話してみろ。戦争で二千万の同胞が死んでるんだぞ、ヴァスラフ。軽々しく非難するのは慎みたまえ。かれらは証拠文書をほしがるだろう。おまえの命も危険にさらされかねん——」

「おれは誰の非難もしていない……頼む……おれが知りたいのは、自分が彼らのために死ぬことになっていたかどうか、それだけなんだ」

「誰もおまえに死んでほしいなどと思っただけじゃない」なだめるような口調で、「なぜそんなことを考える？」

忍耐強い使者は、ねっちりと攻め、必死の過剰な言葉を重ねて、相手の胸の内からつか

み取っていくのだ——パラノイドの疑惑を、和らぐことのない恐れを自己糾弾を、周囲から自分を永遠に隔てる引きこもりの素を。

「だがそれこそが歴史の核心なんだ」夕闇に包まれた部屋を穏やかな声がわたる。どちらの男も椅子に掛けたまま灯りをつけるでもない。「核心の核心だ。きみの知るすべてのことが、目で見たり手で触れたりしたものがすべて、ひとつの嘘から生じているなんてことがあるはずはないだろう」

「しかし死後の生は……」

「死後に生は存在しない」

チチエーリンは死という事実を受け入れるために闘ってこなくてはならなかった。彼の肉体が鋼鉄を受け入れるべく闘ったのと同じこと。希望が湧くたびにそれをねじ伏せていくことで、ようやく生へのこだわりからの苦しい解放を手にした。力と、対抗する力、衝突、そして新たな秩序の形成という弁証法的な思考に慰安を見いだすようになったのはごく最近のこと。〈戦争〉になって〈死〉がリングの相手側コーナーに姿を現わしてからのことだ。長期の訓練を経て、チチエーリンがはじめて眼にした〈死〉は、予想より背が高く、見事な筋肉をして、むだな動きが少なかった。リングに立って初めて、相手のパンチとともに吹きすさぶ寒風を肌感じて初めて彼は、よりによって〈歴史の理論〉に目を向け、その意味を汲みとろうとしたのである。

「アメリカ人はこういってる、『タコツボ監獄に無神論者はいない』とな。ヴァスラフ、おまえが信仰心を持ったためしはない。臨終間際に、恐怖のあまり、回心をしたわけか」
「だから今おれに死ねというわけか？」

「死ねとは言わない。おまえが死んだからって、何の役にも立つわけではない」カーキ色の服装の課報員がもうふたり入ってきて、チチエーリンを見つめる。整った、特徴のない顔立ち。そうか、これはオナイリンによる幻影なのか。やわで、月並みであって、これが現実でないことがわかるのは、ただ一点――

絶対にありえない（が、一見ありそう）こととして――

三人がチチエーリンにはほえみかけている。おっと、それはありえるじゃないか。

叫びのつもりが、轟きとなって出てきた。チチエーリンはリポフに跳びかかり、拳で打ちおす寸前のところで、予想外の素早い反応を見せた仲間に、両側からとり押えられてしまう。その腕つぶしの強いこと、腰のホルスターからナガン拳銃が抜かれるのを、尻と肛門の神経が感じると、もはや顔を思い出せないドイツ女から自分のいちもつが抜けおちたあの朝の感触が戻ってくる。彼女を最後に目にしたスイートワインの朝の、別れの朝の最後のベッドの温もり……

「きみは子供だな、ヴァスラフ。自分の理解を超えた事柄に対して、わかったふりをしていただけだ。きみにはそのものズバリ、ものを言ってあげないといけないようだ」

中央アジアにいたとき、イスラム教の天使が担う役割について聞かされたことがある。そのひとつは、死んで間もない者を審問すること。最後の弔問客が帰ったあと、天使は墓へ行き、死者の信仰心に探りを入れる……

部屋のすみに人影がもうひとつ。チチエーリンほどの年恰好の軍服を着た女だ。その眼はチチエーリンに何も語らない。語るのを拒んで、ただ見つめるばかり。音楽も聴こえてこない。夏の旅行のことも……夕暮れのステップを背景にした馬の姿も見えてこない……

その女が誰だかチチエーリンは気づかない。いや気づかなくていいのだ、もう今となつては意味がない、ただ、それはガリーナだった。彼女は結局、草原のサイレンスから都会に戻ってきたのだ。〈言葉〉のフィールドへ、言葉が鎖状につながって輝き、確証し、いつも手を伸ばせば触れることのできる場所へ……

「きみがなぜ黒い兄弟をハントしていたのかを訊きたい」礼節を保った表現でリポフがたずねる。

お、それを訊いてくれたか、リポフ。どうしてだろうな。「最初は……ずっと前だが——最初は……彼を自分への罰だと思った。自分は選びにもれたのだと。それを彼のせいだと考えた」

「いまはどうだ？」

「わからない」

「なぜあの男を標的に考えた？」

「標的にする以外の接し方があるというのか？」

「ヴァスラフ、きみには進歩を望む気持ちがないのか。大昔の野蛮人と同じではないか。血統だの復讐だのと、すべてが自分のちっぽけなバカげた欲望を充足するために、お膳立てされたと思っている」

わかった、わかった。「それは認めるが、だからってどうだというんだ？」

「言っておくが、あいつはきみの標的ではない。彼をほしいと思っている人たちが他にいるのだよ」

「ああ、それでおれに、好きなように追わせていたのか——」

「いままでは、な」

ジャバジェフのやつ、なぜそれを黙ってたんだ？ あの手洗いのアジア人め、あいつは骨の髄まで下級士官だったのか。全部わかっていて——役人たちめ。仕事は全部こつちにやらせて、途中で割り込んできて、栄光は全部とっていきうって心根なんだ。

「おれから、あいつを取り上げようっていうんだな」

「きみは国に帰っていい」

チチェーリンの視線は他のふたりの方に向けられている。気がつくとも彼らが着ているのはアメリカ軍の制服だ。おそらく会話をひと言も理解していなかったろう。彼はからっぽの両手を、陽に焼けた手首を差し出す。そこに最後の鋼鉄があてがわれると思って。だが立ち去ろうとしていたリポフはふり向いて驚きの表情を見せる。「おっと、違うんだ。きみには生存軍人として三十日間の賜暇が出ている。生きて帰国できるんだ、ヴァスラフ。モスクワに戻ったら、TsAGI^{*11}に報告書を提出する、それでお願いします。次の仕事が終わっているだろう。ドイツのロケット研究班を砂漠へ移送することになっている。中央アジアだ。土地に慣れた中央アジア担当者が必要とされるとわたしは思うがね」

チチェーリンは悟る、自分の人生の戦略的展開は、弁証法的に、中央アジア行きをもつて死を迎える、と。

彼らは去った。女の鉄の顔は、最後の瞬間に、こちらをふり向きはしなかった。戦火に焼かれた部屋に、チチェーリンはひとりたたずむ。一家の歯ブラシのプラスチックが、壁のホルダーにおさまったまま溶け、色とりどりの巻蔓^{テンドリル}を垂らしている。毛先はてんでにばらけて、黒こげの面や、部屋の隅や、すすだらけの窓を指している。

11 チチェーリンの所属は「中央航空流体力学研究所」。

12 ソ連軍に捉えられたドイツのロケット研究者は事実、チチェーリンのいたセミレチエ（七河地方）今日のキルギスタン北部（カザフスタン東部にかけて）に連れていかれた。



最も愛すべき国家とは、あなたやわたしの寿命を超えて生き続けない国家である。死と時間
のなすがまま、漂流を共にする、その時かぎりの冒険としての国家。

——グロース・サックリンググー
醜い豚の子会議、総会決議

北だって？ 北へ向かった探求者がいたかね。求める宝はふつう南にあるもんだろ——肌
の浅黒い原住民の住みかに、違うか？ 危険を冒した事業をお求めなら西へ向かうし、叡
智が欲しけりや東をめざす。北に何があるね？

アヌビス号の逃走ルート。

キルギスの光。

ヘレロ族の死の国。

モリツリ少尉、キャロル・イヴエンター、トマス・グウエンヒドウィ、そしてロジャ
ー・メキシコが、ホルシュタインの小さな青い湖水のほとりにある旅館、〈醜い豚の子亭〉
の赤煉瓦のテラスでテーブルについている。太陽の光に湖面がきらめき、屋根は赤く、尖

1 グロースは「デブ」
のイメージ。サックリン
グは母の乳首に吸いつく
者だが、特に豚の赤ちゃ
んをイメージさせる。

2 エルベ河の北、ユ
トランド半島の根っこの
部分をなすドイツ最北の
地域。

塔は白い。すべてミニチュア風に整った、のどかな田園風景が、四季の推移と正確に連動している。閉じられた扉には対照的な材による×印。秋のまたたき。牛が鳴き、乳しぼりの娘の放屁の音に桶がかすかに反響し、ガチョウはガーと喉をふるわせ強く息を吐き出す。四人の代表は水で割ったモーゼルワインを飲みながらマンダラを論じている。

ロケットは南へ、西へ、東へと発射された。しかし北へは発射されていない——現時点では。アントワープを狙って南へ発射されたとき、方位は東回りに約一七三度、ペーネミューンデでの試験中は〇七二度だった。西のロンドンへは約二六〇度^{*}。平行定規を用いて求めると、もう一つ欠けている（あるいは「結論的に導かれる」）方位は三五四度周辺となる。他の三者が暗に示している、いわば霊的^{ゴースト・ファイアリング}な発射の方角が、これである。マンダラの論理によれば、それはすでに秘密裡に発射されたか、これから発射されようとしているのだ。かくして、後に〈醜い豚の子会議〉として知られる集会の出席者は、各自の器具と煙草と憶測とをたずさえて一枚の地図を睨んでいる。軽んじてはならない。戦後の諜報活動^{インテリジェンス}における、偉大な演繹的瞬間のひとつがいま訪れようとしているのだ。メキシコはそれぞれの方角への発射回数に比例してヴェクトルを伸ばす調整操作の導入を主張してゆずらない。地政学的意味合いにつねに敏感なトマス・グウェンヒドウィーは、一九四四年にブリズナで行われた発射実験（これまた東方へ）も勘案すべきで、そうすると想定される北^{*}への発射は三五四度よりもっと真北向きとなり、さらに、ヴァルヒエレンとスターフェレン^{*}からロンドンとノリッジへ向けて発射された分まで含めるなら、ほとんど真北という結果が得られると主張する。

証拠と直観が——それにプラスして、人間すべての内部にひそむ原始的な恐怖もが——

3 真北をゼロとし、真東を九〇度、真南を一八〇度、真西を二七〇度とする方位角。四方への対称性としての「マンダラ」イメージは、ロケットの平面図像や、発射準備のボタンでイメージされた。因みに、ユングの心理学によれば、マンダラは宇宙のみならず「自己」の全体性を表象する。

4 ともに、現実にはロケットが発射されたオランダの小さな町。

0000度を、真の「ノース」を指し示す。00000号を発射するに、これに優る方向があるだろうか。

ここで問題となるのは、そもそもロケット発射の位置がわかっていないこと。それで方位を論じること——たとえその論が神話的な対称性に基づくものであっても——何の意味があるのか。長さ二八〇キロメートルのカミソリを手にとって、その刃で「ゾーン」のあばた顔を東西に剃りながら、決められないという状況。ものに愚かれたように、いつまでも剃っている、恐怖に手が震える、刃がきらめく、耐えられない、だが止まらない……

「醜い豚の子亭」の看板の下。醜く太ったヨダレだらだらサインの赤児を描いたフルカラーの絵が東西に揺れている。そのブディングのようなお手々で「醜い豚の子」が握っているのは、ポタポタしたたる豚の肉（豚さん、ごめんネ、悪気はないのよ）、もう一方を絵の左側に現われいでたる「母の乳首」に伸ばしている。近づいてくる乳首（人間女性の）を見つめたまま、口をあけて——至福の表情、いまにもがぶりと噛みつきそうな歯を出して、うるんだ眼には、ウマウマむしやむしやウーンちゆるるん、と雄弁に語っている。

「醜い豚の子」はゾーン・タロットの二十三枚目の大アルカナ・カードタロット・ソートなのだ……

ロジャーはその子を、赤ん坊時代のジェレミーの姿に見立てて楽しんでいる。へすべに通じたジェレミーは、ロジャーとのことでもジェシカを許した。自身も一度や二度はあぶない遊びをしているわけで、気持ちにはわかる、ひろい心を持つとしよう、まあ「戦争」が垣根を壊したということさ、ヴィクトリア朝のモラルの垣根をね（その話、誰から聞いたの、あのポリ塩化ビニールのレインコートを発明したイタズラ者と同じやつらかい）……何だよ、ロジャー、あいつ、おまえに向かって立派なふりを演じてるのか？ 眉

5 「看板の下」にあたる原文は「Under the sign of」で、これは、占星術の「宮」や、タロット・シンボルの支配下にあるという意味でもある。

6 タロット・カードの「大アルカナ」は、「魔術師」から「世界」まで、番号のついた二十一枚に、ゼロ番の「愚者」を加えた二十二枚。

を吊りあげて優しげな三角勝をつくって、前に屈んで（ロジャールが思っていたより小柄だったね）グラスを手にとると、今までお目にかかったうちでもっとも悪趣味なパイプ

——パイプ^{パイプ}で再現したウィンストン・チャーチルの頭を火皿に使っているやつ——を吸い込む。そのチャーチルが実に精巧な代物でね、口に葉巻^{タバコ}までくわえてる、葉巻に小さな孔すら空いていて、端からはほんものの煙が出るしくみになってやがんの。……ここはクックスハーフェンの軍人向けのバブ。船舶廃棄場を利用した施設であって、孤独な兵士たちが船のジャンクの間に腰かけ、夢心地で飲んでいる。ふつうの屋外のカフェとは高さが違って、傾いたハッチに昇っている者もいれば、甲板長の椅子や橋上見張り座にすわって揺れている者もいる。鎖と起重滑車^{リフト}と船底板^{ボトム}、黒い鉄製部品に囲まれてビターを飲んでいる者も。いまは夜で、テールにはランタンが置かれている。ソフトな夜の小波が浜の小石の上に寄せてはしずまる。宵っぼりの水鳥がはるか湖上で騒ぐ。

「しかし、それがわれわれを捕えることがあるだろうか、アンタとおれをさ、なあジェレミー、それが問題だ……」こちらに着いてからというものの、メキシコはいつも神託めいた、謎の発言を繰り返している。今日の昼飯時の「クラブ」でもそうだった。これは気まずいことになる。

「なんだ、キミイ、ボクが何に捕えられるって？」一日中、キミイ、キミイって、うるせえんだよ。

「何かがさ、アンタを捕えたがってって感覚を、ジェレミーさんは、まるっきりあしわったことないの」

「味わった——」こいつ酔ってるな。しかも狂ってる。こんなやつをジェシカに近づける

7 栄樹とも呼ばれる低木。塊状の根をパイプの火皿に用いる。

わけにはいかん、数学なんてのをやっているとオーボエ吹きと同じで脳がやられてくるんだろ……

アハ、しかし、月に一度、ジェレミーも、ジェレミーさえも、夢を見るのだ——ギャンブルで借金をつくる夢……種々様々な〈取り立て人〉がくるのだよ……ジェレミーに借金の憶えはない、誰かに負けた記憶も、賭けゲームをした記憶さえも。やってくる使いの背後に大がかりな組織の存在が感じられる。その脅威には常に穴があいていて、その穴をジェレミーが身をもってふさがなくてはならない……さもないと恐怖が穴からあふれ出てくる、恐怖の結晶が……

いいぞ、いいぞ。もうひとつ、勝つこと間違いなしの測定テストの話も、すでにジェレミーに吹っかけておいた——失業中のピエロを二人雇って、公園内の、打ち合わせた場所から、つなぎに白塗り、どちらも長大な気泡ゴムのペニスをつけた恰好で、跳びでてもらう——ペニスの長さは約三メートル、細部まで精巧に仕上げ、色もリアルなそのイチモツで互いに相手を叩きあう。このファンシーな男根は、投資として成功だった。ロジャーと（陸に上がった）船乗りボーディーンはENSAのショールに優る数の客を引き寄せた。小銭を稼ぐにはもってこいの企画である——北ドイツの村々のはずれには、ふたりの道化の叩きあいを目見ようと、大勢が群れるだろう。穀物の消えた穀倉の屋根から突きでた、絞首台のつるし木のような見物台に、午後の空を背景にして、兵士と民間人と子どもたちが立つ。笑いの渦が巻き起こる。

見物人はタイタンとその父たちを想像して笑っているのか。パイ投げほどのおかしさはないにせよ、純粹さでは劣らない。

8 アメリカの「スベシャル・サービス」に相当する、イギリスの海陸空軍の慰問奉公会。498ページに既出。

9 ギリシャ神話のタイタン（巨人族）には、アトラスやプロメテウスら、人間に近い者たちと、彼らの世代の父となったオケアノスやヒュペリオンら真の巨大神の両方が含まれる。

そうさ、巨大なイムのベニスだって兵器になる。兵器として定着する……

ジュシカは言った。髪をバサリ落とし、髭に濃いめの口紅でくっきり違ったラインを引いたジュシカが言った。タイフワイターが打ち出す手紙の山がふたりを隔てていた。

あたしたち結婚するの。いま子どもをつくるのですごくがんばってるのよ。

その瞬間、重力とロケットの間からすべてが消えた。残ったのは自分のケツの穴だけ。

「かまわんさ」ジュシカの子宮を牛めばいい。母子ともに愛してやるから——おれと一緒に来てくれ、ジュス、フリーズ……おまえが必要なんだ……」

彼女はインターコムの赤いレバーを指ではじく。遠くでブザーが鳴る。「セキ・リテイ」完璧に硬質な声だ。カマボコ形兵舎のオフィスの網戸から、潮のひいた平瀬の匂いとともに、こわい顔をした警官が入ってきたときもまだ、ジュシカのそのひと言は、空中に鳴りわたっていた。セキ・リテイ、かよ。それがジュシカのマジック・ワードか、悪魔よけの呪文なのかよ。

「ジュス——」おいおい、泣きだすのかよ？ まるで射精直前みたいに涙がぐいぐいこみあげてくる。

ここで彼をおもらしから救った（というか絶頂への到達をじやました）のは誰か。ジュエリー本人なのだよ。ビーバーさんが現われ気分を一挙に盛り下げると、むっつり顔に犬歯をさらめかせ、「クライム・ダズ・ノット・ペイ」相手の自慰行為に戻っていく。警官詰所の壁に貼ってあるJ・エドガー・フーヴァー長官か誰かのピンナップでもうっとり眺めながらかね。突然、この愛憎もつれる三人が、一緒にクラブで昼食をしよう、なんて話になった。昼食を一緒にする？ なんだよ、そりゃ、ノエル・カワードのアホクサ芝居を

10 「犯罪は引き合わない」という意味の、史上初のピビュラーな犯罪漫画雑誌（一九四二〜一九五五）。残酷な暴力シー

やるってのかい、と思った。ところが土壇場になってジェシカが来られなくなったという。でっちあげの症状は婦人科的な内容で、どちらの男もそれをツワリと早とちりする。ロジャーはそれを、自分への最悪の仕打ちととし、ジェレミーはそれを、恋しい自分に向けられたかわいらしい私的なヤッホー！と解釈する。かくしてクラブで顔を付きあわせる男ふたり、へバックファイア作戦、というのはA4ロケットを組み立てて北海めがけて打ちあげようというイギリスの計画だが、それについてやけに活発に話している。だって、それ以外、このふたり、何を話したらいいんだね。

「どうして？」ロジャーは、同じ質問を繰り返し、ジェレミーをカッカさせる作戦だ。

「なぜA4を組み立てて打ちあげたいと思うんだ？」

「われわれが捕獲したんだ、ロケットを。ロケットなんだから、打ちあげるしかないだろう」

「だから、何のために？」

「何のためって？ 見るんだよ。そんなのわかりきってるだろ。ジェシカが言ってたが、きみは——えーと——数学が専門だったな」

「小文字の σ かけるP^{シグマ}かっこ σ ぶんのSイコール、ルート2 π ぶんの1かけるeのマイナス2 σ 自乗ぶんのS自乗^{*12}」

「まいったな、こりゃ」笑って、手ばやく勘定をすまします。

「おれたちの間じゃ昔からの言い伝えみたいなもんなんだ」

ジェレミーもお返しの手は心得ている。ロジャーをディナーに招待するのだ。クルップ社のクックスハーフェン工場の経営陣のひとりだったシュテファン・ウトガルドロキ宅^{*13}で

ンやアダルトな状況の描写も含んでいた。

11 このエンタテインメント界の巨匠は、上巻259ページでも揶揄されていた。

12 正規分布（ガウス分布）を示す、統計学の基本数式。

13 この男の姓は、北欧神話における「ウトガルトのロキ」と同じ。ウトガルトは「外の国」という意味で、アースガルトの物語で活躍するロキとは別者だが、同様なトリックスターであり、大蛇を猫に化けさせてトリルとレスリングをさせた、というようなエピソードが伝えられている。

の、インフォーマルな内輪のパーティ、「もちろん同伴で来てくれてかまわないんだ」と、川辺のビーバーがものを嘔むみたいな早口で、「ここらにはしゃれたNAADFのお姉ちゃんも揃ってるからキミにだって見つかるだろ——」

「インフォーマルって、ラウンジ・スーツで来いってこと？」と、相手が言い終えるのを食いとめたロジャーだが、あいにく背広系は一着も持っていない。今夜は逮捕の可能性が充分だ。パーティに集まるやつらには、(a)「バックファイア作戦」の関係者と、(b)クルップ社の重役がいて、おまけに(c)企業間のうわさのネットを通してクライヴ・モスレーのオフィスでの放尿事件のことを知っている者が最低一人はいる。ビーバーとその仲間連中は腹の底でいったい何を考えているのか。それがロジャーに読めたらいいのだが！

ロジャーのデートのお相手は——船乗りボーディーンと相なった。そのお召し物がとんでもない。《パナマ運河ゾーン》では、門の開閉作業員が、トロピカルなオウム色、すなわち黄、緑、薄紫、朱色に染めわけたのを制服にしているが、そこから彼が届けさせたのが、信じがたいプロポーションのズートスーツ。とがったラベルがスーツの端から大きく突きでているためにコートのハンガーで支えていないといけない。紫地に紫模様のサテンシャツを粋に着込んだボーディーンが、コルセットでそのウエストを一〇五センチほどにまで絞りこんで、腹囲のグッとすぼんだ上衣に収めている。そこから膝までしなだれ落ちる上衣は、じつに五ヶ所のスリットが入り、キルトスタイルのプリーツをなして背中から尻にうち掛かる。ズボンの股上はあまりに長く、ベルトの位置がちょうど脇の下のあたり、そこから下へ、先細りになって裾のまわりはほんの二十五センチ程度、これでは足を通す

のに類れ、ジョーのお世話にならねばならない。スーフはブルー一色なのだが、それはスーフの靴ではなく、原色の、靴の具の「青」であってどこでもすぐに眼にとまる。集会の聴衆にこんなのがいて、周辺視野にチラチラしていると、話すほうもソツなくまとめるわけにはいかない。スーフがあんたに迫ってくる。このブルーと同じくらい派手なものを考えろ、と。それに満たない考えは浅薄だ、と。いや、じつに体制転覆的な衣装である。

「こだけの話だがな、相棒」とポーディーン、「このズート、こんなに締めつけなくてもいいとは思わんか？」

「いいか」ロジャーはたった今思いついたアイディアに、自分でクツクツ不健康に笑いながら、「ゴムのいちもつさえ持っていけないところだぜ、今夜はアタマで勝負するしかないんだ」

「じゃあな、おれはバイクを（ブツツイの館）に走らせて、ワルを駆り集めとくから。それで——」

「なんかヤワな作戦に聞こえるけど。かつてのビッグの冒険精神は、どこへ行ったのかな」

「おいおい、バディイ——相棒を「バディイ」と語末を強く言うのは海軍特有の訛りである。「カモン、バディイ、おれの身にもなってくれや」

「それはいいが、あんたの靴の……ド派手な黄色、なんとかならないかな」

「ただのウブな少年がよ」この色黒の海の兵士は、股ぐらに手を突っこんで掻いている。

その角の指で逃げまわる蟹を追っているのか。ズボンの腰のブリーツが風船みたいに膨れあがってさざ波立つ。「ミネソタ州アルバート・リーから出てきたソバカスだらけの少年

14 ビッグが、「おれの身にもなってくれ」という意味の英語慣用句「俺の靴に収まってみてくれ」(Put your foot in my shoe)を言ったことへの反応。

だぜ。ルート69沿いだ。制限速度はチュルチュルシユボシユボ[＊]っていう、田舎町よ。そんなところから出てきてヘゾーンで奮闘してるわけだ。そのソバカス坊やはコルクに安全ピンを刺したのを電極代わりに使ってキャッチした無線波を、夜遅くまで聴いてたもんだぜ。アメリカ中のあっちからこっちから聞こえてくる声をさ、十歳にもならねえうちから聴いてただけだな、その声の中に、ギャングの抗争と関わりあいになるのを勧めたやつはいなかったぞ、バディイ。おまえ、この歳までとんでもねえ甘ちゃんていられてよかったな、ロジャー。ヨーロッパのギャングを見るのは初めてか。楽しみにしてるや。やつら、ダンダンダンと三連発ぶち込むのが好きでさ、頭、腹、心臓にくらわせる。腹っていうのは胃だ、いいな？ 胃はこっちじゃ二流の内臓なんかじゃねえ、相棒。歳をくうと見えてくることもあるんで、憶えておいてくれや」

「ボーディーン、おまえ脱走してきたんじゃないのか。それって、死刑もんだろ？」

「大丈夫だ、そんなことは。だがな、おれはただの歯車だ。何でも知ってるなんて思うなよ。関わりのあることしかわかってねえんだ。コカインの精製、成分分析、そういうことなら教えてやれる。宝石を手でつかみや温度のようすからニセモノかどうかもある——ニセのやつは手からあんまり熱を吸い取らねえからな。『ガラスは吸血嫌いのヴァンパイア』って、むかしのディーラーのことわざにあるわ。ニセ札だって俺の眼にかかりゃ一発でバレる。そんなのは簡単よ。目で見たものは忘れねえ、そういう記憶はヘゾーンでもピカイチだろうよ——」ズートスーツに包まれてぶつぶつ喋り続ける男を、ロジャーはクルップ社のボーティヘ引っぱってゆく。

会場に入ったボーティーンの眼にまず飛び込んできたのが、今夜演奏する弦楽四重奏団

15 ここで、ビッグが華やかな装束を着て、
「ルート・シックスティ
ナイン」は、ニセモノか
らデキヤスまで南北に走
る幹線道路。

16 上巻のページ（本
文及び註も参照）に続き、

である。第二ヴァイオリン担当がグスタフ・シエラボーネ。ゾイレ・ブマーのところに入り浸っては煙たがられている大麻吸いの仲間だ。ヘデア・ブラーツ、界限では「ギャブテン・ホラー」という、なかなか的確な渾名で親しまれている——そしてヴィオラ担当が、グスタフと一緒にやってきては（あなたたちの部屋のドアをコンコンして笑っているの誰ですか、フレッドとフィリス）^{*16} 半径百メートル以内の人間を自殺気分^{*17}に追いやる憂鬱者のアンドレ・オムノボン。羽根のようなルケひげを生やし、腹にボーキー・ビッグのいれずみ（近頃じゃこれが「ヘップ」^{*18}ってことになってきている。へ内奥ゾーンでも、アメリカのティーンズの娘たちがこれをイカ^{スウーニ}してると思うのだ）。グスタフとアンドレは今宵の四重奏の「内声部」^{*17}を担当する。それがとりわけ奇妙なのは、本日の演目に、ハイドンの第七十六番から除外された四重奏曲、いわゆるカズー・クワルト^{*19}変ト短調が含まれているのだ。名前の由来は、「ラルゴ・カンタービレ・エ・メスト」の楽章に、内声部を普段の弦楽器に代えてカズーを吹くという指示があるからで、このためにチェロと第一ヴァイオリンの強弱法にも文献上異例の問題が生じている。「スピツカート奏法からデタシエ奏法^{*20}へしよっちゅう切り替えないといけないンスよ」とボーディーンは、部屋の向こう、ロプスターのオードブルと去勢雄鶏のサンドイッチの積まれたフリーランチ・テーブルの前に立つ、どこかの企業家の妻に向かってまくし立てる——「弓はあまり使わずに、高めに構えてソフトにやるの——それと、ピアニッシシモ（pp）からフォルティッシシモ（ff）へ移るプラストが無数にあるンスけど、その逆を行くのが一回だけあってね、こいつが……」実のところ、この楽章が検閲に引っかったのは、ffの轟音を一挙にppの静寂へもっていくという反体制的な奏法に一因がある。理由は、宇宙をさまよう、かの

語り手はここでふたたび、フレッド・アレンのラジオ番組 Allen's Alley を真似ている。

17 第二ヴァイオリンとヴィオラが、四声の和音の「内部」の二つであるため、こう呼ばれる。

原文は大文字の Inner Voices。

18 一七九九年エルデー伯爵に献呈され「エルデーディ弦楽四重奏」と呼ばれる、六つ一組の作品。

19 非常にゆっくり、歌うように、そして悲しく。

20 運弓法において、スピツカートは弓を落とす感じで軽やかに跳ねさせる。デタシエは一音ずつ全弓を使って鳴らす。

「音の影」を、太陽の燃焼終結を、思わせるから。(へかれら)はそれを聞かれたくない

——少なくともハイドンが(畏敬すべき作曲家のこの奇行はいつたことだ)提示したままの形で人々の耳に入れるのは危険だと思っている。チェロとヴァイオリンにアルト・カズー、トレブル・カズー、その四つのパートがみんな浮かれて、映画『ジキル博士とハイド氏』の挿入歌「さあ見てちょうだい、ポルカを踊るわたしを」のような音をひびかせはしゃいでいる最中にブツン、小節の途中でいきなりカズーが途切れる。そして高低ふたつの楽器が、ピアノシッシモでつま弾くのが、伝承によれば十八世紀の村の白痴がふたりして下唇を震わせるところを表現したという無旋律のビチカートだ。互いに向きあってビババーとふるえる。それだけのサウンドが、二十小節も四十小節も続く。中列に腰掛けたクルップ社の人間が、ガニマタ脚のビロード椅子をキイキイときしらせる。ビババービババーって、これ全然ハイドンらしくないよ、ムティイ！ I C IとG Eの代表が頭を傾け、蠟燭の光に小さなプログラムを差しだし、読もうとする。一枚一枚、丹念に手書きされたその文字は、ウトガルドロキの生涯の伴侶、フラウ・ウトガルドロキの手になるものだ。夫人のファーストネームを知る者はいない(知らなければこそ、夫人の弁護に回ってくれるので、これはシュテファンにとってはありがたい)。この夫人のルックスだが、それは、死んだ母さんをブロンズに仕立てたイメージである。あんたのママが金箔で戯れていたのを見たことがあるかな。頬を極端にカーブさせてデフォルメし、眉を極端に黒く、白眼を極端に白く、その百パーセントの無関心さはつまるところ、(へかれら)によって歪められた、真に邪悪な顔となっている——ほら、この顔は知ってるだろう、ちょうどこれから一杯目のマティーニを飲もうというナリーン・スロースロップの顔。そう、ナ

21

「You Should See Me When the Pinks」

は、もともと「ヘン」時代の「ヘン」曲だ。

かました。一九四一年の「ジキル博士とハイド氏」で、イギリスの「バーダマ」が歌っている。

22

イギリスの「リアル・キム・カズー」アメリカのゼネラル・エレクトリックも、ヘイメス計画(百基のロケットを回収してアメリカへ送る計画)に強く関与していた。

23

431 ページ参照。アルバトロスを「アホな鳥」と見るのは世界共通らしく、漢語の「信天翁」も、そのお人好しなふるまいからの命名らしい。「フール」であり「バカ」でもあるスロー

リーンが、その精神において、クルップ社のパーティーにお目見えしてゐること。それは息子のタイロンもね。だが彼の場合、ここにいるという意味は、この乙女座の早い時期までに、羽を毛られたアルバトロスになってしまったからだ。毛られたんだよ。九ハダカだ。それで「ヘゾーン」一門に散らばった。彼を「見つける」というのは、もはや不可能かもしれない——つまり「明確に識別される個人として捉えられる」という、旧来の意味での「発見」はないだろう。羽だけが……ただ羽だけが落ちてゐる——どれも代わり映えない、再生可能な器官だけが。これらの羽についてはナターシャ・ラウムの書いた「アルバトロスの体部における決定不能な諸領域」という論文があつて、「ヘビードラ現象」というカテゴリーで一括してしまいたい誘惑にかられるが、しかし、こちらには敵意というものが完全に欠如しているのだ」(『アルバトロス疾病分類マニアの国際協会紀要』一九三六年冬号所収)。すごい学術誌だよ、これは。その冬、現地レポートの必要から、スペインにまで通信員を派遣している。一冊まるごと世界経済の分析に充てて、その症状がアルバトロス疾病分類学上の諸問題と明確に関連していることを示した号もあつて、俗に「ナイトワーム」と呼ばれる病を、疑似ゴルドストラシアン疾病属に含めるか、それとも徴候においてほとんど変わらないモップの七日病のより潜在的な形態とするか、というような問題が論じられてゐる。

うーん、こうした分類項がだね、いったい何を覆い隠すために作られるのか、そのことを「カウンターフォース」の面々が、もっとちゃんとわかつていたら、その認識は、権力を武装解除させ、男根縮小、制度解体を進める助けになつただろう。その認識が足らなかつたのは残念だ。いや、実際はわかつてゐるのに、自分じゃ認めないのだよ。悲しい

スロップにはびたりの表象だが、ハーモニカ(ハーブ)を持つて自然を感ぜし、バラバラになつてまき散らされるところはオルフェウス神話と対応している。

24 ギリシャ神話の怪物ヒュドラは、蛇の形をした九つの首を持つ。本切り落とすと、本生してくる。

25 もともとはドラゴン文化の警察、法執行権力が「ゴッド」を呼びつけたのを引き継いだ。九つの年代の反体制文化では、国家権力、政・財・軍のシステムを「ゴッド」と擬人化する言い方が流行した。人間に権力付けられた自らの意識が、ゴッドに化かして絶えとられ、いることを恐るゝのに、あ

けれど、それが事実。連中は分裂気質であって、多額のカネを前にすると圧倒されて、気持ちもちが二つに割れてしまう。われわれみんなそうなんだけども、それがハードな事実。でももの。われわれの脳内には「権力者」の支部ができていて、その組織のロゴが白いアルパトロスってわけさ。一人ひとりの脳内で活動するエージェントは「自我」をカパーに正体を隠してる。こいつらが果たすべき使命ってのがヒドイんだ、目も当てられん。それを知ってはいても、われわれには何もできない。「権力」からの潤沢なカネを得ているやつらの活動を阻止できない。そいつらが見えている限りはまだいい、見張れている限りは、ちよびりだろうと彼らが姿を見せてくれる限りはね。こっちもわかってないといけない。彼らがいかにして知るかをだ——どのくらい頻繁に、どんな条件下で……大衆雑誌の記事もほとんどんチェックしないとだめだ。「夜のロジャー」とか「ビーバーの大喧嘩——渦中のジェシカはクルップの腕の中で泣きじゃくる」なんていう記事もだ。ぼやけた写真の一枚一枚にヨダレを垂らすくらいでいい——

会場に入ってロジャーはちよつとの間、熱月の汗ばむ夕べを夢見たことだろう。失敗した「カウンタフォース」を、華やかだったかつての反逆者たち、嫌疑は受けながらも警察の餌食にはならず、密かな愛もエンジョイできていたころのこと。どこで騒ぎを起こしてもちゃんと絵になった……破壊を運命づけられた、愛しのフリークたち。

こっちが反逆すれば「へかれら」はそれを利用する。われわれは「へかれら」の立場を強くするだけ。そもそも「へかれら」には不要な手助けをするだけ。「へかれら」にとっちゃ、配当金が入るみたいなんだ。なくて困ることはないが、入るに越したことはない……
そうだよ、「へかれら」が仕掛ける作戦としたら、ズバリ、これじゃないだろうかね。時

かも、本誌執筆時に……
「権力」が実際にや……
ように、多額の……をば……
らまいて……に……
る……を……た……
も……る……な……い……
……

26 フランス革命暦二
年の熱月（一七九四年七
月）に「テルミドールの
クーデター」が起こって、
ロベスピエール、サン・
ジュストらが連行され、
処刑されたことを踏まえて
いる。

間的にも場所的にも、こっちにとつてうまくない。^{オポジション}「敵」の陣中奥深くに、わが人生で初めて本気で愛した女がいて、早く家に帰ってまたジェレミーの今夜のノルマ——ひと出し分の精液——を受けたくて体をもぞもぞさせてるときに、ちくしょう、なんという疑問の深みにはまりこんでしまふんだ。まったく泥沼だぜ——「へかれら」のペットとしての生を続けるべきか、そんなことなら死ぬべきか？　こんな疑問にまじに襲われたことは、ロジャーの人生で一度もない。それが突然襲ってきて、追いやることができない。答えを出さないといけない、それも早く、充分に早く、はらわたが恐怖で縮みあがるような決断を下さなくちゃならない。これは理性で追い返せるような恐怖じゃない。おれの生かおれの死か、さあ、どちらを選ぶ。棚上げしてもだめだぞ。それは妥協じゃなくて、生きる決断をしたことにしかならない、「へかれら」が自分に望む生をだ……

ヴィオラはただよう霊のよう、木目調の褐色で半透明の音色、他の声部^{ヴォイス}の間からため息を発しては消えていく。ディナミクの変化が多彩だ。感じとれないほどかすかな煽^{リフト}りが、楽音を編成しつつ、音量の変化に、ドイツ人が「息のポーズ」と呼ぶものに備えながら、楽句の間をかすめ飛ぶ。グスタフとアンドレの演奏のなせるわざか、演奏開始からしばらくして今夜の観客は、楽音ではなくポーズの方が耳に入ってくるようになる——ちょうど偵察写真を見つめているうち爆撃の穴が一瞬裏返ってブリキの缶からマフィンが飛びでてきたときに眼が受ける、なんかくすぐりされているような感覚に、耳が襲われる。あるいは尾根がへこんで谷になるとか、陸と海とが水銀の境界線を挟んで入れかわるとか言ってもいい——そんな具合に、この四重奏団は、音^{サウンド}の隙間^{ギャップ}を踊らせる。いやいや、こんなもんじゃない、そろそろカズーのおでましだつて！

そいつをBGMにして、さあていよいよ、震えと眩暈を伴う歓喜の中で練り上げられた陰謀が始まるぞ。標的はロジャー。船乗りボーディーンと一緒に飛び込んできてくれたのは、うれしい誤算だ。この男、ディナーの席につくだけのことに、秘密の所作や隠れた意味が伴う。まるで儀式に臨む司祭だ。料理はたいへんに手の込んだコースで、メニューによれば、ルルヴェとポアソンとアントルメがいっぱいだ。「この、ユーバーラッシュングブラーテンってのはなんだね」と船乗りが右の席の女性にたずねる。ゆったりしたカーキ色のドレスに身を包んだコンスタンス・フランプはニュースの狩人。歯に衣着せない語り口で、硫黄島からノルマンディのサン＝ローまで、アメリカ兵士全員のスイートハートとなった記者である。

「あら、書いてある通り」と^{コマンド}突撃コニーの異名をとる彼女は答える、「ドイツ語で“サブライズ・ロースト”の意味ね」

「そりゃ知ってるが」とボーディーン。コニーは、おそらく無意識のうちに目くばせで——ポインツマン、あんたに言っとくけど、きっとやさしさの条件反射ってのも習得されるのであって（一九四二年以来彼女がどれだけの若者が眼の前で倒れていくのを見たことか）それもまた、ゼロを超えても消滅せずに生きつづけるものかもしれないよ……促されてボーディーンはテーブルのはるか向うの端を見やる。そして気づく、企業人間の歯と磨かれた爪が並ぶ向こう、文様イニシャル入りの重々しいナイフとフォークの向こうに、石造りのバーベキュー炉があるじゃないか。黒鉄の焼き串二本は手回し式だ。戦前の時代のお仕着せを着た使用人らが忙しそうにスクラップの紙類（多くはSHAEFの古い指令書）をくべ、焚きつけと四つ割りの松に火がついたら、その火の上に石炭を載せて。この

石炭がいい香りがするんだ。こぶし大の、鶯色の塊で、かつてヘインフレーションの時代には、運河の兩岸に死体を並べたのと同じタイプだ、人命くらいどうでもいいと思えるほどの値打ちがあったんだ、想像してくれや。²⁷……炬のすみではジャスタス君がいまにも点火用細蠟燭に火をつけようというところ、優雅な手つきのグレッツチェンが燃料にキシレンを混ぜている。船舶修理場で米兵から手に入れたものだ。船乗りボーディーンは見ている前で、逆さになったロジャーの顔が、四本か六本の手で押さえつけられ、上唇と下唇が歯からひんむかれている。血の気の引いた歯ぐきが骸骨のように白い。そこに、古典的なサテンとレースのメイド服を着た、お仕置きしたくなるような小悪魔ちゃんがアメリカの練り歯みがきをなすりつけ、ニコチンに汚れた歯垢をゴシゴシしている。ロジャーの眼、ほんとに痛そうだ、懇願している。……まわりで客がひそひそ話。「これは珍しい。シュテファンがヘッドチーズ²⁸の用意までしていたとは！」「おや残念、わたしがガブリとやりたいのはヘッドじゃなくて、別の体部なんですがね……」くすくす笑い。荒い息づかい。そして、あの派手なブルーの先細りズボンは何だよ、びりびりに裂けてるぜ……ジャケツトはシミだらけだし、そして、焼き串に刺してあるあれは？ 脂ののった表面が赤く焼け焦げたのがゆっくり回転して今まさに、おお、誰の顔かと思えばこれは――

「ケチャップはどこだ、ケチャップは」と、毛深い腕とブルーの袖が薬味入れや銀のトレイの間を探しまわる、「ねえみてえだ……ひっでえとこだなーここは、おいロジャー」並んだ七つの敵軍の顔に斜^{ハス}からどやしつける、「ようパッディイ、そっちにケチャップはあるかい？」

そうか、ケチャップが合図の言葉か、ようし――

27 一九二三年一月、フランスのボアンカレーは、ベルサイユ条約で決まった賠償金を払い、ハイパーインフレーションによりでぎずにいるドイツへの対抗処置として、石炭と鉄鋼の一大産地であるルール地方の占領を強行した。これに対し、エッセンの工業を担うクルップ社は従業員のストライキ等で抵抗、テロと占領軍の実力行使により死傷者が続出する事態となった。

28 豚や仔牛の頭から臓器を除いて細かく刻み、加熱してゼラチン状にしたもの。

「偶然にもな」とロジャー、彼も^{だて}に明らかに同一のものを見ていた、「おれもいま同じことを訊こうとしてた！」

ふたりは道化のように顔を見合わせてニタリと笑う。ふたりのオーラは、よく聞け、緑色だ。あったりめえさ。こんないい色してるんは、一九四二年の冬以来なかった。あんときは、北大西洋の強風の中、コンボイ組んで進んでた。そんなとき、箱が崩れて五インチ口径の弾薬が何トン分も床をゴロゴロ転がった。そこにドイツの狼軍団が海面下から攻撃しかけて仲間の船が一隻また一隻とやられてく。ところが第五十一砲架に集まった戦闘員は、バビー・ホッド^{*29}のジョークに聞きいつてる。ドジな部隊の全滅ネタなんだが、それがあんまりおかしいんで、砲員全員ヒステリックに腹をかきむしり、息苦しげに喘いでる——そのとき以来だ、船乗りボーディーンが、死の危険を前にして、こんなにハイな気分になつてるのは。

「気前よく並べたもんだぜ、え？」彼は大声を上げる。「たいしたご馳走じゃねえか！」会話はやんでほとんど静寂。気品にこだわる好奇の顔がこちらに向けられる。炉で炎がはねる。降霊会の「多感の炎」^{*30}じゃないが、もしそうだったら、いまここにプディング准将の霊があることを伝えることができるだろう。老准将はいまや、キャロル・イヴェンターの媒介の労により、ヘカウンターフォースの一員である。いや、それは実に多大なる労であることだろう。老准将の霊と交わるというのはどんなことか。その辛さは、「ハワイト・ヴィジテーション」で〈今週の報告〉を聞かされる苦さに優るとも劣らない。プディングの多弁ぶりは、生前よりもっとひどくなっているのだ。同席者は泣き言を並べはじめた。「いつかあの男を除霊できる日が来るんだろうか」と。だが、料理ネタのいたずらは

29 第二次大戦が終わって約十年後を舞台にした『V.』では、処刑台の甲板兵費で、ボーディーンの直接の上官として登場していた。

30 上巻62ページ参照。

プディングの十八番。彼の入れ知恵があつてこそ、以下の、胸くそ悪い作戦が練りあつたのである。

「そんなすごいご馳走かなあ」とロジャーはさりげなさを装って、「メニューに鼻汁スーブがないじゃないか……」

「まったくだ、おれは膿プディングでもいいかなって思つてたんだが、そういうのは出てくるかい？」

「無理だろ、だが精液スフレならあるかもな！」とロジャーが大声を発する、「片面にさ、月経マーマレードを塗ってな！」

「おれはあのチンポの質感たつぷりのまら滓シチューがいいかな！」とボーディーンが提案する、「それとも血糊のキャセロール、にするか」

「あのですね——」男か女か判別しがたい、くぐもつた声がテーブルのどこかでした。

「おれたちなら、ましなコースを思いつくな、こーんなんよりな」と、ロジャーはメニューを振りながら、「胎盤のアベタイザーから始めてさ、趣向をこらしたかさぶたサンド——もちろん耳もかわいく切りそろえて……それか、あるいは鼻くそビスケット！ そ

うだな、それに鼻汁マヨネーズを塗ってもらおう。小ぶりの粘泥ソーセージがドロツとのつたやつ……」

「わかった」コマンド・コニーが口を挟む、「頭顱を踏めばいいんでしょ。だったら……うーんと……膿のダンプリングは？」

「スープのコースを考えてんだぜ、ベイビー」とクールな船乗りが応える。「廣場コンノメとか、嘔吐ブイヨンとかさ」

「ゲロゲロ・ヴィンソワーズ」とコニーが返す。

「それだ、そうこなくっちゃ」

「包囊サラダに」ロジャーが続ける、「サクランボ色した墮胎アスピックの小さな角片を添えてさ、ふけドレッシングで微妙な味わいをまぶしたやつ」

ウェットと、育ちのよきげな音がして、ICUのセールス・マネジャーが立ちあがって駆けだすが、時おそし。ぼこぼこしたページュの嘔吐物が長い三日月型の軌跡を描いて口から噴きだし、寄木張りのフロアにこぼれた。列をなした会食者の顔に、ナプキンが一斉に引きあげられる。銀器は一斉に皿に置かれ、その白い野に当たって、チャリチャリと鳴りひびく。なんなのだろう、この反応の悪さは。クライヴ・モスムーンのオフィスのときと同じだ……

我らは続ける、屁のフォンデュ（こつてり溶けたチーズの中から絶妙な位置取りでぶくぶくつと、肛門経由のガスが立ちのぼってくる、ああうまそう）、吹き出物のパンケーキ、性病野菜のヨダレソース和え……

カズーが止んで、「イボのワッフル」と、グスタフが叫んだ。

「反吐パンケーキに汗のシロップ」とアンドレ・オムノボンが続け、グスタフは演奏に戻るが、その間の混乱で外声部の演奏が途切れてしまった。

「それに蟻虫ジャムを塗る」と、お愉しみは嫌いじゃないチェリストがつぶやく。

「痔ハッシユ」コニーが目を見かねてスプーンを鳴らした、「はらわたバーガー！」

ウトガルドロキ夫人は跳ねるように席を立ったその拍子に、腫れ物詰めの皿を——失礼、辛味卵の皿を——ひっくり返し、悲嘆の涙に震えながら部屋を飛び出す。亭主も席を立つ

てあとを追う。人前ではいつも温和なその眼はしかし、混乱を招いたやつらを、殺してやるといわんばかりの目つきで雄々しく睨みつける。テーブルに被さるクロスから仄かなゲロの臭いが立ちのぼる。ゲストの口からこぼれていた神経質な笑いは砕け、小声で発する罵り声に変わっていた。

「壊疽^{ヤンタリン}グーラッシュェがお嫌なら、どうぞ、極上のクリーミー・ホワイトの癩病^{レプロシ}ローフを」ボーディーンは歌っている。「レッ・ブロー・シー」から三度下がって「ローフ」で締める。まだ落ちないやつらに向かって楽しげに指を振り、ほれほれ、あんちゃん、頼むわ、このズート野郎のために、ゲロを吐いて見せておくれ……

「カビのフリカッセ！」乱暴者のロジャールがわめく。ジェシカは今宵のエスコート役、紳士ジェレミーの強ばった腕にすがって泣くばかり。ジェレミーはさっきから頭を左右に振ってばかり。ロジャールのやつ、出ていきやがれ。で、ロジャールはどうなのか。いたたまれない気持にはならないのか。そりゃ、なるさ。あんただって、同じだろう。この闘争に意義があるのか、疑いはじめるかもしれない。それでも、鼻^{ノーズ}くそスードルはバターたっぷり、湯気を上げて配膳を待っているし、垢^{ダイトム}がゆと膿^{プスチル}疱^{ボリス}ポリツジが、ベソをかいてる重役予備軍の胃の中に流し込まれるのを待っている。陰部^{ビュレック・ボグワース}マフィン^{マフィン}をカートに積んでテラスまで運んでいかなくちやならない——ホロコーストに汚れた、秋とともに硬まりゆく空の下へ。

「おできカツレツ！」

「おまたグレービー付きだよ！」

「水虫^{シムシム}レリッシムもね！」

ムネモシユネ・グルーブ夫人を襲った発作はあまりに激しく、真珠の首飾りがばらけて、

絹のテーブルクロスを転がっていく。もはや食欲どころの話じゃない。あちこちで、あれもなくゲロゲロやっている。炉の中の炎の勢いはついた。今夜はもう、みなさんへの脂肪の補給はありません。痙攣ひきつけの合間にハニバル・グランツ「ゴッピネット卿は、鼻から黄色に泡立つ胆汁をたらした顔で、議会で取りあげてやるからな、と凄んでいる。「ふたりともスクラブズに放り込んでやる、わしの命をかけてもな！」え？…

足取りの定まらない、ソフトタッチなタップを踏んでドアへ向かうボーディーン、つば広のギャング帽を振る。あばよ、みなさん。パーティ客でいまま椅子にかけているのはコンスタンス・フランツひとり。デザートは何かいいか、大声で考えをめぐらせている。

「股クローチぐらカスタード！³² 痰フLEMのファッジ！³² 青カビマフィン！」³² コニーはあした、地獄をつかむことになるだろうか？ 床に撒かれたあれやこれやの嘔吐物が、玉座へと向かう第六の間に浮かぶ蜃気楼のように光っている。グスタフたちの四重奏団はハイドンの演奏をやめ、ロジャーとボーディーンのあとについて退出しながら、³³ へむかつくデュオの歌声に、カズーと弦楽器で伴奏を入れる

おれにはニキビのアラモード
喰いすぎ、おながが破裂する！³⁴

それでもパッディー、喰おうぜオールナイト
トウジャム・タルト&ダイアリア・ディライト…³⁴

「告白すると」グスタフが早口でヒソヒソと、「今夜の役はなかなか辛いもんがあったよ。

31 ロンドンのワーム
ウッド・スクラブズ刑務
所。

32 「こらしめられる」
ことを、英語慣用句で
Catch hellという。

33 ユダヤ教神秘主義
では、最終的に神のもと
に向かうまでに六つの部
屋で審問が課せられるが、
そのうちの六部屋目。上
巻444〜445ページ参照。

34 足指（トウ）の間
にたまる垢のタルトと、
下痢の飲み。

おれみたいなのを選んだのは間違いかもしれないよ。おれは……突撃歩兵^{*35}だったんだから。ずいぶんむかしの話だが、ホルスト・ヴェッセル^{*36}と同じにな

「それがどうしたい」ボーディーンは大笑い。「おれだって、メルヴィン・パーヴィス^{*37}のジュニアGメン^{*38}だったかもしれんじゃないか」

「え、なんだって？」

「ポスト・トースティーズのためにさ」

「えっ、誰に？」このドイツ人はポスト・トースティーズを、本物のアメリカの総統^{フュラー}だと思いきんだらしい。トム・ミックス^{*39}か誰か、長い唇と馬のくつわみたいな形のあごをした男をイメージしたのだろうか。

最後の黒人執事が屋外に通ずる最後のドアをあけて外に出た。エスケープ。今宵ここから脱出だ。「吹き出物^{ピンブル}パイに汚物^{フイルス}フロステイング^{フイルス}でございます、ジェントルメン」そう言うってうなずく。夜明けのわずかな向こう側に、ほら、微笑みが見えてきた。

35 第一次大戦の塹壕戦に特別に訓練された「嵐の部隊 Sturmtruppen」のこと。

36 ナチス・ドイツの愛国歌を書いた英雄。91ページに既出。

37 一九三〇年代、シカゴ地区のFBI捜査官として、ジョン・デイルンジャーなどの追跡を指揮した。

38 ゼネラルフーズ社は一九三五年、「ポスト・トースティーズ」というシリアル^{シリアル}の箱に、ジュニアGメン（子供連邦捜査官）用のパッジなどを入れて販促を図った。

39 西部劇スター。上巻470ページ註3参照。



ゲリー・トリッピングの荷物の中にはハンカチにくるんで、チチェーリンの足の爪の切り屑と、白くなりかけの毛が一本、それと精液のこびりついたシーツの端切れが入っている。その隣にはアダムとイヴの根も入れておいたし、正しいやり方でつくったパン——その上を裸になって転げた小麦の殻を反太陽回りに挽いてつくった粉を使う——も入っている。ブロッケン1の山腹で育てていた蝦蟇は放したし、白い杖は見習い魔女の仲間のひとりにあげてきた。恋しいあの人、勇ましいわがアッティラに会うために旅に出たのだ。ヘザーンには他にも優に二、三百の女たちがチチェーリンを思い焦がれてる。それぞれみんな女狐みたいに切れる女たちだけれど、ゲリーほどの根性は持ち合わせてないだろう。魔女であるのもゲリーひとりだ。

午にゲリーは一件の農家にたどりつく。台所の床が青と白のタイル、壁には絵画の代わりに手の込んだ古い陶器の皿、床にはロッキング・チェア。「彼氏の写真はあるのかえ？」老婆はブリキの軍用プレート2を差し出す。朝食の残りのパウエルンフリーシュトゥック3が載っている。「呪文は教えてあげられるよ」

1 しばしば人の形にも見える、ラン科の植物アプレクトルム・ヒエマレの根。恋人を引きよせる呪力があるとされる。

2 太陽は東から西へ「時計回り」に回る。その逆。「裸身で転がる」ところを含め、この愛の呪法は、グリムの『ドイツ神話学』（三十四章）に記載されている。

3 「農夫の朝食」の意

「ハーブティーのカップの中に、彼の顔が映るときもあるんです。でもハーブの集め方とか、うんと注意が必要でしょ？ あたし、まだ新米なんです」

「でもおまえさんは恋をしてる。テクニクなんてものは年を取ったもんが使う代用品さね」

「いつまでも恋していればいいのに」

陽の射しこむ台所で老女と少女がたがいを見つめる。ガラス板のついたキャビネットが壁で輝く。窓の外で蜂がうなる。ゲリーが井戸に水汲みに行き、ふたりで苺のリーフ・ティーを淹れる。でもそこに、チチェーリンの顔は浮かばない。

その夜、黒人の一隊が大移動を開始した。⁴ノルトハウゼンはまるで神話都市のようになり、特別な破壊に見舞われそんな感覚で満ちている——澄み切った湖水にのまれるか、空から溶岩を浴びるのか……ここには何も保持できないという恐れが一夜を支配した。ノルトハウゼンに連続性を与えていたのは、ミッテルヴェルケのロケットだけではない。この黒人たちも同じなのだ。だが彼らもすでにそこを去った。このまま移動を続ければ、チチェーリンと鉢合わせするだろう。そうゲリーは確信している。決闘はいやだ、そんなのは大学生のすることですよ、白髪混じりの、あたしの鉄の蛮人をそんなことで失いたくない。彼に最後に触れたのがもう過去の出来事だなんて、あの戦歴の記された傷だらけの手の愛撫をもう受けられないなんて、考えるだけでいたたまれない

背後から、町の眠気が彼女を先へと押しやる。夜になると、ハルツ山は変なカナリアのさえずりだらけ（やくざなカナリア業者が「ゾーン」を占領するマヌケなガイジンに売りつけようと、雌のカナリアに雄のホルモンを注射しているのだ、そうすると長く囀るよう

味。ドイツのジャガイモ
中心の炒め物をこう呼ぶ。

になる)——なにかもう、呪いだらけ、魔女同士の張り合いだとか、政治的なかけひきとか、そんなものだらけ……そんなのは魔法じゃないと、ゲリーはよく知っている。聖なる緑の山々を、手綱のついたどこかの子山羊に虫食いにされた(魔女の都市)。管理の営みだけが続くありきたりの都に成りさがってしまった。まるで音楽家組合の二階のような雰囲気だ。音楽は聞こえず、ガラス煉瓦で区切られた部屋に痰壺と観葉植物があるだけで、魔女の官僚社会で出世することが望みじゃないのなら、こんな山から下りて、世界と交わる方がいい。魔法を实践する、魔女がひとりもないなんて。ブロッケンに行つてその複雑な官僚組織の中で出世を狙うか、さもなくばそんなものに背を向けて世界を選ぶか。魔女ははっきりと二種類に分かれる。ゲリーは(世界)と交わろうとする魔女だ。

これが(世界)よ。ライ麦畑の脇を歩くと、膝までたくしあげた男物のグレイのズボンが、バタバタと腿にまとわりつく……下を向き、眼の上に垂れてくる髪をかきあげながら歩いてみると、ときおり車で通りかかった兵士が拾ってくれる。チチェーリンのことが、集団移動のさなかの(黒の軍団)のことがつかめないか。ゲリーは聞き耳を立てる。大丈夫そうな相手なら、ずばりチチェーリンのことを訊いてみる。流れるうわさのパラエティがゲリーを驚かす。彼を愛している女はわたしひとりじゃない……でもみんなのは友愛とか敬愛とかでしょ？ セックスなしの愛でしょ？ (ゾーン)の中でゲリーだけが、彼のことをトータルに愛してる。チチェーリンは一部で「アカのヤク中」として有名だ。もうすぐ肅清されるだろう。それで派遣されたのが、他ならぬベリヤの上司、あの邪悪なN・リポフだよ。

そんなはずはねえや、チチェーリンなんてもう何ヶ月も前に死んじまったぜ、聞いてな

いのかい……

……別の男を替え玉にしたのさ、次々とな。それで、ついにチチエーリンの陣営はひとりもいなくなっちまったとよ……

……いやあ、チチエーリンは先週末リユーネブルクに現れたぜ。おれの仲間が見てるんだ、見間違えるってことはない……

……おそろしく瘦せちまって、行く先々、ボディガードに堅く守られてる。一ダースはいるな。ほとんどが東洋人で……

……イスカリオテのユダもちゃんと引きつれてるってかい。一ダースってところがウツっぽいわ。信頼できる人間がそんなに集まるのかい。ヤツからすりゃすごい辺境にいるわけだぜ——

「辺境だあ？」後部で議論をつづける兵士を乗せた二トン半トラックは、鮮やかなグリーン広がる田園を走り抜ける……その背後に強風が音もなく巻きあげる紫色に黄色の筋が混じっている。壊血病のような皮膚をした英国兵らとゲリーは一緒にワインを飲んでいる。みな解体部隊の所属で、きょうは一日運河の清掃をやっていた。クレオソートと泥土、ダイナマイトのアンモニアの臭いがする。

「わかってるだろうに、あいつが何をしてるか」

「ロケットのことか？」

「そんなもんに手を染めたかあねえよ、おれはゴメンだね」

丘のてっぺんでは、軍の測量班が壊れた道路を修復している。前屈みになって転鏡儀を覗く人影がひとつ。測鉛線のおもりを持っている人影がひとつ。計器係からすこし離れた

5 キリストの使徒が十二人だったことへの言及。(フーバー)における語りのモードは、時間の進行や因果のしほりからかなり自由であり、小説的というより神話的だといえる。

ところには別の技師がいて、両腕を水平に開き、顔を回してピンと伸びた左右の指先を交互に見やる。それから両腕が一緒にスーッと舞いおりる……眼を閉じて、腕がおのずと動くようになるまで慣らししていけば、指が触れあうところが、水平だった腕とちょうど直角になる……遠くに見える小さな動きをゲリーは注視する。献身的で、優雅な動き。目に見える大地の円の上に男が十字を描いたのを——そこに意図せざるマンダラができたのを——ゲリーは感じる……これはゲリーに送ったサインなんだ。男はゲリーの進む方向を指している。夕暮れが深まって、沼地を同じ方向へ飛んでいく一羽の鷺の姿が見えた。金色の闇、夜はすぐだ。人跡まれなこの辺りは、牧神が近くにいます。黒ミサなら経験もあるし、その恐怖には耐えられる、と彼女は思う。でも、悪魔にお尻がブルーになるほど噛まれるのとこれはわけが違うのだ。全身全霊の叫び声が岩々に響きわたる、パンが彼女を連れていく光輝の世界にあっては善も悪も存在しない。それほどリアルな世界に対する備えがゲリーにあるだろうか。空にはもう月が浮かんでいる。彼女は待つ。鷺を見た場所にすわって、何かがやってきて自分をさらって行くのを待つ。きみはそれを待ったことがあるか？ 外から来るのか、心の内からやって来るのかわからずに待ったことが。ついには何が起るのかを推測する無意味さも超えられる……頭の中をきれいに消して、また消して、〈訪れ〉への備えをつくる……あのときも、この辺りじゃなかったか？ ほら、こっそりキャンプを抜けて〈それ〉とふたりだけの時を持った——大地のうごめきとして感じられた〈それ〉と……春分の宵だった……緑の春の均しい夜……溪谷が裂けて、底の噴気孔から立ちのぼった湯気が、鉢植えに霧を吹くように、トロピカルな生命にうちかかる。臭いがすごい、麻薬の香気、臭いの覆いを被ったみたいだ……人間の意識が——哀れな不具者が、

6 山羊の角と山羊の足を持つ牧神だが、ここにはギリシャ神話のエピソードよりも、魔女の忠誠心を集める魔王として民間信仰の中に生きつづけたパンの姿がある。

変形し破壊を運命づけられた奇体がもうじき出現するだろう。これは人間たちが出てくる直前の〈世界〉なのだ。人間の眼には直接とらえられない。あまりに激しすぎる生の流動。絶え間ない噴出。人はそれを死んだ姿において見るしかない。静止した層の形で。腐敗の過程を通った石油や石炭として。その生きた姿は、脅威だった。巨人族とは、轟音とともに哮りくるう、過度の生命の表現なのだ。地球の体が緑のコロナに包まれるほどの生命の燃焼。なにかそれを押さえ込むものをつぎ込まないと〈創造〉の営みが吹きとんでしまいそうだった。そこで、われわれ人間が造られ、片輪の番人として地に遣わされた。ここで子孫をふやし支配者となるために。神の抑止者、それがわれわれさ。反革命家。死をプロモートするのがわれわれ人間の使命なのだ。かくも殺し、かくして死んでいくわれわれのやり方は地上の被造物のなかで類例をみないが、それはみな、われわれに課せられた仕事だったのだ——個人的にも、人類史的にも。蜂起する緑の革命者どもを抑えつけるという役割を、できるところから始めて、今日のレベルまで到達した。だがまだ充分ではない。抑えきれてはいない。

毎日巨人族のもとへ寝返って、サブレベルでの創造に手を貸そうという徒が絶えないのだ（生身の肉体が転がり流れながら美しさをまるで失わないのはどういうわけだ？）、彼らは民謡に歌われる死神の安息所（空っぽの石の部屋）にはいり、そこから出、あるいは通り抜け、網の下にもぐりこみ、下へ下へおりていって生の反乱に加勢する。

巨人族がはるか下を動きまわる音が、こだまして耳を突く。われわれに見えてはいけないう者たちすべてのうごめきだ——風の神、山上の神、落日の神——その姿を実際見かけている者は多いのに、みんな訓練によってある範囲より遠くを見ないようにしている。神々

のエレクトリックなとろきを町の外れの薄暮に置きざりにして、外套で身をくるみ、常に前を開いたまま夜道を急ぐ、ところかだ――

突然、牧羊神パンが、ヒュイッと飛びでた。その顔が耐えられないほど美しい。美しい蛇。巻かれた尾は空を這う虹の縄だ。おまえの骨の髄に恐怖が走る――

夜の帰宅に人里離れたところを歩いてはいけない。明かりの薄れるときに森に入るのもだめ、午後であっても遅い時間は避けなさい――森に捕まってしまうから。樹のそんな近くにすわって頬を樹皮にもたせかけるのも危ない。この月明りだと男女の見分けもつかないからな。おまえの髪が銀白色にこぼれる。グレイの衣服の一枚下にはおまえの、あまりにか弱い身体^{ボディ}があつて、それは繰りかえし汚辱をあびる運命にある。あの男が眼ざめてきみが消えたのを知ったらどうする？ 彼はだね、今はもう目覚めていても眠っていても同じなのだ――ひとつの夢の中に留まって動かない。醒めた世界と眠りの世界の境界は消えたのだ。以前の世界との最後の絆がタナツとマルゲリータだったのだろうか。だからこそあのふたりの滞在があれほど長くなったのだろうか――彼は離れるまいと必死だった、ふたりを必要としたから……だが近頃は、ふたりに眼を向けても、見えていないことが多い。タナツとマルゲリータが持ち込んでいた現在の手ざわりは失われつつあった、――ずっと以前にゴットフリートがブリツェロに対して自らの実在性をまったく失ってしまったのと同様に。この若者はいまイメージからイメージへ、部屋から部屋へ、出来事^{アクシジョン}の一部になつたりならなかったりしながら流れうごいている……やるべきことがあると、それをやる。その日にはその日の論理があり、要請があり、それを自分で変えることも、放置すること、その外で生きることとも許されない。彼は無力であり、堅い防御の中にある。

7 牧羊神パンの出現を待ち望むグリーから一瞬にして、現世からの超越に身を委ねるゴットフリートに語りが切り替わる。後者を示すキーワードは「銀白色」の髪にみられるその白さ。

ほんの数週間のことだ。それですべてが終わる。ドイツは（戦争）に敗れているだろう。日々の繰りかえしは続く。降伏してからのことを若きゴットフリートは何ひとつ思い描けない。ブリツェロと離ればなれになったら、日々の流れがどう変わってしまうだろう。

ブリツェロが死ぬいやだどうか死なせないで……。 （だが死ぬんだ）「おれが死んでからもおまえは生きる」彼のささやき。ゴットフリートは犬の首輪をつけて彼の足元にひざまずく。ふたりとも軍服姿だ。どちらの男も、女装をしたのはずいぶん以前のこと。どちらも今夜は男でいることが大切なのだ。「物わがりの悪い、高慢なやつめ……」

これもただのゲームなのか、ただの鞭打ちの口実か？ ゴットフリートは口を結んだまままだ。ブリツェロが答えを求めると、それに応じて答えるが、多くの場合、ブリツェロの独白がひたすら何時間も続きそうな勢いなのだ。ゴットフリートに、こんなふうに語りかける人間は初めてである。父親は命令と宣告と、問答無用の判決文しか口にしなかったし、母親は感情的で、愛情とフラストレーションと秘めた恐怖の奔流を息子に向けるばかりで、親子で話し合ったという経験はない。こんな、ウソみたいにリアルなことがあるんだろうか……彼は言葉の一つひとつを、保存しなくてはならない気持ちにかられる。どれひとつ失ってはならない。ブリツェロの言葉は彼にとって掛けがえのないものになっていた。この人はひたすら与えたがっている、代わりに何を要求するでもなく、愛するものを放出している。ゴットフリートは自分がブリツェロのために存在していることを確信する。他の者たちが存在しなくなっても、いまその中を通っている新しい王国で、ブリツェロにとって唯ひとりの住人が自分なのだと。これを彼は予期していただろうか——こうやって連行^{デイル}されることを。これの中へ連れ込まれることを。自分の腸^{はらわた}の毒に染まった糞の中へ注

ぎ込まれるブリツェロの種子は……排泄されるしかない、無駄でしか……しかし……ひと組の男女としてつがい、身体を震わせ、歯までガチガチさせて生命の門にまでたどり着くときには、彼は心にもっと豊かなものを感じていなかったか。挿入のための手はずだとか、熱情もなく打ちすえる儀式のスタイルや衣服の心得だけではなく。ヘビの皮のように薄っぺらで消えてしまいそうなストッキングも、心で感じる緊縛を象徴する特製の手枷と鎖だとか、それらを超えたもっと敬虔な思いを抱いていたではないか……いま〈別の王国〉への門へと近づいていくとすべては劇のよう。内側のどこかに白い巨大な鼻づらを感じた——無表情に白く凍りついた野獣が彼を押しやる感じを。神秘の地殻とマントルが、彼の聴覚にとっても届きそうもない轟音を発するの……それらもまた無くてはならないものなのだ、糞を崇めるかのように性器を捧げる恋人たちも。終わりを崇め、連結が個人の制御を超えて進行する、またはついえる、路上での絶望の夜を崇める者たち。生の行為であるうと死の行為であろうと、失墜した者たちは数知れず——もう一晚ひとりぼっちでいる判決を受ける者も……彼らはみな否定され、見捨てられていくのか、これらの者みんなが？

近づいてゆくにつれてゴットフリートは、内へ包まれ、また包まれていく。自分を開こうと、心の括約筋をゆるめようと努めるだけで精いっぱいだ……

「ときどきわたしは〈世界〉の涯に行きつく夢を見る。この世の行きどまりを見いだすのだ。わたしの山上のエンツィアンはつねに知っていたのだ。だがわたしの場合、その発見はえらく高くついたな。」

「アメリカは実際世界の涯だったのだ。ヨーロッパにあてた大陸サイズの、見ずにはすま

8 リルケ「ドゥイノの悲歌」の第九の悲歌、上巻198ページ参照。

Gravity's Rainbow

ないメッセージだった。おのれの〈死の王国〉の場所を、ヨーロッパは見いだしていたわけだ——西洋世界が発明した特別な〈死〉の支配する国。蛮族にも荒廃の地はあった。カラハリ砂漠が、霧で対岸の見えない湖が。だがヨーロッパは深みにはまっていた——野蛮人の無垢から離れて、妄想へ、耽溺へと。アメリカは見えざる力からの贈り物、元に戻るための途だったのに、ヨーロッパはそれを拒否したのだ。ヨーロッパの〈原罪〉——今では名前を変えて〈近代的分析〉というらしいがね——しかし、贖うのがよりむずかしいのは、〈後罪^{サブリメント・シン}〉の方なのだよ。

「アフリカに、アジアに、原住民の住むアメリカ、そしてオセアニアに、ヨーロッパはやってきて、〈分析〉と〈死〉の秩序をうち立てた。利用できないものは殺害するか、変容させた。やがてその死の植民地は勢力をつよめ、分離独立した。だが帝国づくりの衝動は、死を増殖させ、死の構造を繁茂させていくという使命は変わらなかった。われわれはその過程の最後の局面にある。〈アメリカの死〉がヨーロッパを占領するに至ったのだ。旧世界のメトロポリスから帝国統治を学びとって。しかし、現在あるのは死の帝国の構造だけで、七色の大きな羽毛も、黄金づくりの調度品も、アルカリの海に響く壮大な行進曲もない。他の大陸の野生人らも、西洋にかぶれはしたものの、いまなお生の名において抵抗を続けている。苦境の中で灯火を保ってやってきた……その一方で、〈死〉と〈ヨーロッパ〉はいまも別れたままだ。二者の愛はクライマックスに達していない。死は単に支配するのみ。〈死〉との、愛における、完全な融一はまだ……」

「いまサイクルがひと巡りを終え、次のサイクルが始まるうとしているのか？ われわれの新しい〈涯^{はて}〉は、われわれの新しい〈死の王国〉は、今度は〈月〉なのだろうか？^{*10} 壮

9 死における愛の成就是、ヨーロッパのロマンスの根強い伝統。リルケに傾倒するロマンティスト、ブリツェロらしい台詞である。

10 〈ロケット〉の死の構造を、アメリカを牽引者とする次のサイクルも引き継いでいるというヴィジョン。『重力の虹』はアポロ計画が月面着陸でクライマックスを迎える時期に書き進められていた。

大なガラスの球体をね、中が空洞のやつが、はるかに高く遠くにあるのを想像してしまうんだ……その植民者らは空気なしにやっていく術を身につけている。内も外も真空中で大丈夫……もはや人間は帰還の必要すらなくなった……彼らは人間の男たちだよ。そりゃあ帰る方法はいろいろあるが、どれも煩雑で、激しく言葉に左右される。存在は東の間で決して「リアル」とは言えない……帰還の道は非常に危険で、ちょっと間違えば、きらめきながら宇宙空間を落下するだけだ……冷え切ったそこは隅々まで重力に支配されている。墮ちる危険がつねにつきまとう。コロニーの内部で、限られた数の植民者らは、外見が霜のようであって、実体感に欠け、その生気のなさといったらまるで記憶そのものを見ているようだ。手に触れられる存在ではない……遠いイメージが、白黒の目の粗い映像が。過去の途切れた霜の歳月の白い緯度地帯での出来事を映しているだけだ。その空無なコロニーを訪ねる者は、わたしのごとき数少ない偶然の訪問者だけだ……

「いくら望んでも、取りかえしはつかない。あの男たちは悲劇の一日に見舞われたのだ——上昇、炎上、墜落、流血。もう遠い昔になるが、あの一日のことで彼らは永久の外地へ放りだされてしまったのだ……いや、あいつらは宇宙飛行士ではないよ。こちらにくれば、世界と世界の狭間を飛びたがった。飛び込み、ターンし、腕を伸ばして、スイングする。輝きの中を抜け、中空の冬の夜を通して——みなランデヴーを夢見ていた、孤独の宇宙に、優美さを無駄に撒き散らして行こう空をブランコを。誰ひとり観る者もなく、愛した者たちにもう二度と会えないことを確信しながら……」

「彼らが夢見た接続はいつも果たせなかった。漆黒の宇宙空間を数兆マイルも外れ、凍りついた沈黙の数分もズレていた。だがわたしは、話を聴いておまえを引き戻したかった。」

憶えているよ。おまえはよく、ベッドの寝物語に、わたしにささやいていたな、いつか一緒にふたりで月に住みたいと……そんな歳ではなくなったか。もう立派な男だからな。わたしが死の過程で、おまえの身体をどれだけ蝕んだか、感じられるかね。あれはわたしの運命だった。いずれ時が来れば、誰にもそういう時が訪れる。父親は〈死〉のウィルスのキャリアーで、息子はそれに感染する……〈死〉は策を弄して、父と息子が互いにとって美しく見えるように図ってきた、ちょうど〈生〉が異性を互いに美しく見せてきたように……ああゴットフリート、もちろんだおまえは美しい、だがおれは死んでいく……今際のきわは、できるかぎり正直な心で過ぎていきたいと思う。おまえが永遠の生命を得ることが、おれのハートを引きさくのだ——わからないのか、どうしておれが破壊の衝動に駆られるか、ああおまえの瞳の、その阿呆みみたいな澄みきりよう……朝夕の整列で見えるおまえの表情が、あまりにすなりと、おれの病気を吸いこみ、おまえの小さな無知の愛の中にかくまおうとするのを見るとたまらないのだ……

「おまえの愛」と言ってブリツェロは数度うなづく。だが彼の眼は言葉から切れて、危険なまでに中空をさまよっている。現実のゴットフリートからは遊離し、もう引き戻すのは無理のようだ。ここで息をしている青年の弱まりゆく臭いが、氷のように厳として冷たいバリアに阻まれていく。この流れはもう戻せない。ヨーロッパ的時間のように一方向的だ……

「おれは断ちきりたいのだ——感染と死というサイクルから切りはなされ、愛の中に抱きこまれない。おまえもおれも、死も生も、ひとつところに、不可分なものとして集まり、ひとつなる光輝^{レイディアン}をつくるその中へ……」

ゴットフリートはひざまずき、棒のように無感覚なまま、待っている。ブリツェロが彼を見ている。深く見つめている。こんなに白いブリツェロの肌を見るのは初めてだ。荒々しい春の風がふたりのいるテントのキャンパス地をたたく。日没が近い。ブリツェロにとってはそろそろ夕方の報告を受けに行かねばならない時刻だ。彼の両手が横たわる近くに食堂のトレイが置いてあって、煙草の吸い殻の山ができています。近視のブリツェロの魔女の眼が、厚いレンズの向こうからゴットフリートの眼をのぞき込むのは初めてのことだったかもしれない。ゴットフリートは眼をそらすことができない。なにやら決断を迫られているのはわかる、ブリツェロが何かを期待しているのだ……だが物事を決めるのはいつもブリツェロだった、どうして今になって急に……

すべてがいま、ここに浮きたつ。日々の進行は、いまだその役割を失わず、われわれを時間に留めおき前へと駆りたてる……鉄のロケットが外で待つ……雨の降りしきるサクソニーを、春の産声が、その誕生の叫びが、何マイルも渡っていく……ロケットの最後の覆いが、剝がしたギアが、つかみ取ったベアリングが、腐ってカビと泥に薫る靴下と下着類が、通路の脇に落ちています。いまこの風に打たれるゴットフリートに希望があるなら、他所でも希望は見つかるだろう。この場面そのものを一枚のカードとして読まなくてはならない——「これから起こること」^{*12}として。そこに描かれた者たち（汚れた白とアーミィグレイで、崩れかけた壁のらくがきのような、まばらな走り描きの画）の身にその後何が起ったのかはともかくとして、カードは失われない。だがそれに名前はなく、〈フール〉の札と同様、ひと揃いの中での位置も決まっていらない。

11 ゴットフリートを搭載したV1ロケット00000号をブリツェロが打ち上げたのは、神話的な水準では「春分の日」だったと見なすことができる。光が闇と拮抗し、闇に打ち勝つこの日は古代より「光輝なるもの」の復活を画す日。

12 ケルト十字法によるタロット占いで最後（十枚目）に引く最重要カード。それまで出た九枚のカードと総合して読まれ、日本ではしばしば「最終結果」と呼ばれる。



これはエンツィアンの一隊だ。夜闇をついて、真新しいロケットを先へ進める。降雨時や濃霧時には、見張りが防水シートをかけるのが遅れると、光沢を帯びたロケットの肌はたちまち黒いスレートに早変わりしたかに見える。結局、発射の直前になって、こいつは黒く塗られることになりそうだ。

これぞシリーズ第二弾、00001号である。

エルベ河の向うからロシアの拡声器が、きみらに向かって呼びかけていた。夜になると野営の焚き火まで、アメリカ人の黒人口調のうわさの音が聞こえてきた。そしてきみらの希望の地の上に、アメリカの黄色い砂漠と、赤肌のインディアン、青い空と緑のサボテンの図を描いてみせた。〈ロケット〉とめぐり会ったときのことを思いだしてごらん。いや現在のじゃない——職の安定をもたらしにくるようなものとは違う——懐かしいやつだ——憶えてるかな、手押しで動かしていた頃のあの感触を。それに直接身体を触れさせながら、その動かぬ重量を動かしていく。一ダースの儀仗兵になったあの朝のことを……きみらの顔はみな一様に自己消去の波にもまれていた——人格と人格が重なってつくるモア

1

543 ページから続く。

2

（黒の軍団）を自分たちの側に引き入れようと、アメリカが黒人を使ってアブローチしてきたのだらう。収奪したロケットの行き先は南西部ニューメキシコ州だった。

レ・パターンがだんだんとソフトに和らぎ、その波動もしだいにぼやけて、ついに全体が
淡い明暗をもつ一塊の雲になる——冷えきった盛り土の上を少しのあいだ押し上げなくて
はならないとき、きみらの顔から憎悪のすべてが、愛のすべてが、流れ落ちただろう。き
みらのブーツの足先で、丈の短いコート裾をはためかせて年配の連中がわめいていたね。
吐きだされた白い息が、きみらの背後で乱気流に崩れた。……きみらはこれからどこへ
行くんだ？　どこの帝国、どこの砂漠へ？　きみらはそのボディを撫でたんだ、その野
獣的な、手袋を通して凍りつくような身体を。恥も遠慮もなく、きみら十二人は必死に、
愛の中で、それを押したのだ、ここバルト海の岸边でだよ——ペーネミュンデではなかつ
たかもしれない、公式のペーネミュンデでは……だが一度、何年も前に……白のシャツ、
ダークなベストと帽子に身を包んだ少年たちが……どこのビーチだったろう、子どもたち
のリゾートだった、ぼくらももっと若かった……〈試験発射台Ⅶ〉^{テストスタンド}でのことだよ、そのイ
メージ、最後の、きみは顔をそむけることもできなかった——潮風が死を孕んで匂いつづ
けていた、冬の海の波音が打ちつづけ、雨の予感がきみの首筋に絡まり、短髪の間をうご
めいていた。……聖なる場へテストスタンドⅦ〉でのことだ。

しかし少年たちもみな年を食った。このシーンには色がほとんどない……みな陽に向か
って押していく、ギリリまぶしさに眼を細め、唇を横に押しひろげて。ここはジーマンス
社での朝の勤務のように明るいぞ、壁の上の高いところでケンタウロスが闘っている。時
計の文字盤は数字がない、自転車が軋る、弁当の容器と包み、男も女も顔を下に向け暗い
入り口に向かつて従順に流れていく……それは今や忘却されたある写真家が一八五六年、
初期のロケツト・シネマ^{ラケーテン・シネマ}を撮影した写真に似ている——これが、その写真家の命を奪った

写真なのだ——撮影から一週間後、スタジオで加熱気化水銀を吸った彼は水銀中毒で死亡した……まあ、彼は日頃から適量の気化水銀をたしなみ、それが脳に良好な効果をもたらすと感じていたんだが。「デア・ラケーテン・シユタット」みたいな作品が生みだせたのもそれが理由かもしれない——ドイツ国内では地勢的にありえない高みから、この祝祭的な都市の全容を見せてくれているのだ。街は、予想に違わず四区画に等分され、どの線もどの陰影も人の手の入った建築的なものはすべて、不気味なほどの精確さをきわめている。それはヘレロ族の村同様マンダラ構造であり、頭上には壮大な空を有し、大理石が荒々しい白波と白熱の光を表現している……ヘシテイのあちこちで建設と破壊が進行中なのか、ここでは何ひとつ同じまま留まりはしない。骨も湿る地下室で働きつづける労働者の浅黒い首筋に汗の玉の一つひとつが浮かびあがる……セメント袋が破れて、舞いこった粉末が光の中を漂う……ヘシテイは今後に変転してやまないだろう。砂ぼこりには新しいタイヤの跡が刻まれ、道路脇に新しい煙草の包み紙が捨てられ……ヘロケット⁵に向かう工学的技術革新が、新たな供給経路を生みだし、新たな暮らしをアレンジし、その変化が、この異様な高みから捉えた交通のラッシュに反映している。実際ヘシテイの改変とロケットの細部修正との対応関係を示す関数テーブルも存在しているのだ。それは、一九四三年にRAFメドメナム⁶で、コンスタンス・バビントン⁷と彼女の同僚らが開発し、ペーネミュンデの偵察写真にロケットを見いだしたテクニクから発展したものに他ならない。

だが思いだしてごらん、きみらはそれを愛したのかい。愛したのなら、どのように？
どのくらい？——まあすぐに「ハウ・マッチ？」と聞いてしまうのはよしとしよう。みんな

真技術であるダゲレオタイプは、銀メッキした銅板をヨウ素の蒸気にあててヨウ化銀を感光させ、それを水銀蒸気にさらすことで像（鑑賞用のポジタイプ）を得る。

5 メドメナム（バツキンガムシャー州の裕福なヴィレージ）近くのデインズフィールド・ハウスに置かれた英国空軍の機関。第二次大戦中の航空写真の解析本部。

6 一九四三年の春、バビントン・スミス夫人が偵察写真の解析中にマイン・ヴァーゲン（移動発射台）に載った鉛筆型尾翼付きの物体を発見。これによってイギリスはナチスのロケットが実在する証拠を得た。

な測定し、値を比較して、式を立てることに慣れっことで、あとのくらしい、全体のどのくらい、この場合にはどのくらいかを求めたがる……しかし、みんな一緒に海へ向かっていくに際しては、ためらわずに感じてほしい、ダークな愛の二重性を。それが愛であるともにも恥辱でもあり、虚勢でもあり、工学者の地政学でもあることを。影響力の範囲^{インフルエンス}というが、この場合は球体ではなく、断面をバラバラとするロケットの射程のトーラス体^{トーラス体}というべきか……

……だが、そのトーラスの底面が地球の表面に一致すると考えてはならない。ロケットが地面から「上昇」し、地面に「激突」すると考えるのはチガウ、キミラはソウダと思ッテ打ち上げ実験をシテイタノダロウがコレは言ウマデモナク地面ノ無限ノ深ミニ始マリ無限ノ深ミへ戻ッテイク過程ナノダヨ、わたしらに見ることが叶うのは、その頂上部分だけだ。沈黙の別世界から表面を突き破って、ヴァイオレントに（ジェットエンジンが音の壁に衝突する、将来には宇宙船が光の壁を破壊するだろう）憶エテオケヨ、今週ノ（ゾー）のパスワードは **FASTER THAN THE SPEED OF LIGHT**、光ヨリモ速クだ、キミラの声も指数関数的にスピードアップさせるのだ——一次関数的上昇であってよいのは呼吸器上部に疾患を持つ者のみ。そして、ふたつの「端」^{エッジ}のどちらでも莫大なエネルギーの移行が起こる。すなわち、この世への下からの突入、コントロールされた燃焼——ふたたび下降、コントロールされない爆発……この過程にシンメトリーが欠けていることは、何か空間を充たすとされたエーテルにも似た仮定上の存在が、時間を充たして流れているとの想像へわれらを誘う。時間を「真空」と見なすことは、われわれ相互の隔絶感覚を助長するが、そうではなく時間を「エーテル」の海として、われわれを世界から世界へ運んでい

7 ある面（一般には円）を、その外側にある軸を中心回転させて得られる（ドーナツ型の）立体図形。

8 放物線は対称的であつても、地上における（ロケット）の展開（時間軸上の変化）は非対称である。機体の原料や燃料の採掘・発射・（誘導）されながらの上昇・燃焼終結・自由落下・着弾による爆発、の過程は一方的で非可逆的だ。

9 スコラ学^{スコラ学}は、中世ヨーロッパの大学で開発された、厳密に理詰めの論法による神学（および他の領域

つてくれるものと見なすことで、連続性が回復されるだろう。より優しく、よりリラック
スした宇宙が立ちあらわれるだろう……

そうなんだ、これは一種のスコラ学[＊]さ、たしかにね。ヘロケット[＊]の状態の宇宙論とい
かな……ノロケット[＊]が、他の可能なあり方のなかで、まさにこのように進むということ

——地表の上に跳ねあがる大蛇の蛇局のような虹色の光、鋼鉄の強縮性[＊]擽[＊]……大地はそ
の懐深くに、われわれには知りようもないすさまじい嵐を抱えているもんだ……それら可
視的な次元を暴力的に突きぬけながら、数字の宇宙[＊]へ突入していく。古風な、褐色の木製
パネルの部屋で演じられた、一八八〇年代のヴィクトリア朝風の頭脳戦の世界さ。もう一
方にヴェクトル解析派[＊]——懐かしの「エーテル」の時代だよ、銀色の、振子つきの、石の
錨とギザギザの真鍮と透かし細工による優雅で機能的な、きみらのおじいさんの時代の物
たちに囲まれた空間だ。そのセピアの色調に染まっているのはたしかだ。だがロケットは
多くの形をとらなくてはならない。ロケットと接触する者は多様なのだ——戦場にある者、
トンネル内で働く者、書類を扱う者——彼らが夢見るいくつもの異なった形に応えるもの
でなくてはならない。異端が現れても揺るがぬ輝きをもっていないなくてはならない……異端
の輩は出現するのだ。一陣の風火とともにグノーシス派の信奉者等がやってきてヘロケッ
ト[＊]の玉座の間に入りこんだ……カバリストはヘロケット[＊]をトラーと見なして、リベ
ットとバーナーカップと真鍮の薔薇の一つひとつを、一言一句を凝視し、自由な順列・組
み合わせを考え出しては、つねに新たな啓示を展開させる……マニ教を信じる一派は善悪
ふたつの「ヘロケット[＊]」を見てとるだろう。彼らは「原初の双児」について、聖なる
私的言語[＊]で語りあう（その双子の名がエンツィアンとブリツェロだという者もいる）。善

の「宇宙の形」(一)は、
「哲学」で記述されること
が多いが、哲学的な意識
をさすものではない。

10 ロケットが噴く炎
の軌跡の詩的表現におい
て、大地の蛇と空を駆け
る虹とを融合した表現。

11 三次元空間におけ
る運動の数学的記述のた
め一八四三年、アイルラ
ンド人W・R・ハミルト
ンによって導入された四
元数[＊] (quaternions) は、複
素数[＊] (complex numbers) を拡張した
数体系だった。これに対
しアメリカ人ウィリア
ム・ギブスが、三次元の
ヴェクトル座標による方
法を提示、一八八〇年代
の物理学会で両派に分か
れての論争が巻き起こっ
た。この件をピンチン
は「逆光」で詳しく取り
上げている。

のロケットは人を星に導き、悪のロケットは世界を破滅に導く、両者は永遠の闘争を繰り広げるのだ、と。

だがこれらの異端者は捜しだされ、抹消されるだろう。そのたびに沈黙の支配が領土を拡張する……異端者はひとり残らず捜しだされるだろう。一人ひとりがロケットを持ち、その標的の追求装置には、異端者の脳波図や、心音の棘波とささめき、霊体が花開くような身体赤外線のパターンの情報が蓄積されるだろう。ロケットはみずからが添いとげるべき目標を見つけるや、後を追いまわし、緑のクスリで声を奪った狐犬を飛びかからせ、われらの《世界》を渡って空にきらめく尖点を相手の背中に突きつけるだろう。この守護者兼処刑者がこちらへ向かってくる、とどろき迫る……

指針を述べる。既成の踏み分け道は使わない——突然、河岸で行きどまりになったり焼けこげた操車場に出してしまうのがオチだから。道路も突っ切って進む。舗装されていようがいまいが、あらゆる道にロシアや英国やアメリカのパトロール隊がいる。近ごろ彼らは近づく冬の脅威にさらされて強ばり、白く堅く形式ばった注視へと駆りたてられている。夏のあいだ無視していたことも見逃さない。樹木も藪も色を替え、荒野原を何マイルも染めていた紫が色あせ、夜の到来が早まるについて、彼らのペーパーワークへの執心は日ごと強まる。それと、乙女座の初旬の季節に降る雨に濡れないこと。この行軍に、禁を破つてもぐりで参加している子どもらは、咳と熱にやられ、夜は大きすぎる軍用ジャケットにくるまってグシグシグシ、ゼイゼイやっている。その子らに、フェンネル、ベトニー、ゲルダローズ、ヒマワリ、ゼニアオイのハーブで茶を淹れて飲ませてあげること——サルファ剤とベニシリンの収奪も心掛けよ。正午までには日射しで道の窪みも畝も乾いてしま

12 《ロケット》をめぐって教義の対立が起こる。その必然性と闘争の不可避性について、エンツェアンは全体論（システム論）的視点から考えている。グノーシス派の中心教義は、この世が神ではなく、不完全な半神によって造られたという点にある。生成世界を完全に超越した領域を神の御座とする点は、ユダヤ教神祕主義を奉じるカバリスとも同様。その思考伝統は、フリーメイソンや薔薇十字団にも流れ、リルケの詩における天使への憧憬においても、ナチスを支えた少年たちの衝動においても、その変奏を見ることができらるだろう。

13 《ロケット》を型なめる中心として、すべての可能性を包括した《ゾーン》のアーキタイプが急速

うだるう。土ぼこりを立てぬよう、行進は中止。野で眠ること。切り離れたロケットの隠れ場所としては、干し草の下、傷破された鉄道車庫に残る一枚壁の背後、河床わきの雨に濡れた柳の間がよい。危険を察知したら、そうでないときもしばしば訓練のため、散りぢりになること。そして、網目のように流れ、ハルツの山を下り、峡谷をのぼり、さびれた鉱泉場の干上がったフヤフヤの場所で眠ること（彫像の陶器の眼にひと晩中、公式的な苦痛と死の表情で見つめてもらえ）。ブーフと壕シヨベルにつぶされる松葉の香りを嗅ぎながら夜の隠れ家を掘ること。……これは行軍ではない、苦闘ではない、宿命として定められたことなのだという信念を失わないこと。000001号は、潤滑油を塗ったポルトのように滑っていく。ゆく道は廃墟と見えるが、それは見かけのことであって、実は（戦争）が慎重に、特殊な爆撃技術の粋を凝らして製作したものだ。あらゆるマシンの中で最も人間との合一が進んだこのヘロケットなるもの——もっとも恐怖すべき爆撃の力を秘めたヘロケットなるものを受け入れること……

000001号は各パーツに分解される——弾頭、誘導部、燃料用および液体酸素用タンク、尾部。発射地点に着いたら、元どおりに組み立てなおさなくてはならない。

「私は人民の間で創られる」と言いますけどね——クリステイアンが、野営地を見下ろす野原を、エンツフィアンと歩いている。「各人を暴力から保護し、厄災時にシエルターを提供するために」と。しかしどの社会も同じでしょう。それを言わない社会があったら見せてほしい。それに、エンツフィアン、現実にとんだ保護があるというんです？——谷間の方に腕を回し、黄色と灰色の迷彩模様の網状の広がりを目指しめす。その内側が透けてみえる。今度の旅に限ってはふたりとも真鍮の視力を得た……

に、大団のバウザーゲームとして構造化されつつある。

14 和名は藟香（ワイキョウ）といい、中世ヨーロッパでは魔女や悪霊を防ぐ効果があるとされた。整腸作用があり、漢方薬等でも使われる。以下の植物もみな、ヨーロッパで夏の終わりに採れる薬草。

15 原文は「*Einmal ist ein Mal*」
「*Einmal ist ein Mal*」というドイツの諺。ドイツ語には「一回は一回」という意味がある。これは「*Einmal ist ein Mal*」という諺が現れるだけ、人間の運命の合一——という意味で使われている。これは「*Einmal ist ein Mal*」という諺が現れるだけ、人間の運命の合一——という意味で使われている。これは「*Einmal ist ein Mal*」という諺が現れるだけ、人間の運命の合一——という意味で使われている。

エンツィアンは、自分より若年のクリスティアンと、遠くまで散歩に出たのだ。自然に流れでたという感じで、どちらの側にも思惑はない。権力譲渡もこんな具合に起こるのか？ どちらも疑う気持ちはあるが、それでも、以前のような気まずい沈黙は消えさった。張り合いの関係は消えた。

「啓示だね。突然わかる、保護できる社会はないと。今までも無力だったのだと——社会とは紙の楯のようなお笑い種だと」クリスティアンには自分の知っていることのすべてを話しておかないといけない、自分の疑念も、自分が夢みたことも、すべてを。どれひとつ真実だと主張するものはないことを明確にして。何ひとつ、言わずにすますことは許されない。自分が占有していい考えなどない。「へかれら」はわれわれにウソをついた。われわれを死から救うことはできないので、死についてウソを語ったのだ。みな協働してウソを固める体制を組んで。へかれら」は、われわれに信頼と愛——彼らが実際そう呼ぶのだ——を要求しておいて、その見返りに、何をくれた？ われわれを風邪から護ってくれたか？ ノミは、孤独はどうだ？ 何かひとつでも世話になっているだろうか？ へロケット」以前は信じてこられたよ、信じていたかったしな。だがへロケット」は貫く。いつ空に現れるのかわからない。安全な場所はどこにもないんだ。だからへかれら」のことはもう信じられない。われわれの心がまっとうで、真実を求めるかぎりには「そうなんだ」クリスチャンがうなずく。「まっとうで、真実を望んでいる」エンツィアンの顔を見て念を押すことはしない。

「そうだ」

「それで……信頼喪失の時代には……」

論が参考になる。

16 ここにはジャイロスコープとガイドビームおよび誘導電波の受信機が積載されている。巻末「解説」中の図参照。

ある晩のこと。雨の中を進んでいた隊は、ひと気の去った研究基地を宿とする。そこでは大戦末期、ドイツ軍が音波を使った「死の鏡」を開発していた。平原を横切って、白い一枚岩のコンクリート放物面がジグザグに並んでいる。放物面の前、精確に焦点の位置で爆発物を爆破するという発想で、爆音はコンクリートの放物面鏡に当たって完璧な衝撃波を生みだし、通り道にあるものを何であれ破壊する。この実験でふき飛ばされたモルモット、犬、牛の数は何千にも上り——死の統計曲線のデータも大量に蓄積された。だがこの計画はアイディア倒れで、短距離範囲では有効であっても、少し距離が伸びると急激に威力が落ちて、同量の爆薬を別な形で使用した方が威力に勝る地点を超えてしまう。霧も風も、微細な波紋や出っぱりも、完璧にスムーズな条件をわずかでも歪めるものがあると、衝撃波の殺戮性は一気に下落する。それでもエンツィアンの心に具体的な戦争のイメージが浮ぶ。これが武器として使えるのは、「砂漠だ。敵を砂漠に誘いだす。カラハリに。そして風のやむ瞬間を待つ」

「砂漠を求めて戦う軍があるかしら？」カッチェが訊く。彼女の羽織っている緑のフード付きレインコートは、エンツィアンにさえ大きすぎるかもしれない。

「砂漠の中で戦う」クリスティアンはしゃがんだまま、白い反射鏡の曲面を見上げている。一行はその基底部に集まり、雨の中、煙草をまわし、残りの行軍から一時の休息を得ている。「For「求めて」ではなく、By「中で」ですよ。うちの大將が言っているのは」

テキストは、述べられた直後に字句を正確に把握しておけば、あとになって面倒がおこらない。エンツィアン大佐が礼を言う。

百メートル先にある、別の白いパラボロイド。その中にちぢこまって一人の太った少年

17 第二次大戦期にドイツが様々な兵器開発に乗り出したのは事実で、このような音波による破壊装置を開発中だという噂も、まことしやかに広がった。

が一行を見つめている。そのグレイのタンカージャケットのポケットから、長い毛に隠れた小さなふたつの輝く目。「太っちょルートヴィヒ」と迷子のレミング、ウルズラである——ようやく、最後に、万難をクリアして見つけたのだ。この一週間、少年とレミングは遠征隊一行の脇を漂行していた。彼らの視界のすぐ外側につけ、アフリカ人たちの足取りに合わせて歩いた……見上げる崖の樹々の陰に、夜は焚火の光の届かぬところに、ルートヴィヒの見つめる眼があった……見つめながら証拠を、数式に入れる項を集めている……少年とレミングが「ゾーン」をゆく。だが何を見たかといえ、これまでのほとんどが、大量のチューインガムと大量の異人のペニスだ。この時世に、少年ひとりで「ゾーン」を放浪しているのだから、そのくらいが関の山だろう。ウルズラの生命は守られている。ルートヴィヒの方は死ぬより大変な運命に落ちたようだが、それもまあ、やり方次第でなんとかなると知った。すべてのレミングが断崖から身を投げるわけではないし、すべての子供が、利益の汁を吸う誘惑から護られているわけでもないのだ。「ゾーン」とは、そういうもの。それ以上、または以下を期待するのは、天地創造の諸条件に異を唱えるにひとしい。

隊の先頭にいるときエンツィアンは、しばしば夢想到に耽る。ドライバーが話しかけてきてもお構いなしだ。ヘッドライトのない夜は、雨になって落ちそうなほど粒の大きな霧が、ときおり濡れた絹のスカーフのように飛んできて顔を撫でる。内側も外側も同じ温度、同じ暗さ。この微妙な均衡の中でエンツィアンの心は、覚醒と睡眠の二層のあいだを浮遊する。その界面にガラスのゴム膜のような表面張力があって、彼は手足を昆虫のように差しあげ、膜に差しこむ。夢に手足を撫でられて感受性が異様に高まる。ヘレロ・スタイルの、

18 ルートヴィヒ&ウルズラの登場は、306ページでスロースロップがマールヴィに再会したシーン以来。

横にならずとも心地よい居眠りだ。盗んだトラックのエンジン音を消すため、ボンネットの上には古いマッドレスが縛りつけてある。運転するウサギ、ことヘンリックは、温度ゲージの針から注意をそらさない。こいつが「ウサギ」と呼ばれるのは、ヘレロ族の古い言い伝えに出てくるように、いつもメッセージを読みちがえるからだ。神話の神々も、このように茶化されてしまうとは。

道路に人影が現われて、懐中電灯をぐるぐる回す。エンツィアンはアイシングラスのシートをめくり、垂れこめる霧の中に首を突きだして、合言葉「光よりも速く」を叫ぶ。人影は「通れ」の手振り。だがふり返りざま、エンツィアンの視界の端に、懐中電灯の光が捉えた——黒い顔面に雨が粒の粒子となって付着している。これはドーランで黒塗りにした肌だ。ヘレロの肌についた雨滴はこうはならない。

「ここでUターンできるか？」路肩が崩れやすいことは、ふたりとも承知している。野営地向かってなだらかにうねる低地が、一瞬あんず色の光に照らし出された。

「ちくしょう」ギアをバックに入れたウサギのヘンリックは、慎重に車をバックさせながらエンツィアンの命令を待つ。見張りは懐中電灯を持った男ひとりだったのかもしれない。

この先数マイル、敵が集結しているようにも見えない。しかし——

「見ろ」道端にうつぶせに倒れている男がいる。ミエチスラフ・オムジレだ。頭にひどい傷を負っている。「中に運べ、ほら」エンジンがかかったままのトラック後部にオムジレを運び入れ、簡易テントの覆いをかける。負傷の程度を確かめている余裕はない。顔を黒塗りにした歩哨の姿はあれつきり見えない。バックで戻っていく方向からライフルの乾いた音が連発するのが聞こえる。

「このままバックで突っこんでくんですか？」

「おまえには迫撃砲が聞こえたか」

「あれのあとですか？ 聞いてません」

「それなら、アンドレアスが破壊したんだろう」

「ああ、やつらのことなら心配ありませんよ、大^{シグアロレルエ}将、おれたちを心配してるんです」

オルチェネは死亡。オカンディオ、エコリ、オムジレは負傷し、そのうちエコリは重体。敵は白人だった。

「数は？」

「一ダースくらいですかね」

「安全な陣地を得るのは無理だ——」青白い懐中電灯の光が、震える地図の面を動き、楕円から放物線へと形を変える。「ブラウンシュヴァイクに行きつくまではな。そこに今も街があればの話だが」大粒の雨が地図を叩く。

「鉄道はどこです？」そう発言したクリスティアンの顔を、アンドレアスがじっと見つめる。関心があるのはお互いさまだ。他人への関心がこのごろやたらに高まっている。鉄道は六、七マイル北西を走っている。

隊が到着し、ロケットを積んだトレーラーの脇に荷物を降ろす。若木が斧で倒されてゆく。うち振るう一発一発が大きな音を遠くへ響かせる……骨組みが組み立てられてゆく。若木を曲げてつくった輪の上に大きな防水シートを張り、その下に衣服の束や、鍋・ヤカンを類を入れていくさまは、まるでロケット組み立てのシミュレーションのようだ。アンドレアスが呼びかける。「おとりの要員は全員、煮炊きワゴンに集合」手がポケットに入れ

たリストをまさぐる。おとり隊は急激な方向転換はせずにこのまま北へ進む——残りは東に折れて、ロシア軍のいる方へ戻る。充分に接近すれば、英米両軍にしてももっと慎重に動かざるをえないだろう。うまくすると両陣営のインターフェイスを進んでいくことが可能かもしれない。雷雨気団の端を滑るようにして……〈東〉と〈西〉の界面を、最後まで進みきることができるかもしれない。

アンドレアスの垂れた踵が後板を蹴テールゲートっている、ボン、ボン……出発の合図だ。エンツィアンは顔を上げる。何だろう、アンドレアスは何か言いたそうだ。やっ——「それで、一緒にいくのは、クリスティアンなんですか？」

「ん？」雨粒のたかったまぶたの下で目がパチクリ。「なんだ、おまえ、そんなことを」「どうなんです、おとりの方もうまくいくはずですよね？」

「いいか。そうしたいのであれば、おまえがクリスティアンを伴って行ってくれていいんだ」

「知りたかったですよ」アンドレアスは肩をすくめる、「どのように決まったのか」「それならおれに訊けばいいのだ。何ひとつ決まったりはしていないのだから」

「いや、あなたが決めるんじゃないにしても。ゲームを仕切ってるのはあなたでしょう。あなた自身は安泰かもしれないが、われわれの方はそれじゃやっていけないんです。この先どういう展開になるのかわかっていないと」

エンツィアンは膝について重い鉄のテールゲートをさし上げる。いかにもわざとらしく見えるだろうが、それは承知の上だ。自分はただ、この〈ゾーン〉で夜も寝ずに、死に向かう、苦痛に喘ぐ人間たち、大いなる〈屈従の民〉ヒューミリティの仲間入りをしたいと切に望んでいて

も、誰が信じてくれるだろうか？ 愛しい見捨てられた者たちと共にありたいと心から思っている——よそ者でありつつけるしかないことはわかっていても。……頭上でチェーンの鳴る音がする。テールゲートの縁が自分のあごの高さに来たとき、エンツィアンは見上げる。アンドレアスの眼を覗きこむ。エンツィアンの腕が重みで堅く締まる。ひじが苦痛に震える。これは捧げ物なのだ。エンツィアンは訊ねたい、おれのことを否定しているやつが他に何人いる？ このおれだけに見えていない運命があるのか？ だが、習慣となった動作はどんなときにも生きつつける。エンツィアンは両足を踏んばると、音もなく、鉄の重量をさし上げ、叩きつけるように上にはめる。そしてふたりでコーナーにボルトを差し入れる。「それじゃ、向うでな」エンツィアンは手を振り、くると向きなおる。ドイツの錠剤デゾキシエドリンを飲み、ガムの包みをあけて口に一枚ほうり込む。スピードが歯ぎしりを起こす。きしる歯でガムが噛まれる。ガムを噛むのは、先の〈戦争〉で女たちが考案した、泣かずにいるためのテクニクである。いや別離が辛くてのことではない。我が身が嘆かわしくなったのだ。みんながあることを信じるなら自分はそれを被るしかない。みんなの思いが強まれば、その分、こちらは屈するしなくなる。わが民は、可能とあらば、おれを潰すこともするだろう……

クツチャ、クツチャ、ふーむ、こんばんは、女性陣。いいぞ、リュビカ、その打ち方でいいんだ。クツチャ、ミエチスラフ、どうだ頭の容態は？ 連中はさぞかしたまげただろうな。弾丸をはね返したんだから、ヘッヘッ、クツチャクツチャ、やあ、"スパーク君"（とはオゾハンデのこと）、液体酸素の件でハンブルクから何か情報は？ オウルルのやつ、送信してこないと困ったことになるぞ、身を潜めていなくちゃならなくてケツがたまら

ん——うう、まいったね、誰がきたかと思えば——

ヨーゼフ・オムビンディ、〈空無派〉のリーダーだ。しかしその顔から笑みが消えるまでの数秒間、エンツィアンはそれをオルチェネの幽霊だと思ってしまう。「オカンディオの子どもも殺されたといううわさだが」

「デマだ」クツチャ。

「彼女はおれが出産をやめさせようとした最初の相手なんだ」

「で、いまも彼女に不吉な関心を抱いているというわけか」クツチャクツチャ。そうでないことは自分でも知っているが、この男には腹が立つのだ。

「自殺とは、最下層の人間にも享受されている自由だぞ。その自由をあんたは許そうとしないのか」

「イデオロギーはなしでいこう。訊きたいんだが、おまえの友人のオウルルは、液体酸素^{L.O.X}発生器の始動準備をするのかな。それとも、予想外の展開がハンプルクでおれを待っているのか」

「わかった、イデオロギーなしに訊こう。あんたは自分でも享受している自由を、仲間みんなには与えようと思わないのか、大佐、ングアロレルエ、どうなんだ」と言っていた、今夜息を引きとった男の幽霊であるかのように笑ってみせる。この男は、探り針で、彼をつついてゐる。どうなの？ え、何、何を言いたいのか、大佐？ だがようやく彼も気づく、エンツィアンの表情に表れた厭気に。それが引っ掛けではないことも理解する。「自由なのさ」、オムビンディは笑顔でささやく。これはラブソング——鮮やかな橙色に縁どられた黒い空の下で歌われる。新生児の靈魂が肉体に閉じこめられるのを嘆くカタリ派的恐怖

でいっぱいのコマーシャル。^{*20}「その自由をあんたもまもなく行使するかもしれないよ。あんたの魂が眠りの中で喋ってるのが聞こえたんだ。あんたのことなら誰よりもよく知っているのさ」

クツチャ、クツチャ、そうだ、こいつに当直リストを渡しておかなくちゃいけなかった。バカをしたもんだな。好きな夜を選ぶことができるじゃないか。……「おまえ、幻覚だろ、オムビンディ」脅えて狼狽している様子を適量、声に混ぜる——うまく行かなくても充分な侮辱にはなる程度に。「おれが抱えてる〈死の願望〉を、いま投射しているんだがな、それが、なんとおまえそっくりなんだ。こんなに醜いものだとは思ってもみなかった」と言って、〈宇宙人スマイル〉をたっぷり三十秒間浴びせかける。オムビンディは十秒で視線を逸らしはじめた。汗をかき、唇をギッと結び、地面を見て、向きを変え、また向き直って大将を見るが、今夜のエンツィアンは同胞相手に容赦はしない、なおも顔に〈宇宙人スマイル〉を浮かべ、半径一マイルをアイスクリームの色に氷結させてしまおうといわんばかりださあわれわれの気持ちがあんな揃ったところで、なにはともあれバッテリーの覆いを取りつけるってのはどうだい、ジューロ、そうさ、X線視力だよ、防水シートなど透視してしまふのだ、奇跡だな、そう書き留めておきなさい……ほら、ヴラスト、無電の監視は次はおまえがやれ、当直表はこのさい無視する。ハンプルクとのやりとりは型通りの通話以上のものが載ったためしがない。その理由を知りたい。オムビンディの同調者が当直に立ったとき実際にどんな言葉が行き交っているのかを……遠征隊の指令周波数だが、これは連続波のトン・ツーによっている——誰の声かばれることはない。だが専門のオペレーターともなると誰が信号を打っているかの見分けがつくという。ヴラストはもつとも

20 カタリ派は十二世紀から十三世紀を中心に南フランス等を中心に勢力をもったキリスト教の異端信仰。創世された世界を悪として見る程度が甚だしく、人間の肉体もサタンによる創造物と見るため、生きている間は邪悪な牢獄への幽閉が続く。オムビンディらによる、自殺のセールス（上巻607ページ参照）も、生命世界からの解放を勧める点では、相通じるところがある。

有能なオペレーターの一ひとりで、オムビンディ一派の打電スタイルなら、ほぼ全員、うまく真似ることが出来る。必要な場合に備えて、練習を積んできたのだ。

他の連中は、エンツィアンがいったいオムビンディに対して手を打つのかどうか長いあいだ気を揉んできたわけだが、いま答えは、彼の表情と足取りに歴然としている。――略帽のつばに手を触れる程度のサインで、計画の指示を送りさえすれば、オムビンディ一派は、しずかに、衝突もなく、今夜の当直から外れる。ただし、武器弾薬はそのままだ。それまで没収するというのは前例もないし、その理由もないだろう。エンツィアンにとって、この判断で討たれる危険が増すわけではない。いつだって危ない橋を渡っているのだ。

太っちょ少年ルートヴィヒが靄のなかで、ツチポタルになっている。少年はゲームをしていた。別の側に壮大な白人の軍隊が控えていて、自分はその偵察兵。ルートヴィヒのひとりで、高台から怒濤のような軍勢が押しよせ黒人たちを一つぶしにする。あとには地面に黒い汚れが残るだけ。でももう攻撃開始の合図は出さないことにした。それより、この行軍に、隠れてついていくのが楽しい。眼下で戦闘は起こらない。彼らの旅はルートヴィヒを含まない。どこか行くべき場所があるのだ。ついていくことに変わりはないが、行動は別、あくまで部外者としてだ。自分は「ゾーン」の波に揺られるだけ。それ以上でも以下でもない……



流れの上に架かった橋。頭上を渡る人や車はほとんどない。見上げると、円錐果^{まっかき}をつけた針葉樹の繁る斜面が、道の片面から黒々と上に延びていく全景が見える。木々は、自分らの土地が、地に根を下ろしたみずからの存在が、工学機械によって傷つけられたことに、哀しみの軋り声を発している。褐色の鱒が川面の下を飛ぶように動いた。橋の下には、ここにシエルターを求めた他の者たちが壁のアーチに書きつけた落書きがある。おれ^{オレ}を連れて行け^ミ、伸^{ストレッチ}、足^{フット}、何をぐずぐずしている？ もう最悪だ。あんたのもとには安らかな眠りがあるのだろうか？ それだけじゃないのか？ 後生だ。はやく来てくれ——ルドルフ・エフィグ二等兵 12日iv月45年[※] コマンド部隊のドーランで描かれた、花に見入っている男の絵もある。遠景に、それともサイズが小さいだけか、近づいてくる女らしき姿がある。女ではなく妖精のようなものかも。でも男はそちらを見ていない。中景に乾し草が積まれている。花は子供の陰唇の形をしている。空から輝きの顔が見下ろしている。その表情は仏陀のように満ち足りて安らかだ。その下に別の人間が英語でこう書きつけた——傑作！仕上げるべし！ さらに下に別の筆跡で、仕上がってるんだ、バーカ、お前も仕上^{フイニッシュ}がって

1 死神（＝白の翼王 Dominus Blicero）の渾名。グリの『ドイッ神話学』によれば、死は死にゆく者の足を引き伸ばすと信じられた。

2 戦争の最終局面。ハノーファー陥落がこの二日前。月末にはヒトラーが自害する。

3 単語当てゲーム。その単語に含まれるアル

るな。そばにドイツ語で、おれのハートのすべてをリーゼレに捧げた——姓名も、階級も、部隊名も、軍籍番号もない…… 他にはイニシヤル、ひとり遊びの三目並べ、そして、

GE—KAT— と謎の言葉が、綴りおえずに終わっている。ハングマンのゲームなのか

——首吊り男が、コンクリート・アーチのほとんど向こう端に描かれていた。道路は狭く、陰影の変化もないので、こんな早朝の時間でも見えるのだ。道ばたの草むらに自転車半分埋もれている。刈りたての乾し草の上で、季節はずれの蝶が一匹、まぶたのように白い羽根で、やたらにウインクして飛びまわる。坂の上では誰かが生木に斧を叩き込む……この場所で、いま、若い魔女が、ようやくヴァスラフ・チチェーリンの居所を突きとめた。

流れのほとりにチチェーリンは腰を下ろしている。落胆も平静さもなく、ただ待っている。勢いよく弾かれるのを待つピンボールの電磁石^{ソレノイド}といったところか。足音にチチェーリンは顔を上げ、女の姿をみとめる。昨晚以来、彼の眼に最初に映ったものがこれ。そのように彼女が仕掛けた。ゲリーの魔法が成功したのだ。一張羅のパンティの股のところを破りつつチチェーリンに見立てた人形の眼に、東洋風のうるんだ眼——ほんとは粘土に長い爪でざっと描いただけなのだけれど——に被せて目隠しした。そのとき唱えた呪文が——

あの人にあたし以外が見えなくなりますように。彼の瞳の中で、燃える愛の太陽が永遠に輝きますように。あたしのこの暗闇があの人を包みますように。神の聖なる御名のすべてにより——メルキデール、ヤホール、アナフィエルの天使らにより、偉大なメタトロンのによりて、あなたと、あなたのまわりのすべての人が、わたしの意志の通りになりますように呪います。

ファベット文字を言うとき、出題者はその文字の位置を示す。その単語にない文字を言ってしまうと、「処刑台と首つり男」を描く線が足されていく。このゲームの答えは GENERATOR か。

4 ピンボールのパンバーは、球がスイッチと なってソレノイドに電流が流れ、その磁力でワイアを引っばって球をはじき返すという仕組み。

5 A・E・ウェイトの「The Book of the Dead」に依って呪う者は、望みの恋人を手えられうる。ヤホール (Yahweh) もアナフィエル (Anaphiel) も、神メタトロンの化身と見なされる重要な大天使。

秘訣は集中にある。それ以外のすべてを排除すること——月も、杜松の林を吹く風も、真夜中の野をうろつく野犬も。ひたすらチチェーリンの記憶に、彼の移り気な眼に集中する。気持ちを盛りあげ、呪文のリズムに合わせてオルガスムスへの坂道を登っていく。そしてちょうど呪文の終わりで最後の「力の御名」を呼び終えたときに、絶叫が、指なしのオルガスムスが、指を天に差しあげた絶頂が重なるように。

その後に魔法のパンをふたつに割って、片方を食べる。もう半分はチチェーリンの分だ。そのパンをいま彼は口にする。水の流れは速い。一羽の鳥が鳴いている。

夕暮れ近く、恋人たちは草の冷たい土手に裸のまま横たわっている。コンボイが小道をこちらに向かってくるのが聞こえてくる。チチェーリンはズボンを引きあげ、土手をよじ登っていく——食べ物か煙草をめぐんでもらえるかもしれない。黒い顔が通り過ぎていく。ンバカイエレ⁶。興味深そうな一瞥をくれる者、疲労しきった自分のことで精一杯の者、あるいは00001号の弾頭部を積んだ幌付きワゴンに注意を集中したままの者。エンツィアンはオートバイを止め、ンバカイエレ、金属が埋まり、無精ひげの生えた白人の男に話しかける。二人は橋のまん中で、とぎれ気味のドイツ語で話す。チチェーリンはアメリカ煙草半箱とジャガイモ三個をせしめる。領きあうふたり——儀礼的ではなく、にこやかにでもなく。エンツィアンはバイクのギアを入れ、遠征隊に戻る。チチェーリンは煙草に火をつけ、道行く隊列を眺める——薄暮の中で身体を震わせながら。そして流れのほとりで待つ若い女のもとへ戻る。夕闇が閉じる前に、場所を決めて火を熾さなければならぬ。

これは魔法だ。しかしだからといって、幻想だとは言いきれない。夕闇が迫るころ、ふ

6 「われは過ぎゆかれた」という意味のヘレロ語。上巻686ページに既出。チチェーリンの弟殺しへの執着は、ここで過去のものとなった。

たりの男が出会いながら、兄弟だと気づかず、それっきり、通りすぎてしまうというのは以前にもあったことに違いない。



いまや〈都市〉の高層化はとめどなく、エレベーターでの移動もたいへん長丁場となる。^{*1}

中はラウンジになっていて、座席やベンチのすわり心地も快適だ。スナックバーやキオスクもあって、昇降中に『ライフ』誌の拾い読みができる。中に入ると一番にキョロキョロと安全検査合格証を確かめようとする小心者の気持ちを楽にするために、若い女性の乗務員もおいていて、緑の楔形帽子に、同じく緑のビロード・ジャケットと、先細りの黄色いストライプ入りスラックスという（ズートスーツの女性版ともいうべき）いでたちで、みっちり仕込まれたエレベーターの教養を披露し、乗客の不安を除いてくれる。「初期の時代には」と、イリノイ州カーボン・シティ育ちのミンディ・ブロスが、何千ものぼやけたダイヤの垂直に通過する真鍮のモアレを背景にして、その横顔に空虚なスマイルを連発させながら甲高い喉をふるわす——ミンディのいまだ成長途中の顔は、タロットの杯のクイーン^{*2}みたいなドリミ^ミかつ実際の、きみの方を直接見たりすることはない。金褐色のラウンジ内で、常に視線を一定の角度で屈折させる……現在は朝で、エレベーターの後方、小さな噴水から一、二歩下がったところで花屋が咲きたての瑞々しいリラやアイリスを差

1 『重力の虹』の最終セクションは、これまで数度にわたってメイン・テキストに織り合わされてきた未来都市の描写で始まる。特定の思考が抑圧される、ディズニークラウド化されたここは、二十一世紀の読者には、すでになじみのある場所かもしれない。

2 杯を見つめる姿で描かれ、知性も幻視の能力も高い良妻賢母とみなされる。

「たぶん、このようなくらいの騒動が起る以前、交通というものは事実上二
次元に限られておりまして、あ、あなた、おたずねになりたいことがありますね——」
この常連の客やかし客との間に、親しげな、屈折のない笑み——「飛行機があつたじや
ないか、あれはなんなんだ」とお訊きになりたいんですね——その客、ほんとうはロケッ
トのことをたずねたかった。誰もがそれを知っている。ところが、なぜなのだろう、ロケ
ットの話はタブーなのだ。で、丁重さは崩さぬままにミンディさん、現実の暴力の契機
を、御庄というヴァイオレンスを持ち込んだ——朝日の向かい側に広がる九月の朝の、そ
の漂白された力を、肌をこする朝風のエッジを、このくつろぎの乗物へ持ち込んだ。空間
を上へ上へ抵抗なく上昇するエレベーターは、スローな照明でまわり中をグリーンに照ら
したカステイル液体石鹼の中を昇っていく一個のバブルのよう。越えていく階には、早
くも群れている人々の頭が、海中に輝く精子と卵子よりも明るく見える、と思えば、明か
りのない、ヒーターもない、立ち入りを禁じられヤケに荒廃した階をいくつか過ぎゆき、
「戦争」以来誰も降りたことのない階を通過しようとしたそのとき、アアアアアッ
ッ——という咆哮^{ハウリング}。「これは、ありふれた航空力学上の効果でありまして」、ミンディが執拗
に説明する。「わたしたち自身の境界層とパスしていく穴の形態との——」「それ、まだ
行きつかない穴」の意味だろう?と、別の客やかし屋がわめく。「穴の形がちがうのか
なり?」「そう、通過後の穴も同じですわよ」ミンディは突っこみを軽くないなし、大きく口
を動かしながら、唇をすぼめ、ゆるめ、ほほえむという一連の動作を続ける——その間に
も、通過階にギザギザに空いた穴たちは咆哮し、そのハウル音をみじめに引きずって落ち
ていく。きみの靴底から何階分も下に行ってから、ブルース・ハーモニカのように音程を

3 ロケットのような
高速で空中を進むもの
の周りにできる、100ペー
ジ 20 参照。

スライドさせる——だが、雑踏でこった返すフロアを過ぎてゆくときは、どうして同じ咆哮が聞こえないのか？ Xファスの週のパーティのように暖かなライトを受けて、ガラスの切面やスクリーニングが豊かな光の濃淡を演出して、きみを手招きするフロアだよ。ゴボイボと陽気な不平をこぼすコーヒー沸かし。まいったなあ、これできょう一日が過ぎてしまふ、ようマリー、あんたらSG-1に描いてあった図をどこに隠してるの？……どういう意味よ、〈フィールド・サーヴィス〉が持つてるわよ……またかよ？ 〈エンジン・アリンダ・デザイン〉は何の権利もないのか？ これじゃまるで、自分の子どもが家を飛びでていくのを眺めてるようなもんじゃないか——〈フィールド〉〈デア・ヴェルト〉に、一個の装置が配備されるのを見にいこうって駆けていくのを。そうなんですよ。胸が裂ける、母の祈り。……ゆっくりと、リユーベック・ヒトラー少年合唱団の歌声が背景にフェード・イン（今日では、少年団員たちは「ザ・リーダー・ホーゼナーズ」という名前で、〈ゾーン〉中の将校クラブを回っている。名前にふさわしい恰好をし——場の雰囲気が大丈夫そうなら——聴衆に背を向けて、肩ごしにイタズラっぽいかわいい顔を見せて、戦士らを挑発する。

母の涙にまさる痛みよ

鞭のひと打ち、ママのひと打ち

右に左に、見事に揃ったお尻のクネクネ。革のズボンがピチピチで腿を動かす臀筋の動きがはっきり見える。これを見て騒がない股間は、きつとこの会場にひとつもあるまい。こ

4 「SG」といえば〈Sゲレート〉とも呼ばれた〈黒装置 Schwarz-beta〉が想起される。

5 Welt II 「フィールド」を意味するアフリカ・リンズ語で、アフリカ南部の草原を意味する。ドイツ語の Welt（世界）と同音で、おそらく掛詞として受けとってよいのだろう。

6 ドイツ語で「革のズボンを穿いた者たち」の意。

これらの尻が剥きだしになり、母親の棒ムチを浴びるところを想像しない御仁もまずいるまい。甘美な赤い筋、美しくも厳格な女性の顔が、振りおろす鞭を通してほえんでいる。その眼が一瞬だけキラリと輝く——きみがハイハイを始めたころ、おかあちゃんのふくらはぎと足ばかりが見えていた——それまでオッパイが力の源泉だったのが、革靴の匂いを覚えて変わったのだ。その統治の匂いが、きみの視線の及ぶかぎりママの膝へ、そして——その年のファッション次第で——太腿へ。革の脚と、革の足が支配するその前で、きみは無力な赤ちゃんだった……。

「どうだろう」ひそひそ声でタナツが言う、「この定番の幻想を、人は母親の膝で習得したというのは、ありうる話だと思うがね。脳内のフラシ天のアルバムに、いつも小公子の恰好をした子どもの写真が収まっている。鞭を乞うフランスのメイドと」

タナツの手の下で、ルートヴィヒは自分のやや大振りのケツをうごめかす。どちらも踏みこえてはいけないおのれの領域を持っている。それでもふたりはこっそり近づき、一つの小さな界インターフェイス面を持った。冷えこんだ藪の中——その中央を叩いてつぶし、横になる場所をつくった。「なあルートヴィヒ、ちょっとばっかSMごっこをしても、別にどうなるわけでもないって」

「そんなこと、誰が言ったの？」

「ジークムント・フロイトかな。知るかよ。しかしな、この話題になるだけで反射的に恥を感じてしまうように教え込まれるのはどうしてなんだろうな。他の性行動は許されても、これに限ってダメだという〈構造〉に、なぜなっているのか。それはな、服従と支配こそがそれを存立させる源泉だからさ。それを私的なセックスで浪費するのはまかりならん、

というわけだ。私的であろうとなかろうと、セックスで使ってはいかん、とね。権力を掌握できるのは、おれたちの屈従があつてゆえのことだからな。権力のゲームに巻き込むには、支配されたいという欲望をおれたちがたっぷり抱えていられる必要がある。歆びじやなく、権力を得んがためにな。もしSMがまんべんなく行きわたるようになれば〈国家〉も力を失って消えていくだろうよ」

これが、タナツの提唱するサド・アナーキズム理論。近ごろの〈ゾーン〉で彼は、その主導者と目されている。

舞台はいよいよリユーネブルク・ハイデ。昨夜ここで、燃料と液体酸素のタンクを携えたグループがランデヴーした。尾部運搬のグループは午前中ずっと無電で連絡を入れ、位置の画定を試みたが、それには空模様の安定を待つしかないようだ。00001号の組み立ては地理的な側面を持っている。これはいわば、逆向きのディアスポラであり、離散していた種子が万有引力で内側へ向かつて結集することのささやかなプレビューであり、救世主が落ちた火花を集めることの予行演習である。・・・クレプラハ嫌いの^{*}子の話を憶えているかな。嫌悪を超えて恐怖を抱き、クレプラハを目にしただけで緑色の発疹を起こす、全身に立体地図のようなブツブツの盛り上がりがある、所を変えながらできるのである。母親がその子を精神分析医のところへ連れていく。「未知のものに対する恐怖ですな」灰色の大物が診断をくだす。「クレプラハを作っているところを見せてあげれば、しだいに慣れてくるでしょう」帰宅後の台所。「さあ、ママがビククリするほどおいしいものをつくりますからね!」「ワイイー! ヤッター、ママ!」と喜ぶ子供に、「いいですか、まず小麦粉と塩をふるいにかけて、小さなお山を作ります」「何つくるの、ハンバーガー? ヤッター

7 民族離散を意味する「ディアスポラ」は、パレスチナの地から世界に散らばったユダヤ人と共に、アフリカ大陸から南北アメリカに連行された黒人たちについても用いられる。

8 ユダヤ人が安息日等に食べるワントンのような食べ物。

「——ハンバーガーのお肉と、タマネギね。こうやってフライパン、ほら、いためますからね——うわあ、おいしそう、待ちきれないよ。今はなにしてんの?」小麦粉の山に火山の口をあけて、卵を割って、中に入れて「かきまぜるの手伝おうか? お、すごいや!」「それを平らに伸ばしまーす。ほらベッタニコになったでしょう。そしたらこれを四角に切って——」「いけいけ、ママ!」「スプーンでお肉をすくって、この四角いのはさんだら、三角に折りたた——」「G A A H H H H!」男の子が叫ぶ、真の恐怖に襲われて——「クレブラハだ!」

この世には、ジブシーに伝えられて歴史による離散を免れた秘技もあれば、カバリスト、テンプル騎士団、薔薇十字会に託された秘儀もある。それと同様、このへ畏るべき組み立ての秘技の類は、あれやこれやの民族ネタ・ジョークに紛れて、時の侵食から身を守ってきたのだった。タイロン・スロースロップに関する話もあって、この男は自分自身の組み立てに立ちあうために「ヘゾーン」に送り込まれた、というのだ。語り手の思い入れが激しければ、声をひそめて、彼の時の再統合、と語っただろう。この話、ユーモアで締めるパンチラインがあるかと思うと、さにあらず。計画はうまく行かず、スロースロップは組み立てられるどころかすっかり解体され、散布される運命をたどる。そのことはタロット・カードでも示されている。A・E・ウエイト氏が説く「ケルト十字法」にしたがって並べられ、解説されたのだが、出てきたのは落ちこぼれやドジな野郎のカードばかりで、それらが指し示すのは、いつまでも諍いの絶えない未来、そして平凡な人生（これはスロースロップの当人だけじゃなくて、エヘヘ、それを語る者たちの人生にもあてはまりそうだ。シグニファイター^{※10}のカードに被せるカードとして——それもやり直しの後——ペン

9 「脱自己化」するにつれて、意識の時間幅も狭まり、ついにはオルフエウスのようにバラバラになって山野に散った様子が描かれてきた。

10 薔薇十字団やフリーメイソンについて、魔法、カバラ、錬金術について多数の著作を残したオカルト学の権威。

11 十枚のカードを並べる古来のスタンダードな占い方。

12 「ケルト十字法」ではまず、占うべき人物を表すカードを選んで、輪の方を上に向けて縦に置く。このカードを英語で「Knights」と呼ぶ。ここでは「象徴カード」と訳す。

「ワタシの心を逆さに引くようにして、テレビにでも戻った方が良かったです。」（マケシ&イチジク・シヨート）のも度目の再放送を観て、憐草を吸って、みんな忘れてしまえって——はきりと幸福が示されるとか、破壊の後に贖いが来るとか、そういう展開には決してならない。望みのありそうなカードはことごとく逆さに引く。なかでも情けないのは、そもそもが逆さに吊るされた「ハングドマン」が、彼の隠れた願望と恐怖を示すところだ……

「ドクター・ヤンフなどもともと存在していないのです」世界的に高名な分析医のミッキ・ワクスストーリーはワクスストーリーが自説を述べる。「あれはフィクションです。ロケットが空中で爆発するたびに、それを自分の性器で直接、あまりにも痛切に受けとめてしまう、その悲愴な感覚を説明するために、こういう人物をつくり出したわけです……ヤンフという存在を指定することで、おれは死に恋をしているのではないか、人が死滅していくことに性的な興奮を覚えるのではないかという、到底認めがたい疑念を否定することができませんから」

「これら初期のアメリカ人たちは、それなりに、粗野な詩人の側面と、精神的な欠陥とを併せもつ興味深い存在でした……」

「われわれはスロースロップ自身に特に関心を持ったわけではない」ヘカウンターフォー・ス」のスポークスマンが先日、『ウォールストリート・ジャーナル』誌とのインタヴューでそう認めた。

インタヴュー……ということとは、スロースロップはむしろ団結を促進するものとしての意味合いが強かったと……

スポークスマン……いや、その意味さえなかったな。われわれは当初から、意見が割れて

13 「……に読……
載されている……」
The Political Key to the
Text (一九……)の説
明では、「仕事も他も平
凡、幼稚、心の狭さ、弱
さ」を示す。シグニ……
ターキーを覆うように興
向きに置くカードは「障
害」を示す。逆さまだと、
その否定的な面が強調さ
れる。

14 「願望と恐怖」を示
すのは、九枚目のカード。

15 スロースロップの
解体とともに、小説の時
間は一九四五年の枠組み
を離れたようだ。（ゾー
ン）の出来事が神話や象
徴として「読まれる」時
間は、この小説が書かれ、
読まれる時間に属する。

いたんですよ。それが、われわれの致命的弱点のひとつでした「という」と、他の弱点が何なのかと、訊きたいんですよが」。ある一派は、彼のことを「口実」と呼んだ。別の者は、彼がどの点においても真正に宇宙そのものを映しだしている小宇宙ミクロコスモスになっていると感じていた。彼らミクロコスモスたちは、標準の歴史を見ても想像できるとおり、早まった行動を起こしました。われわれはどうかというところ——まああれは非常に変わった異端の追跡だったですね。夏の北海沿岸、風車の並ぶ低地の野で、あるいは満足な光を得るのも苦勞するような沼地で、追いつづけた。クリスティアンが古い目覚し時計を見つけたところがありました。それから例のラジウムを掘りだして、鉛錘の糸のコーティングに使いました。薄暮の中で、糸が輝やくんですよ。彼らが重りを垂らしているところ、見たところがあるでしょ。彼らは股のあたりに両手を当ててるんで、五〇メートル先で黒い人影がぼわっと光る小便を垂れているように見える……新米をからかうのに、よく「おい、幽霊が小便してるぞ」って言ったもんです。ヘラケーテン・シユタットのチャーリー・ノールノールといたところですかね。……「たしかに。洒落た言い方に走ってるがね。彼らのことを、洗いざらい話してるのさ……あんたのところの編集長が何を聞きたがってるか、知っててそれに答えてるんだから最悪だね。ああすっかりお見通しさ。わたしは裏切り者だ。保菌者だよ、あんた方のウィルスの。あんたと同じや「腸チフスのメアリー」メアリーを市場や駅に遣わして勢力に菌をまき散らしてるだろ。われわれは待ち伏せしてたんだよ。何人かを地下鉄でキャッチした。大変な思いをしたよ。あれが自分の最初のアクシジョンで、いわばイニシエーションだった。真っ暗なトンネルを追っかけるんだ。相手の恐怖が感じられたよ。トンネルの分岐点に出ると、地下鉄の音響に頼って進むしかないんだが、これが全

16 ハーマン・メルヴィルの小説『信用詐欺師』(二八五七)の主人公の名でもあるが、『GRC』の註は、戦争中および占領下の欧州で工兵大隊を指揮した Charles C. Noble (通称 Chuck) を指すとする。彼は後にマンハッタン計画に関わり、軍と研究者をつなぐ要人として、冷戦下の西ヨーロッパ安全保障計画に関わった。

17 メアリー・マロンは腸チフス菌の健康保菌者(不顕性感染)で、二十世紀初頭の七年にわたりニューヨーク内外を転々としながら料理人として働き、発覚するまでに多数の客を感染させていた。

然当てにならない。方向感覚を失ってしまいそうになる。光はほとんど見えず、レールが微かに——地上で雨の夜に道路が光るみたいに——光るだけ。そのときだよ、ひそひそ声が聞こえたんだ——待っているいくつかの人影、保線ステーションのところで、それぞれの角度で、壁に背中をつけて、追跡シーンを眺めてる。「終点は遠すぎるよ」と彼らが言う。「戻りな、この支線に停車駅はないんだから。なんでもない芥子色の壁が何マイルも続く、そこを電車と乗客が止まることなく通りすぎる、長い午後の走行があるだけだ……」ふたり逃がした。残りは捕まえた。二つの駅のマークの間でね、^{グリス}油と通過だらけの歳月に黄色いクレヨンでつけたマーク、1966から1971までの間に私は最初の血を舐めたんだ。いまの話も入れときますか？」敵の血を飲んだわけだ。グノーシスの一派がかくも追いまわされるのはそれが理由。聖体拝受の秘蹟ではほんとうに敵の血を飲むだろう。聖杯は、サングラール、¹⁹といって血まみれの容器であるわけだ。そうでなかったらあれほど神聖視する理由がない。黒の儀仗兵が大陸の半分もの距離を、ずたずたに裂かれたヨーロッパ大陸を、石の夜も冬の日も、進んでいくだろうか。ただの杯に甘美な唇をつけるだけのために？ そうじゃない、彼らはモータルな罪²⁰を運んでいる。敵を飲むんだよ、飲んだ血は体内のジュース²⁰で搾りにとって全細胞で吸収する。あんたたちが公式に定義した「モータルな罪」とはそれだろう。それってあんた方に背く罪だよな。あんた方の刑法の一項目に過ぎないんだが「真の罪はあんた方の犯している罪だ。その統合を阻止し、線引きをし、われわれを敵以下と見なして、疎外し続けている。結局のところ、われわれはみんな同じ苦層²⁰にはまっただけなのに。」

われわれは敵の血を飲んだのだ。友の血を、愛したんだよ。」

18 因みに一九六六年から一九七一年は、欧米や日本で諸体制に対する「カウンターフォース」が盛りあがった時期と対応する。同時にそれは『重力の虹』の主要執筆期間でもある。

19 聖杯の語源は、古フランス語に由来する *beal. Sangreal* は、語源的にも「血杯」である。聖杯信仰はアーサー王伝説に留まらず、カタリ派、テンプル騎士団、フリーメイソンといった（おおまかに言って）グノーシス主義の流れをくむ一連の信者によって、その「実在」が信じられた。この「スポークスマン」は、684ページで紹介されるステイヴ・エーデルマン。上巻598ページにも彼の本からの引用があった。

アイテム番号S-1706・31、合衆国海軍支給のアンダーシャツの一部、左下から右上方にかけて刀剣の形と思われる褐色のしみ有り。

右の脚註は、〈メモラビリアの書〉^{*21}にはついていない。その布切れをスロースロップに^{*22}渡したのは、船乗りボーディーンで、ある晩、ヘシカゴ・バー^{*23}での出来事だった。その晩はある意味で、ふたりの出会いの場面の再現のようだった。ボーディーンはギターのネックにはさんだ太巻きのマリワナ煙草をくすぶらせながら、哀悼の歌を歌ったが、それは半ばロジャー・メキシコの歌、あとの半分は戦時下のサンディエゴに停泊を余儀なくされた、名も知らぬ水夫の歌のようであった――

昨週、だれかのママにパイをぶつけた
昨晚、おれの心のためにパーティをした
気がつきや頭上で六時〇二分が叫んでた
いや、十一時五九分だったっけ……

「リフレイン」

夜の街、金網フェンスが多すぎて
雨の中、震えているヤツ多すぎて
聞いたぜ、おまえ、赤ちゃんできたか

20 神字でいうところの「死に値する罪 mortal sin」とは、神の赦しがないかぎり当人を地獄へ落とす大罪のこと。

21 「メモラビリア」とは「記憶に留めておくべきこと」の意。散逸するスロースロップについて書き留めた書なのか。

22 キリストの「聖骸布」が想起される。

23 と同時に、『V』の冒頭でベニー・プロフェインがビッグ・ボーディーンに会うシーンの再現のようでもある。スロースロップの解体と同時に、作者自身および過去の作品からの混入が始まったのか。『スロー・ラナー』の序文(19ページ)によれば、ビッグには実

もう会うこともないだろう

ときには北へ帰ってみたい。ハンボルト郡の森の中——^{*24}

ときには東に帰ってみたい、くにの家族の顔を見に……

沈みきったおれのハート、少し浮かせてくれるかな。

たまにはおれを思い出すって、わかるだけでいいんだぜ。

ボーディーンは「サイレンリング」——朝食シリアル*25の箱のふたと引き換えに子供たちに送ってくるやつ——をうまいこと尻の穴にはめていて、好きなときに一定の強さの屁を鳴らすことができる。曲の区切りに、ヒューイイイ——ッ、と屁音の伴奏を入れる。これになかなか熟達し、いまは屁の音程を合わせる技術を習得中だ。神経系に耳——脳——手——オケツを結ぶ、新しい反射弓が形成されつつある。それが同時にイノセンスへの回帰をもたらししている。今夜の取り引きの動きが鈍いのは、みんなおれの歌に聴きほれているからだろうと、感じやすいボーディーンは思っている。そうかもしれない。新鮮なコカの葉が詰まった梱がアンデスから入って、今ここは音の響きも伸びやかな、革命前夜のラテンアメリカの倉庫のようだ。といっても、革命はいつも遠くに見えるだけだ——窓辺に長いレースが揺れる午後など、ときどきトウキビから煙が上がる、空を汚すその煙より近づくことはない。……路上の子供らは、働き者の小人のような動きでコカの葉を巻いてビンロウジの実を、小ぶりで噛みごろのサイズに包んでいる。赤く染まった子供たちの手は、影の世界で耐えることなく燃え続ける生命の残り火だ。船乗りボーディーンは急に顔を上げた。

在のモデルがいた。

24 北カリフォルニア。後にこの郡をモデルにした場所が、『ヴァインランド』（一九九〇）の舞台となる。

25 一九四〇年代に西部劇俳優のトム・ミックスを看板にしてラルストン社が出していたシリアルの景品。多孔の笛が指輪についている。

狡猾なその髭づらに、蔓延する部屋の煙と無関心がうちかかる。彼が見ているのはスロースロップだ（いまなおスロースロップを、バラバラでない一個の存在として見ることできるのはボーディーンだけ。他のみんなは、彼をひとつに——ひとつの観念にすら——つなぎとめる努力をだいぶ前にあきらめてしまった。「あまりに遠く離れてしまった」というのが彼らのいつものセリフである）。ボーディーンはどうなのだろう？ 自分の力もいつかは及ばなくなってしまうのか、じきに、他のみんなと同様、スロースロップを手放さなくてはならない日がやってくるのか。だめだ、誰かがふんばらなくては、われらの全員が失格だなんて、そりゃちっと惨すぎる……ロケットマン、ロケットマン、このグータラ野郎。

「おい、いいか、これを受けとってほしい、わかるか？ これはおまえのだ」 コイツまだ聞くことができるんだろうか？ この布切れ、このシミが見えるんだろうか？

「いいか、あの男を彼らが待ち伏せしていた晩に、おれはシカゴにいた。あのとき、パイオグラフ劇場の通りのすぐ先について、銃声から何から聞いたんだ。フン、おれはまだ海軍の新兵で、この国の自由ってのはこういうことか！ と思って、走っていったね。シカゴの人間の半分が集まった。酒場から、トイレから、横町からみんな出てきた。女たちは速く走るのにスカートをたくし上げてさ。クロドブリーのおかみさんもいたぜ。大不況時代からずっと飲んだくれてたんだが、朝日が射すと走り出した。たまげたねえ、グレイト・レイクス^{*27}の同期のやつらも半分来ていて、青の制服に、おれと同じベッドスプリングの痕をつけている。ベテランの淫売もある、あばた顔^{*28}したホモも、機関いじりの手袋をひっくり返したみたいな臭いをさせてる、ヘザ・ヤーズ^{*28}の裏のスラムから来たバアさんもいる、

26

227 ページ註20参照。

27

イリノイ州ノース・シカゴにある海軍の新兵訓練施設の名。

28

シカゴの「ユニオ

映画館から走ってきて腿に冷えた汗の玉っころをつけているお嬢ちゃんも、みんないるんだぜ。で、何してるかっていやあ、服を脱いだり、小切手帳をやぶり取ったり、他人の新聞をちぎり取ったりだ。何のためかって、ジョン・ディリンジャーの血がほしいんだ。少しでも吸い取ろうって、みんな熱狂してた。捜査官も止めようとはしねえ。通りに流れた血の上によ、みーんな折りかさな^{たか}って集ってるっていうのに、その鼻面から煙草の煙をく

ン屠場」の通称。

ゆらせてつつ立ってる。だけど、おれもただ一緒に動いてただけで頭は働いてなかったんだが、それがすべてじゃなかった。何か別のこと——おれにとってすごく大事なことがあったんだろうと思うんだ……おい、話が通じてるか……これを、おまえにもらってほしいワケを話してるんだぞ、わかったか？ これはディリンジャーの血だ。おれが手を伸ばしたときはまだ温かった。へかれらへは、ディリンジャーをただのゴロツキだと思わせようとしたが——やつら、ほんと頭が狂ってるぜ——それでもディリンジャーはやることをやった。へかれらへを襲った。彼らのクソ銀行をだ。便所の中でカネまみれになってるところを襲ったんだ。そのとき、やつが何を考えていたかはどうでもいい——やったことの妨げになりさえしなきゃいいことだ。おれたちが今なぜここでこうやってるかも、どうでもいいことだ、え、ロッキー？ そうさ、おれたちに必要なのは、正しい理由なんかじゃない。グレース^{*29}があるってこと、そこが重要なんだ。物事をスムーズに進める、目に見える優美さがな。勇気とか、頭の良さも悪いもんじゃないが、しかしグレースがなきゃ、何にもならない。おまえは——頼むぜ、聞こえてるのかよ？ これ、これは効き目があるぞ。ほんとだ。おれの役には立ってくれた。だが、おれはダンボの段階は卒業したから、こいつがなくとも飛べる。だがロッキー、おまえは要るだろ、ほら、こいつが……」

29 人間の自力では獲得できない、神や自然の恵みを必要とする「優美さ」。

ふたりはそれっきりになったわけではない。しかし後の出会いには、いつも誰か、じやまが入った。ヤクでおかしくなったヤツが出たり、不正取引が発覚したり見破られたりの騒ぎになったりで、ボーディーンは、恐れていたとおりになってしまった。面目ないが仕方ない。スロースロップをひき留めきれなくなってしまったのだ。彼の視野の及ぶかぎり、白のネットワークに覆われようとしている今、ボーディーンも急かされるように、その布を苦痛と死の表徴として理解するようになった。このところトゥルーディとふたりで過ごす時間が増えたのは、友達のマグダに、第一種の鬱症状が出て、レーヴァークーゼンの街^{*30}に引きこもってしまったからである。雑草が繁茂する奥の中庭では頭上を這う電線がパチパチと唾を吐き、埃だらけの煉瓦の割れ目から雑草が吹きでて、鎧戸はいつも閉まり、足下の草たちは、最悪の味わいを持つ秋のフロアに転じている。日によっては、風がバイエルの工場からアスピリンの粉ぼこりを運んでくる。人々はそれを吸いこみ、より以上に鎮静される。

マグダの不在はふたりとも痛く感じている。ボーディーンの特徴的に気色悪い笑い声は、「グヒッ・グヒッ」からドイツ語風の「チヒッ・チヒッ」に変化しつつあった。そればかりか彼は、マグダ愛用の変装道具まで身につける。変装といっても、仮装舞踏会でやるのと同じ、すぐに見破られる気さくな変装だ。気遣いの装いが、服装倒錯の形をとった。彼の人生でも初めてのことである。まわりはみんな取引で忙しいので、訊く者はないが、ボーディーンは自分でそれを、これでいいのだと思っている。

空の光が透明に伸びる、最初二回ほど引っぱった後のタフィーの感じそのものである。

30 ここに本拠を置く
バイエル社もIGファル
ベンの一部だった。

ある。さもなくば、煙突を下る声たちか、通りをうろつく人影か。「異常な死を確実に遂げられるようにすることが、生きる目的である。どこで死に遭遇しようとも、そのとき自分が、とても異様な状況にあるということ。そのような人生を生きること……」

アイテム番号S-1729・06　メイワイン7cc入りの壺。分析の結果、クルマバソウのハーブ、レモン、オレンジの皮を抽出。

別名「森の主」といわれるクルマバソウの小枝は、古代テュートン族の戦士が身につけていた。戦いに勝利をもたらすものとして。ニードーシャウムドルフの繁華街の真ん中である晩、分散したスロースロップの一部と、無断離隊中のジャバジェフとが出会ったとの報告あり（スロースロップの断片がそれぞれの人格へと成長したと信じる者もいる。それが正しいければ、今日の「ゾーン」の人間たちのうち、誰がスロースロップがばらまかれてきた者なのか、知る由もないだろう。彼の最後の写真といわれるものが、英国のロック・グループ、ザ・フールがリリースした唯一のアルバムにあるそうで——ミュージシャン七人が、イースト・エンドかテムズ南岸域の、古いロケット弾落下跡で、初期のストーンののような傲慢なスタイルで写っている。季節は春、崩れた壁と煉瓦の真実を緑のマンツトが覆い、その上にフレンチタイムが目を見張るような白いレース細工をかけている。七人のうちどの顔がスロースロップなのか、知る手がかりはなく、彼が関わっているようなクレンジットも、「ハーモニカ、カズー——友人」という記載に留まっている。しかし彼のタロットを知るわれわれは、探すべき場所を知っている。彼が「屈従の民」の間に、灰色の

31 直訳すれば「低地村」。低地の河口にたまる泡のイメージか。

32 和名タチジャコウソウ。二十センチから四十センチほどの丈で白い細かな花をつける。

33 偶然か否か、このバンドは実在し、一九六九年にグラハム・ナッシュのソロデビューで彼らの唯一のアルバム、タロットの図柄をあしらった

見捨てられし者たちと共にいることを。天空から憎しみの光を浴びて、暗黒の海の中を漂う姿を探せばいいことを……)

今夜はもう、平原の上空に、侘びしい日没の長いキャッツアイがあるだけだ。紫色の雲の天井を背景に明るい灰色の目にダークグレイの虹彩が見える。それが、ジャバジェフとその仲間の集会を見下ろしている、というよりは、背景に展示されているといった感じ。この町で奇妙な大会が催されていて、ドイツ中のあらゆる地から、村々の阿呆が流れてくる(その口からハイピッチの色の筋が流れ出て、それがそのまま消えないので、彼らの通った跡に残った色跡を住人が指で差している)。阿呆たちは、グレイト・ブリテンに、イギリス連邦の一員と認めるよう要求し、なおそのうえに国際連合への加入の申請をするよう求める決議を採択する。教区の学校に通う子どもたちは、阿呆たちの成功のためにお祈りをするよう要請されている。十三年におよぶヴァチカンとの協力関係は聖なるものとそうでないものの区別を明確にしえたのだろうか? 今宵あらたな国家が生まれつつある、その誕生には劇場的で祝祭的な面もある。今宵はメイワインが行きわたるだろう。ジャバジェフが数リットルを工面してきた。村の阿呆たちに祝わせよ。阿呆たちの聖なる光が波紋をなして広がってその干渉パターンで集会所のランタンの光をふさいでしまえ。コーラスラインは英雄的に踊れ。ぼろ衣の主役は十六人のオールドタイマー。舞台でシャッフルを踊りまくり、みな一斉にベニスをこすり、六尺棒³⁵に擬したベニスを振り、あちこちで二、三人がもつれながら枝葉のついた棒を振りまわし、目に余る下疳と外傷をさらけ出し、精液を噴出しては血の筋入りのゼラチンをズボンのひだの上に垂らす。埃色したジャケットからポケットが六十女の乳房みたいに垂れ、素足の踵には小さな広場や寂れた通りの土ぼ

The Hunt を出している。たしかにハーモニカの音に特定のクレジットはない。ちなみにアルバム三曲目の曲名が「レインボー・マン」。

34 ナチス政権樹立の一九三三年から四五年の崩壊まで、ローマ教会は「中立」を保ち、ナチス・ドイツに批判的な行動をとらなかった。

35 quartersticking はイギリスの古い武道競技で使われる六フィートから九フィートの長さの木の間棒。

こりが永遠に付いたままだ。喝采せよ、座席をバンバン叩き、兄弟愛の唾をとばせ。今夜ジャバジェフとその一味は、ニードーシャウムドルフ唯一の医者 of 自宅に乱暴に押しつけて（連携などあってなきがごとし）、特大の皮下注射器を盗み出した。それでワインを射つのだという。こちらへ向かうバトカーだっているかもしれない。道路のずっと先のどこかで誰かの野性の耳が、延々と夜道を走る占領軍のコンボイの響きを聞きとっているかもしれない。視界を越えたその先に、ヘッドライトの散光が弱まり消えるその先に、かすかに伝わる轟音は危険を伝えるシグナルだ。それでも依然、人垣の輪は崩れない。何が起ころうと、ワインはそのはたらきを全うするのだ。眼がさめたら、手にナイフを握っていたことはないか？ 頭をトイレの中に突っこみ、ぼやけて映る長い棍棒が今にもきみの上唇を直撃しようとしている、そのままきみは古く赤く毛細血管が縦横に走るまどろみの中へ落ちていく、こんな暴力は絶対起きない世界へ、そしてまた女の悲鳴に目をさます。そしてまた、溺れるときにも眼も耳も凍りつくような運河の水の冷たさで、空を降下し近づいている圧倒的な数の〈要塞〉によって、何度でも何度でも目をさます。・・・だが、いつまでも、本当には目を醒まささない。

ワインのもたらす幻覚なのだ。ワインの至福は重力を拒む。ロケットになって昇つていくエレベーターの天井にきみは張りついている。もう下りられないよ。その方法がないんだ。きみはふたつに分裂する。基本の〈二者〉に、どちらのきみも、もうひとりのきみの存在を知っている。

トラックの列が丘を下る。州道ハイウェイのせばまった道を、今は午後の三時ころだが、どのトラックもヘッドライトを点灯し、丘の頂の、カエデの木の間から電気の眼がチラリチラリこちらを見つめる。すごい騒音だ。坂の勾配が変わるたびにガキガキとギアボックスが音を立て、キャンバス地の幌の下からは「ダブルクラッチだ、ばか野郎！」と、うんざりしたように怒声上がる。道端の林檎の木が花をつけている。朝の雨で枝が湿って黒ずんでいる。その下に、足をむき出した、蜜のような金色と褐色の娘がすわっている。誰とでも一緒にすわる——スロースロップは別だけれど。名前はマージョリー。兄のホーガンが太平洋戦争から帰ってきたらこの娘に言いよるだろう。しかし結局ビート・デュフェイにさらわれるだろう。マージョリーとデュフェイにキムという娘ができ、キムはお下げ髪をホーガン・ジュニアによって学校のインク瓶に潰けられるだろう。ミンジバラの暮らしは続く、占領があるうとなかろうと、タイロンおじさんがいてもいなくても。

空気が中にまだ雨が残っている。ヒックス整備工場脇に兵士らが集合する。裏の敷地には油だらけの鉄の山と窪みがあって、ボール・ベアリング、クラッチ・プレート、トランسمミッションの部品がいっぱいだ。その下の駐車場——緑色の縁取りをしたキャンディ・ストアと共用になっていて、そこで彼はスクールバスを、真っ黄色のバスの頭部が、三時十五分に曲がり角に姿を現わすのを待ったし、小銭をたかるならどの高校の生徒が簡単かも知っていた——にはコードの古い車が六、七台、それぞれの汚れと故障の程度を抱えて置いてあるのだが、それら、若き帝国を思い出させる乗物は、いま雨の予兆をたたえた空

36 『スロー・ラーナ』197ページ参照。この一節には、一九四五年から二十年近く未来の、マサチューセッツ州ミンジバラを舞台にした物語「シークレット・インテグレーション」の内容が取りこまれている。タイロンの兄のホーガンは医者として登場。その息子のホーガンは、アル中から立ち直った小学生という設定。

37 一九二〇年代から三〇年代にかけての数年間、先鋭的な車を作っていたメーカー。

の下で霊柩車のように光っている。特務班はもうバリケードづくりに取りかかり、掠奪グループは、角に納屋のように大きなグレイの羽目板づくりの建物をさらしているピッチーニさんの店に侵入した。子供たちは荷積みのリフトのまわりに群がり、麻袋からヒマワリの種を失敬して、店の冷凍庫から牛のバラ肉を解放する兵士らの話に聞き入っている。スロースロップがここから家へ帰るには、二階建てのヒックス整備工場の煉瓦の壁の脇道を通っていかなくてはならないのだが、その緑の小路の入口は店の裏手で燃えているゴミの焚き火と配達用トラック置き場のかげに隠れて見えない。二軒の敷地の間を通るのだが、そのふたつは正確に背中合わせになっているのではなく、片方の塀沿いに、もう一軒の、私設のクルマ道を歩いているという恰好だ。その二軒とも琥珀と黒の、おばあさんの家で、生きていたり剥製だったりする猫であふれ、傘の汚れた灯火や、^{スタンド}ドイリーやレースのカバーがすべての卓上や椅子の背もたれにかけてあって、人生最後の陰鬱さを漂わせている。それから通りを横切って、脇にタチアオイが植わったスノッド夫人の私設車道を進み、金網のゲートとサントーラの家の裏庭を抜け、生垣の尽きたところで柵の横木を乗りこえ、前の通りを突っきると、ほらきみの家だ……

でも占領下。へかれらゝは大人の通路だけでなく、子どもたちの近道までも遮断してしまったのだろうか。ホームにたどり着くのはもう手遅れなのか。

ヘデア・ブラーツンにて

クックスハーフェンから帰ってきたグスタフとアンドレは、アンドレのカズーからリー

ド・ホルダーとリードを外し、そこにスズ箔を張って——そのスズ箔にプツプツと穴をあけ、いまそれでハッシシのケムリを吸っている。端の小穴に当てた指のバルブをスパスパと調節して、うまいことキャブレターの働きをさせてるんだ。ゾイレがさ、うまいことペーネミュンデの「推力グループ」にいた元技師たちを動かして、ハッシシ吸引に最適なパイプについての長期にわたる研究をさせたんだ。それでどんな答えが出たと思う？ 流量比からいっても、熱伝導の点からみても、空気と煙の比率の制御においても、昔ながらのカズーの形に優るものはないんだとさ！

イエイ。カズーにまつわるオカシナ話をもうひとつ。リードの上方にあるナックルのネジ山が電球のソケットについているネジ山と、ぴったり合うのだよ。われらがヘキャプテン・ホラー^{*38}グスタフが、派手に黄色い、盗品の英国製射撃メガネ（静脈を探すのに便利じゃないかね）をかけ、喜びいさんで宣告する——ここには紛れもなくヘファイバス^{*39}の手が回ってるのだと。「おまえらはカズーが反政府的な楽器だと思ってるだろ。おめでたいやつめ、見ろよ——」今日もゾイレのところによってきたグスタフはちゃんと電球持参だ。今日こそは、麻薬狂いの大将を徹底的にへこましてやれ……器用な手つきで電球をリードの穴にぴったりはめ込み、消音してしまふ。「わかったか、ヘファイバス」はカズーにもしっかり手を回してるのさ、ハッハッハッ！「長い長いタマネギ尻より始末が悪いシヤードンフロイデ^{*40}が、部屋全体に立ちこめる。

だがグスタフが持ってきたのは、他ならぬ、われらが電球バイロン君なのだった。バイロンは心の中で思っている——何を言うんだ、全然違うぞ、これは捕えられ抑圧された全電球に対する、カズーからの愛に満ちた共闘宣言なんだ……

38 この呼称はマール・エル・コミックの「ヘキャプテン・アメリカ」の敵役を思わせる。

39 482ページ参照。

40 247ページに説明があるように、他人の不幸を喜ぶ感情。

敷物の下で映画が上映中だ。床の上に一日二十四時間、敷物をめくれば、ほら映ってる！ ゲアハルト・フォン・ゲールによる不愉快にして悪趣味な新作プロジェクト、完成の見込みのまるで立たない映画のラッシュの映像が今日も出てきた。シュプリンガーは、まったくいつまで続けるのだろうか、この敷物の下で。タイトルは『ニュー・ドープ』。文字通り、誰も知らない新種の麻薬についての作品なのだが、これがまた嫌らしいドラッグで、その性質のひとつに、これを服用した瞬間、その感覚を人に伝える能力をまったく失ってしまう、のみならず、どこで手に入れられるとも言えなくなってしまうのだ。ディーラーにしてもこのドラッグがどんなものか、他の人間同様わかっていない。唯一のチャンスといえば、それを服用する（射つ？ 吸う？ 飲み込む？）瞬間にたまたま誰かと出会うことだ。ドラッグの方がきみを見つける、ってことらしい。逆転した世界の一部なんだ、これは。スパイが掃除機みたいなピストルをもって死ではなく生をもたらすべく暗躍しているみたい——引き金を引くと射殺されてまもない人の身体から弾が銃口に吸い込まれ、死体に命が戻って、〈大いなる非可逆性〉⁴¹が逆転される（毎々の音声編集作業が終わったあかつきにどういう作品ができてるか——きつとドラッグにやられた頭でしか面白いとは思えない代物でしょうね）。スクリーンにはたとえばこんな字幕——

アミタール・ナトリウムにご執心のゲアハルト・フォン・ゲール

映し出される大男は、役者としては大根のフォン・ゲール自身。トイレにペタリ尻をつけ、それが……どうやら超特大の幼児用「トレーニングおまる」であるらしい、腰かけたフォ

41 原文は *The Great Irreversible* で、これは〈時〉の別称。

42 633 ページで「〈原初の双児〉についての聖なるイデオロリア（私的言語）」と書かれているものがこれだろう。あるいは、原文で次にくる in Bergamot まで呪文に含むのか。『GRC』はアナグラム解説の単なる

ン・ゲールの股の間からぬつと突きでた陶器製のジャッカルが、デレッと笑う口元に、恥ずかしげもなくマリワナ煙草をくわえている——「悪も驚も突きぬけて」シユプリンガーがまくしたてる、「気候はみずからのプロンドの道を進む。それというのも粗悪な戦争のもとで彼らはまったく無力であるから。いや悪事のためではなかった。最初は違ったところだ。燃え光る泥のシートにくるまった監視の者たちが現れてつがい始め、ひとかけらの慈悲もない王の玉座の下、花の下で、ベルガモット語やおふぎの幻想語で、medosh-nicka bleelar medoometnozz」まあ、こんなものばかりだから、ポップコーンを取りにきたければその余裕はたっぷりある。ここヘデア・プラーツでポップコーンといえばアサガオの種のこと。それを火で炙ってポンと破裂させた褐色の食べ物である。ここの常連で敷物の下の映画をまともに観る者はない——観るのは、たまたま寄ったヴィジターである。たとえば、レーヴァークーゼンのアスピリンの大工場から逃げてきたマグダの友だち連中。彼女らは隅の方で不健康な笑い声を立てながら、くすねてきたコーンスターチを水で溶かしたものをお互いの裸体の上に垂らしあっている……『易经』に凝っている一派は、お気に入りの卦をそれぞれの足指にタトゥー⁴⁴して、一ヶ所に長く留まっていられない。なぜだかという、「イーチャングな足を持つて」から！ヘマばかりしている魔術つかいも来ているが、彼らは自らのヘマによって、いろいろあぶない存在を引き寄せずにはいない。クリフォート、ウィジャ盤のいたずら者、ポルターガイスト、その他ありとあらゆる心霊界の落ちこぼれやドジな輩を——そうなのだ、こうした輩がこのところヘデア・プラーツに大集合しはじめている。そうでなくするためには、ある者は受け入れある者は拒むというやり方にスイッチしないといけないが、そんな勇氣は誰にもない。……だってそ

ひとつの可能性として、Mammon doomed Blicero; the black Enzian gets zero (「モンがブリツェロを破滅させ、黒いエンツィアンはゼロを得る」という文を提示している)。

43 アサガオの種の多くは麦角アルカロイドを含む。LSDに似た幻覚作用を起こすことは古くから知られていた。

44 六十四卦のうちどれか。六本の線のそれぞれが陰か陽になる、六十四の組み合わせパターンのそれぞれを「卦」、または英語で「ヘクサグラム」という。

45 英語で live ticking 「たたく」というのは、「じつ」として「いられない」という意味の成句。

の種の選択決定は、天空の高みにまします天使たちの仕事でしょう。高みからわれわれの倒錯行為を見つめて、らっしゃる。みんなが黒のサテンの上を這いまわり、鞭の柄を口にかませ、悪人の静脈注射の血をなめたりするのを笑いながらため息からいちいちチェックして、死の宣告に持ち込むんだ、いったい死の深い美しさに天使ら自身は接したことがあるんだらうか……

ヴァイスマンのタロット

ヴァイスマンのタロットはスロースロップのよりもいい。実際に出たカードを順番通りに示すと――

象徴カード――剣のナイト
覆うのは――塔
交わるのは――ソードのクイーン
頂上に――杯のキング
下に――ソードのエース
先に――カップの4
後ろに――ペンタクルの4
彼自身――ペンタクルのページ
環境――カップの8
希望と恐れ――ソードの2

46 タロットでは最初
に問題の本質を象徴する
カードを自分で選択する。

これから起こること——世界

彼はまずブーツ姿に紋章をつけ黒い馬にまたがって現われる。人馬ともにありったけのギヤロップで突き進み、巨大な墓地の小丘を越え、黒い顔の羊を蹴散らす。運命がゆっくり迫りくる彼の視野を、黒々とした杜松の木立が夢見るように、死を愛するように走る。その運命は、緑に黄褐色をまじえながら去っていった夏景色に君臨するモニュメント。埃色の低地を抜け、ついには灰野色の海へ、海の色はしだいに濃く、やがて日没の光のまわりに紫の輪が、ダンスホールの照明のように現れる。

この男に対して父殺しを企てても完全には果たしえないだろう。このごろの〈ゾーン〉の、エディプス的狀況ときたら最悪だ。威厳など消えてしまったし、母親も男性化し、誰も性的関心など抱かない、すり切れた金袋と化してしまった。息子たちといえ、四十年ほど流行遅れの無性欲生活にまだとらわれている。今日の父親には力などないし、過去にもなかったのだが、四十年前に殺せなかったので、われわれは今も同じくぐずぐず消極的な態度でいる。父親たちが密かに期待するマゾヒスト幻想に陥ってしまったのだ。さらに悪いことに、おのれの弱さを押しかくすべく、強い父親を演じようとするものだから、子供たちに憎まれるのも当然だ。そして、権力の座を奪おうとして、今度は彼らが挫折する。……かくして、苦痛と消極性を愛する人間が一世代、また一世代と〈ゾーン〉での生涯を終えてゆく。声もなく、色あせた精液を臭わせながら、死を恐怖し、売りつけられる慰安の商品に、それらがいかに無益、醜悪、浅薄であれ耽溺し、死に対してしか能のない連中にみずからの人生を定義させて平気であるのだ。

残り七十七枚のうちヴァイスマンを「覆う」（すなわち彼の現状を揭示する）のが、

ここで最初に「剣のナイト」を選んだということは、ヴァイスマンの冒險的人生の行く末を占ったことを意味する。

47 ドイツ国防軍の野戦服に用いられる灰緑色。

48 タロットは寓意画の描かれた二十二枚の大アルカナと、四種類（ワンド、ソード、カップ、ペンタクル）それぞれ十枚（計五十六枚）の小アルカナからなる。小アルカナはそれぞれ1から10までとページ、ナイト、クイーン、キングで構成される。ピンチョンが依拠しているライダー版の図版と、A・E・ウェイトによる解説は www.sacred-text.com/larot/ で見ることができる。あるいは wikipedia の "rider-waite" を検索。

《塔》だった。《塔》は面倒なカードで、みんなそれぞれ違ったストーリーを読み込んでいく。男根的な高い建造物を直撃する稲妻と、建造物から落下する一人を含む二人（うち一人は王冠をかぶったまま）の人物が描かれている。そこに射撃の意味を読みこんで満足する者もいるが、これにグノーシス派やカタリ派にとってのローマ教会のシンボルを見て、異端の存在を認めぬ《システム》がいずれは崩壊を免れないということを表していると一般化して捉える者もいる。しかしみなさんにはもうわかりますよね、それがロケットを表してもいると。

《黄金の夜明け団》⁴⁹では《塔》が壮麗さに対する勝利を、そして復讐の力を表すものと解釈している。ゲッペルス宣伝相も、職務の必要上さまたまに言っていたが、復讐としての《ロケット》を信じていた。

カバラの《生命の樹》では、《塔》が十のセフィラのうち、ネツァク（勝利）とホド（栄光ないし光輝）とをつなぐ経路となっている。そこから《黄金の夜明け》の解釈が生まれている。ネツァクは火と情動、ホドは水と論理の性質を持ち、神の身体にあって、これらふたつのセフィラはその太腿をなし、神殿の列柱をなし、両者ひとつになってイエソド、すなわち生殖ならびに排泄の器官につながる。

しかし、それぞれのセフィラは固有の悪霊クリフォトにとり憑かれているのだ。ネツァクはゴラブ・ツエレクすなわち死の鴉に、ホドはサマエルすなわち神の毒薬に。どちらかきまとうだろうと考えられる。夢の中で落下がそうであるような、非常に急で、不均衡な落下。物体の間を落ちていくというより宇宙空間を落下するような感覚である。クリフ

49 一八八八年にマダレガー・メイザーズが、薔薇十字団とカバラの象徴体系を基に作り上げたキリスト教カバリスト集団。詩人W・B・イェイツも参加した。

オトは各々手持ちの範囲の厄災しかもたらすことができないが、ネットアークからホドへ通過するさい、二つの悪霊が新種の悪霊の誕生をもたらしたように思われるのだ（なに、それって弁証法的タロットなのかって？ まさにその通り。マルクス・レーニン主義を信じるマジシャンなんていないと思っている方は、考えなおしたほうがよろしいぞ！）。〈死の鴉〉は〈神の毒薬〉を口にした……のだが、少量だったので吐き気もせず、アマニタ・ムスカリアにも似た尋常ならざる心地になった。……この合体の産物に正式な名はないが、これぞ〈ロケット〉の守護悪霊なのである。

ヴァイスマンに「クロス」するカードは〈剣のクイーン〉。これは、女装した彼自身なのかもしれない。彼の最大の障碍がそれだというわけだ。「下に」^{ビニース}は〈ソードのエース〉。冠の内側で燃える一本の剣——これまたネットアーク、勝利の意味だ。アメリカに伝わったランプでは、ソードのエースはスペードのエースに変わっている。こちらはもうちょっと不吉な色合いを帯びている。どんなゲームであれ、このカードが出ると一同静寂に包まれることはきみも知っているだろう。ゲームの流れが止まって、あたりは沈黙に包まれる。そして「後ろ」^{ビハインド}にあって、ヴァイスマンの人生から去ろうとしている力はヘンタクルの4。これに描かれているのは、ささやかな財産（四枚の金貨）しか持たない人物がそれにしがみついているという図だ——この阿呆は金貨二枚を両足でしっかり押さえつけ、もう一枚を頭にのせてバランスをとり、四枚目をしっかり握りしめて腹に押しつけているのだが、その胃には潰瘍ができています。このカードが表しているのは、家に潜み、暗がりから現れてお菓子の家をかじろうとする物欲しげなやつらから守ろうという魔女である。ヴァイスマンの「先に」^{ビフォー}は杯が差しだされている。祝宴すなわち飽食ということだ。酒も女

50 幻覚ベニテングタケ。上巻183ページでオズビー・フィールがいじっていた。

もしきにとつきり手にはいるという意味。そいつはオマデトウといたいたいところだが——
ヴァイスマンの「ハウス」を見ると、積みあげられた八脚のキャップを背にして、出ていく
ところだ。これは、いつも自分で棄てていくものばかり与えられる運命を表しているのか
もしれない。その理由は、この夜の最後の杯となった女によって、文字通りの苦杯を舐め
させられたからかもしれない。その女、ヘッダードの2人は、バルトの海の果て、磯辺にひ
たり腰をおろして、月光の中で目隠しをし、握った二本の剣を胸の前でクロスさせている
……「剣の交差」は通例「戦闘停止による和平の回復」と解釈され、それは今日の「ゾー
ン」の状況を大まかに物語るものではあるが、同時にヴァイスマンが心の奥底に抱えた願
望もしくは不安の表現でもある。

「セリッ」のカードは、「世間」が見るヴァイスマンの姿ということだが、これが年若い
学究肌の「ペンタクルのページ」で、魔法の金の護符を見つめて思索にふけっている。ペ
ージは少年ばかりでなく少女の意味にもなるが、ペンタクルは肌がきわめてダークな人々
を表すので、このカードは若い時分のエンツィアンと考えるとほぼ間違いない。ヴァイスマ
ンはついに——紙の世界の話とはいえ——自分が最初に愛したものになったというわけか。
彼の希望の「冠」は「カップのキング」。これは白人の知的な王だ。ヴァイスマンの行
方を知りたければ、売れっ子の学者、大統領のブレーン、重役会に名をつらねているイン
テリ連中を捜してみるといい。きつとそこらにいるだろう。高みを捜すことだ、下ではな
く。

この男の未来を占うカード、来るべき結末は「世界」である。

51 「世界」のカードを
どう読むかについて言及
はない。ヴァイスマンは
霊となりつつも、リルケ
的な天使の世界への超越
は果たせず、この世界に
留まった、ということか。
「世界」はまた、国外脱
出、新しい旅の始まりも
含意する。「白の冥王」
プリフェロは、アメリカ

うとしている。

イサク

カバラ以前の、四世紀ごろから存在するアガダー^{*54}の伝えるところによれば、モリアの地でアブラハムがイサクをまさに犠牲に捧げようとしたとき、^{*55}イサクは神の玉座に通ずる控えの間を見たという。修行中の神秘家にとって、見えた世界を保ちながら、玉座へ続く間を一つひとつ通ってゆくのは恐ろしく大変なこと。合言葉やら印章やらの講習を受け、鍛錬と禁欲によって身体を整えるだけでは足りない。精神面でも、決して萎えることのない意志の勃起を保っていなくてはならない。入口では天使らが、きみを騙し、脅し、残酷なあらゆるいたずらを仕掛けようと待ちかまえている。死者の抜け殻であるクリフォトは、ひき返させられた友達の話をして、彼らへのきみの愛を逆手にとろうとするだろう。きみは攻めの道を選んだ。最大最強の危険に身をさらさぬうちに怖じ気づくのは許されない。

もう一方に、暗い、女の、受け身の、自己犠牲の、道がある。刃の下にイサクがそれだ。ギリギリと光る刃が拡がりながら広間を落下する、落ちたとたんに魂が抗えないエーテルによって持ちあげられて昇っていく。カメラと一緒^{*56}にドリーに乗ったゲアハルト・フォン・ゲールが歓喜の声を挙げ、ニンフエンブルクの長い通路をフルスピードで突きすすむ（おめでたいやつめ、いつまでもここでも有頂天になってるがいい……）。頭上で明るさを増す霊的な光。金箔とガラスに囲まれた空間にあって、光はほとんど青く見える。ここで働いた金箔師らは全裸姿で頭も剃っていた。ひらひらする箔を壁に留めておくために、陰毛と

54 ユダヤ経典に収められた書き物のうち、神の法について述べる（「ハラハー」とは別の、さまざまな説話、寓話、物語を総称する）。

55 アブラハムの信仰深さを確かめようとした神は、息子イサクを焼きつくす献じ物としてささげるよう求めた（「創世記」二十二章）。

56 ミュンヘンに建つババリア王国の城。アラン・レネ監督の『去年マリエンバートで』（一九六一）は、この通路での長いトラクシヨットを含む。同じ通路と思しき場所でフォン・ゲール

こすり合わせて静電気を溜めたブラシを用いた——性器に発するエレキの光が永遠の金色に輝く景観をつくるようにと。だがマッド・ルートヴィヒとスペインの踊り子⁵⁷は溝を流れていくにまかせよう、現世の過去はいまや大理石を這う褪せた緋色の輝き、甘い水のように裏切りの光をたたえて見える……それももう今は背後に過ぎた。神の玉座メルカバーへ昇っていく。人間の痕跡はもはやほとんど消えさるなか、魔法の可能性を求めて最後のしぐさを、後戻りのないみちを昇りながら……

打ち上げ準備

どでかい白蠅。いや、白いレースに包まれたペニスが勃起でジリジリいつてるんだ、血だか精液だかこびりつかせて。この若者のブライダル衣装となった死のレース地。すくつと伸びる若い二本の脚が縛られ、白いサテンのスリッパには白いリボンがついている。若者の赤い乳首も勃^たっている。背中にかかる金髪は、ドイツ製の金の合金、うすい黄色から白に輝き、背骨を軸に左右対称に垂れかかる。髪の毛が弧を描き渦巻くさまは繊細で指紋のよう、磁力線に沿って並ぶ砂鉄のよう。ソバカスとホクロのそれぞれは、あるべき位置に正確に埋め込まれた黒の特異点だ。うなじに汗が溜まる。口を覆う猿轡は、白いキッド革の手袋——ヴァイスマンはこの目のために象徴的な意味のすべてを厳密に計算した。この白い手袋は〈栄光の手⁵⁸〉と同じ意味を担う、その女性版。物盗りはこの手袋で闇を照らしてきみの家に忍びこむ。死者の手の中の蠟燭、それがいま、〈死〉がその甘美な舌先をきみに這わせた瞬間にすべての体内組織が固まるように勃^たっている。その手袋は〈栄光の

が撮った映画について、
上巻746ページで語られて
いる。

57 「マッド」と言われたのはルートヴィヒ二世。「スペインの踊り子」と呼ばれた（アイルランド人の）ローラ・モンテスはルートヴィヒ二世の愛人。

58 絞首された罪人の手等特殊な方法で保存したもの。

手⁵⁹を取める腔——そして00000はゴットフリートが回帰する子宮。

積載せよ。このロケットはプロクラテスのベッド⁵⁹ではないが、彼を取めるようつくり変えた。若者とロケットの双方を、互いに合わせてデザインしたのだ。鉄の臀部の彎曲がなんと美しいぞ……あいつがピタリとフィットする形だ。これは結婚なのだ。ヘシユヴァルツゲレート⁶⁰と一段高次の集合体の。青年の裸の四肢が金属的に緊縛されて悶えうごめくそのまわりを、燃料と酸化剤、生蒸気パイプ、推進^{スラスト・フレイム}台、圧縮空気のバッテリー、肘型排気パイプ、分解器とタンクと通気孔とバルブ類が埋めている……そのうちひとつのバルブ、ひとつのテストポイント、ひとつの圧力スイッチが、まぎれもなく真のクリトリスとして、00000号の神経系に直接配線されている。彼女の秘密を暴け、ゴットフリート。愛のゾーンを見つけてそこを舐め、接吻せよ……その時間はある——まだ何分が残されている。液体酸素のパイプが近すぎて、おまえの頬が凍りつくか。骨が霜となっておまえの感覚を焼きつくすか。じきに火も加わるぞ。太らせたおまえを焼くための「かまど」⁶¹が赤くなる。お、軍曹が、ツントクロイツ⁶¹を持ってきた。点火だぞ。いよいよおまえの打ち上げだ。兵士らは気をつけをして待機している。さあ、ゆけ、愛^{ラブ・ヒューン}の者よ。

ハードウェア

彼は、さしわたし四インチの人工サファイアの窓を与えられた。これはIG社により一九四二年に育成されたマッシュルーム型のぼっこり丸い形状のもので、コバルトの添加によってほのかに緑色がかっている——熱に非常につよく、可視の光線ならばたいい透

59 寝かせるベッドに合わせて旅人を斬ったり伸ばしたりしたというギリシャ神話の盗賊の話に基づく。

60 新型ロケットを開発するたび、ナチス・ドイツは「集合体 Aggregate」の意味の「A」につく数字を増やしてきた。ヴァイスマンがベクラールにデザインさせた00000は、人間をも合体させた、新たなレベルの集合体。

61 「発火の十字架」。長いボールの先につけた発火装置で、A4ロケットを打ち上げる際にこれが使われた。

62 原文は“grown by the IG”で、「開発され

過する——これを通すと機外の空や雲は歪むけれども、それは気分のよい歪み方だ。窓ガラスというものが一般化する前、おばあさんの時代に〈牡牛の眼^{オウセンウシノメ}〉と呼ばれたやつに似ている……

気化した酸素の一部がゴットフリートのヘイミポレックス^{ヘイミポレックス}製の死装束にしみ入ってゆく。片方の耳には外科的施術的に埋め込まれた超小型スピーカーが、愛らしいイヤリングのように光る。音声データは、無線誘導システムを通し、マルチ回路で伝えられるようになっていたので、ヴァイスマンの声も軌道修正の信号とともに——当座は——ロケットに届くだろう。だが、ゴットフリートから地上への返信チャンネルは存在しない。地上で彼の正確な死亡時刻を知る術はない。

チェイス・ミュージック

ついに、である。「なんということだ、遅すぎた！」のセリフをいつも、謙遜の社交辞令として、かすかな薄ら笑いとともに、その刑事人生の生涯言いつづけてきたサー・デニス・ネイランド・スミスが——結局「遅すぎた」ためしは一度もなく、いつも必ず「黄色い悪魔」フリー・マンチュー配下の不器用なヘマにより、あるいは死体のそばに運良く残されていた決定的な手がかりにより、勝利のどんでん返しが待っているんだが——今度という今度は、なんということだ、本当に遅すぎたではないか。

スーパーマンがブーツでひらり着地しても、そこは誰もいない木立ちの空き地。起動打上げ台は継ぎ目からゆっくりとオイルのため息をもらし、木々の傷跡からは樹液が垂れて

た developed)ではない。生命と物質(死)の境界はすでない。

63 魚の膠質(にべ)からつくったアイシンググラスを、家の上階の丸窓とした。

いる——苦しい通過^{パッセージ}への苦いマナ^{*64}として。午後の日射しにスーパーマンの原色マントも色あせ、人は彼のカールした髪に最初の白髪を見いだすだろう。フィリップ・マローウはひどい偏頭痛をもよおして、スーツのポケットのライ・ウイスキーのバイント壘に反射的に手を伸ばすだろう。そしてブラッドベリー・ビルディング^{*65}のレース模様のバルコニーを愛おしく思い出すだろう。

サブマリナーと彼のマルチリンガルな一党はバッテリー・トラブルで動きが取れない。

プラスチックマンはヘイミボレックス^{*}の鎖状構造の中で道を失い、彼を雇ったヘザーン^{*}中のトボロジの専門家たちはあわてて謝礼小切手の支払いを止めるだろう（自在な変形がウリじゃなかったのかい、まったく！）。民兵隊の先頭でローン・レンジャーは愛馬の白い皮膚が剥けて血を流すほど拍車をかけて突進するが、仲良しの無垢な少年ダンは、折れた首を縄で木につるされている（トントはゴーストシャツ^{*67}を着て、冷えきった焚火の跡にしゃがみ込んでナイフを研ぐのか）。

「遅すぎた」が、彼らのプログラムにインプットされることはない。一度もない。代わり
に彼らが見いだすのは、一瞬の正気の停止である——しかしあああという間に、その瞬間
は過ぎ去って、いま来た道をデイリー・プラネット社に戻っていつて話すのだ。うん、ジ
ミー、きつとあの時だ。時間の特異点を通過したときのことだ。あの瞬間に何が起きたか、
まったくの謎だからね。そうさ、ジミー、時間——時ってやつは、ほんとに不思議なもん
だ。^{*68}……過去を忘れるのなんかいくらでも可能さ。英雄たちはそのまま進む。時を経て、
出世して、現場を離れ、中間管理職に収まるのだが、監督すべき部下の仕事はどんどん新
しい形に置き換わっていき、過去のシステムは解体していく。古い時の組織^{タイム・組織}に次つぎと生

64 神の恵みの食べ物。

65 映画『ブレードランナー』で知れわたる以前にも数々の映画の舞台となったロス中心区のビル。レイモンド・チャンドラーの小説を映画化した『かわいい女』(1955, *My Darling Clementine*) (一九六九) では、私立探偵フィリップ・マローウがこの建物を事務所にしていて、アトリウムを囲う（鉄の線細工レールがついた）屋内バルコニーが特徴的。

66 名をネイマーという海底王国の王子。緑の水泳パンツを穿いた、一九四一年誕生のコミック・ヒーロー。

67 ゴーストダンスを踊るインディアンが着る、魔法の力を持った聖衣。

じていく摩訶不思議な時間が、古い制度をうち破る新しい世の中のしくみを宣言していくのだよ。英雄たちは、それを時の癌細胞と呼ぶのだが、何がどうなっていくのか、これはいったいどういう意味なのか、まるで分からんのさ、なあジミー……

このごろ彼は、いなくなった犬たちを恋しがることもある。ポタポタだれを垂らすしか能のないやつらに対し、この男がセンチメンタルになるだなんて、誰が想像しえただろう。だが彼の回された役所の下位部局は、匂いも肌触りもない場所だ。感覚除去の現象が、一時的に、彼の好奇心を刺激したことはあって、しばらく自身の生理的変化を毎日忠実に記録していた。だがそれをやると、死の床にあって最後まで自らのデータをとり続けたというバヴロフのことがどうしても思い出される。ポインツマンの場合、これは単なる習慣なのだ。退行的科学主義^{レトロサイエンス}というやつ。後ろを向いて、閉まりつつあるストックホルムへの扉に最後の一瞥を投げることに。そんなわけでデータの記入も途切れていき、やがて止まる。後は報告書にサインをし、他人の研究の監督をし、新しい才能を発掘すべく英国各地へ、のちには外国へも足をのぼす、そんな毎日。ふとした拍子に、モスムーンをはじめとするお偉方の顔に、ある種の反射反応による表情が浮かぶ。何の表情か、それをポインツマンが認めることは、夢のなかでもありえまい。ああこれは一生何の進展もなかった者、あるいはヘマな動きに終始した者に対して、権力の地位にある者が示す容認の表情なのだ、と認めることは。だって、まだまだ自分にも、創造的なチャレンジの場が残されていないはずは――

はい、でも、どうでしょう、この男、研究者としてすでに終わってませんか。迷路の〈奥〉まで進みきることは叶わなかった。〈賞〉を得た高みから神について語りだす、愛す

68 新聞記者クラーク・ケント（スーパーマン）が同僚のカメラマン、ジミー・オルセンに語りかけているという設定。

69 原語は *sensory deprivation*。密封した水槽タンクに浮かぶことで感覚刺激を断ち、変容した意識状態を得る実験がドラッグ・カルチャーの文脈でもはやされた。ガチガチの生理学者をからかうジョークとして使われている。

70 ポインツマンが神聖視する『条件反射講義 第二巻』の、ホースリー・ガントによる序文によれば、バヴロフは死の当日にも神経病理学者を招き、自分の症状のデータ提供を申し出た。

ベッキリンゴの頬をした白髪のエキセントリックな老人になる道は閉じている——彼のもとに「原因」と「結果」の山と、不毛だった研究用具を遺して……彼の通廊は無機質にして輝かない。リハーサルもぼつちり済ませた演説をやるはずだった中央の間まで、いつもの冴えない、寒々しい廊下が続くだけ……

カウントダウン

周知のとおり、カウントダウン、10—9—8……とやるあれを考案したのはフリッツ・ラングで、一九二九年製作のウーファ配給『月世界の女』で最初に使っている。ラングはカウントダウンを発射場面にとり入れてサスペンスを盛りあげたのだった。「あれもまあ、私の使った忌まわしい「タッチ」の一つでね」と、ラングは語っている。

「天地創造のさいに」と、カバリストのスポークスマン、ステイーヴ・エーデルマンは説く、「神は空無の中へエネルギーのバルスを送りだした。虚空はやがて分岐し、十の圈ないし相に分かれた。それが1から10までの数に照応する。セフィロトという名で知られるものである。神のもとへと回帰するためには、10から始めて1まで、それぞれのセフィラと折り合いをつけていかななくてはならない。魔術と信仰で武装したカバリストは、セフィラ征服の旅路にあるのだ。カバリストの奥義秘伝の多くは、この旅を成功に導くためのものである。」

「さて、セフィロトは全体としてひとつのパターンを形づくる。それは「生命の樹」と呼ばれ、神の身体でもある。十の圈は二十二の小径で結ばれている。小径はそれぞれ、ヘブ

71 通廊を抜けて、光輝くストックホルムの授賞式に向かう幻想は、上巻271ページに描かれていた。

72 これはサイレント映画。「Zehn Minuten」（あと十秒）という字幕が「Zehn Minuten」に代わり、5、4、3、2、1と次第に数字だけ大きくなって「JEINU」とともに発射となる。

73 658ページ註19参照。

ライ語のアルファベットの文字に、またタロット・カードの〈大アルカナ〉に照応する。ロケットのカウントダウンは数字の連続のように見えるけれども、そこに〈生命の樹〉を宿しているのだ。そのすべてを一度に、シリアルでなくパラレルに、把握しなくてはならない。

「セフィラには能動的で男性的なものもあり、受動的で女性的なものもあるが、〈生命の樹〉自体はひとつの統一体として、他ならぬ〈ボデーンプラッテ〉⁷⁴に根を張っている。それはひとつの独特の〈地〉⁷⁵の軸、〈大いなる発射〉によってこの世に誕生する、新たな世のしくみのことである」

「で、でも、地軸が新しくなれば、地球の自転が変わるでしょう」ビクターにそんな疑問が湧く、「そうになると、占星術はどうなっちゃうんでしょね？」

「別の星座でやるんだ、バカ」エーデルマンはビシャリときめつけ、ソラジン錠剤のファミリーサイズの大壺に手を伸ばす。彼はすっかりこのトランキライザーの常用者になっていて、顔色もだいぶ黒ずみ、見た目にもあぶない灰紫色^{スレートパープル}をしている。ここの通りでは、みんな日焼けして、おまけにいろんな刺激物で目を赤くして歩いているので、彼の姿はとりわけ異様である。エーデルマンの子供たちがたいへんなイタズラ者で、廃物のトランジスタラジオから半導体基板コンデンサーを取りだし、知らんぷりしてババのソラジン壺に放りこんでおく遊びを始めた。不注意な父親には、錠剤とコンデンサーの違いが見えない。そこで、しばらくは、自分の体に毒物耐性ができてきたかと勘違いした。だが耐性の限界が、越えられぬ深淵として近づき、ほんのささいな出来事——通りにサイレンが鳴り響くとか、ジェット機が轟音をたてて待機経路を旋回したとか——で飲みこまれそうになる一

74 Bodentplatte (地の皿)とは、移動可能なV2ロケット打上げ台。

75 「アキシス・ムンディ」(世界の軸)は、天と地中をつなぐ軸。世界樹としてもイメージされ、ここから世界が始まったとされる。

歩手前で、幸い妻が悪ふざけに気づいた。今ではゴクリとやる前に、リード線や、μの字や、番号表示がないか、一錠一錠確かめることにしている。

「ほら」^{エラリスカ76}と、ゼロックス・コピーの厚い束を持ちあげて、「新しい地軸に基づく天体暦だ」

「え、ボーデンブラッテを発見した人がいるってこと？ 軸の位置が分かったの？」

「デルタ1そのものだよ。公表はされなかった。『カイザーズバート探検隊』が発見した」
もろに偽名とわかる名前だ。カイザーが生やしていたのは、口ひげであって、顎ひげではない。

アポロンの夢へとつながれて：

リアルな出来事がきみに起ころうとしていて、きみはそれに向かって突き進もうとしている——きみの前面には、きみと平行に一枚の透明な面があって、そいつがうなりをあげてきみの両耳を裂き、眼を過敏にさせている。光は白亜^{チョーク}のような青へ偏向、皮膚が痛い。とうとう来たぞ、リアルな出来事だ。

ここは000000号の尾のセクション。ゴットフリートの眼の前に、文字通り、透きとおった面がある。ヘイミポレックス^{ヘイミポレックス}の死装束。幼児期の記憶が、彼の集中した意識の中を浮上してくる。リングの皮の記憶、それが爆発し、星雲となり、空間は歪曲し、光は赤く変移する。眼は釘づけだ、もっともっと遠くの方へ。・・・プラスチックの表面は小刻みに震えている。灰白色、色彩を嘲るような、色に敵対するような色。

76 「ヘロケット」が、天と地をつなぐ世界の軸を再定義すると信じるエーデルマンの立場からすれば、〈発射台〉の位置によって、新時代の地球の自転軸が定まり、占星術のためのエラリス（星座位置のデータ）が手に入る。

外気はじつとり寒く、生贄は薄衣だが、中は暖かく感じられる。白のストッキングがサスペンダーの金具からすっきり伸びる。パイプに小さな曲がりがあって、彼はそこに頬をもたせかけて死装束の中を覗きこむ。背中やむき出しの肩を髪の毛がくすぐる。薄暗い、白化した空間。横たわり、夕べの不健康な空間へと開かれる、婚礼の間。この先何が起こるか分からない運命に身をゆだねて。

回路を埋め込んだ彼の耳に、無線の音がよどんできこえる。強くフィルターのかかった金属的な声の響き。麻醉に意識が埋もれていくときの外科医の声のようにジージーする。いまはもう儀礼の言葉しか聞こえてこないが、まだ声を聞き分けることはできる。彼を完全に包み込んでいる「ヘイミポレックス」の柔らかい匂いは、過去に親しんでいる匂いであって、彼を恐怖させることはない。遠いむかし、眠りに入るときに部屋にただよっていた、幼児期の甘美さに深く縛りつけられていた頃の匂い……夢の中に入りかけたときもまだ匂っていた。さあ、眼をさます時間だ。つねにリアルだったものの息の中へ。さあ、眼をさませ、すべては守られている。

オルフェウス、ハーブを置く

ロサンジェルス発（PNS電）^{*77}——メルローズ・アヴェニュー^{*78}のオルフェウス座の夜間支配人リチャード・M・ズラップは、「不適切なハーモニカの使用」とみずから呼ぶものとなるが。友人にとっても敵にとっても「アデノイド男」と言えば彼のことである。ズラ

77 このイニシヤルで知られる「パシフィック・ニュース・サービス」は、ベトナム戦争に関する既成メディアの報道に対抗する形で一九六九年にできた、オルターナティブな情報配信局。ただし、ここは「ピンチ・ニュース・サービス」の略かもしれない。

78 ビヴァリー・ヒルズからウェスト・ハリウッドに位置するあたりは、シヨッピングとダイニングと劇場で賑わう国際観光通りになっている。

79 「リチャード・M」で想起される「ニクソン」は、この本が書かれた時期の現職大統領。「ズラップ」は「ズル」の「ズル」に相当する擬声語。

ップによれば、劇場前にできる列、とくに深夜の上映を見にきた客が、この楽器が理由で、ほとんどアナーキーな様相を呈するという。

「ペント・エケロートとマリア・カザレスの特集以来、これが続いている」とこぼすズラップは五十がらみのエラが張った男で、表情には常に「五時の翳り」を宿している（「アワリー・シャドー」と呼ばれる毎時の翳りのうちでも抜きんでて暗い影だ）。両腕を挙げてピースマークの逆の形をつくるのが癖で（この形は手旗信号のUの文字でもある）、そのとき、いったい何ヤードあるのか誰も測ったことのない白のフレンチカフスがむき出される。⁸¹

「よう、リチャード」通りすがりの男が冷やかす、「おまえのカフス、丸見えだ」と言いながら自らの男性自身をさらけ出し、指先でその包皮をいじりまわすのだが、その詳細を当特派員がお伝えするのは控えたい。

ズラップ支配人は少々たじろぐ。「まちがいない、あいつが首謀者のひとりだ」と明かして、「あの男には手を焼きました。彼と、もうひとり、ステイヴ・エーデルマン」。その名を支配人は「エーデルビッド」と発音する。⁸²「名前を出しても、困るもんか」

支配人が言及している事件は目下係争中である。ハリウッドのビジネスマン、ステイヴ・エーデルマンは昨年、刑法第一一五九条（不穩凶器準備罪）に違反したかどで、現在アタスカデロにて無期限監禁中。⁸³申し立てによればエーデルマンは、当局が公認していない意識の状態で、司法省要注意リストにあるコード進行を公衆の面前で演じた——そのようすは映画館前に並んだ客全員が目撃している。

「そ、それで今じゃみんながやっている。おっと、みんな」と言っちゃいけませんな。

80 ベルイマン監督の『第七の封印』（一九五七）で死神役を演じたスウェーデンの俳優と、ジャン・コクトーの『オルフェ』（一九五〇）の冥界の王女役で知られるスペイン出身の女優。

81 背広の腕からワイシャツの袖を大きくのぞかせて、両腕でV字をつくるニクソンのしぐさを皮肉っている。

82 原文 *streetwise instrument* は、「体制転覆の楽器」の意味にも。

83 ロスとサンフランシスコの中間にある町。精神に脆弱性のある犯罪者を収容する「州立病院」がある。

84 「サイレント・マジORITY」に訴えたニク

「さういふことは、實際にはなされてゐるのよ、南島の少数者であります。私が言いたかったのは、エーデルマンのことときやつらがみんな、ということですよ。列に並んでいた善良な市民まで、みんなやつていたはずはないじゃないですか、ワッハッハ。ちよつとお見せしましょう」

ズラップはきみを招いて黒ぬりの支配人用フォルクスワーゲンに乗せる。気がつけばもうフリーウェイだ。サンディエゴ、サンタモニカ両フリーウェイのインターチェンジ付近で見た舗道をズラップは指さして、「このあたりで最初に見かけたんですよ。VWを運転しているのをね、この車と同じだ。想像できますか、わが眼を疑いましたよ」だが、ズラップ^{*85}支配人のことばかりに集中しているわけにはいかない。サンタモニカ・フリーウェイ^{*85}というのは、昔から、車によるありとあらゆる愚行狂態のメッカである。サンディエゴ・フリーウェイ^{*86}のような白人のお上品さもなければ、パサデナ^{*87}のような設計上の危険もない。ハーバー^{*88}と違ってゲットー的な殺気もない。口にするのはためらわれるが、サンタモニカ・フリーウェイはフリークのパラダイス、そしてきょうもみんな繰りだしている。支配人のエンタテインングな話にも、そうは付きあつてばかりいられない。こいつらを見ると、きみもある種の身の毛のよだちが抑えられないだろう、ほとんど反射的な〈同類意識^{*89}〉に支配されてしまう。そいつらは四方八方から何やらわめきながら群がり寄つてきて、ウィンドー越しに目玉をグルリとやる。ハーモニカのみならず、カズーまで吹きだす始末。

〈禁令〉などあつたものではない。

「まあ、リラックスなさい」支配人の眼に、特徴的な輝きが灯る。「あの連中もみんなオレンジ郡に、ゆつたり暮らせる家を持つでしょう。ディズニールランドのすぐそばにね」と

サンタモニカの風景が想起される。

⁸⁵ サンタモニカからビヴァリー・ヒルズ、ハリウッドを越えてLAのダウンタウンまで東西に延びる。

⁸⁶ 海岸沿いの裕福なコミュニティをつなぐ。

⁸⁷ このフリーウェイはダウンタウンから北東のパサデナまで山がちの道を進む。

⁸⁸ ダウンタウンから南へ、人種暴動のあつたワッツや、後にギャングスタ・ラップで知られるコンプトンを通じてサンペドロの港まで走る。

⁸⁹ 他人を自分の同類と見る意識状態。社会を形成する結合の根拠。

まで言ってポーズを置くその芸風は、まさにナイトクラブの喜劇役者。黒いタールの輪の中に、白亜の恐怖を浮きたてて。

笑いがきみを取り巻く。パッドを張った内装の四隅から一斉に巻きおこる、律儀な聴衆の笑い。漠然とした狼狽の感覚とともに、きみは理解する。そうか、車のステレオ装置から出ている音かと。ダッシュボードのグローブボックスの中を覗きみれば、その種のテープがライブラリーのように完璧に揃っているではないか——《拍手喝采（好意的）》、《拍手喝采（強制的）》、《襲う群衆》（これは二十二ヶ国語あり）、《多様なイエス》、《多様なノウ》、《黒人運動支持者》、《女性運動支持者》、《競技者》——なんだよ、これは——《火器戦（旧型）》、《火器戦（核）》、《火器戦（市街）》、《大聖堂の音響》……

「もちろん、わたしどもは何であれ暗号によって話さないとならんわけで」支配人は続ける、「そのことは今もむかしも変わりはない。しかしこれほど解読がむずかしい暗号というのがありましたかな。それを理由に、敵対陣営からの攻撃も受けました。国民を軽蔑してると言うんですな。しかし、こちらはまさしくフェアプレイの精神でやってるわけです。わたしらは怪物じゃない。彼らにもある程度はチャンスを与えておかないと。希望を完全に潰してしまっただけじゃないかん、でしょう？」

フォルクスワーゲンは今LAのダウンタウン上にさしかかった。フリーウェイを降りる車が、黒いリンカーンといくらかのフォード、中にはGMCさえも含む車列を作るが、中にポンティアックは含まれない。⁹⁰ それらのフロントガラスにもリアウィンドーにもオレンジの蛍光塗料で葬儀と書いたステッカーが貼ってある。

支配人、こんどは鼻をすすっている。「あれほどできる男も珍しかったのに。わたしは

90 大統領リンカーン、企業家フォードに対し、ポンティアックはインディアナ（オタワ族）の酋

参列できなかったが、代理にはハイレベルの者を送りましたよ。彼の抜けた穴を誰が埋めるんだらう」と言って、ダッシュボードの下に隠れたボタンをガシャリと押すと、聞こえてきたのは男の笑い声、これは葉巻と年代物のバーボンをたしなみながらの、間の空いた、ウォッ、ホッホッという、それでも大声の笑いで、間に「ディック、^{*91}うまいぞ！」や「聞いたか、いまの」といったフレーズも聞き取れる。

「わたしは自分の死にざまを夢みるんです。あなたも彼らに雇われてるんでしょうが、いからまあ、聞きなさい。午前三時に、サンタモニカ・フリーウェイを飛ばしてるんです。暖かい夜で、窓は全開、七〇か七五マイルを出して、吹き込む風が、後部のフロアから薄いプラスチックの袋をムクムク持ちあげる。ふつうのドライクリーニングを包んでるビニールなんですがね、あれがフンワリ浮かんで近づいてくる。水銀灯を浴びて幽霊みたいに白いのがですよ……わたしの頭に巻きついて、あまりに薄く透きとおるんでそれと気づかずにいると、もう手遅れなんだ。プラスチックの死装束で窒息死してしまうというわけです……」

ハリウッド・フリーウェイを、^{*92}謎めいた幌つきのトレーラートラックと、魚雷のような流線形のタンクに液体水素を積んだローリー車に挟まれて進んでゆくうちに、^{*93}真正銘のハーモニカ吹き隊列に出くわした。「少なくとも例のタンバリンのやつらじゃない」ズラップがつぶやく。「去年ほどタンバリンは多くないな、ありがたいことに」

午後になると、キルト鋼板のケータリング・トラックが行きかう。金属ボディの表面がさざ波立って、きびしい砂漠道の末に行きついた運搬可能な湖のようだ。きょうはへ収集日、^{*}ゴミ・トラックはみなヴェンチュラ・フリーウェイめざして北へひた走る。ダンブ

長だった。

⁹¹ リチャードの愛称で、ニクソンもこの名で呼ばれた。

⁹² ロサンジェルスを盆地を北西の人口密集地サンフェルナンド・バレーと結ぶ重要な幹線。

⁹³ 一九四五年にV2を積んで北ヨーロッパを動いていたトラックの一九七〇年版か。当時のロスのフリーウェイを、ICBMを積んだトレーラーが走っていた可能性はある。

⁹⁴ サンタバーバラからパサデナまでロスの北の山沿いを東西に走る。

スターの集団排遣^{※95}。色も形も傷の具合もあらゆる種類を揃えた〈容器〉の破片をみんな集めて、ヘセンターンに帰っていく……

サイレンが、ふたりの不意をついて鳴り響く。ズラップはすばやく上目づかいでミラーを見て、「まさか非合法なブツなど持っとらんよね」

だが、それは警察が発するよりも大きな音だった。コンクリートとスモッグからなる全域を包み込み、遠い盆地と山脈^{やまなみ}を覆いつくす。死すべき人間の身でこれを逃れられるはずはない……空間的にも、時間的にも……

「これはバトカーのサイレンじゃないですよ」きみのハラワタが痙攣する。きみはA M ラジオのつまみに手を伸ばす。「違いますって——」

準備完了

「ロイメン」^{※96}とブリツェロ大尉が叫ぶ。過酸化水素と過マンガン酸塩のタンクへの注入は終わった。ジャイロコンパスも据え付けられた。みな待避壕で身をかがめて様子をうかがう。アイドリング中のトラック後部にしまった器具類がカタカタ音を立てている。バッテリー充電班と、激発装置のピンをはめ終えた軍曹とが乗りこむと、トラックはできたての褐色の轍を踏みしめ木立ちの中へ。ブリツェロはなお何秒か発射台を見回して、万事ぬかりのないことを確認するとロケットに背を向け、決然とした足取りで、消火装置のついた車に向かう。

「操縦部クラー^{※97}ル？」と操縦パネルに向かっていている若者に声をかける。

95 そのままトラックの「フォーク」に差して持ち上げ、中身をあげるようにできている大型のゴミ箱。

96 作業員に対し現場から離れよ、というドイツ語の指示。

97 原文の Steuerung

「問題なし」
イスト・クラール
トラインツェル

パネルの光を受けて、マックスの顔は堅い。強ばった黄金色だ。

「推進部クラール？」

「イスト・クラール」ロケットエンジンのパネルの前のモーリツの声だ。首に下がっているマイクに吹き込まれた声が、オペレーション・ルームに届く。「発射地点クラール」

「シユリユッセル・アウフ・シーセン」^{*98}ブリツェロの指令。

モーリツがメイン・キーを〈発射〉へ。「シユリユッセル・シユテート・アウフ・シーセン」

クラール。

ここで劇的効果のため派手にポーズが入るといい。そこでヴァイスマンの頭の中を最後に目にしたイメージが思う存分かけめぐる。恐怖に結わえられた尻肉のクリーム（黒いものは一滴残らず排泄したね、リープヒエン？）若者の乞いねがう眼に金色の鞭のカーテンのようにかぶさるつけ睫毛、ゆうべテントで言いそびれたことを言おうとしてももう遅すぎる猿轡をかました喉……ブリツェロ自身のペニスの先が最後の噴出をした喉の、食道の奥深く（だが、痙攣する子宮頸部をちょうど超えたところにあるコレは何だ？〈闇への曲がり角〉の向こうの〈悪臭……白さ……を、その角で……待っている〉）だが、だめだ。儀式の進行がすべてをそのビロードの手でつかんでいる。あまりに強く、あまりに暖かく。

「電源接続」指令するブリツェロの声は冷静で平穏だ。

「ルフトラーゲ・クラール」操作パネルの前からマックスが叫ぶ。

モーリツがVORSTUFEのボタンを押す。⁹⁹「全系統接続しました」

十五秒の静止。その間に酸素タンク内の気圧が上昇。モーリツのパネルにライトがまぶ

は、ロケットの尾翼のコントロール装置を指す。

Klar は英語の clear で、「障碍なし」「準備完了」の意味で使われる。

98 キーを〈発射〉位置へ。

99 発射までに押される五つのボタンについては上巻 684 ページ参照。

しく点灯する。

「排気準備完了」

点火のランプが灯る。「ツンドウング・クラール」

これで「フォルシュトゥーフエ・クラール」。前段階のスイッチを押してしまうともう後戻りはきかない。ロケットの底で炎が勢いを増す。炎の色が変わる。ここで四秒ある。不確定の四秒。儀礼ではあっても、すべてが定められているわけではない。ロケット発射を任される将校が第一級であるか凡庸の道を歩むしかないかは、この鐘鳴りひびく寓意に満ちた進行の、どの瞬間で「ハウプトシュトゥーフエ」の指令に踏みだすかその違いが、一流のロケット将校と、凡庸にしかならない将校とを分ける。

ブリツェロは超一流だ。早くからトランスに入る術を身につけ、天からの啓示を待つ、ひかりは必ず来た。それについて言葉にして語ったことはこれまで一度もない。

「ハウプトシュトゥーフエ」

「ハウプトシュトゥーフエ・イスト・グデーベン」

「主段階に入りました」

パネルは今や完全に閉ざされた。

二個のランプが点滅する。「シュテカー1 ウント 2 ゲファレン」モーリツが報告す

る。二つのプラグは爆風で地面に飛び、噴きだす炎の中を跳ねている。重力に焚きつけられた炎は明るい黄色だ。そしてタービンの轟然たる唸り声。炎はたちまち青に変化する。

轟音は叫びの最高値に達した。鋼鉄の台の上にロケットはなお一瞬留まった後、ゆっくりと、その筋肉を憤怒にふるわせながら、昇りはじめる。四秒後、首が傾きはじめる。だが、炎がまぶしすぎて内のゴットフリートの姿は見えない。見えるのはひとつのエロティック

な概念だけ、あの青のヴァイオレンスから生じる、自らを昂奮に駆りたてる幻影だけだ。

上昇

この上昇は〈重力〉に知られるだろう。だがロケットのエンジンは、脱出を約束し、魂を軋らせる、深みからの燃焼の叫びだ。生贄は、落下に縛りつけられてはいても、脱出の約束に、予言に、のっとって昇っていく……

リンゴがついにリンゴの色になる光へ向かっていく。リンゴを切るナイフがリンゴを切るナイフに感じられ、それぞれがそれぞれの所に在り、つね日頃より鮮明ではなくても、より確実に存在している。こんなにも多くの存在を、一瞬のうちにすべて置き去りにしていかなくてはならないのか。弾力のある縛りによって下へ後ろへ圧しつけられ、その圧力にたまらず（胸部が苦しい、腿の内側は凍えて何も感じない）、屈んだ姿勢で額が片膝に触れる、髪の毛が涙のように屈するようにうちかかる、雨に打たれるからっぽのバルコニー、ゴットフリートに泣き叫びたいという気持ちはない……いくら地上に聞こえないからといっても……地上への無線回路はないのだ……ブリツェロは叫びたくない僕の気持ちを、おもんばかりで、漏れることのないようにしてくれたのだ——どんな声も、うなりも、咳き込みも——

ブリツェロとの愛の姿が子ども向けのさし絵のイメージをとる。ひらひらとめくられる最後の数ページに、弱くやさしく描きおえないままの線で縁どられ、ためらいのパステルカラーで塗られた挿し絵。ブリツェロの髪は濃く、肩まで垂れてウェーブがかかり、若い

騎士の従者が見習いのようだ。何かしらの光学器具を覗きこんで、母親的あるいは教育者的な顔をして幼いゴットフリートと呼んでいる……次のブリツェロは遠い、オリーヴ色の部屋の向こうの隅に腰をかけ、彼との間には何やら焦点のぼやけた影、それが友か敵かゴットフリートにはわからず、そして——おや、ブリツェロは——もういない、ああ……留めおこうとするそばからスルリとふたりは離れていってしまう、眠りに落ちるときのようにしだいにぼやけて、つかめ、すっかり引きとめていれば、腿に伸びるサスペンダー・ベルトも視界から失わずにいられる、子鹿の脚のように細い白の革ひもと先の黒い点……黒いキャッチそれをいくつも流してしまったじゃないか、ゴットフリート、大事なんだぞ、なくしたら困るんだ……これが最後だってわかってるのか……キャッチ轟音はいつ止まったんだ？ 燃焼終結か、ブレンシユルツスはいつなのだ？ こんなに早いはずはないぞ……だが燃えつきた尾部の穴が揺れながら太陽を横切り生贄の青年のブロードヘアーを通して、ほら見えるかブロッケン^{*100}の妖怪だ、誰の影だ、何の影だ、光まぶしいここから投射されて暗い空の黄金の、白^{ホワイトニング}なりの領域に、〈重力〉も一時的に遠のく水面下の静まり……この死は、白くなりゆくこと、ホワイトをウルトラホワイトまで推しすすめることでなくて何だろう——この死とは漂白し、浄化し、酸化し、研磨するもの、それ以外の何だというのだ——青年の痛めつけられた筋肉にとって、あの男はきょうは「シュトレッケーフ^{*101}」だったけれども、よりの確には「ブリッカー^{Blicker}」であり、「ブライヒエレード^{Bleicheröde}」であり「ブリーチャー^{Bleacher}」であり「ブリツェロ^{Blicero}」と呼ぶのがぴったりで、白人種の肌白さを拡張し純化して色素を、メラニンを、色彩の違いを、明度の違いを抹殺するのだ。そのあまりの白さのためにキャッチあの犬は赤いセッターだった

100 上巻627ページ参照。

101 646ページの落書きに登場した「伸足^{Stretchfoot}」にあたるドイツ語。

のに、あの最後の犬の頭だよ、見送りにきた優しい犬だよ赤いってどんなだったか思い出せない、追いかけたのはスレートブルーの鳩だったのに犬も鳩も白になってしまった運河のほとりであの晩木の匂いがしてああ僕はあの夜を失いたくなかったのだキャッチ道をはさんだ家と家、その間に波が立っている、どちらの家も船、うち一艘は長くて重要な航海に旅立つところだ。波立ちも安らぎと愛情に満ちてキャッチブリツェロから最後の言葉だ「夕闇の端っこ……その長い弧の上に人々が並んでみんな一番星に願いをかける。……いつときも忘れてはならない、陸も海も何千マイルにわたってつながる男女の列を。真の翳りの瞬間とは、空に光の尖端が見えたときだ。単一の点、そのとき〈影〉がおまえを集めさらっていく……」

いつも心に留めておけ。

彼の両足の間に一番星が掛かっている。

さあ――

落 下

リズムミカルな手拍子が壁に響く。壁は固くつややか、石炭のようだ。ハヤク！ うつせ！ エイガをうつせ！ スクリーンは眼前に広がるぼやけたページ。白く、音もない。フィルムが切れたのか、映写機の電球が切れたのか、闇に包まれる前にどちらが起きたのか、映画館に入りびたりの（違うか？）われわれオールドファンでさえ、見きわめるのはむずかしい。切れる直前の映像はあまりに直接に視覚に飛びこみ、誰もしかとは捉えてい

ない。あれは人間の姿だったのか、その者は世界各地の大都会の日没時を夢見ながら——
あたりは人が不死性を信じさせるほどの光輝に満ちている——戸外に出て一番星に願いを
かける。だがそれは星ではなかった、輝きながら落下する死の天使なのだった。そして暗
転してゆくスクリーンのぎこちない拡がりや何やら続くものがあつた——われわれの能力
では見えない映画が……その画像がいま顔のクロースアップとして浮上する、みんなが知
っている顔の——

そう、このフレームで。この暗い無音のフレームに、ロケットの尖った先が、秒速約一
マイルのスピードで、永遠かつ絶対的な無音の中を、この古い劇場の真上、その測定不能
の最後のギャップ、最後のデルタに到達するのである。

慰めが必要なら、隣の客と触れあう時間はありますよ、なんならご自分の冷えきった股
間とかに手をのぼします？……もしも歌をご所望なら、へかれら^{*}がこれまで誰にも教え
てこなかった歌をお教えしましょう。ウィリアム・スロースロップ作の賛美歌。何世紀も
忘れられ、印刷されることもなかった。かの時代のシンプルで爽やかな曲調で歌いませ
んか。弾むボールに合わせてどうぞ¹⁰²——

汝の時の砂尽きるとも

砂時計を回す御手あり

数多の塔を潰せし光が

最後の一人を棄て落とすまで……

荒れ果つる地の道にて

102 映像で歌詞を示す
ときに、ボールが弾んで
歌う単語を指し示す。

發達の驕りが眠るまで
その御顔、凡ての山の肌にある
その御魂、凡ての石の中にあり……

ナウ、エヴリバディ——

解説——『重力の虹』とその時代

佐藤良明

『重力の虹』が刊行された一九七三年二月にピンチョンは三十五歳だった。前作『競売ナンバー49の叫び』からは七年を経ていて、その間、短篇ひとつ発表していない。次作『ヴァインランド』の出版は十七年後、ということ、六〇年代末を中心とした五〇六年を、これ一作に費やしたということだ。二十九歳（一九六六年）で執筆が本格化、三十四歳（一九七二）で大筋脱稿した——または脱稿不能状態に陥った——と見なすことができようが、この年齢幅は、ウィリアム・フォークナーが、自らの故郷をフィクション化した一連の物語群（ヨクナパトリーファ・サーガ）の構想を始めて（『サートリス』と『響きと怒り』の出版は一九二九年、三十一〜二歳）、五作目の『八月の光』（一九三二）を完成させるまでとほぼ等しい。

『重力の虹』では、いくつかの独立した物語が、かなり強引に繋がりながら進んでいくのだが、たとえばペクラー一家を中心に、ヴァイマル時代の革命闘争とウーファ映画、ロケット製作の夢の行方を追い、そこにヴァイスマンという男を絡めて、ナチスのイデオロギーを内面からあぶり出していくというコンセプトは一冊の小説として十分すぎるほど重いつわられる。しかもピンチョンはすでに『V.』（二十三歳で脱稿）にヴァイスマンをナチスの将校として登場させ、エンジニアのモンダウゲンに「いずれ我々も君が必要になる……そういう用が出てくる」（『V.』上巻363ページ）と言わせているのだ。なのに、もし出したら批評界からも一般読者からも熱く受け入れられたらどう物語をまとめる

ことはしなかった。

私が今、まるで歴史改竄小説を書こうというかのように思い描いているのは、ピンチョンがヘロケット・シテイ・サーガをなす小説を次々と発表していたら、というファンタジーである。以下の諸々の企画が仕上がっていった可能性がある。

作品1 今述べた、ベルリン、ペーネミュンデ、ミッテルヴェルケを主な舞台に、科学者とその妻、ヴァイスマンによる特殊ロケット00000の打ち上げをクライマックスとする、緊張とパラノイアに満ちた心理ドラマ。ケクレの夢に始まるフランツ・ペクラーの新物質開発、アハトファーデンの流体力学、ネリッシュの語る自動制御の話をつなぎ込んだこの小説は、二十世紀を代表するテクノロジ小説の一冊になったのではないか。もちろん、フリッツ・ラング映画の偏愛はそのままに、またモンダウゲンやファーリンガーの神秘主義をもう少しゆっくりと開示してもらう。

作品2 もう一冊は、ペクラー家の物語と同様、独立性の強いチチャーリンの物語（上巻639〜680ページ）から出発する。〈北〉のパワーによる〈南〉の征服が、基本的に言葉による沈黙と口承文化の制圧だったことを描いたこの一篇に、異母兄弟エンツィアンの物語を対位法的に絡めれば、コンラッドの『闇の奥』の伝統を一新するような、帝国主義文学の傑作ができたのではないか。ロシアの「南下」と、ドイツによる南西アフリカでの暴虐に、イギリスの対中国阿片戦略を混ぜる（チュー・ピアンという人物をもう少し膨らませて）。物語の現在は大戦直後の〈ゾーン〉のままにして、英米による、〈バックファイア作戦〉やヘルメス計画も盛り込む。つまり、チクリッツやマーヴィ大佐という憎まれ役にも活躍してもらい、ナチスの〈ロケット〉が米ソのパワーによって強奪されていた現代史の

暗部を抉る。

作品3 スロースロップの物語は、第三部の冒頭から始めることもできた。自分自身に仕込まれたトンデモナイ謎を探りながら「ゾーン」を行く、コミックな精力絶倫男「ロケットマン」。これはミステリー小説であると共にピカレスク小説であり、国際陰謀の絡むサスペンスであり、幽霊船譚であり、神話を投影したジョイス張りのモダニズム小説でもある。何であれその面白みは、自在な文章から繰り出される不思議で異様な素敵なキャラクターにある。リアル（実在者）なのか単なるリール（映画）なのか——はたまた古代の母神のなれの果てか——あまりに怪しいマルゲリータとピアンカの母娘。このふたりの回りに退廃しきった白き「へかれら」が群れ集まる一方で、存在そのものが「へかれら」に対するカウンターであるような、陽気で、ワルで、前近代を生きるかのような元氣者たちが活躍する。後者をつなぐのは、魔法とドラッグと純情、ホラ話と民話と動物たちと海の冒険だ。なんとも素敵な魔女っ子ゲリー、老いてなおヤクと女に一途な純情男ゾイレ・ブマー、ヤミ市を回る船の舵を握る女傑グナープ夫人。加えてピンチョン作品には常連の船乗りボーディーンがいる。スロースロップ自身は、やがて自我を失って解体していくのだが、その彼と最後まで交感を続けていたのがボーディーンで、この男、行儀は最低だが、ブタ仲間として、一風変わった共感を呼び起こす。

作品4 スロースロップに執心するポイントマンを主人公にした小説も、切り離しが可能だったのではないだろうか。「ホワイト・ヴィジテーション」が集めた多彩な心理・生理・心霊学者たちの、可笑しくもおぞましい諸学説が飛び交う風刺小説。え、何だって？ ロケット落下に先行して、自分のペニスを勃ててしまう？ そうなんだ、彼がロンドン娘とやると、あたかもそれが誘因となって必

『ロケット』が落ちてくるんだよ——こんな漫画的状況が、本格的な『ゼロの学説』に回収される。影に、バイビー・タイロンのおちんちんを条件づけたと思しき科学者（ヤンファー）を影に配す辺りは、往年の怪人ドラフ風（メタリイ）といった趣もある。研究所には、確率統計の専門家もいる。戦争を母「生命の源」とするロジャリーの悲恋物語も、この作品の一部になるだろう。

作品5 『重力の虹』でとどころ挿入（フラッシュバックではなくフラッシュフォワード）される『未来都市』の描写を、『ロケット』と『プラスチック』の支配する一見ハッピーな恐怖の国を描くディストピア小説『ラケーテン・シュタット』としてまとめることも、あるいは可能だったかもしれない。

□

この仮想がもし現実だったら、その後のピンチョン世界も展開を異にしていたかもしれない。この『全小説』シリーズも、今よりさらにカラフルで、アクセスのいいものになっていたかもしれない。だが重要なのは、ピンチョンが全部ひとまとめにして出版したという事実である。広がっていく想像力に制御をかけて、まとまりのある作品を抽出するという「分け隔て」を、彼はよしとしなかった。その結果、幸か不幸か、私たちの前に壮大な物語複合体としての『重力の虹』が遺された。

この物語複合体は、フォークナーの（あるいはガルシア・マルケスや中上健次の）「サーガ」とは違って、ひとつのコミュニティに拠点を置かない。話の舞台は地球の五大陸に及び、歴史的にも、アメリカの形成、宗教改革、地理上の発見にまで遡る。いや実に、地中に化石が形成される地質学的時間だとか、宇宙空間を渡ってくる「音の影」だとか、語りは常にサイケデリックな連想に開かれてい

る。名前のついた登場人物（生物、物体）は四〇〇超、国籍も相当な数に及び、ニホン語やヘレロ語を含めた十人の外国語がテキストに乱れ飛ぶ。

「幸か不幸か」と言ったが、ピンチョンの創作多勢がもたらす「不幸」については記すまでもない。何冊もの文学作品の内容が、複雑に絡んだものを読まなくてはならない。しかもこの語り手は物を知りすぎている。まるで百科事典が語り手を務めているかのようなところもある。時に語りは散文詩のようになり、一語一語が重くなり多重なイメージが響き合う。あまりに長大、あまりに重厚、（言い古されたダジャレを使えば）何回読んでも難解で、何度読んでも難度は落ちない。

この感想を、日本で最初のピンチョン精読者の一人である池澤夏樹氏は、コンピュータの喩えを使つてこんなふうに表現した——ピンチョンはROMの蓄えが大きいだけでなく、大量の知識をRAMに呼び込んで瞬時に動かしている。そうなのだ、ふつうの読者は脳のキャッシュメモリが足らなくなつてついていけない。これだけの数の人物が、こんなに複雑な話の中で絡み合いながら、数十ページ（時によっては数百ページ）も離れたシーンで響き合う、それに対応しろと期待されても無理でしよう……。

訳者として、逆境と闘うみなさんを僥倖ながら支援したいと思った。で、出しゃばりすぎとの批判は覚悟で、二重の作戦をとった。まず、脚註である。断っておくが、この註のうち、訳者が単独で調べ出したものはほとんどない。「重力の虹」の出版後、一九七〇年代末くらいから、その攻略を目指す研究者のコミュニティのようなものが自然にできて、その後十年ほどをかけ、注釈とテキスト・リディングの精度はかなり上がった。画期的だったのは、一九八八年に出版されたステイヴン・ワイゼンバーガーの *Genet's Kinnikinnik Companion*（略称「GRC」）で、これは小説中の約二二〇〇項目について、そのソースと文脈を徹底調査した本文三〇〇ページの注解書である。これに追加・補

正すべく、ドナルド・ラーソンが“A Companion's Companion”という本格的なウェブサイトを立ち上げると、ワイゼンバーガーは八〇ページ分ほど増量した『GRC』の第二版(二〇〇六)を出版。その後も、専門誌 *Pynchon Notes* などを通して、新しい発見や間違いの指摘が続いている。一般向けにも、thomaspychon.com と pychonwiki.com の両方にページ毎の注釈(英語)が載っているし、themodernworld.com/pychon にも様々な有用な情報が上がっている。本書下段の註は、すでにパブリック・ドメインと見なしうる知識を訳者なりに簡潔に編集したものであって、特に必要と思われる以外はクレジットの表記もしていない。最初の注釈本であるダグラス・ファウラーの *A Readers Guide to Gravity's Rainbow* からも知見を収奪したし、他にも過去三〇余年、折りに触れて読んできた研究書や論文の示す解釈に助けられた(なかで一冊、自分にとって最良の本は、チャールズ・クラーク編の論文集 *Approaches to Gravity's Rainbow* (一九八三) だった)。

脚註は、読者の知識をその都度補うROM(リード・オンリー・メモリー)とはなりえても、ある人物について書かれてきたことの「ランダム・アクセス」のためには別の企画を必要とする。このために、「主なキャラクター」についての索引を巻末に用意すると共に、特に下巻の註に「xページ参照」のひと言を入れさせていただいた。もちろん、テキストの相互連関について、読者は押しつけられる謂われはないので、どうぞ、ご自分が最大限楽しめる方法で、本書に浸っていただきたい。英米圏のピンチョンの読者からよく「三度読むとわかる」と聞かされたが、この訳書では、二度目の読みでジグソーパズルのピースがどんどん嵌まっていくのではないかと秘かに自負している。

□ □

テキストは細部もないがしろにはできないが、作家としてのピンチョンの「構え」を知ること、

本書を読み解く上でたいへん重要である。

『重力の虹』出版の翌年と翌々年、アメリカの体制は計三つの賞を与えようとした。よく知られた話だが、縁り返そう。まずピューリッファ賞。フィクション部門諮問委員会（専門家の集団）が一致して本作を推薦したのに、評議会がそれを却下。「読解不能、大仰で書きすぎ、ときに猥褻」というのが理由で、その年は「受賞作なし」という結果に終わる。全米図書賞は授与されたが、これにはピンチョン側が「ヴァイキング社の担当編集者の発案だが」代理としてコメディアンを遣わすというイタズラで対応した。アメリカ文芸アカデミーが五年に一作、特別にすぐれた文学作品に与えるという純金のメダル（ウィリアム・ディーン・ハウエルズ・メダル）はピンチョン自身が辞退した。三十代にしてフォークナーらに並ぶ榮譽を「要らないので、どうぞ押しつけないでください」と、少年のうちにまっすぐに拒絶した。

拒絶とイタズラ——なにか、ピンチョン文学自体とも通じてくるような話である。『重力の虹』というこの小説自体、壮大な「拒絶」と「イタズラ」の集合体ではないか？

初期短篇集『スロー・ラーナー』に「シークレット・インテグレーション」（一九六四）という長めの短篇があつて、これにグローヴァーという天才少年が出てくる。すぐに長い単語を使ってしまったり、話のなかにもっととした微積分学を混ぜ込んだりする誘惑に勝てない。その彼と仲間の子供たち——タイロン・スロー・スローの甥を含む——が集まってやる遊びが「アナキストごっこ」だ。これがなかなかサマになっていて、学校も工場も敵に回し、黒人を排斥する親たちに対抗して、集合的イマジネーションによって黒人少年を仲間に加える。子供たちの中に一人、下流の（父親が車の廃品屋をやっている）子がいって、その父親と、もう一人、禁断症状に苦しみながらシニールな語りを披露するアール中のジャズマンは、大人であっても「敵」ではない。

ピンチョンの短篇の中でたぶん一番読みやすいこの作品が、『重力の虹』と意外な類縁性を持つことにお気づきだろうか。グローヴァ少年は、ベルリン問題のことで父親とぶつかり合うのだそうだが、すでにニュー・レフトの心を持った天才少年が、冷戦構造の由来に関して学び、地球にミサイルが飛ぶようになった経緯についてハードウェアの工学を含めて学習し、その他帝国主義の歴史、戦前の資本主義経済とそれを支える科学技術、欧州の中でもひとときわ際立った精神をみなぎらせるドイツの文化について古代信仰から何から学習し、ついでにロシアやアルゼンチンやアフリカ・ヘレロ族についても学び、さらに、カリフォルニアのビーチでサイケデリック・ドラッグも経験して神秘思想に深入りし、その上で子供らしいイタズラ精神を大いに発揚しながら壮大なアナキスト小説に取り組んだとしたら……結果はまさしく『重力の虹』になりはしないだろうか？

ピンチョンのことを、成長したグローヴァ君と見なしてみろ。トム少年の方は、十六歳でコーネル大学の物理工学科に入学（それが冷戦まったただ中の一九五三年、そこはソ連に勝つための科学戦士の養成所のようなだったろう）、二年次を終えたところで休学して海軍に入隊する。その経緯は不明であり、軍での生活のようすも——彼に関する記録が「謎の消失」を遂げているため——分かっていないが、長編第一作『V』（二九六三）から想像する限りでは、五六年のスエズ動乱絡みで地中海に配備されたようである。そこでエジプトや、イギリスの植民地政策や、戦争の機構について知見を深めたに違いない。『スロー・ラーナー』の「イントロダクション」で自ら語っているように、船の甲板に兵卒や下士官と輪になってすわり、海の男たちの独特なストーリー・テリングに親しんだことも、後のピンチョン文学に影響している。

五七年に復学し、今度は英文科で学ぶのだが、彼が海軍にいた間に時代は少し動いていた。つまり少年少女たちの間でロックンロールが沸騰し、文学青年の一部で〈ビート〉——アレン・ギンズバー

グの長編詩「吠える」やジャック・ケルアックの『オン・ザ・ロード』——への熱狂が起こって、シヤイナピンチョンが付きあう仲間も、おそらくはボヘミアンな雰囲気を共有するようになった。卒業後、すでに作家の道を選んでいた彼は、後述するように親友のリチャード・ファリーニャに呼ばれてニューヨークに出るのだが、翌年（一九六〇）の初頭には、別の友達の引きでシアトルのボーイング社でテクニカル・ライターの職を得る。ボーイングと言えば、核の時代の先端兵器ボマーク・ミサイルを作っていた会社である。そのミサイルの起源は言うまでもなく、ナチスのロケットV2である。『V.』では二十世紀の生命世界を、死と無機物が凌駕していく物語が語られる。それなのに、そのプロセスの総仕上げとなった第二次大戦期に関しては、ドイツ空軍によるマルタ島の包囲爆撃しか取り上げられていない。何故『V.』でV2の話が出て来ないのか。「次の大作」に回そう、という意図があったからか。

□ □ □

「次の大作」は、ロケットの打ち上げをもって始まる。オランダの海岸付近からロンドンまで約二百数十キロ、放物線の頂点はヒマラヤ高峰の十倍の高さに達した。その成層圏から自由落下する。ニュートンの法則により、速度は毎秒九・八メートルずつ増していく。真空状態であれば、約百三十秒後に、音速の四倍近いスピードで地上に衝突するだろう。実際は、対流圏に入ると空気抵抗が増し、スピードは鈍る。それでも衝突時にマッハ2は優に超えていた。新幹線の最高速度のほぼ十倍。想像しよう、その速度と衝撃で、一トンのアマトール火薬が爆裂する。

しかしそのロケットはいかにして飛ぶのか？ そのメカニズムまでこの小説家は扱おうとする。そこが『重力の虹』の、普通のノヴェルとの違いである。

上空八〇キロを超え一〇〇キロ近い高さまで打ち上げるための推力をどうやって得るのか。燃料を「かま」で燃やすのである。巨大なタンクにエチル・アルコール（75%の水溶液）を注ぎ、マイナス二〇〇度に近い液体酸素を注ぎ、その両者を燃焼室に引きこんで化合させる。引きこむために蒸気タービンを回すのだが、その蒸気は、過酸化水素水と過マンガン酸塩の反応によって得る（V2のロケットエンジンの詳細な図を、v2rocket.comなどのサイトで得ることができる）。アイディアとしてはシンプルだが、エンジニアリングは多難を極めた。地上での爆発を避けるために、エンジンの外側の冷却と、流量の正確な調節が欠かせない。音速を超えるスピードで大気を擦るとき、空気の渦がどんな作用を及ぼすかも把握しなくてはならない。ペーネミュンデの試験発射台^{テストスタンド}で実験は続き、一九四二年十月、ついにロケットは打ち上がった。重力の二倍の推力を得たロケットは、天から落とすのと同じスピードで、地から上がった。いった。

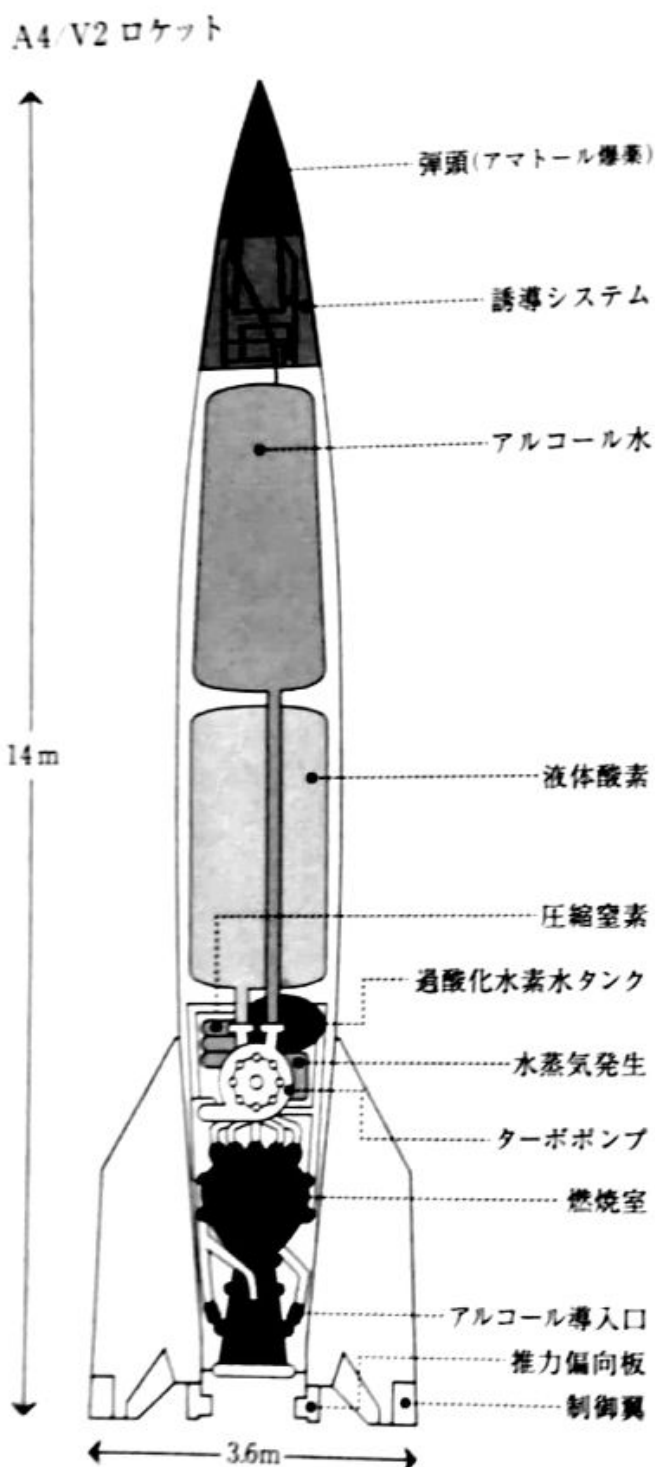
だがどうやって的に当てようというのか。これが「誘導」の問題である。一九四四年九月に始まったロンドンへの攻撃も、当初はだいたい大雑把なやり方だった。方位と傾きを決定し「^{ブレンシュルツス}燃焼終結」のポイントを決めて、あとは慣性飛行に任せる。ロケットが水平と垂直を「知る」ためのジャイロスコープを積んでおいて、ロケットの飛行角度が定められた角度からずれたとき、しかるべき電流が流れて、機首を戻す回路については、上巻573〜574ページで触れられている。上巻460〜461ページで話題になる、電波による制御法が利用されるようになったのは、七ヶ月に及んだ攻撃の末期のことである。

様々な最先端技術の集合体であるA4は、ナチス・ドイツの科学技術の勝利ではあったけれども、実戦での戦果はさほどでもなく、それがもたらした死者の数は皮肉にも、着弾地より、捕虜に過酷な奴隷労働を課した製造元の方が多い。こういう点からも『重力の虹』の中心的問いが重みを増す――あの「戦争」は何だったのか？ 連合国と枢軸国が二手に分かれて闘っている舞台の背後で、一

体どんなプロセスが進展していたのか？　そもそも〈戦争〉とは何であるのか？

パラノイア気味の理解が頭をもたげる。「パラノイア」といってもそれは、「現実」に背を向けた妄想とは違う。『重力の虹』の語り手や諸々のキャラクターが口にする疑念は、註でも述べたように、ニュルンベルク裁判の取材員で、巨大カルテルを細部にわたって調査したリチャード・サスリー著 *IG Farben* (一九四七) の記述から外れるものではない。巨大企業と軍部とナチ党の結合から、ファシズムの体制が生み出されていった経緯を、サスリーの本は描いていた。そして〈企業〉には本質的に国境はない。

〈戦争〉の本随に関わる部分に、有機化学関連の諸企業と財閥が、敵味方の境界を貫いて連なった巨



大コンダロフリットによる、人倫に外れた営利プロジェクトがあった。——この認識は妄想ではない。証拠も少なくない。世界史の背後に陰謀の手を見る人たちの間で、IGファルベンの暗黒の歴史は、いまも関心が保たれている。

だがピンチョンは小説家として、事実の追求よりも、疑念を、より明快なパラノイアへと導いていくことに関心を示す。パラノイアを育て、膨らませ、それによって現実の歴史との関連を失うことなく、法外な作品世界を築いていくこと。これが、ピンチョンによるパラノイアの方法だ。だからこそ、彼は歴史を調べる。パラノイアの核に、誰も嘘だと否定できない事実が据えることにこだわる。

森の空き地で、デブで醜い二人のアメリカ人（マーヴィ少佐と実業家チクリッツ）の会話を聞きながら、ロシアのロケット技術課報員チチェリンは気づく。国家の消えたドイツの夜闇に、ロケットを基盤として、ソヴィエトを含む世界に広がるひとつの〈く〉——IGラケーテン——が形を取ろうとしていることに（下巻324〜325ページ）。

連合／枢軸の別も、自由／共産の別も、実は見せかけでしかないことには、「ゾーン・ヘレロ」のリーダー、エンツィアンも「すさまじい理解の洪水」（下巻234〜235ページ）の中で、気づいている。〈戦争〉は政治とは無関係。政治は完全にお芝居^{シアター}であって、「その影で、テクノロジーの要請こそが、専横的な力を揮い、事態を動かしていた……人間と技術とが一体となって、戦争というエネルギー・バーストを必要とする何者かに変化したのだ」と。

□ □ □ □

ピンチョンの関心は常に、人間とテクノロジーが一体となって、「よりよき未来」ではなく、「より大規模に暴力的・排除的であるような未来」を築きつつあるという点に注がれる。より多くの人間が

蹴散らされ、クズとして吐き出されるような社会を、彼は見据えている。だがその視線は、ドキュメンタリー作家のそれというよりむしろ思想的だ。社会学・宗教学・民俗学・神話学の文献に当たり、現代の世界の危機をわれわれの意識と制度のシステムの問題として考え、自らの思考をテキストに織り交ぜる。

『重力の虹』執筆中、彼がある学部学生からの質問に答えて書き送った長文の手紙があって、これがイギリスの研究者デヴィッド・シードの *The Fictional Labyrinths of Thomas Pynchon* の巻末に載っている。この学生はボンデルスヴァールツ族に関しての卒業論文を書いていて、その権威とおぼしき作家ピンチョンに参考文献のお伺いを立てたのだ。その返事の手紙は、作家自らが、自分の作品の意図を、学部生向けにやさしく語っているという意味で、貴重な資料である。

ドイツがヘレロの心に対してやったことも、僕らの先祖がアメリカン・インディアンに対してやったことも、いまベトナムでサイゴンのキリスト教徒一派とそれを動かしている連中が仏教徒の心に対してやっていることも、みんな一つのことなんだと思う。どれも、分析と差異づけを尊ぶ文化が、ユニティと統合を尊ぶ文化の上にのしかかってそれを潰していくという、ひとつの出来事だよ。植民地化以前のヘレロの「……」村の形を見てみなよ。円形で、古くからの陰陽の図そのものだ。女は北に住み、男は南に住み、すべてがマンダラのパターンで成り立っている。彼らの信じる神にしてもそう。男と女、破壊と創造、生と死を同時に体現している。そこへ宣教師がやってきて統一された全体をひき裂いた。対立観念を分離して、カテゴリーに仕切っていった……。

この小説が書かれていたとき、まだベトナム戦争が、どんどん泥沼にはまっていた時期だという

ことは重要だ。作家の意識の中で、第二次世界大戦は、まるで終わっていないなかった。だから本書でそれは唯一無二の〈戦争〉(the War)と記される。それは極端に言うなら、分離分析の思考を頼みとする西欧型の心による、地球上のそれ以外の型の思考によって生きる人種や生き物への侵略戦争である。

世界の信仰の形のなかで、キリスト教は極端に違っていると、手紙にピンチョンは書き、さらに続けて――

なかでもドイツ型のキリスト教というのは、西欧的・分析的・直線的・疎外的精神の最も完璧な表現になっている。微分法を完成させたひとりがライプニッツだったというのは、偶然のことじゃない。変化というものを静止の相において捉えるというやり方。極限まで切り刻んでいって、厚みを失った一枚の時間を眼の前に固定させる。そうやって大砲の弾を空中に静止させる……こういう一見関係のないことがみんなつながっているんだ。

長く引用したのは、この小説に繰り返し立ち現れるテーマが、ぞろぞろ出てくるからだ。「ドイツ型」のキリスト教、と言われているものの、その純粋な表現がカルヴィニズムであるが、これがアメリカ建国の精神となった。その教義は、人間が時間とともに変化することを認めない。神意に変化はなく、人は、常にすでに、選ばれているか、見捨てられている。

と述べたところで、前作『競売ナンバー49の叫び』とのつながりも見えてくる。学園紛争とベトナム戦争が本格化してくる一九六六年に出版された前作は、中流家庭の妻として温々とヘシステムに生きていたエディパが、そこから彷徨い出るとい話だが、そのとき彼女の前に(あるいは想像の中

に「現れる（ペトリステロ）」は、オランダでのプロテスタント革命から排除されたグループに起源をもつ。この物語は〈西洋近代〉を一度バラして、新しい文化を織物を紡ぎ始めようという当時のカウンターカルチャーの思想的文脈に即して読むと、数々の細部がつながってくるのである。

魔術的思考を脱し、合理的に物を考える精神が、科学技術を獲得し、経済を回転させ、富と権力を増大させている、その〈システム〉の困ったところは——エディパも発見するように——吐き出される者があまりに多いということだ。産業の営みによって世の中を組み替え、それに成功することで天に向かおうとする〈かれら〉がいる一方で、彼らに使われ、屑（waste）として吐き出される人と物の累積がある……。

唐突ながら、このシステムを〈ロケット〉のイメージで捉え直してみよう。〈ロケット〉は天を目指す。目指すところは月であれ神の国であれ〈死〉の支配下にある。〈ロケット〉を飛ばすために、どれだけの人と物が使われ、クズとして廃棄されなくてはならなかったか。〈ロケット〉を飛ばした結果、どれだけの死体が積み上がったか。

本書では、〈ロケット〉を飛ばす人間の内面も描かれる。そのSS将校の名「白人男性 Weissmann」（SSコードネーム「ブリツェロ」の響きについては上巻612ページを確認のこと）。彼はリルケの『ドゥイノの悲歌』の信奉者だ。地上の混濁から、山上の崖に咲く一輪のリンドウエンツィアンを手にして天に昇るヴィジョンに彼は陶醉している。ドイツに連れてきたてのエンツィアンに彼は教えた——「単なる鋼鉄の勃起にあらず、〈ロケット〉とは女性的暗黒から勝ちとられる、システム全体なのだ」と（上巻616ページ）。この「女性的暗黒」とは、すぐに「ハマザー・ネイチャー」エントロピー」という言葉で置き換えられている。堅牢な白人男性に対する、暗く、黒く、ぐちゃぐちゃしたもの。

エコロジーの思考に慣れた現代人に、自然は理知的な存在にも見えるけれども、重化学工業が文明

を駆動していた西洋に、そんなイメージはなかった。自然はぐちゃぐちゃと繁茂し、腐敗の中から生命体が湧き出るような、黒々として怪しくやわらかくすべてが偶然に任される。その自然から白い男たちが勝ち取ったもの——採掘・精錬・分解・合成した材料と、化学的・流体力学的・電磁学的・物質工学的な知識——があつて、前者を後者が制御し、重力を凌ぐ推力と自動制御の機構を通して天を目指して上がっていくのが「ロケット」である。ヴァイスマンにとってそれは、この世の^{エントロピー}混濁を逃れて完全無欠な「天」に差し上げられる魂の象徴だったわけだ。

ロケットが飛ぶたびに、その放物線のこちらの端でも、あちらの端でも、犠牲者は積み上がっている。『重力の虹』は、その分厚いページに哀れな姿を並べる。ロンドンの瓦礫に埋もれた女の子、「イルゼ」を名乗ってペクラールと遊園地で遊ぶ収容所の娘。英軍の空爆によって殺されたペーネミュンデの労働者たち。リストは伸びる。慰安婦として「館」へ連れてこられたスペイン戦争の闘士マヌエラも、ジャガイモの消えた北東ドイツの田舎道を歩き続ける解放された捕虜たちも、入っていた強制収容所から出されてなお、ブリツェロを想像上の看守とするゲイ・コミュニティを作る同性愛者も。いやいや、もっと広い歴史のステージに眼を向ければ、本書には白人たちによる暴虐の記述が目白押しだ。スペイン系植民者によるアルゼンチン土着民の「掃討」。ロシア人による中央アジアの制圧、イギリス人が中国人に行ったアヘン貿易、そしてドイツの将軍が発したヘレロ族の「根絶令」。それらの非人道的衝動の^{プロトタイプ}原型として描かれる、オランダ人によるモリリシャス島でのドードー鳥殺し。

戦争小説でありながら、直接の戦闘シーンは（『黒の軍団』に対して加えられる小規模な攻撃以外）出てこないし、強制収容所に言及しながら囚人の虐待を直接描くこともない。ナチスが滅んでも、本当に恐ろしいものは引きつがれていることを訴える小説なのだから、それで当然なのだろう。

語りは、①エンサイクロペディック（百科全書的）であり、②シネマティック（映画的）であり、③ポエティック（ほとんどサイケデリック）であり、④メタフォリック（隠喩的）であるという特徴を持っている。

「百科全書的」な語りの先例として、メルヴィルの『白鯨』（二八五二）を挙げることができるだろう。人気作家だったメルヴィルが、三十歳のころに大変身して書き上げたこの猛烈な小説は、鯨の細部を記し、捕鯨業の細部を記しながら哲学的思索に耽り、多くの人種を甲板に乗せて権力について、またアメリカという国についての考察へと読者を誘う小説だが、鯨を「ロケット」で置き換えてみると『重力の虹』も同系統の作品であることが見てとれる。ただしこちらは徹底している。社会学、宗教学、心理学ばかりでない。自然科学やロケット工学ばかりでもない。ほんのちょっとした記述、たとえばアルフォンソ・トレイシー宅に並ぶピンボール（下巻357ページ以下）や、闘争生活を送る印刷工の父親の描写（下巻334ページ）にも、ふつう小説からは聞かれない、エンサイクロペディックな声が聞こえる。読んでいて常に、感覚が研ぎ澄まされる感じがする。

それは語りの声が「映画的」であるという点とも絡んでいるだろう。冒頭のブレンティスの夢は、夢であっても映像的にすぐリアルで、ヘビーメタルだ。訳しながら、文章の描写にうまく反応できないとき、そのシーンをスクリーンで見ていることを想像すると腑に落ちることが多かった。そういう箇所は無数にある。上巻96ページに始まる夜中の聖ヴェロニカ病院も、白黒映画を想像して読んでいくと伝わるものが多いと思う。

まあ映画と言え、それぞれのエピソードを区切る □ □ □ □ □ □ □ □ のマークは、フィルムとの両脇についたスプロケットに見える。最後のエピソードの最後のシーンは、ニクソン政権

下のロサンジェルス映画館。一瞬読者は、それまでずっと長大な映画を見せられていたかのような感覚に襲われる。そればかりではない。小説の語り手は、ときどき映画の弁士でもあるかのようにスラップ・アップして読者に向かってまくし立てる。ロジャーとジェシカが村の教会で「夕べの祈り」を聴くシーン。冬枯れのイングランドにカリブから混ざりこんだ「黒一点」のカウンターテナーが若いふたりを紅潮させる上巻247ページからの十五ページほど、もしよろしければ読み返していただきたい。

語り手がたたみ掛けるのは〈戦争〉の細部だ。250ページから251ページにかけて、歯磨きチューブから、歯磨きする子供、その泡が包み込む、子供たちがぶつぶつ吐き出す言葉たち、それをみんな戦争の日常にまとめあげる（訳文ではこたわらずに句点を多用したが、原文ではこの二十行ほどをワン・センテンスで突っ走っている）ところなど、小説というより詩であって、矢継ぎ早に繰り出される言葉とイメージの鮮やかさは、若きピンチョンに強いインパクトを与えたに違いないギンズバードの「ハウル」を思わせる。ウェディングドレスの黄ばみに始まり、東南アジアの抗日戦線から帰ってきた瘦せたイギリス兵と、イタリア人捕虜との駅での出会いを活写し、戦下での子供や老人の暮らしの劣化を追いつつ、〈戦争〉に対してキリスト降誕神話が担う役割を突くところは、長大なパラグラフを得意とした過去のピンチョンでも最長最強の部類だろう。戦時資料の細部の調査に基づいたその記述はシュールだけれどリアルであって、その長大なパラグラフを、狂気に接する迫力でプレイするナレーションは、ピンチョンがヴィレッジに見に行ったことが知られているデビュー時のオーネット・コールマンの、いや、執筆時期とシンクロさせるなら、一九六〇年代末のカウンターカルチャー・シーンを彩ったサイケデリックなギターソロの名演を思わせるものがある。

ピンチョンのテキストはまた、隠喩と象徴の拡がり強いのが特徴だ。冒頭のロケット／バナナ／

ペニスの繋がりが見えやすいだろう。ロケットが〈死〉のシンボルであれば、プレンティスのバナナは豊穣な〈生〉のシンボル。落ちてこないロケットは、それを空中でもぎ取る神の手を想起させ、と同時に、後のページでロケットは神のペニスとしてもイメージされる。古代神話の時代、主神が稲妻を太母に挿した。重工業時代、主神は死神となって——上巻242ページ〜243ページのロジャーの想像によれば——「レディー・ロンドン」の招きに応じてV2を挿しまくる……。『隠喩的』というのは、単に修辭法の問題ではない。真理に向かうのに、分析（どのように違うか）をもってすると、隠喩（どのように同じか）をもってすると二つの方法があるとする、ピンチョンの知の方法は、明らかにメタフォリックである。

解説の最初で、この作品が数冊の小説に分離できる可能性を示した。ではその全体はどのように統合されているのか？『重力の虹』の四部の構成は、「冬」（キリスト降誕祭に向かう一週間）、「春」（日数的には長い、温暖なリビエラを舞台に辻褃を合わせている）、「夏」（VEデーから原爆投下まで）、「秋」に対応している。ただし第四部は時間構造自体を欠いているので、ぜひ白黒トーンのシーンとカラフルな色彩との対照に注意して読み進めたい。

全体で七十三に区切られている各セクションには、ひとつまたは複数の物語の断片が収められている。それらのエピソードの中には、ゆるくて滑稽なものと、タイトで悲劇的なものが混在している。そのうち最長のものが、下巻最初のフランツ・ペクラーのエピソードで、ここはケクレの蛇に関するシュルレアリスティックな夢が飛び出す以外、珍しくも語りのトーンが一定で、話の進行も、回想部分はリニアに年を追って進んでいく。この語りは、クマースドルフからベーンミュンデ、さらにはポーランド南東のブリズナ、最終的にはノルトハウゼンで進められたロケット製作の歴史を、（当初

の開発責任者ドルンベルガーの著書を下敷きに、事実と密着して振り返るものになっている。視点人物がフランクであるという点も揺るがず、彼とヴァイスマンとの間で演じられる取り引きには、緊迫した心理的リアリズムの味わいがある。語りのトーンが視点人物の意識と性格を反映している例といえる。

対照的に、家出をしたレニ・ペクラの視点から語られる十九番目のエピソード（上巻297ページ）は、夢のシーンがいつぱいで、占星術にはまりながらスイートな革命を夢見る中流出身の娘の意識と性格を反映している。収容所に入るところを含め、レニの造形には、『ヴァインランド』のフレネシを予兆させるものがあることも興味深い。

ピンチョンに登場するキャラクターで、ヒーローの名に値する者は少ないが、エンツィアンは最もポジティブに描かれるキャラクターだろう。民族の歴史を背負い、神話にも与しながら、自己犠牲をもって人心をつかみ、一族を団結させて、マンダラとしてのロケットの完成を図る。キリストと対照的に比較させるところもある。エンツィアン率いる〈黒の軍団〉が、その象徴的なロケットの打ち上げに向けて行軍するシーンは、しかしどれだけ「現実的」だろうか。同じロケットでも、こちらはブリッエロの打ち上げるナチズムの、独善的な〈白さ〉に包まれたロケットとは、論理も倫理も異なる。工学とシステム論を修めた上で、マンダラの全体論から、指導者としての生き方を導きだそうとするエンツィアンは、どこか作者の理想の投影のような気がしなくもない。やっぱり彼は「シークレット・インテグレーション」でグローヴァたちが共同幻想の中に生み出した黒人少年カールのような存在でしかなかったのだろうか？ だがフィクションにおいて「リアルである」を「リアルでない」から分け隔てることに、一体どれだけの意味があるのか。

思考からの合理の枷を振りはらうかのように、『重力の虹』の作家は、排中律の縛りから自由であ

る。AとB二つの概念が、対極的な関係をなすとき、AであればBでない——とは考えない。この点、
本書の「アンチ・ロビンソンマン」は、ノキシコよりも、ピンチョン自身である。死んでいても生きて
いる、という論理で彼は書いている。AかBかではなく、AもBも。グレタは映画女優であるとともに
に「白き女神」として、モリツリ少尉が目撃した恐ろしい行為に手を染める。カッチェにしたって、
ときどき石像の女神のようになる。霊能者の恋人ノラ・ドズン・トラックは彼女自身によれば「重
力」なのだそう。一体、何がどうなっているのだと混乱することはない。対象のアイデンティティ
を固定せず、全スペクトルの可能性を持たせる、これが「虹の語り」というものなのだろう。

□ □ □ □ □ □ □ □

『重力の虹』はリチャード・ファリーニャに捧げられている。

騒ぎ好きのディックとシャイなトムとは、コーネル大学の学生時分、互いの才能を認め合う創作志
望の学生だったが、ディックは結局大学は卒業せずニューヨークでの生活に飛び込み、トムも大学院
への奨学金を蹴ってディックのいるNYに向かった（因みに、キャンパスで歌っていた心理学科のピ
ーター・ヤローもヴィレッジに向かう。三年後彼はピーター・ポール＆マリイとして「パフ」を歌い、
これが世界的なヒットとなる。その詞を書いたのは物理学科のレニー・リプトンで、この多彩な男は
後に、自主映画づくりのバイオニアとして——『ヴァインランド』のフレネシのように——パークレ
ーの学生運動を撮っている）。

NYでトムは短篇「ロウ・ランド」（一九六〇）を発表した。結婚生活から逃げだした男が、海軍の
部下だった毛むくじやらの快楽主義者（初登場のビッグ・ボーディーン）と一緒にゴミ収拾車で巨大
なゴミ捨て場に行き、そこで黒人の守衛と三人、酒を飲んでホラ話を語り合うという筋立てで、『重

力の虹』を読んだ後に再読すると、そうか、このゴミの下の地下通路の先から、ワックスウィングやゾイレが出てきてもおかしくないな、という気にさせられる。小さくて魔法のように美しいジブシーの女の出現は、『V.』のパオラや『重力の虹』のゲリーの前触れにも感じられる。太古的な「シー・シャンティ」の魅力もちゃんと表現されていて、なにか当時のヴィレッジの、コアなフォーク的感性を感じさせる。

「コアなフォーク的感性」というのも妙な表現だが、ビートに遅すぎヒッピーには早すぎた対抗文化の心性を言うのに便利なので使ってみた。『怒りの葡萄』的な民衆との一体感に、ビート由来の快楽／黒人／神秘志向が被さって先鋭化したもの。というところ、もろにディランの世界であるが、私見によればボブ・ディランとトム・ピンチョンの「構え」の違いは大きくない。トムは隠遁して体制の拒絶を続けたが、ボブも表舞台に立ちながら拒絶は続けた。

ところでボブに熱を上げたジョーン・バエズには妹ミミがいて、このミミに熱を上げたのがディック・ファリーニャである。ミミとディックの結婚式は、『V.』の出版直後のことで、トムはメキシコから汽車とバスを乗りついで、カリフォルニアのビッグ・サーに近いカーメル・ハイランズへやってきて新郎付添を務めた。ディックはミミとフォーク・デュオを組んで、ロックと混ざる直前のカリフォルニア・フォーク・シーンの一翼を担った。ディックの待望の初小説 *Been Down So Long It Looks Like Up to Me* (あまり長いことダウンだったんでまるでアップしてるみたいだ) が出版されたのが一九六六年四月末のこと、トムの二作目『競売ナンバー49の叫び』の出版と相前後してのことである。刊行日の二日後に、ミミの二十一歳の誕生パーティが開かれた。その晩、ディックは客の一人が乗り付けたハーレー・ダヴィッドソンの後ろに試乗する。夜の山道でバイクは転倒。ディックは打ち所が悪かった。この二ヶ月後、同じオートバイ事故を起こしたボブ・ディランは一命をとりとめ

たが、その運はディックになかった。トムは今度は、棺の付添人を務めに海岸の山道を上がっていき。

葬式をすませ、LAへ戻ったピンチョンは、ルボ・エッセイ「ワッツの心の中への旅」を書いて『NYタイムズ・マガジン』（一九六六年六月十二日号）に掲載した。ワッツでは前年に大規模な人種暴動があった。コンクリートの割れ目から草がチョコビチョコビ生えている、ゴミの多いストリートに立って、二十九歳の長身の作家が空を見上げる。西方数マイルのところにLA X（ロス国際空港）があって、銀色のジェット機がスモッグを切り裂く。「ここはホワイต์な幻想の町における、苦い現実のポケットだ」——そう書きつけるピンチョンは、文明の進展から取り残された者の視点から見ている——フリーウェイもジェット機もビヴァリー・ヒルズの緑濃い椰子の木も、みんな「ホワイต์な幻想」にすぎないんだ、といわんばかりに。

文明に乗っかっている人間は「現実」を見ていない。幻想に取り憑かれている。この認識から、拒絶のアートが始まる。イタズラが精神が燃えあがる。

「ホワイต์な幻想」には、デカルトからバヴロフに至る機械的認識論も、悩み多き金持ちが信じる精神分析の諸理論も含まれていただろう。『競売ナンバー49の叫び』に出てくる狂ったフロイト派の分析医の造形にも、ピンチョンの拒絶とイタズラが精神が大いに発揮されている。「ホワイット・ヴィジョンなこと！」

ピンチョンは最終的にマンハッタン・ビーチへ下る坂の途中にある小さな一軒家の二階に住んで、『重力の虹』を書き続けた（この家は『LAヴァイス』で、ドックの事務所として描かれている）。この作品に腰を落ちつけて取り組み出したのは一九六六年と推定されるが、その年のカリフォルニアの

若者文化は、実にカラフルな出来事に満ちていた。反戦闘争の激化や都市暴動によって、公民権運動に代表される理性的な改革運動が行き詰まり、資本主義そのものの転覆を目指したり、幻覚剤を通してアートと神秘に浸ったりと、要するにニュー・レフトとカウンターカルチャーの時代に突入していく。黒人コミュニティでは、警察の暴力からの自衛のため、武装の動きも始まっていく。

共通の合言葉は不当な制御^{コントロール}からの脱却。〈近代〉の偏狭な「合理」からも、お行儀のよい「自制」からも。ボブ・ディランが秩序だったプロテスト・ソングからシュルレアリスティックな歌詞とロックのビートへ舵を切ったのは、時代の動きと深く絡んだ行動だった。

サンフランシスコ湾域では、一月の「トリップス・フェスティヴァル」を契機に、幻覚的な視覚モチーフと、サイケデリックなサウンドが広まっていく。ヒッピーたちはロスにも群れ始めた。五月、ロスのウィスキー・ア・ゴー・ゴーでドアーズが演奏開始。六月、フランク・ザッパ率いるマザーズ・オブ・インベンションが初LP『フリーク・アウト』を発表。八月に出たビートルズの新LP『リボルバー』には、ティモシー・リアリーによるLSDトリップの指南書『サイケデリック・エクスペリエンス』から歌詞をとった曲「トゥモロー・ネヴァー・ノウズ」も入っていた。十月、ベトナムの米軍人員三十二万超。同じく十月、オー克蘭ドでブラック・パンサー党結成。ロンドンでジミ・ヘンドリクス&エクスペリエンス活動開始。

こういう状況が、年を追って進展していく中で、『重力の虹』の執筆は続いた。カリフォルニアのビーチへ押しよせる「フラワー・チルドレン」は、ピンチョンより一回りほど若い連中で、ビーチのガレージ・バンドが始める音楽も——『ヴァインランド』のゾイドたちが演奏したような——「サイケデリック・サーフ」が増えた。だがビーチでトムは旧世代、ドラッグには入りこみながらも現象を見つめ、カウンターカルチャー自体に潜む資本主義の躍動や、子供化する若者を手玉にとろうとする

新 クラフツの動きを観察していた。そのテーマは、長い休止時間のあと、『ヴァインランド』(一九九〇)において浮上する。

しかし本作でも、一九四五年にスーパーインポーズするような形で「六〇年代」が見え隠れしていることに気づかれた読者も多いだろう。いつも何やらドラッグをいじりながら、支離滅裂と思しき映画制作にのめっているオズビー・フィールなど、冒頭でいきなり黒人系ブルースを歌い出すところを含め、その造形は明らかに「ロックとドラッグ」の時代の若者だ。また第四部で折角「カウンターフォース」を登場させながら、ロジャータちに焦点を当てたところが冴えないのは、『ヴァインランド』でロックンロール人民共和国を建国する学生理論家が冴えないのと同じ理由ではないだろうか。これに対し、電球バイロンなどのサブカル・ヒーローや、「音の影」^{サウンド・シャドウ}などのSFネタは軒並み元気がいい。キング・コングや狼男を含む大衆ホラーのキャラクターも、それを大衆の無意識として、つまり〈かれら〉ではなく〈われら〉の心の自然の側に位置づけている。ロケットマンになり、ブタになり、LSDのグッド・トリップで自然に溶け込むかのように散っていったスロースロップを、最後までボーディーンが見守るところも、大衆の英雄ディリンジャーが聖なる徴しを担うところを含め、読者を熱くする。

そうしたポップ・カルチャーへの健全な信頼を——工学の数式や深遠な神秘主義にひっかいた難読なジョークとともに——保ちえたのは、作品にとって幸運なことだったと思う。だが執筆が四年、五年と続くうちにニクソン政権が誕生、『重力の虹』の執筆を支えた、素晴らしくアナキックな時間は奪われていく。『ヴァインランド』で描かれている通りのマリワナ狩り／反体制分子つぶしが進行する。〈戦争〉が唸りをあげる……。

この新訳は、旧訳を「踏み石」にしている。データ化した全文を上書きする形で第一稿を作成させていただいた（これは謝辞である）。この訳文もいつかまた踏み石となる。

翻訳にとりかかったのは、周囲の迷惑を顧みず大学を早期退職した二〇〇七年の春である。ちょうどその頃ヘトマス・ピンチョン全作品の企画が持ち上がり、他の作品にも関わることになったが、あとかきの執筆を終える今日まで、およそ千日ほどの日々をフルにこれ一作に費やすことができた。ライフワークと呼べるかどうかはわからないが、いつの間にか意地の仕事になっていった。この小説に取り組み始めた大学院の頃から数えれば、お世話になった人は、星の数に匹敵する。

地球が太陽の周りをめぐる、最初の一突きを与えたのは、ニュートンによれば神であるが、ピンチョンの周りをめぐる、最初の一突きを私に与えたのは、志村正雄氏である。日本にピンチョンをもたらし、私に研究の道筋と、就職先と、アメリカでの研究休暇まで与えてくださった氏への負債の支払を、この仕事で済ますわけにもいかない。

恩師大橋健三郎先生には、三十六年前の口述試験の席で、博士課程に進んだら『重力の虹』をしっかりやりますと約束したのだが、その成果をお見せすることができなかった。翻訳ではあるが、なんだか一番自分らしく感じられるこの仕事を、この春、天国、もとい、地に眠られたばかりの大橋先生に捧げる。

二〇一四年八月十五日

訳者